茨城県教育財団文化財調査報告第280集

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

（第 4 分冊）

平 成 19 年 3 月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第280集
島名熊の山遺跡（第4分冊）
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第280集

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

（第 4 分冊）

平 成 19 年 3 月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

目　　次

―第４分冊―

６　その他の時代の遺構と遺物 ……893
⑴　土坑 ……893
⑵　その他の土坑 ……894
７　遺構外出土遺物 ……921
第８節　まとめ ……927
写真図版

6　その他の時代の遺構と遺物

その他の時代の遺構は，近代の土坑１基，時期や性格が不明な土坑342基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

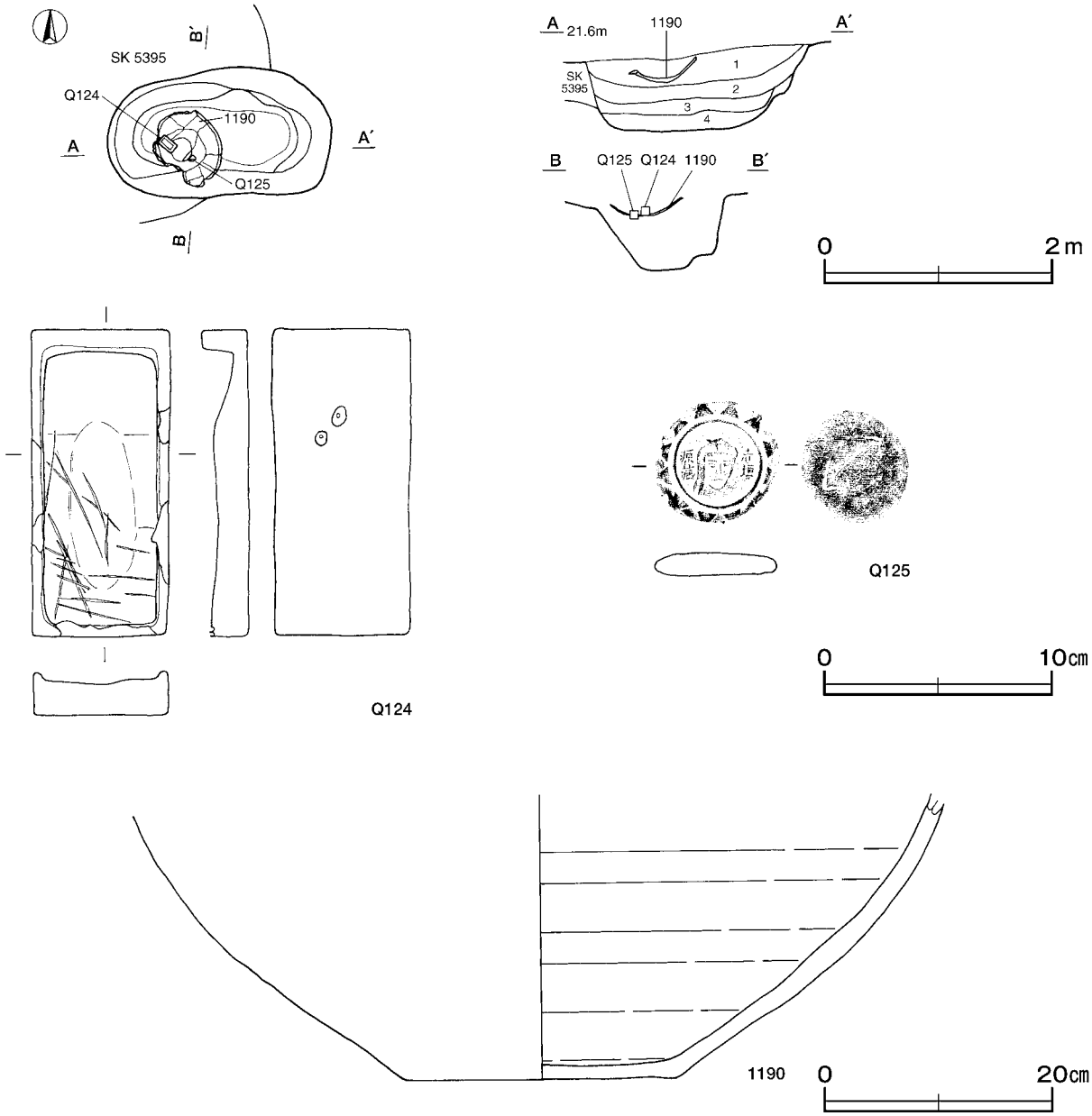
(1)　土坑

第5398号土坑（第757図）

位置　調査区南西部のＳ３ｉ9区，標高21.5mほどの斜面部中段に位置している。

重複関係　第5395号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長径1.95m，短径1.12mの隅丸長方形で，長径方向はＮ－88°－Ｗである。深さは73㎝で，底面は平坦であり，壁は外傾して立ち上がっている。



第757図　第5398号土坑・出土遺物実測図

覆土　４層に分けられる。ロームブロックや炭化材を含む人為堆積である。

土層解説

1　暗 灰 黄 色　ロームブロック中量，炭化材少量，白色粘土ブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化材少量
3　灰 黄 褐 色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　陶器片51点（源法寺焼甕），石製品１点（硯），ガラス製品１点（石蹴遊具），鉄製品１点（不明）が出土しているほか，縄文土器片，土師器片，須恵器片，土師質土器片，陶磁器片が混入している。1190は第２層の上面に正位で据え置かれた状態で出土し，内部底面からはQ124・Q125が出土している。

所見　1190の内面には炭化した有機物の付着がみられ，肥甕と考えられる。ただし，掘り方が隅丸長方形であり，甕を棺に転用した墓坑の可能性もあり，Q124・Q125はその副葬品とも考えられる。Q125は，赤穂浪士の図柄と「赤垣源蔵」の銘があり，同種の石蹴遊具は，神奈川県逗子市池子遺跡群の№７地点東地区第１号旧河道に出土例がある。第１号旧河道の埋没時期が昭和13年以前とされていることから戦前に流行した玩具類と考えられる。時期は，出土遺物から19世紀末葉から20世紀初頭と考えられる。

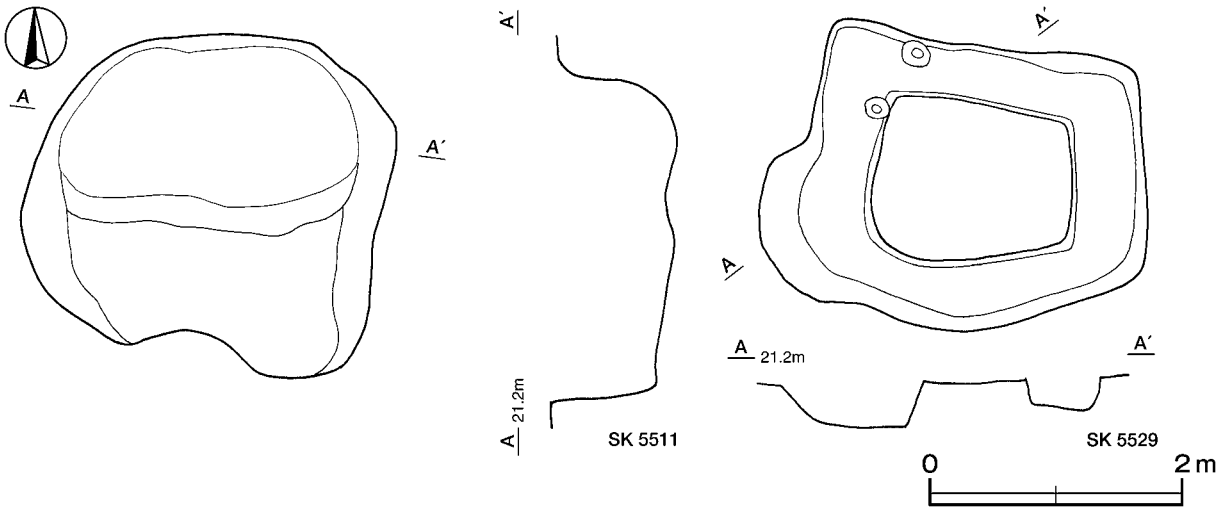
第5398号土坑出土遺物観察表（第757図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1190	陶器	甕	－	(24.8)	24.0	長石･石英･雲母	明赤褐	普通	ロクロ成形	上層	20% 源法寺焼

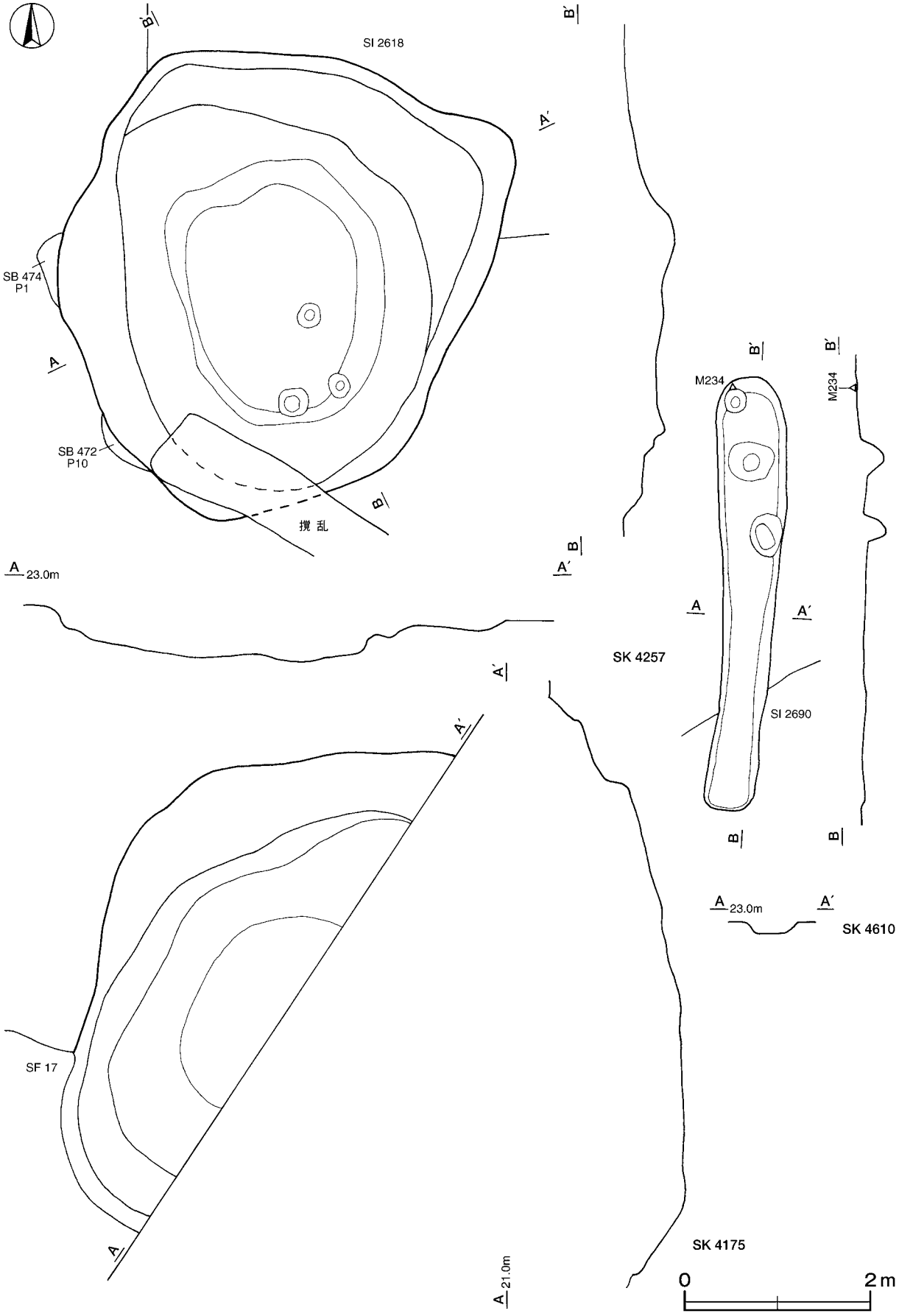
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q124	硯	13.5	6.1	2.0	219.1	泥岩	陸部一部欠損　擦痕	1190底面	PL143
Q125	石蹴遊具	5.3	4.7	0.9	41.5	ガラス	浪士像　「赤垣源蔵」銘　三角文　灰オリーブ色	1190底面	PL143

⑵　その他の土坑（第758～776図）

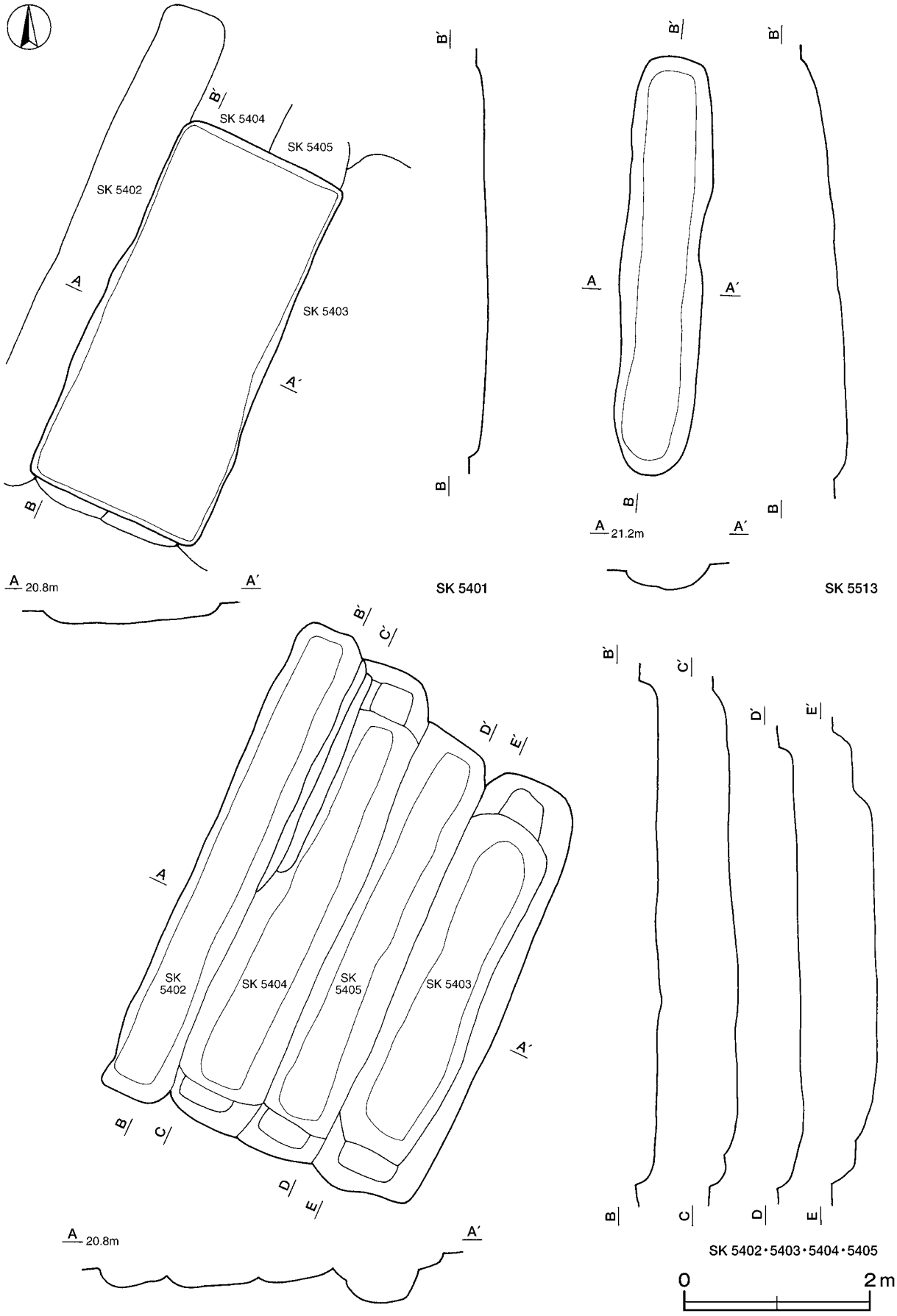
性格不明の土坑については，以下，実測図にて紹介する。



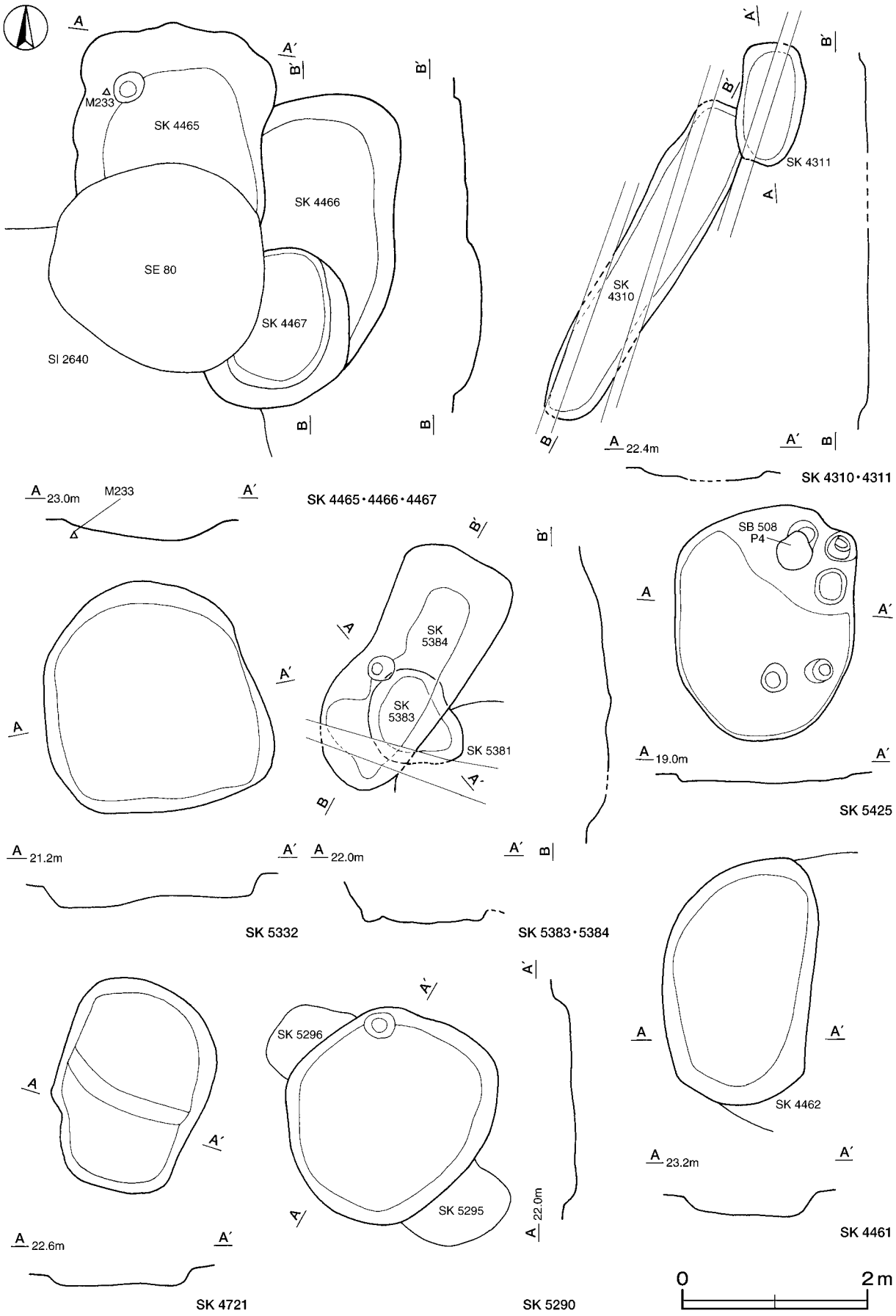
第758図　その他の土坑実測図⑴



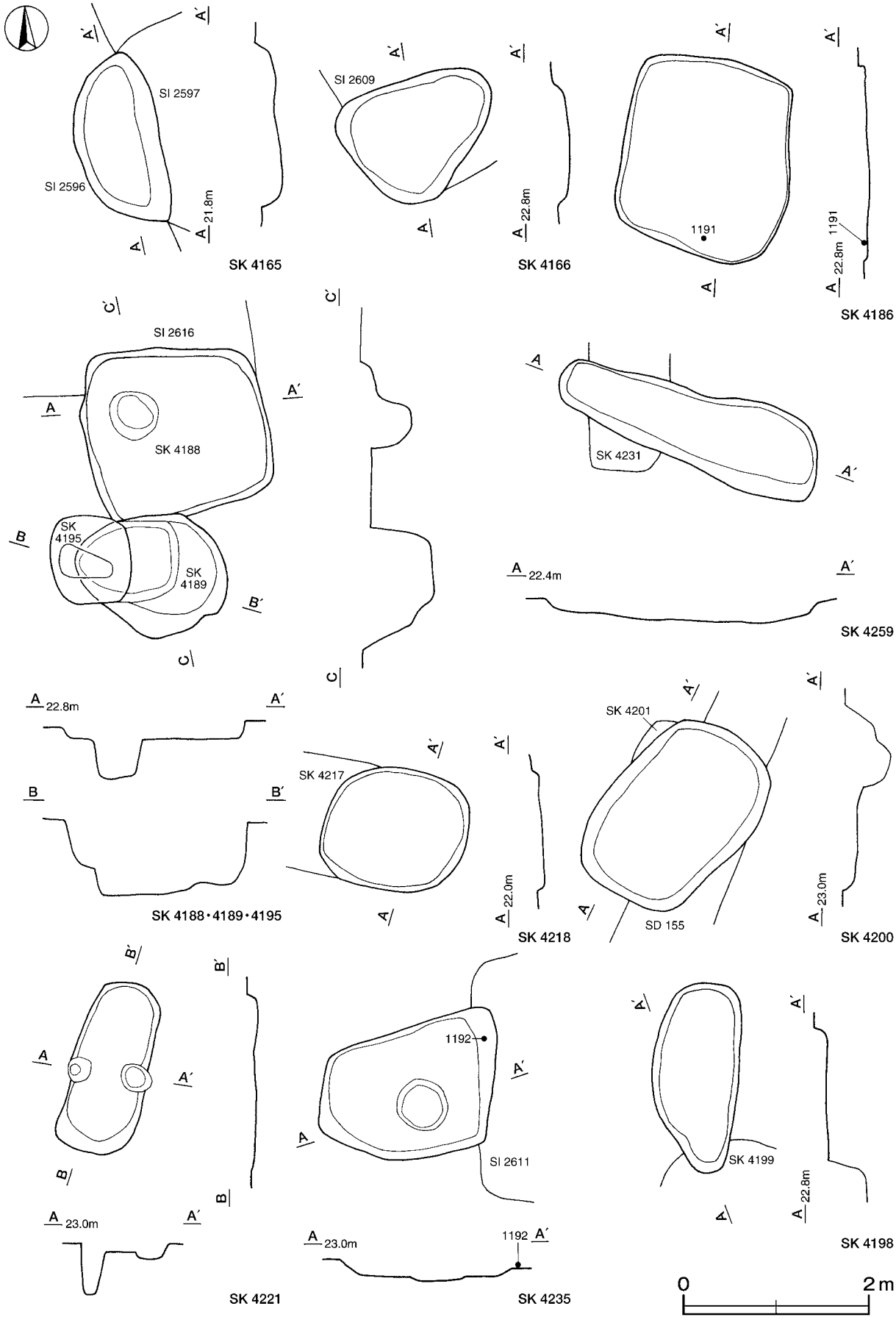
第759図　その他の土坑実測図(2)



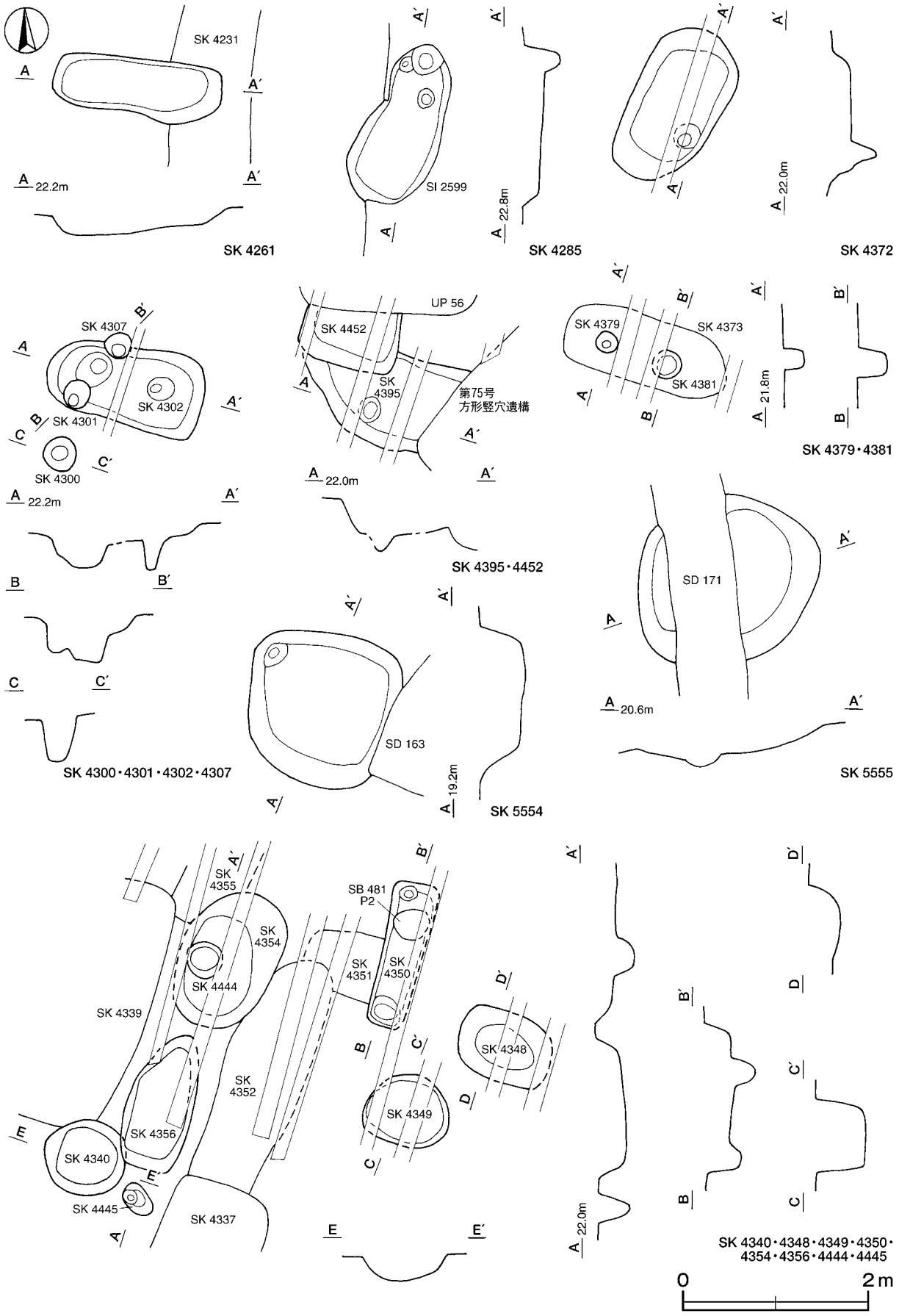
第760図　その他の土坑実測図(3)



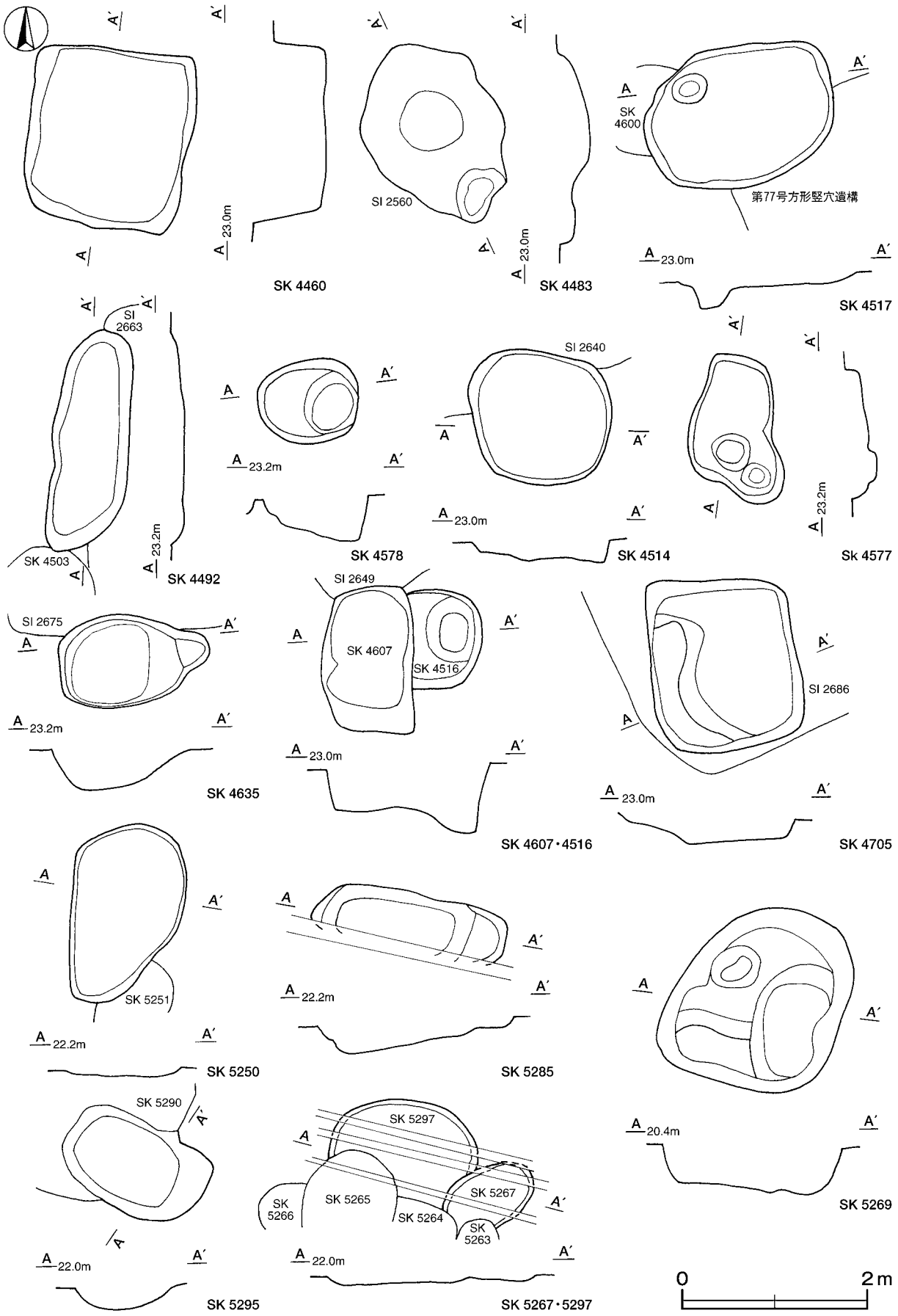
第761図　その他の土坑実測図(4)



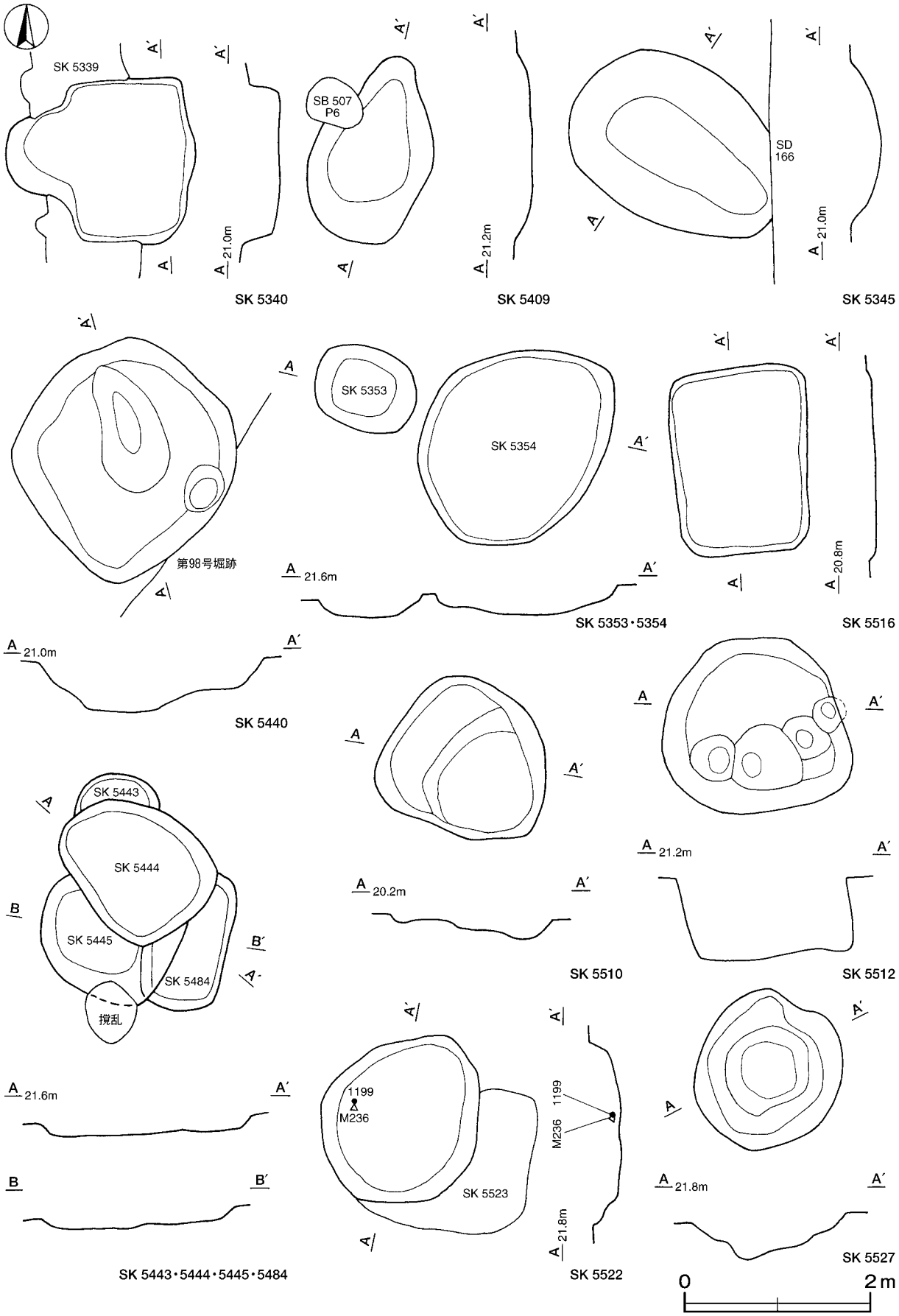
第762図　その他の土坑実測図(5)



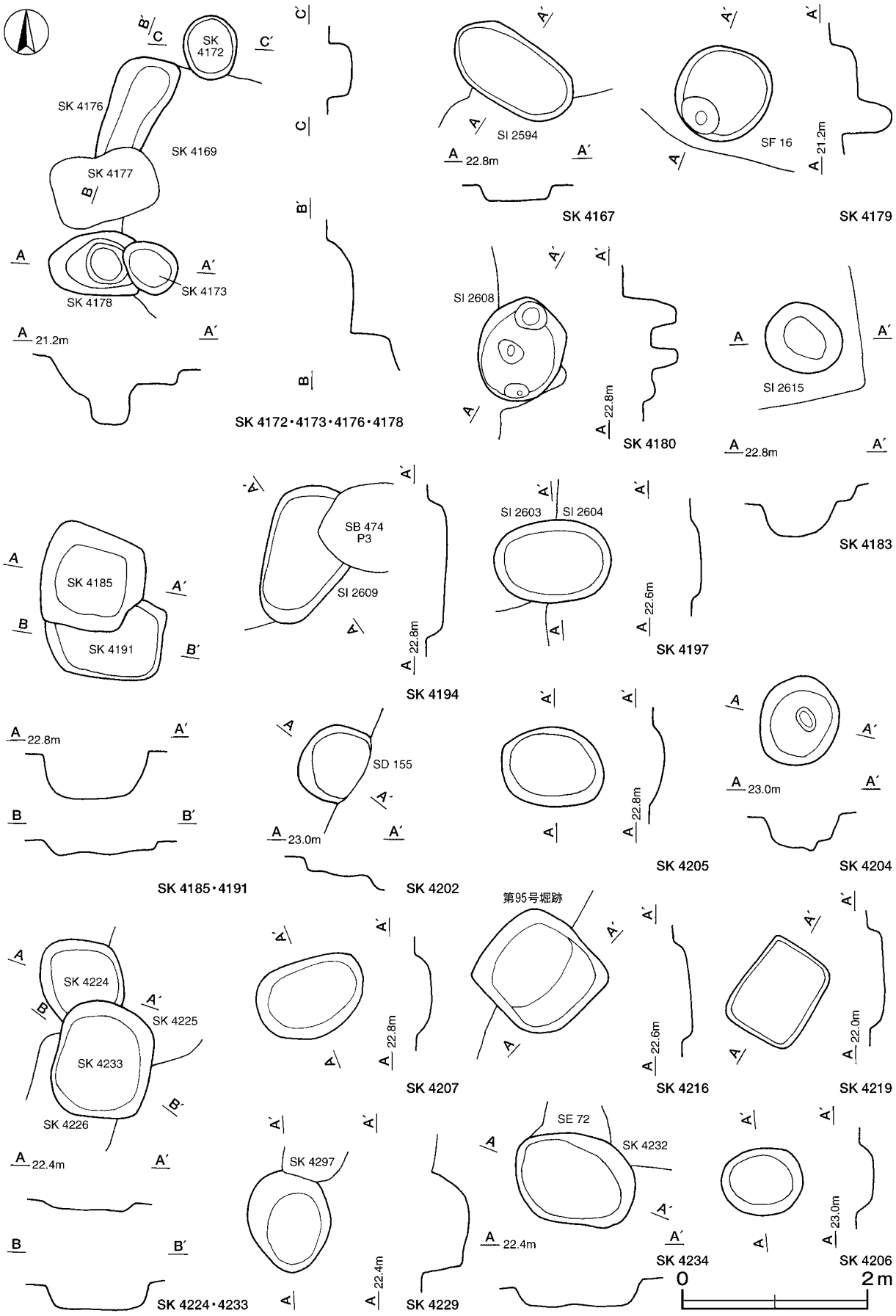
第763図　その他の土坑実測図(6)



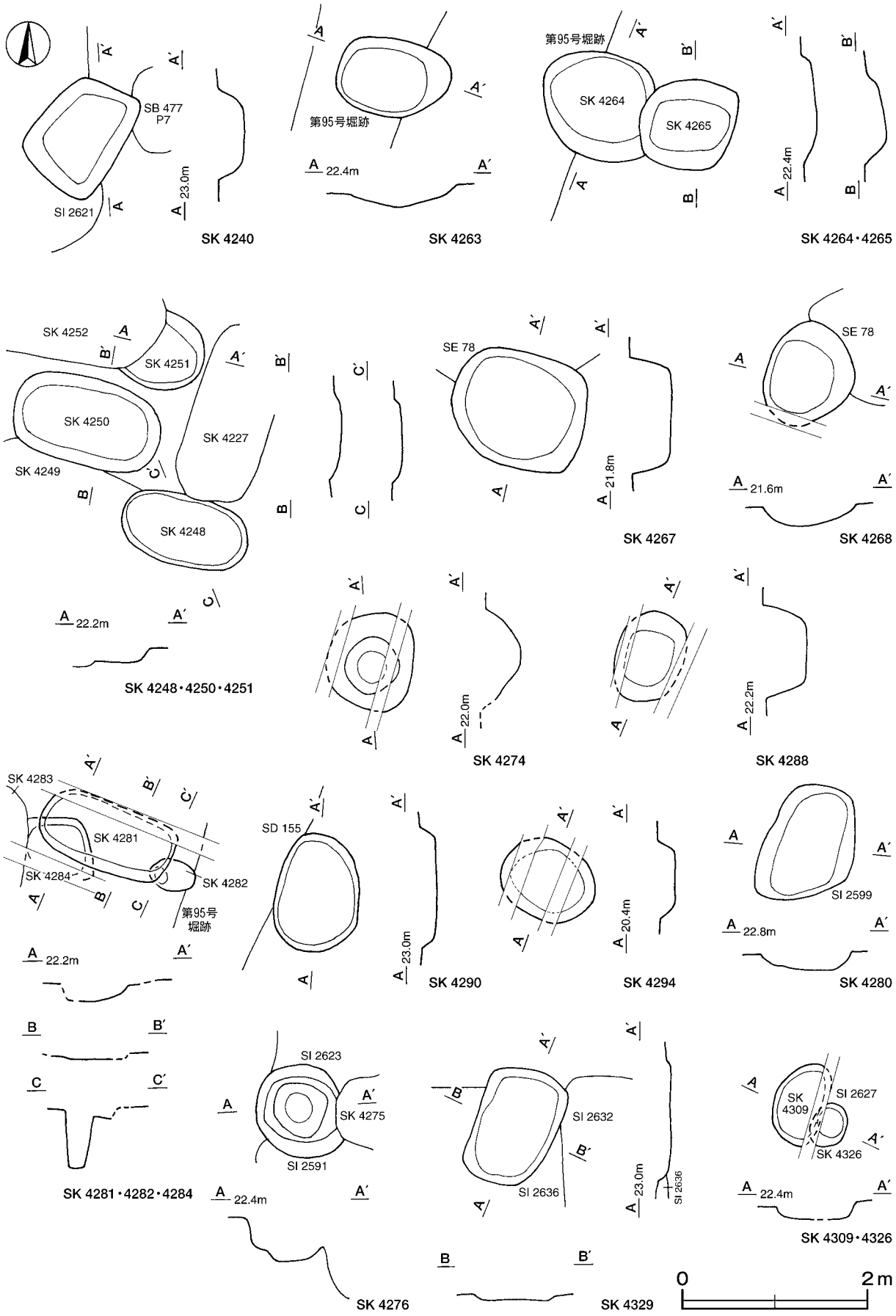
第764図　その他の土坑実測図(7)



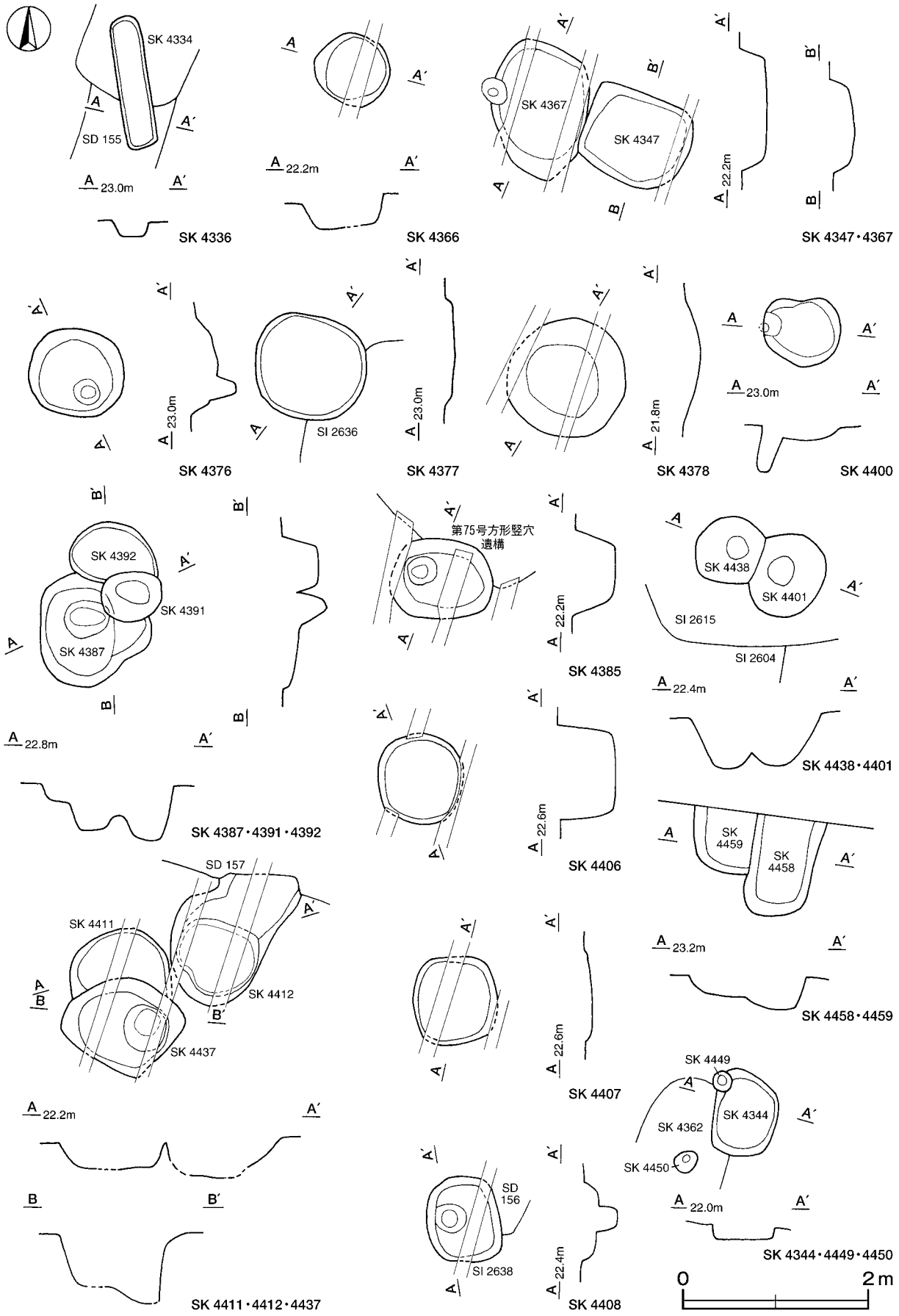
第765図　その他の土坑実測図(8)



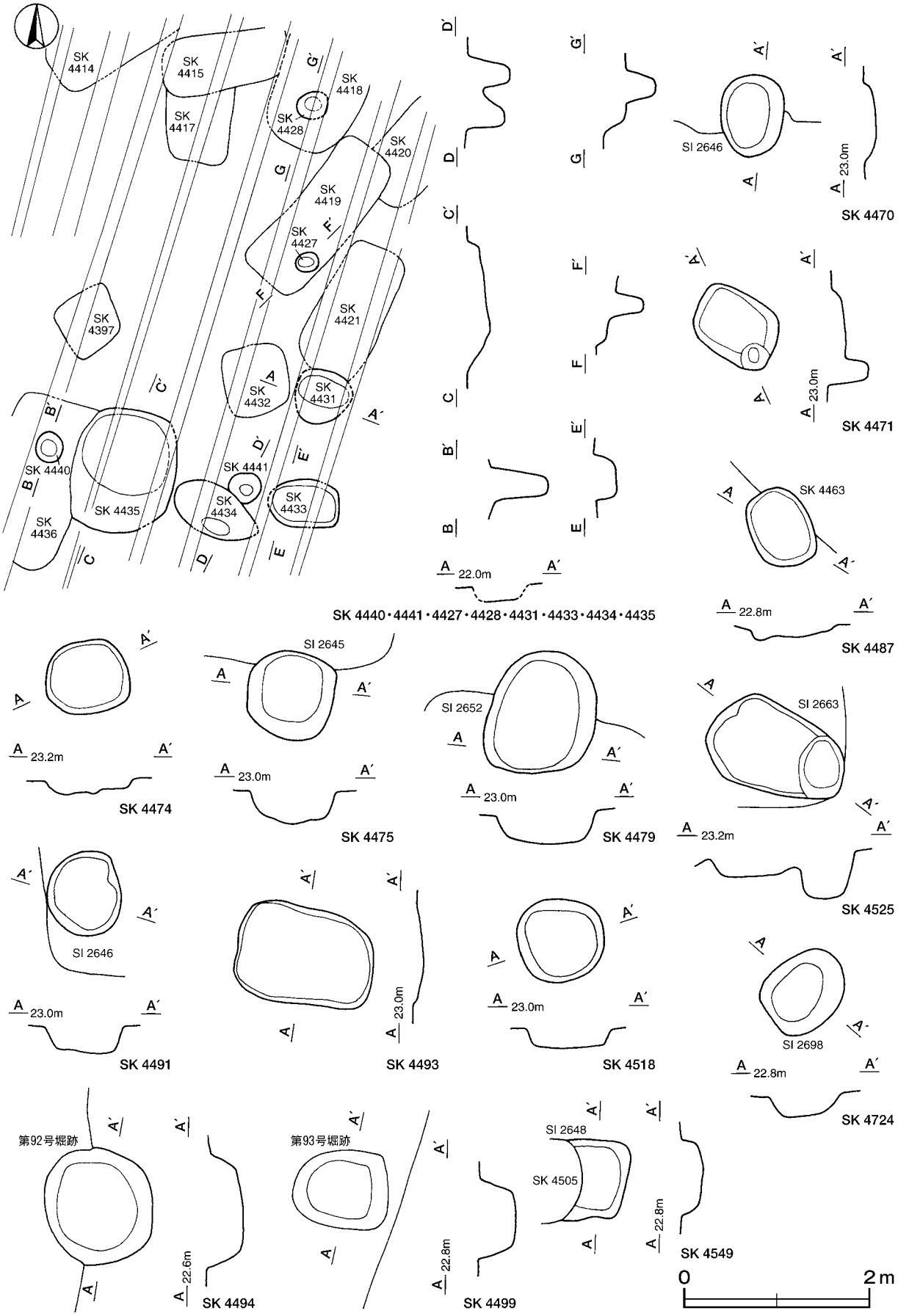
第766図　その他の土坑実測図(9)



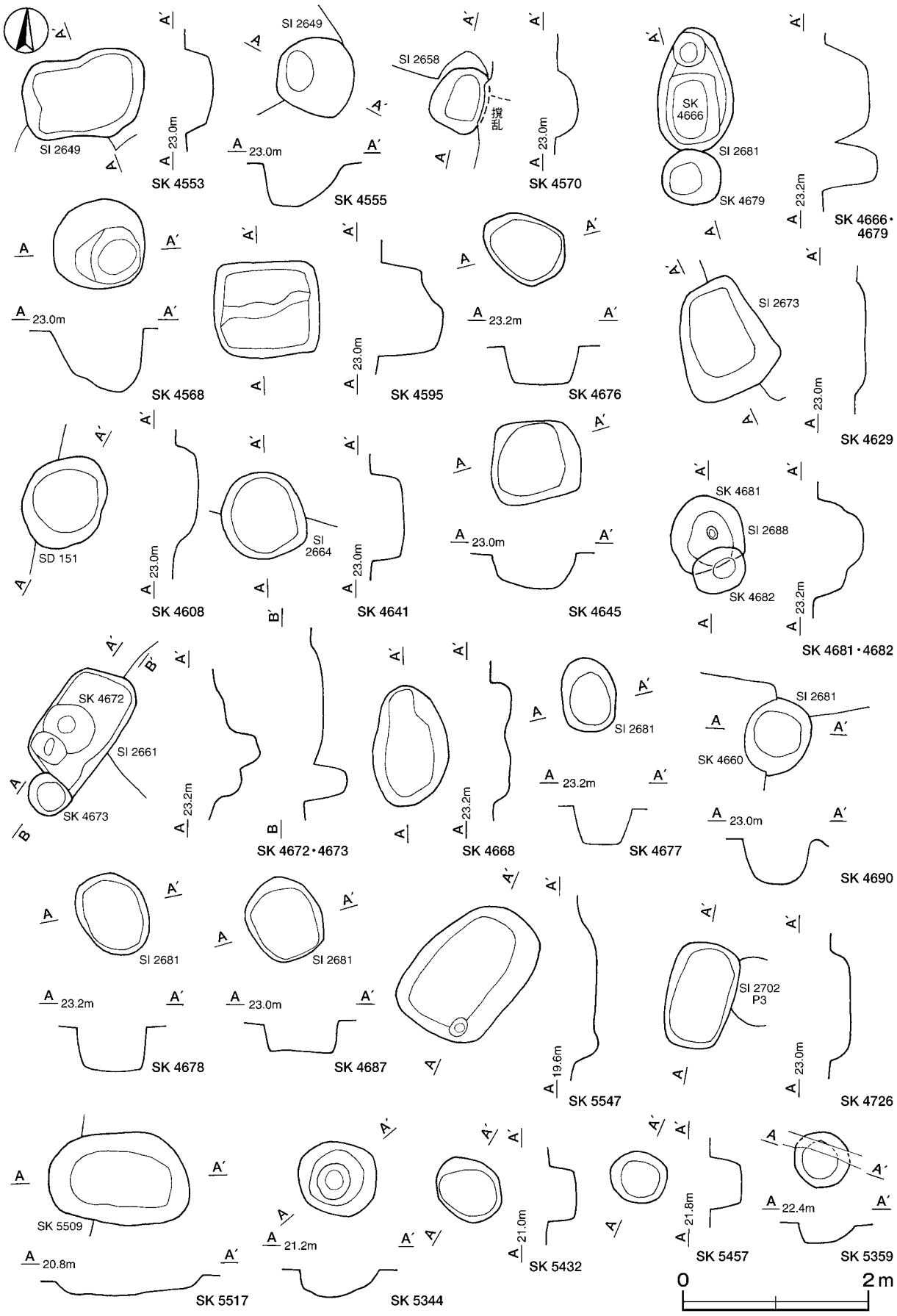
第767図　その他の土坑実測図(10)



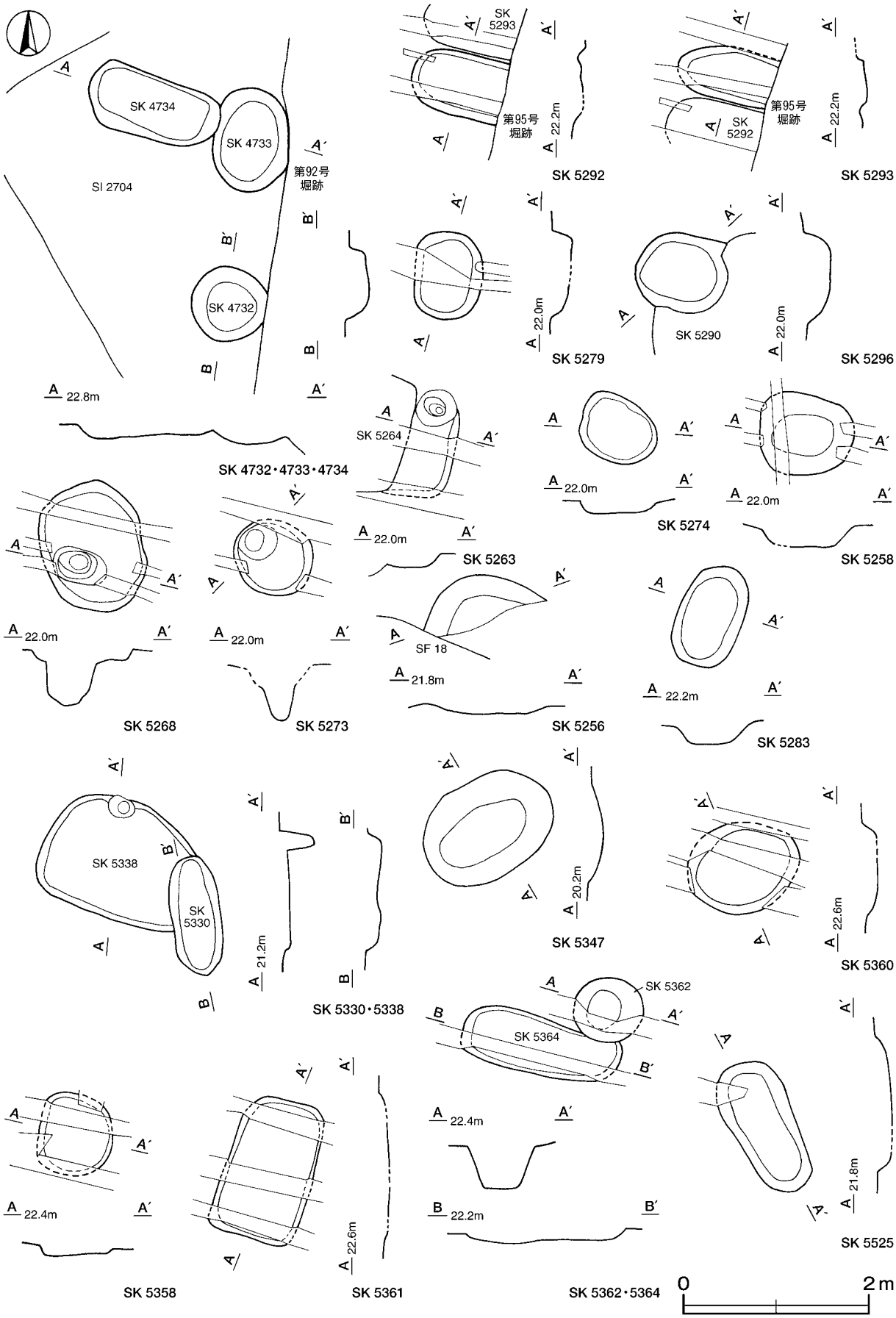
第768図　その他の土坑実測図(11)



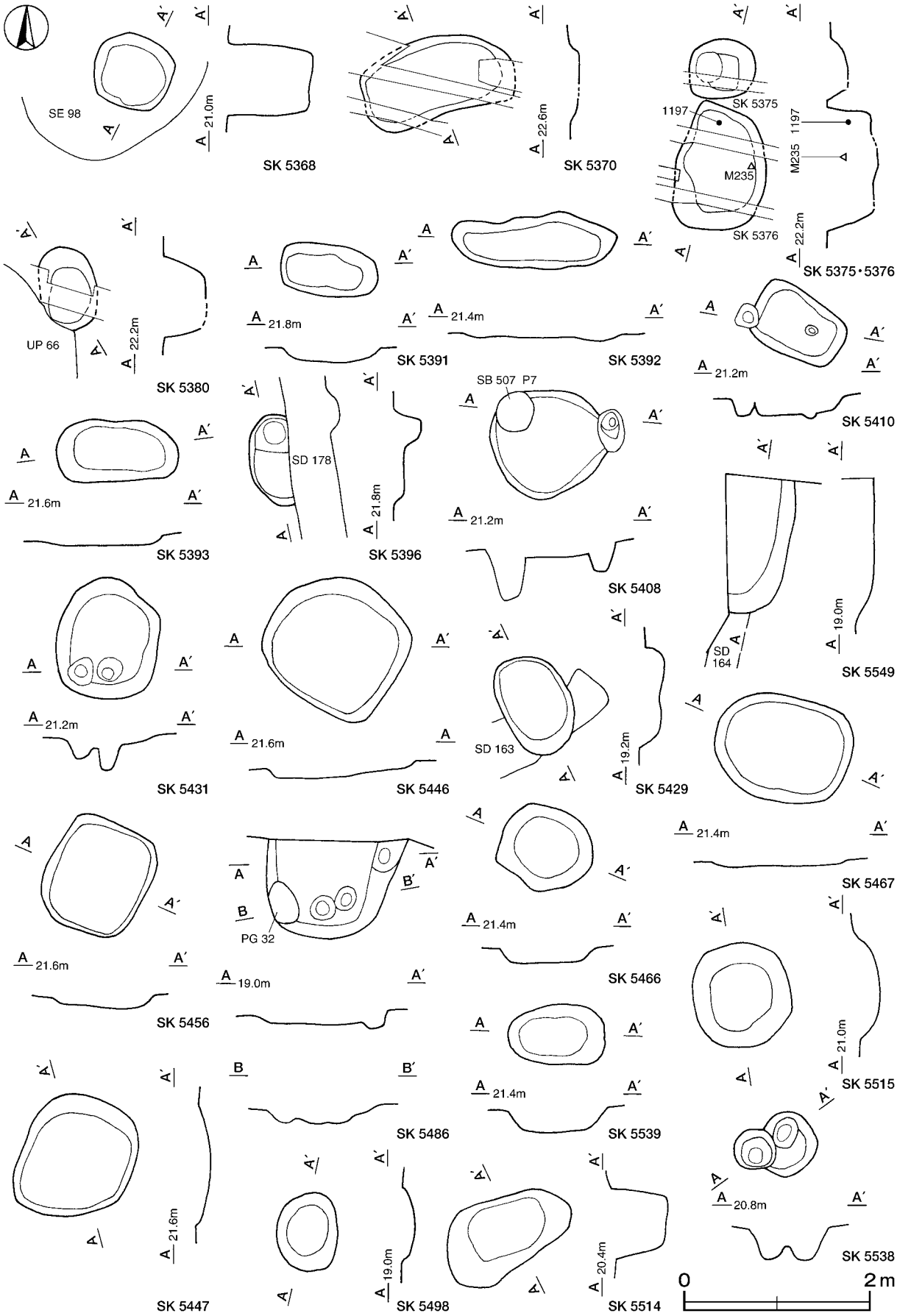
第769図　その他の土坑実測図(12)



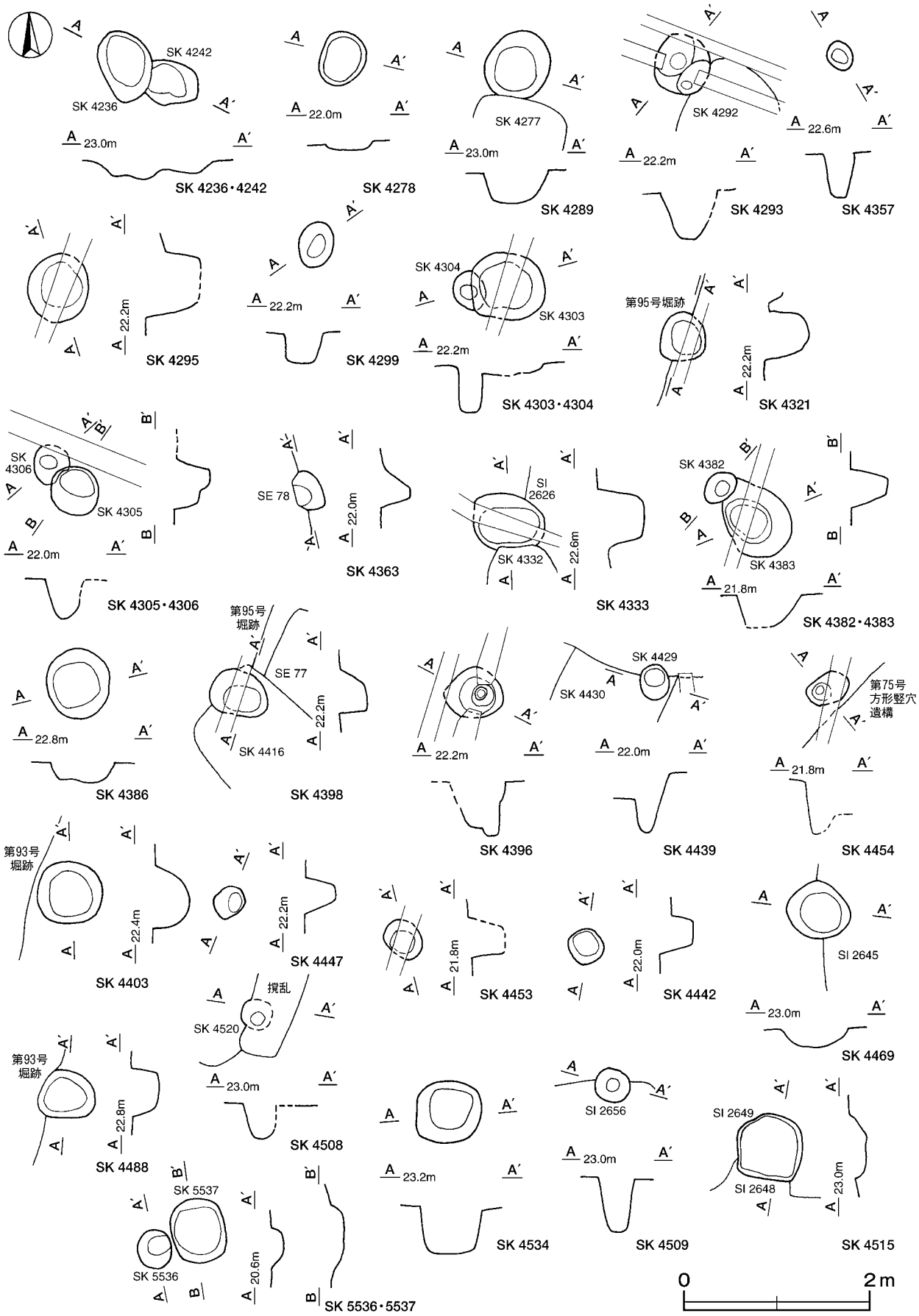
第770図　その他の土坑実測図(13)



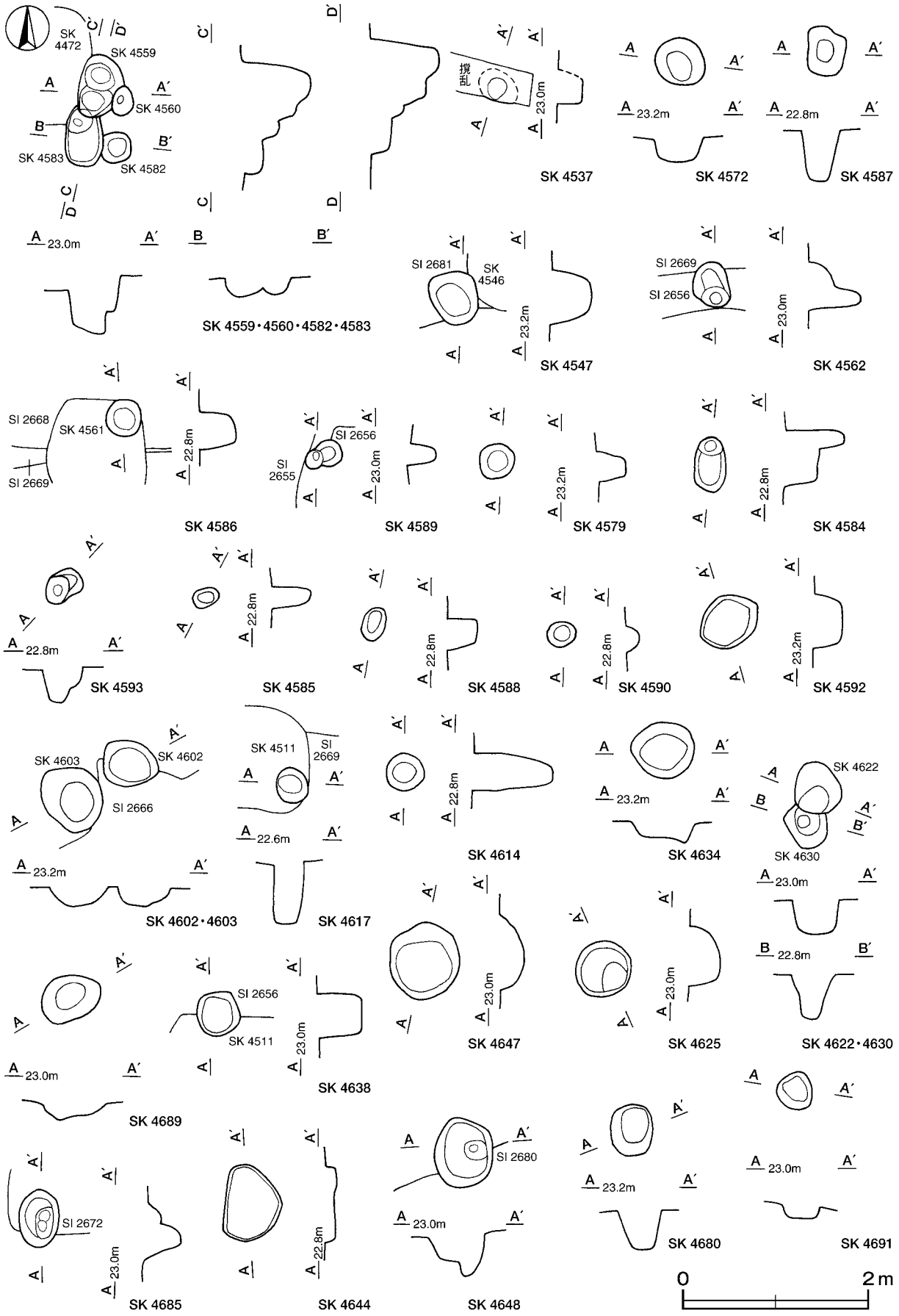
第771図　その他の土坑実測図(14)



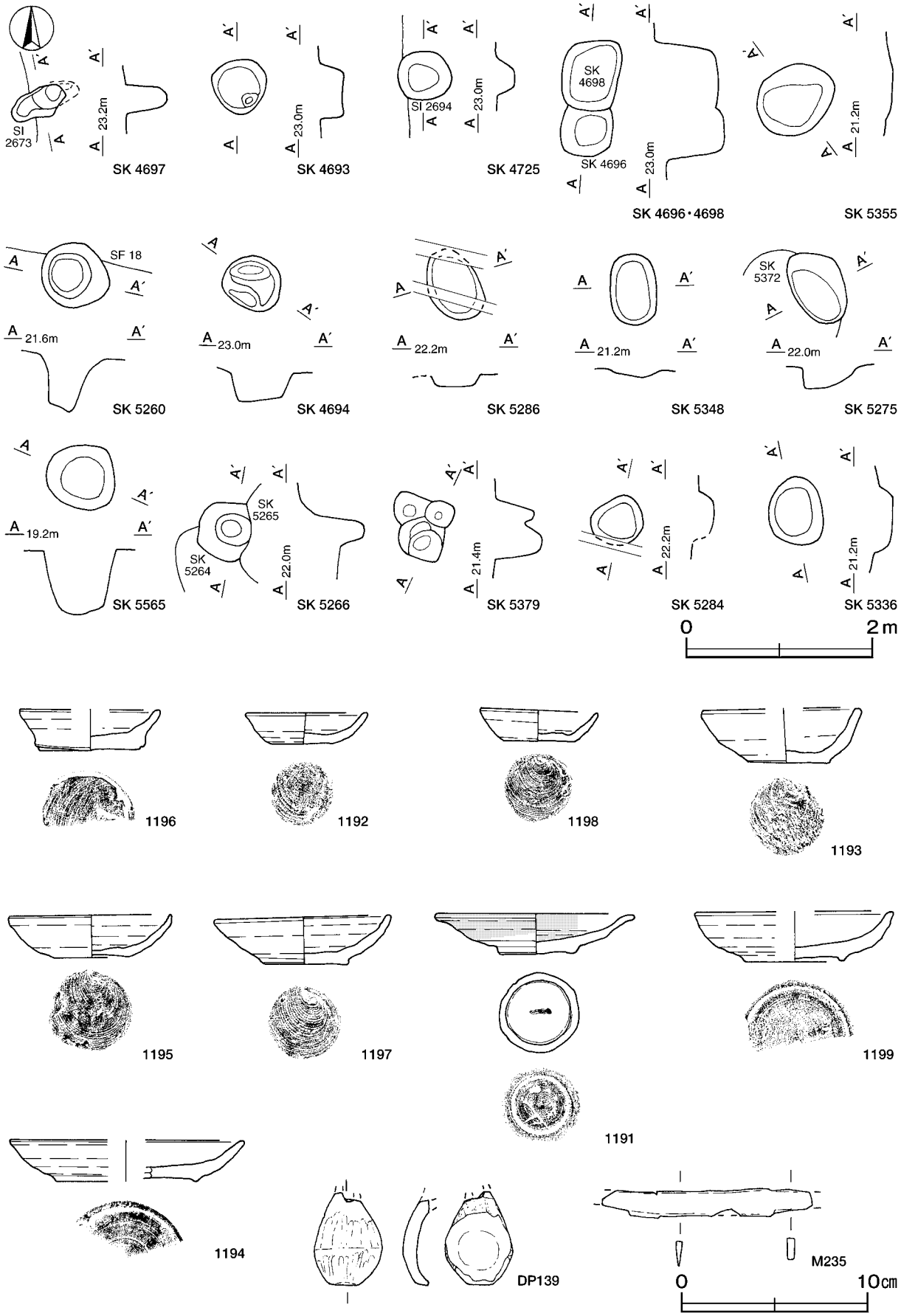
第772図　その他の土坑実測図(15)



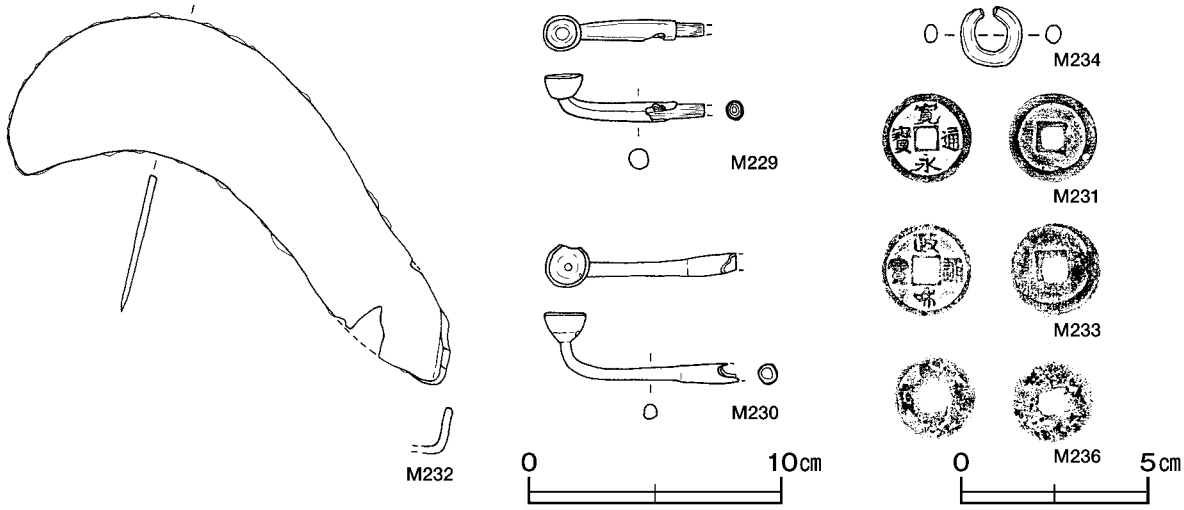
第773図　その他の土坑実測図(16)



第774図　その他の土坑実測図(17)



第775図　その他の土坑・出土遺物実測図



第776図　その他の土坑出土遺物実測図

第4175号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M229	煙管	(6.4)	1.4	2.0	(6.4)	銅	外面緑青　内羅宇一部残存　雁首部	覆土中	PL147

第4186号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1191	陶器	灰釉端反皿	10.5	2.3	4.0	精良・灰釉	灰オリーブ	良好	体部内・外面灰釉　体部内面トチン痕　削り出し高台　高台周辺無釉　底部朱墨「一」	下層	100% 瀬戸・美濃系 PL136・137

第4194号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP139	土鈴	(5.0)	3.7	0.3	(16.2)	土(長石･雲母)	ヘラ磨き　にぶい橙色　孔有	覆土中	PL138

第4235号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1192	土師質土器	小皿	6.4	1.7	3.4	長石･石英･赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	上層	80%

第4383号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M230	煙管	(7.7)	2.7	0.8	(7.2)	銅	外面緑青　雁首部　肩部有り	上層	PL147

第4412号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M231	古銭	2.50	0.55	0.20	5.5	銅	寛永通寶　初鋳1636年　古寛永	覆土中	

第4438号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M232	鎌	17.5	5.4	0.3	(129.3)	鉄	曲刃　基部折り返し	覆土中	PL146

第4465号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M233	古銭	2.50	0.64	0.24	2.5	銅	政和通寶　初鋳1111年　北宋銭　篆書	下層	PL148

第4553号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1193	土師質土器	小皿	[8.3]	3.0	4.2	雲母	橙	普通	体部内･外面ロクロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り	覆土中	50%

第4610号土坑出土遺物観察表（第776図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M234	耳環	1.7	1.6	0.5	3.2	銅	開口部有り	下層	PL147

第5279号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1194	陶器	丸皿	[12.6]	2.2	[7.6]	精良･長石釉	灰白	良好	ロクロ成形　体部内・外面長石釉　削り出し高台　底部無釉	覆土中	30% 志野系

第5336号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1195	土師質土器	小皿	8.7	2.3	4.1	長石･石英･赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土中	100% PL136

第5368号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1196	土師質土器	小皿	[7.4]	2.2	5.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土中	50%

第5376号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1197	土師質土器	小皿	9.4	2.6	4.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部内面ナデ　底部回転糸切り	上層	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M235	刀子	(11.3)	1.6	0.4	(13.8)	鉄	端部欠損　断面三角形　両関	上層	

第5514号土坑出土遺物観察表（第775図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1198	土師質土器	小皿	6.2	1.7	3.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り後ナデ	覆土中	100% PL136

第5522号土坑出土遺物観察表（第775・776図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1199	陶器	丸皿	[10.4]	2.7	[5.3]	精良･長石釉	灰白	良好	ロクロ成形　体部内・外面長石釉　削り出し高台　底部無釉	中層	40% 志野系

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M236	古銭	2.40	0.69	0.10	2.6	銅	熙寧元寶　初鋳1068年　北宋銭　真書	中層	PL148

表64　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4165	S 5 h1	N－10°－W	楕円形	1.91×0.92	23	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2596→SI2597→本跡
4166	S 5 c2	N－54°－E	不整楕円形	1.68×1.40	12	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片	SI2609・SB478→本跡
4167	S 5 c4	N－54°－W	楕円形	1.44×0.76	20	外傾	平坦	人為		SI2594→本跡
4172	S 4 i8	N－9°－E	楕円形	0.68×0.58	26	垂直	平坦	人為		SK4169→本跡
4173	S 4 j8	N－61°－W	楕円形	0.64×0.58	38	外傾	傾斜	人為		SK4169→SK4178→本跡
4175	T 4 a8	N－33°－E	[不整楕円形]	6.14×(2.40)	95	緩斜	U字状	自然	土師器片，須恵器片，土師質土器片，陶器片，石臼，砥石，煙管	本跡→SF17
4176	S 4 i8	N－24°－E	[隅丸長方形]	(1.22)×0.64	28	緩斜	U字状	人為		SK4169→本跡→SK4177
4178	S 4 j8	N－88°－E	[楕円形]	[1.15]×0.70	72	外傾	平坦	人為	土師質土器片	SK4169→本跡→SK4173
4179	S 4 j8	N－48°－E	円形	1.08×1.00	30	垂直	平坦	人為		SF16→本跡
4180	S 5 c3	N－14°－E	楕円形	1.16×0.94	30	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2608→本跡
4183	S 5 d1	N－52°－W	楕円形	0.84×0.74	36	緩斜	平坦	人為	土師器片	SI2615→本跡
4185	S 5 a7	N－78°－W	方形	1.14×1.08	49	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SK4191→本跡
4186	S 5 a7	N－10°－E	長方形	2.12×1.78	11	緩斜	平坦	人為	土師器片，陶器片	
4188	S 4 c0	N－80°－E	方形	1.96×1.84	19	外傾	平坦	人為		SK2616→本跡→SK4189→SK4195
4189	S 4 c0	N－82°－W	楕円形	1.66×1.36	77	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SK4188→本跡→SK4195
4191	S 5 a7	N－78°－W	[長方形]	1.26×0.89	16	緩斜	平坦	人為		本跡→SK4185
4194	S 5 b2	N－25°－E	楕円形	1.52×0.91	20	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，陶器片，土製鈴	SI2609→本跡→SB474
4195	S 4 c0	N－10°－W	隅丸方形	0.94×0.86	54	外傾	平坦	人為		SK4188→SK4189→本跡
4197	S 4 e0	N－87°－E	楕円形	1.25×0.87	11	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,灰釉陶器片	SI2603→SI2604→本跡
4198	S 4 b0	N－7°－E	隅丸長方形	2.02×0.96	12	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，砥石	SK4199→本跡
4200	Q 5 i2	N－35°－E	隅丸長方形	2.14×1.46	17	緩斜	平坦	人為		SD155・SK4201→本跡
4202	Q 5 j1	N－30°－E	楕円形	0.83×(0.68)	10	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片	本跡→SD155
4204	Q 5 i1	N－15°－E	楕円形	0.96×0.85	38	外傾	平坦	人為	土師器片，磁器片，瓦片	
4205	Q 5 h1	N－80°－W	楕円形	1.12×0.85	14	緩斜	U字状	自然	土師器片，須恵器片	
4206	Q 5 g2	N－74°－E	楕円形	0.86×0.74	18	緩斜	平坦	自然	土師器片，須恵器片，磁器片，種子	
4207	Q 5 h1	N－68°－E	楕円形	1.20×0.85	16	緩斜	平坦	人為	土師器片，瓦片	
4216	Q 4 g0	N－48°－W	方形	1.22×1.12	19	緩斜	平坦	人為		第95号堀跡→本跡
4218	Q 4 g8	N－79°－W	楕円形	1.52×1.32	8	緩斜	平坦	人為		SK4217→本跡
4219	Q 4 g8	N－35°－E	長方形	1.06×0.84	16	外傾	平坦	自然		
4221	R 5 j4	N－18°－E	長方形	1.90×0.82	8	緩斜	平坦	自然	土師器片，須恵器片	
4224	Q 4 i8	N－7°－W	[隅丸方形]	[0.90]×0.88	15	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK4225→本跡→SK4233
4229	Q 4 i7	N－4°－W	楕円形	1.10×0.88	49	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，敲石，砥石，鉄滓	本跡→SK4297
4233	Q 4 i8	N－12°－E	隅丸長方形	1.26×1.04	28	外傾	平坦	人為		SK4225→SK4224・SK4226→本跡
4234	Q 4 i8	N－78°－W	楕円形	1.38×1.01	26	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SE72→SK4232→本跡
4235	R 5 h1	N－73°－E	長方形	2.00×1.41	15	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2611→本跡
4236	R 5 h2	N－21°－W	楕円形	0.79×0.56	19	緩斜	平坦	人為		SK4242→本跡
4240	S 4 a0	N－30°－E	長方形	1.24×0.94	29	緩斜	傾斜	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，灰釉陶器片	SI2621→SB477→本跡
4242	R 5 h2	N－75°－W	[楕円形]	(1.54)×0.46	13	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	本跡→SK4236
4248	Q 4 j8	N－76°－W	楕円形	1.40×0.78	12	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK4249→本跡→SK4227
4250	Q 4 j7	N－74°－W	楕円形	1.62×0.96	13	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SK4249→本跡
4251	Q 4 j8	N－40°－E	[楕円形]	0.90×(0.60)	16	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SK4252
4257	S 5 b4	N－24°－E	楕円形	5.16×4.32	66	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，灰釉陶器片，陶磁器片，刀子	SI2618→SB472・474→本跡
4259	Q 4 f9	N－67°－W	不整長方形	2.97×0.77	10	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK4231→本跡
4261	Q 4 f9	N－82°－W	楕円形	1.84×0.63	24	緩斜	平坦	自然		SK4231→本跡
4263	Q 4 j9	N－80°－W	楕円形	1.21×0.88	22	緩斜	平坦	人為		第95号堀跡→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4264	R4j9	N－72°－W	楕円形	[1.43]×1.14	16	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	第95号堀跡→本跡→SK4265
4265	R4j9	N－77°－W	隅丸方形	1.04×1.00	24	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	第95号堀跡→SK4264→本跡
4267	Q4i6	N－76°－W	隅丸長方形	1.46×1.24	46	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SE78→本跡
4268	Q4i5	N－19°－E	楕円形	[1.18]×0.96	22	緩斜	平坦	人為	土師器片	SE78→本跡
4274	R4f5	N－9°－E	方形	1.07×[0.93]	44	緩斜	U字状	人為	須恵器片，鉄滓	
4276	S4f0	N－36°－W	楕円形	1.08×0.94	50	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片，砥石	SI2591・2623→本跡→SK4275
4278	Q4g7	N－23°－E	楕円形	0.60×0.48	10	外傾	U字状	人為		
4280	R5g1	N－25°－E	隅丸長方形	1.34×0.96	18	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,土玉	SI2599→本跡
4281	R4a8	N－66°－E	[楕円形]	1.48×[0.70]	6	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SK4282・4284→本跡
4282	R4a8	N－77°－W	楕円形	0.50×0.35	62	垂直	凹凸	人為	土師器片，須恵器片	第95号堀跡→本跡→SK4281
4284	R4a8	N－85°－E	[方形]	0.68×(0.48)	20	緩斜	U字状	人為	須恵器片	本跡→SK4281・4283
4285	R5f1	N－23°－E	不整楕円形	1.83×0.88	18	外傾	凹凸	人為		SI2599→本跡
4288	R4c7	N－16°－E	楕円形	1.00×[0.72]	46	外傾	平坦	自然	土師器片，須恵器片，陶器片	
4289	R5a1	N－14°－E	円形	(0.74)×0.68	35	外傾	U字状	自然	須恵器片	本跡→SK4277
4290	Q5j2	N－16°－E	楕円形	1.28×0.92	18	外傾	平坦	自然	土師器片，茶臼	SD155→本跡
4293	R4a8	N－23°－E	円形	[0.62]×0.58	52	外傾	U字状	人為	土師質土器片，陶器片	SK4292→本跡
4294	R4i4	N－64°－W	楕円形	1.06×0.84	18	外傾	平坦	人為	土師器片,土師質土器片,陶器片	
4295	R4i4	N－0°	円形	0.74×0.68	60	外傾	U字状	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	
4299	R4a7	N－17°－E	楕円形	0.45×0.38	32	外傾	U字状	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	
4300	R4b7	N－17°－E	円形	0.36×0.35	49	外傾	平坦	人為		
4301	R4b7	N－21°－E	楕円形	0.34×0.30	35	外傾	平坦	人為		SK4302→本跡
4302	R4a7	N－77°－W	隅丸長方形	1.72×0.84	16	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	本跡→SK4301・4307
4303	R4i5	N－81°－E	楕円形	0.80×0.74	15	緩斜	平坦	人為	土師器片	SK4304→本跡
4304	R4i5	N－12°－W	楕円形	0.45×0.36	51	垂直	平坦	人為	陶器片	本跡→SK4303
4305	Q4j7	N－36°－W	楕円形	0.56×0.52	36	外傾	平坦	人為		SK4306→本跡
4306	Q4j6	N－0°	円形	0.42×0.40	44	外傾	U字状	人為	土師質土器片	本跡→SK4305
4307	R4a7	N－70°－E	円形	0.30×0.28	17	緩斜	平坦	人為		SK4302→本跡
4309	R4c8	N－23°－E	楕円形	0.92×[0.58]	11	外傾	平坦	人為	陶器片	SI2627→本跡・SK4326
4310	R4d8	N－30°－E	長方形	3.88×0.73	10	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,磁器片	本跡→SK4311
4311	R4d8	N－6°－E	楕円形	1.34×0.70	11	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	SK4310→本跡
4321	R4f7	N－65°－E	方形	0.55×0.53	50	外傾	平坦	人為	土師質土器片	第95号堀跡→本跡
4326	R4d8	N－23°－E	楕円形	0.60×[0.38]	18	外傾	平坦	人為		SI2627→本跡・SK4309
4329	R5i1	N－25°－E	隅丸長方形	1.32×0.90	5	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,鉄製品	SI2632・2636→本跡
4333	R4b9	N－80°－E	楕円形	0.76×0.62	48	垂直	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	SI2626→本跡→SK4332
4336	R4g0	N－9°－W	長方形	1.44×0.33	28	外傾	平坦	人為		SD155→SK4334→本跡
4340	R4j3	N－73°－W	円形	0.91×0.85	27	緩斜	U字状	人為	土師器片	SK4339→本跡→SK4356
4344	R4j4	N－5°－E	楕円形	0.92×0.70	17	外傾	平坦	人為		SK4362→本跡→SK4449
4347	R4h4	N－69°－W	長方形	1.16×0.98	24	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK4367→本跡
4348	R4i4	N－67°－W	[隅丸長方形]	[1.05]×0.76	34	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，陶器片	
4349	R4i4	N－66°－W	円形	0.90×0.79	54	垂直	平坦	人為	土師器片，瓦片	
4350	R4i4	N－15°－E	[長方形]	1.60×[0.47]	32	外傾	凹凸	人為	土師器片，土師質土器片	SK4351→本跡→SB481
4354	R4i3	N－19°－E	楕円形	1.53×[1.05]	20	緩斜	平坦	人為		SK4352・4355→本跡→SK4444
4356	R4i3	N－19°－E	楕円形	1.52×0.72	30	外傾	平坦	人為	土師器片	SK4340→本跡
4357	Q4i9	N－54°－W	円形	0.31×0.29	45	外傾	平坦	人為		
4363	Q4i6	N－20°－W	[円形]	0.44×(0.28)	30	外傾	平坦	人為		本跡→SE78
4366	R4i4	N－75°－W	楕円形	0.86×0.74	32	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,鉄滓	

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4367	R 4 h4	N－9 °－W	不整楕円形	1.36×1.18	28	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	本跡→SK4347
4372	R 4 e3	N－23 °－E	隅丸長方形	1.76×0.95	24	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	
4376	R 5 i1	N－76 °－W	楕円形	1.05×0.94	25	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	
4377	R 5 i1	N－47 °－W	円形	1.25×1.18	11	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2636→本跡
4378	R 4 e3	N－20 °－E	円形	1.27×[1.26]	15	緩斜	U字状	自然		
4379	R 4 f4	N－23 °－E	円形	0.22×0.22	24	垂直	平坦	人為		SK4373→本跡
4381	R 4 f4	N－15 °－E	円形	0.32×[0.32]	32	垂直	平坦	人為		SK4373→本跡
4382	R 4 d5	N－35 °－E	円形	0.38×0.30	42	外傾	U字状	人為	土師質土器片	SK4383→本跡
4383	R 4 d5	N－28 °－W	楕円形	0.95×0.65	35	緩斜	U字状	人為	煙管	本跡→SK4382
4385	R 4 h4	N－75 °－W	楕円形	[1.08]×0.87	42	外傾	平坦	人為	土師器片	第75号方形竪穴遺構→本跡
4386	S 5 d2	N－12 °－W	円形	0.78×0.70	11	外傾	平坦	人為		
4387	S 5 d2	N－0 °	[円形]	(1.21)×1.20	50	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	本跡→SK4392→SK4391
4391	S 5 d2	N－79 °－E	楕円形	0.64×0.54	60	外傾	平坦	人為		SK4387→SK4392→本跡
4392	S 5 d2	N－79 °－W	楕円形	1.00×0.62	38	外傾	平坦	人為	須恵器片	SK4387→本跡→SK4391
4395	R 4 g4	N－67 °－W	[不整楕円形]	[1.82]×1.00	40	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，陶器片	本跡→第75号方形竪穴遺構・SK4452
4396	R 4 h5	N－64 °－W	楕円形	0.60×0.55	40	緩斜	平坦	人為		
4398	R 4 b8	N－67 °－W	楕円形	0.66×0.48	30	垂直 外傾	平坦	人為		第95号堀跡・SE77・SK4416→本跡
4400	R 5 j4	N－85 °－W	楕円形	0.85×0.72	16	緩斜	U字状	自然	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
4401	S 5 d1	N－19 °－E	楕円形	0.80×(0.74)	55	緩斜	U字状	自然	土師器片，須恵器片	SI2604→SI2615→本跡→SK4438
4403	S 4 c9	N－67 °－W	円形	0.71×0.67	38	垂直	U字状	人為	土師器片	SI2614→本跡
4406	R 4 h7	N－0 °	円形	1.00×[0.98]	62	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2638→本跡
4407	R 4 h8	N－4 °－W	隅丸方形	0.96×0.90	8	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，灰釉陶器片	SI2638→本跡
4408	R 4 h8	N－8 °－W	隅丸長方形	0.94×0.80	16	外傾	凹凸	人為	土師器片	SI2638→SD156→本跡
4411	R 4 g6	N－87 °－E	[楕円形]	1.08×(0.51)	26	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，陶器片，砥石	本跡→SK4437
4412	R 4 g6	N－28 °－E	[楕円形]	(1.51)×1.04	41	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,古銭	本跡→SD157
4427	R 4 f6	N－83 °－E	楕円形	0.26×0.21	50	垂直	U字状	人為		SK4419→本跡
4428	R 4 e6	N－69 °－E	楕円形	0.36×0.30	58	垂直	U字状	人為		SK4418→本跡
4431	R 4 f6	N－22 °－E	不整円形	[0.60]×0.60	18	外傾	平坦	人為		SK4421→本跡
4433	R 4 f6	N－80 °－W	楕円形	0.78×0.52	25	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
4434	R 4 f6	N－63 °－W	楕円形	0.98×0.54	43	外傾	U字状	人為	土師器片	SK4441→本跡
4435	R 4 f5	N－16 °－E	隅丸長方形	1.48×1.12	25	外傾	緩斜	人為		本跡→SK4436
4437	R 4 g6	N－87 °－E	楕円形	1.34×1.02	68	外傾	平坦	人為		SK4411→本跡
4438	S 4 d0	N－14 °－E	円形	0.73×0.72	55	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,灰釉陶器片,鎌	SI2604→SI2615→SK4401→本跡
4439	R 4 g4	N－23 °－W	楕円形	0.35×0.32	62	外傾	平坦	人為		SK4430→SK4429→本跡
4440	R 4 f5	N－16 °－E	楕円形	0.34×0.31	64	垂直	U字状	人為		SK4436→本跡
4441	R 4 f6	N－75 °－W	楕円形	0.36×0.32	46	外傾	U字状	人為		本跡→SK4434
4442	R 4 g3	N－32 °－W	方形	0.39×0.38	34	外傾	平坦	人為		
4444	R 4 i3	N－13 °－E	円形	0.40×(0.36)	44	外傾	U字状	人為		SK4354→本跡
4445	R 4 j3	N－33 °－W	楕円形	0.38×0.23	34	外傾	U字状	人為		
4447	R 4 i5	N－21 °－E	楕円形	0.41×0.31	32	外傾	平坦	人為		
4453	R 4 g3	N－47 °－W	楕円形	0.44×[0.35]	40	外傾	平坦	人為		
4454	R 4 g4	N－60 °－E	楕円形	0.46×0.30	56	外傾	U字状	人為		
4458	Q 5 f9	N－11 °－E	[隅丸長方形]	(1.10)×0.68	36	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK4459→本跡
4459	Q 5 f9	N－5 °－E	[隅丸方形]	(0.70)×(0.66)	22	垂直	平坦	人為		本跡→SK4458
4460	Q 5 f6	N－10 °－E	長方形	1.95×1.74	68	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，鉄製品	
4461	Q 5 g9	N－2 °－E	楕円形	2.60×1.61	21	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，石臼	SK4462→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4465	Q 5 g7	N－3 °－E	[不整形]	2.01×(1.52)	17	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，古銭	SI2640→本跡・SK4466→SK4467→SE80
4466	Q 5 g7	N－4 °－E	[楕円形]	(2.86)×(1.45)	18	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2640→本跡→SK4465・SK4467→SE80
4467	Q 5 g7	N－28 °－E	[楕円形]	1.83×(1.08)	28	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2640→SK4466→本跡・SK4465→SE80
4469	R 5 a4	N－41 °－W	円形	0.66×0.60	23	緩斜	平坦	人為	土師器片，釘，鉄滓	SI2645→本跡
4470	R 5 a4	N－3 °－E	楕円形	0.91×0.69	16	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，陶器片，釘	SI2646→本跡
4471	R 5 a3	N－58 °－W	長方形	0.95×0.73	16	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
4474	R 5 c7	N－72 °－E	楕円形	0.93×0.78	14	緩斜	U字状	人為		
4475	R 5 b5	N－5 °－E	隅丸方形	0.96×0.92	34	外傾	平坦	人為		SI2645→本跡
4479	Q 5 g8	N－17 °－E	楕円形	1.35×1.15	34	外傾	平坦	人為		SI2652→本跡
4483	Q 5 g5	N－38 °－W	不整形	2.09×1.45	33	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，砥石	SI2560→本跡
4487	Q 5 g5	N－16 °－W	楕円形	0.87×0.68	10	外傾	平坦	人為		SK4463→本跡
4488	Q 5 j3	N－79 °－W	[楕円形]	[0.65]×0.52	26	外傾	平坦	人為		SI2643→本跡→第93号堀跡
4491	R 5 a4	N－9 °－W	楕円形	0.91×0.80	31	緩斜	平坦	人為		SI2646→本跡
4492	Q 6 i1	N－11 °－E	楕円形	2.43×0.84	16	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2663→SK4503→本跡
4493	Q 6 h5	N－77 °－W	隅丸長方形	1.50×1.04	10	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，磁器片，鉄製品	
4494	R 6 a8	N－7 °－W	円形	1.26×1.17	40	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，瓦片	本跡→第92号堀跡
4499	R 5 a3	N－80 °－W	不整楕円形	1.04×0.88	38	外傾	平坦	人為	須恵器片	SI2655→本跡→第93号堀跡
4508	Q 5 j5	N－52 °－W	[円形]	[0.34]×[0.31]	36	外傾	U字状	人為		SK4520→本跡
4509	R 5 b4	N－29 °－W	円形	0.40×0.37	57	垂直	U字状	人為		SI2656→本跡
4514	Q 5 i7	N－78 °－W	楕円形	1.58×1.43	23	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2640→本跡
4515	R 5 b5	N－6 °－E	不整円形	0.71×0.70	8	緩斜	凹凸	人為	土師器片，須恵器片	SI2648・2649→本跡
4516	R 5 d5	N－3 °－E	[楕円形]	1.07×(0.74)	52	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	本跡→SK4607
4517	R 5 b5	N－78 °－E	楕円形	2.07×1.52	20	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片，釘	第77号方形竪穴遺構→SK4600→本跡
4518	Q 5 i5	N－89 °－W	楕円形	0.95×0.89	21	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
4525	Q 6 j2	N－70 °－W	不整楕円形	1.56×0.97	18～50	外傾	平坦	人為		SI2663→本跡
4534	R 5 d6	N－9 °－E	隅丸方形	0.68×0.68	49	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
4537	Q 5 j6	N－40 °－W	[楕円形]	[0.48]×[0.34]	23	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
4547	R 5 f6	N－19 °－W	不整楕円形	0.60×0.52	42	垂直	平坦	人為		SI2681→SK4546→本跡
4549	R 5 c5	N－7 °－E	不明	0.83×(0.46)	23	外傾	平坦	人為		SI2648・2649→本跡→SK4505
4553	R 5 b6	N－81 °－E	不整楕円形	1.30×0.85	30	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2649→本跡
4555	R 5 c7	N－28 °－W	不整楕円形	0.90×0.85	44	緩斜	平坦	人為	須恵器片	SI2649→本跡
4559	R 5 b3	N－14 °－E	楕円形	0.68×0.50	73	垂直	平坦	人為		SK4583→本跡→SK4560→SK4472
4560	R 5 a4	N－8 °－E	楕円形	0.32×0.27	38	垂直	平坦	人為		SK4559→本跡
4562	R 5 d3	N－15 °－W	不整楕円形	0.50×0.38	52	外傾垂直	U字状	人為		SI2669→SI2656→本跡
4568	R 5 f5	N－1 °－E	円形	0.97×0.98	67	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片	
4570	Q 6 g5	N－17 °－E	[楕円形]	0.74×[0.58]	18	外傾	平坦	人為		SI2658→本跡
4572	R 5 d6	N－39 °－W	楕円形	0.56×0.50	26	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
4577	R 5 e5	N－3 °－E	不整楕円形	1.42×0.88	22	緩斜	凹凸	人為	土師器片，須恵器片	
4578	R 5 e5	N－88 °－W	楕円形	1.11×0.90	55	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
4579	R 5 f5	N－28 °－E	円形	0.40×0.36	38	外傾	U字状	人為	土師器片	
4582	R 5 c4	N－40 °－E	[楕円形]	[0.36]×0.32	19	外傾	U字状	人為		本跡→SK4583
4583	R 5 c3	N－1 °－W	[楕円形]	(0.66)×0.38	36	垂直	平坦	人為	土師器片	SK4582→本跡
4584	R 5 c3	N－6 °－W	楕円形	0.60×0.33	40	垂直	平坦	人為		SI2669→SI2668→SI2656→本跡
4585	R 5 c3	N－60 °－E	楕円形	0.29×0.22	41	垂直	U字状	人為		SI2669→SI2668→SI2656→本跡
4586	R 5 d3	N－5 °－W	円形	0.40×0.37	34	垂直	U字状	人為		SI2669→SI2668→SI2656→SK4561→本跡
4587	R 5 c3	N－17 °－W	不整楕円形	0.56×0.42	56	外傾	平坦	人為		SI2669→SI2668→SI2656→本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4588	R 5 c3	N－24°－E	楕円形	0.36×0.24	32	垂直	平坦	人為		SI2669→SI2668→SI2656→本跡
4589	R 5 b3	N－64°－E	不整楕円形	0.40×0.25	30	垂直	平坦	人為		SI2656→SI2655→本跡
4590	R 5 c2	N－42°－E	円形	0.30×0.28	15	外傾	平坦	人為		SI2656→SI2655→本跡→第93号堀跡
4592	Q 6 h1	N－35°－E	楕円形	0.63×0.55	31	外傾	平坦	人為		
4593	R 5 d3	N－55°－E	不整楕円形	0.43×0.40	37	外傾	平坦	人為		
4595	R 5 d4	N－88°－E	方形	1.13×1.04	67	外傾	平坦	人為		
4602	Q 6 j3	N－81°－W	楕円形	0.59×0.49	20	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2666→本跡
4603	Q 6 j3	N－47°－W	楕円形	0.74×0.62	22	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，陶器片	SI2666→本跡
4607	R 5 d5	N－1°－E	長方形	1.58×0.99	46	緩斜	平坦	人為	土師器片	SI2649→SK4516→本跡
4608	Q 6 h6	N－26°－E	楕円形	1.07×0.85	26	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SD151→本跡
4610	Q 6 h6	N－4°－E	隅丸長方形	4.70×0.74	12	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,灰釉陶器片,耳環	SI2690→本跡
4614	R 5 c3	N－0°	円形	0.40×0.40	86	垂直	U字状	人為		SI2669→SI2668→SI2656→本跡
4617	R 5 c3	N－34°－W	楕円形	0.38×0.34	67	垂直	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	SI2669→SI2668→SI2656→SK4511→本跡
4622	Q 5 j8	N－21°－W	楕円形	0.59×0.45	37	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2680→SI2674→SK4630→本跡
4625	Q 5 j9	N－11°－W	円形	0.60×0.60	32	外傾	U字状	人為		SI2680→SI2673→本跡
4629	Q 5 j9	N－26°－W	不整長方形	1.21×1.04	18	外傾	平坦	人為		SI2680→SI2673→本跡
4630	Q 5 j8	N－61°－W	[楕円形]	0.49×(0.46)	50	外傾	平坦	人為		SI2680→SI2674→本跡→SK4622
4634	R 5 b8	N－84°－W	楕円形	0.71×0.60	20	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
4635	R 5 b7	N－79°－E	不整楕円形	1.64×1.01	44	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	SI2675→本跡
4638	R 5 b3	N－0°	円形	0.48×0.47	－	外傾	平坦	人為		SI2669→SI2668→SI2656→SK4511→本跡
4641	Q 6 g3	N－27°－W	楕円形	0.95×0.86	35	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2664→本跡
4644	Q 5 g8	N－4°－W	不整楕円形	0.84×0.60	11	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2680→SI2674→本跡
4645	Q 5 j8	N－70°－E	隅丸長方形	0.96×0.87	38	緩斜	平坦	人為	土師器片	SI2680→SI2675→SI2674→本跡
4647	Q 6 h6	N－1°－W	楕円形	0.84×0.76	26	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片	
4648	Q 5 i8	N－20°－W	楕円形	0.77×0.66	44	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2680→本跡
4666	R 6 e7	N－4°－W	楕円形	1.32×0.80	50	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，馬歯	SI2681→本跡→SK4679
4668	R 5 a9	N－5°－E	楕円形	1.30×0.82	21	外傾	凹凸	人為		
4672	R 5 a0	N－37°－E	長方形	1.30×0.79	53	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2661→本跡→SK4673
4673	R 5 a0	N－50°－W	楕円形	0.46×0.41	46	外傾	平坦	人為		SK2672→本跡
4676	R 5 f6	N－56°－W	楕円形	0.92×0.68	43	外傾	平坦	人為	土師器片	SI2681→本跡
4677	R 5 f7	N－3°－W	楕円形	0.80×0.59	25	緩斜	平坦	人為	土師器片	SI2681→本跡
4678	R 6 e7	N－29°－W	楕円形	0.93×0.75	46	垂直	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2681→本跡
4679	R 5 f7	N－79°－W	円形	0.64×0.59	27	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2681→SK4666→本跡
4680	R 5 f6	N－2°－W	円形	0.56×0.46	30	外傾	平坦	人為		SI2681→本跡
4681	R 5 h8	N－17°－W	楕円形	0.82×0.79	38	緩斜	U字状	人為	土師器片，土師質土器片，磁器片	SI2688→本跡→SK4682
4682	R 5 h8	N－68°－E	楕円形	0.60×0.46	16	緩斜	平坦	人為		SI2688→SK4681→本跡
4685	Q 6 i2	N－1°－W	楕円形	0.65×0.43	41	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2665→SI2672→本跡
4687	R 5 e7	N－22°－W	楕円形	0.91×0.78	36	垂直	平坦	人為	土師器片	SI2681→本跡
4689	Q 6 g2	N－62°－E	楕円形	0.67×0.49	14	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2662→本跡
4690	R 5 f7	N－22°－E	円形	0.85×0.72	46	緩斜	U字状	人為	土師器片，須恵器片，土製支脚	SI2681→本跡→SK4660
4691	R 6 e6	N－10°－E	円形	0.40×0.37	13	外傾	U字状	人為	土師器片，須恵器片，陶器片	SI2681→本跡
4693	R 5 f7	N－24°－W	円形	0.58×0.58	25	垂直	平坦	人為	土師器片	SI2681→本跡
4694	R 5 f7	N－54°－W	楕円形	6.08×5.50	30	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2681→本跡
4696	R 5 f7	N－5°－E	円形	(0.50)×0.56	58	垂直	平坦	人為	土師器片	SI2681→本跡→SK4698
4697	Q 5 j0	N－69°－E	不整楕円形	0.80×0.33	65	垂直	U字状	人為	土師器片，須恵器片	SI2673→本跡
4698	R 5 f7	N－9°－E	楕円形	0.75×0.63	68	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	SI2681→SK4696→本跡

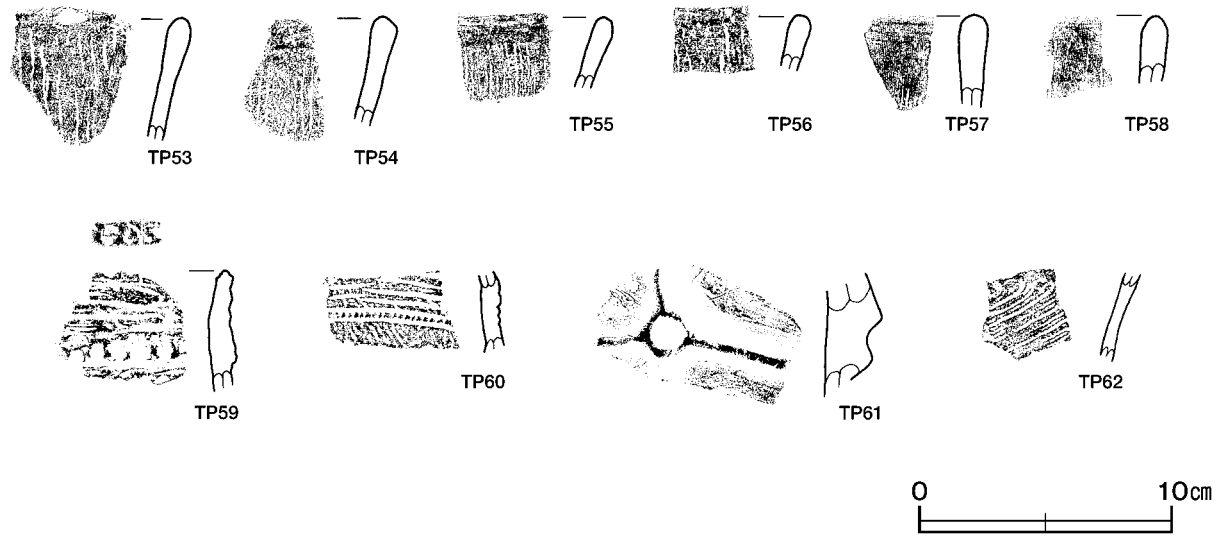
番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
4705	R 6 f3	N－6 °－W	隅丸長方形	1.86×1.60	24	外傾	凹凸	人為	土師器片，須恵器片	SI2686→本跡
4721	Q 5 b1	N－18 °－E	不整隅丸長方形	2.30×1.64	23	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
4724	R 5 e0	N－49 °－E	楕円形	0.95×0.78	22	緩斜	平坦	人為	土師器片	SI2698→本跡
4725	R 5 d0	N－87 °－E	楕円形	0.46×0.40	20	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2694→本跡
4726	R 6 d5	N－13 °－E	隅丸長方形	1.18×0.71	16	外傾	平坦	人為		SI2702→本跡
4732	R 6 f6	N－0 °	円形	0.80×0.80	20	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SI2704→本跡→第92号堀跡
4733	R 6 e6	N－5 °－E	楕円形	1.10×0.82	20	外傾	平坦	人為		SI2704→本 跡→SK4734→第92号堀跡
4734	R 6 e6	N－71 °－W	長楕円形	1.47×0.68	14	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SI2704→SK4733→本跡
5250	S 4 i5	N－30 °－E	不定形	2.06×1.30	8	緩斜	平坦	人為		SK5251→本跡
5256	T 4 a5	N－72 °－E	［円形］	1.26×(0.56)	10	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	本跡→SF18
5258	S 3 g0	N－7 °－E	楕円形	1.04×0.88	18	緩斜	平坦	人為		
5260	T 4 a3	N－62 °－W	円形	0.74×0.68	56	外傾	U字状	人為		SF18→本跡
5263	S 4 c2	N－17 °－E	［方形］	[1.20]×(0.54)	14	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SK5264
5266	S 4 c2	N－10 °－E	円形	0.60×(0.55)	66	垂直	平坦	人為		SK5264→本跡→SK5265
5267	S 4 c3	N－58 °－E	［楕円形］	(0.94)×0.68	6	緩斜	平坦	人為		SK5297→本跡→SK5263→SK5264
5268	S 4 b4	N－16 °－W	楕円形	1.40×1.20	58	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	
5269	T 4 d3	N－57 °－E	不定形	2.30×1.80	48	垂直	平坦	人為	土師器片,土師質土器片,砥石,鉄滓	
5273	S 4 a3	N－70 °－W	円形	0.87×[0.80]	56	外傾	平坦	人為		
5274	S 4 a4	N－44 °－W	楕円形	0.90×0.70	12	緩斜	平坦	人為		
5275	S 4 a4	N－36 °－W	楕円形	0.87×0.57	22	外傾緩斜	平坦	人為	土師質土器片	SK5372→本跡
5279	S 4 b4	N－3 °－E	楕円形	0.94×0.72	20	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	
5283	S 4 c1	N－25 °－E	楕円形	1.14×0.70	18	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	
5284	S 4 c2	N－76 °－E	不整楕円形	0.56×0.50	18	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
5285	S 4 c2	N－78 °－W	［隅丸長方形］	2.10×[0.72]	20	外傾緩斜	平坦	人為	土師質土器片	
5286	S 4 c2	N－29 °－W	楕円形	[0.81]×0.56	12	外傾	平坦	人為		
5290	S 4 e1	N－44 °－E	不整楕円形	2.41×2.07	15	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，陶器片	SK5295・5296→本跡
5292	S 4 b5	N－76 °－W	不明	(1.02)×0.68	9	緩斜	平坦	人為		本跡→第95号堀跡
5293	S 4 c5	N－74 °－W	不明	(1.04)×[0.58]	9	緩斜	平坦	人為		本跡→第95号堀跡
5295	S 4 d1	N－66 °－W	隅丸長方形	1.57×0.97	24	緩斜	U字状	人為	須恵器片，土師質土器片，陶器片，砥石	本跡→SK5290
5296	S 3 d0	N－59 °－W	楕円形	0.96×0.83	27	緩斜	平坦	人為	陶器片	本跡→SK5290
5297	S 4 c2	N－74 °－W	［楕円形］	1.68×(1.06)	10	緩斜	平坦	人為	土師質土器片，陶器片，砥石	本跡→SK5264･5265･5267
5330	R 3 j6	N－5 °－W	楕円形	1.27×0.53	12	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	SK5338→本跡
5332	S 3 b5	N－12 °－W	不整形	2.51×2.26	25	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	
5336	R 3 f7	N－1 °－W	楕円形	0.74×0.59	18	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
5338	R 3 j6	N－64 °－W	不明	(1.60)×1.27	8	緩斜	平坦	人為		本跡→SK5330
5340	R 3 h5	N－89 °－E	不整形	2.06×1.76	36	外傾	平坦	人為	須恵器片，土師質土器片	本跡→SK5339
5344	R 3 e8	N－59 °－W	円形	0.87×0.77	28	緩斜	U字状	人為		
5345	R 3 d6	N－54 °－W	楕円形	2.48×1.74	30	緩斜	U字状	人為	土師器片，土師質土器片	本跡→SD166
5347	R 3 d2	N－57 °－E	楕円形	1.49×1.05	16	緩斜	U字状	人為	須恵器片，土師質土器片，陶器片	
5348	R 3 d9	N－6 °－W	楕円形	0.80×0.48	8	緩斜	U字状	人為	須恵器片	
5353	R 3 i0	N－63 °－W	楕円形	1.13×0.89	28	緩斜	U字状	人為	土師質土器片	
5354	R 3 i0	N－44 °－E	不整楕円形	2.42×1.91	22	緩斜	U字状	人為	土師器片，土師質土器片	
5355	R 3 c8	N－67 °－E	楕円形	0.88×0.76	6	緩斜	平坦	人為		
5358	S 4 d6	N－6 °－E	［楕円形］	[0.88]×0.79	10	外傾	平坦	人為	硯	
5359	S 4 d7	N－8 °－E	円形	0.60×0.60	21	外傾	平坦	人為		
5360	S 4 c6	N－60 °－E	楕円形	1.21×[1.00]	15	外傾緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，土師質土器片	

番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
5361	S 4 d6	N－16 °－E	隅丸長方形	1.56×0.94	6	緩斜	平坦	人為		
5362	S 4 e5	N－75 °－W	楕円形	0.74×0.67	47	外傾	平坦	人為	土師器片	SK5364→本跡
5364	S 4 e5	N－78 °－W	[隅丸長方形]	1.72×0.61	13	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	本跡→SK5362
5368	R 3 a8	N－49 °－W	円形	0.86×0.82	90	垂直	平坦	人為	土師質土器片	SE98→本跡
5370	S 4 e6	N－74 °－E	[隅丸長方形]	1.63×0.84	10	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	
5375	S 4 a4	N－95 °－E	不整楕円形	0.72×0.64	21	緩斜	平坦	人為		
5376	S 4 a4	N－10 °－E	不整長方形	1.35×0.98	54	外傾	平坦	人為	土師器片,土師質土器片,砥石,不明鉄製品	
5379	R 4 b1	N－27 °－W	不整形	0.83×0.65	49	外傾	U字状	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	
5380	S 4 c4	N－13 °－W	楕円形	0.89×0.59	43	緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	本跡→U P66
5383	R 4 j1	N－33 °－W	[楕円形]	[1.16]×[0.86]	30	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	本跡→SK5381→SK5384
5384	R 4 i1	N－31 °－E	隅丸長方形	2.79×1.12	23	緩斜	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶磁器片,貝殻	SK5383→SK5381→本跡
5391	S 4 j1	N－79 °－W	隅丸長方形	1.06×0.57	15	緩斜	U字状	人為		
5392	T 4 b2	N－89 °－E	不整楕円形	1.77×0.61	8	緩斜	U字状	人為		
5393	T 4 b1	N－87 °－E	楕円形	1.32×0.68	10	緩斜外傾	平坦	人為		
5396	S 3 i0	N－10 °－W	[楕円形]	1.00×(0.44)	26	緩斜外傾	平坦	人為		本跡→SD178
5401	Q 3 i9	N－24 °－E	長方形	4.22×1.96	25	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片，陶器片	SK5405→SK5404→ SK5403→SK5402→本跡
5402	Q 3 i9	N－24 °－E	長方形	5.46×0.71	22	緩斜	平坦	人為	土師器片,土師質土器片,陶器片,瓦片	SK5404→本跡→SK5401
5403	Q 3 i9	N－25 °－E	長方形	4.86×1.20	50	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	SK5405→本跡→SK5401
5404	Q 3 i9	N－25 °－E	長方形	5.32×0.97	24	緩斜	平坦	人為		SK5405→本跡→SK5402→SK5401
5405	Q 3 i9	N－25 °－E	長方形	4.88×0.80	25	外傾	平坦	人為	須恵器片，陶器片	本跡→SK5404→SK5403→SK5401
5408	Q 4 f3	N－73 °－W	円形	1.27×1.22	28	緩斜	平坦	人為	土師質土器片	本跡→SB507
5409	Q 4 e2	N－16 °－E	不整楕円形	2.06×1.28	18	緩斜	平坦	人為		本跡→SB507
5410	Q 4 e3	N－59 °－W	隅丸長方形	1.03×0.69	15	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
5425	Q 3 f3	N－10 °－E	楕円形	2.59×1.95	10	外傾	平坦	人為		本跡→SB508
5429	Q 3 g4	N－25 °－W	楕円形	1.10×0.75	22	外傾	平坦	人為		SD163→本跡
5431	Q 4 e3	N－ 7 °－W	楕円形	1.32×1.08	12	緩斜	U字状	人為	土師器片，土師質土器片	
5432	Q 3 j9	N－43 °－W	楕円形	0.76×0.62	32	外傾	平坦	人為		
5440	Q 3 i0	N－41 °－W	隅丸方形	2.30×2.25	56	外傾	平坦	人為	土師器片，灰釉陶器片，釘	第98号堀→本跡
5444	Q 4 j4	N－44 °－W	隅丸長方形	1.68×1.33	16	外傾	平坦	人為	土師質土器片，陶器片	SK5443･5445･5484→本跡
5445	Q 4 j4	N－52 °－W	[楕円形]	[1.54]×(0.76)	14	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	SK5484→本跡→SK5444
5446	Q 4 j3	N－53 °－W	隅丸方形	1.48×1.41	14	外傾	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
5447	R 4 a3	N－32 °－E	隅丸長方形	1.38×1.19	14	緩斜	平坦	人為		
5456	Q 4 j3	N－26 °－E	隅丸長方形	1.22×1.08	12	外傾	平坦	人為		
5457	R 4 a4	N－77 °－E	円形	0.62×0.59	35	外傾	平坦	人為		
5466	Q 4 d4	N－66 °－W	楕円形	1.02×0.90	15	外傾	平坦	人為	土師質土器片，陶器片	
5467	Q 4 d3	N－69 °－W	隅丸長方形	1.46×1.14	4	緩斜	平坦	人為		
5484	Q 4 j4	N－11 °－E	[隅丸長方形]	1.50×(0.49)	15	外傾	平坦	人為		本跡→SK5445→SK5444
5486	Q 3 e2	N－89 °－W	[隅丸長方形]	1.46×(1.07)	22	緩斜	平坦	人為		本跡→PG32
5498	Q 3 e3	N－ 8 °－E	楕円形	0.84×0.63	12	外傾	U字状	人為		
5510	T 4 e3	N－31 °－W	円形	1.90×1.78	23	緩斜	平坦	人為		
5511	T 4 c2	N－71 °－E	不整形	3.12×2.82	92	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片,陶器片	
5512	T 4 b1	N－73 °－E	楕円形	1.95×1.90	89	外傾	平坦	人為	土師器片,須恵器片,陶器片,砥石,鉄製品	
5513	T 3 b0	N－ 3 °－E	楕円形	4.52×0.90	24	外傾緩斜	平坦	人為	土師器片，土師質土器片，鉄製品	
5514	T 3 d0	N－61 °－E	楕円形	1.46×0.86	58	外傾	平坦	人為	土師質土器片	
5515	T 3 a8	N－48 °－W	円形	1.12×1.14	24	緩斜	平坦	人為	土師器片，須恵器片	
5516	T 3 a6	N－ 4 °－W	方形	2.00×1.50	6	緩斜	平坦	人為		

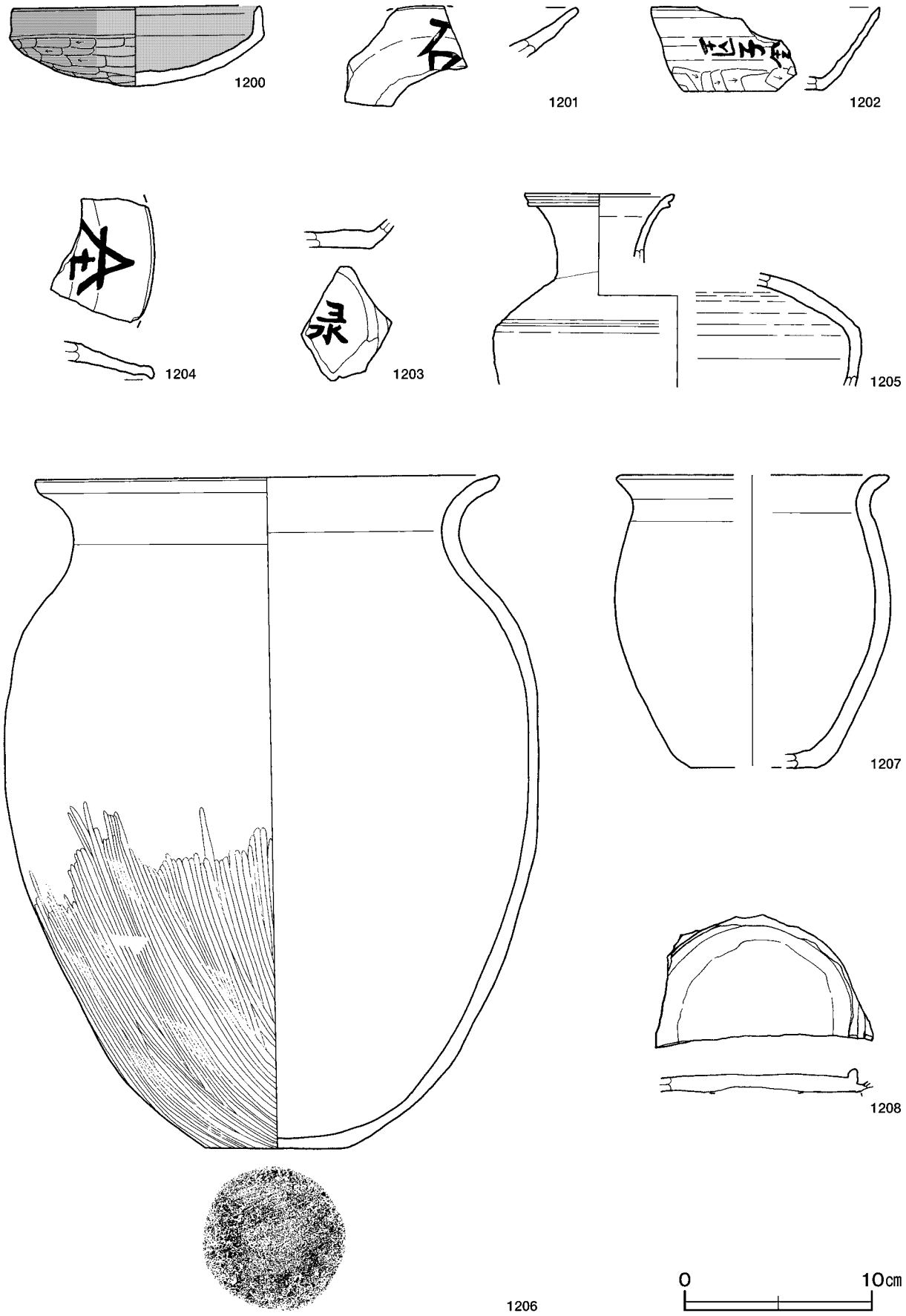
番号	位置	長径方向	平面形	規　模(m)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (新旧関係　旧→新)
				長径×短径	深さ(cm)					
5517	S 3 i4	N－80°－W	楕円形	1.56×1.02	16	緩斜	U字状	人為		SK5509→本跡
5522	S 3 f8	N－30°－E	楕円形	2.00×1.72	33	緩斜	平坦	人為	土師器片,土師質土器片,陶器片,古銭	SK5523→本跡
5525	S 3 d9	N－28°－W	楕円形	1.50×0.66	12	外傾	平坦	人為		
5527	S 3 b9	N－5°－E	楕円形	1.73×1.56	42	外傾	U字状	人為	土師器片,須恵器片,土師質土器片	
5529	S 3 c5	N－82°－W	長方形	3.08×2.22	35	緩斜	平坦	人為	土師質土器片，陶器片	
5536	T 3 c8	N－18°－W	楕円形	0.41×0.36	12	緩斜	平坦	人為		
5537	T 3 c8	N－20°－W	楕円形	0.70×0.58	11	緩斜	平坦	人為		
5538	T 3 c8	N－76°－E	不整形	0.88×0.64	32	外傾	平坦	人為		
5539	R 3 j7	N－87°－E	楕円形	1.03×0.65	24	外傾	凹凸	人為	土師質土器片	
5547	Q 3 h8	N－41°－E	隅丸長方形	1.60×1.08	20	外傾	平坦	人為		
5549	Q 3 e3	N－6°－E	［楕円形］	(1.48)×(0.74)	20	緩斜	平坦	人為	土師質土器片，陶磁器片	SD164
5554	Q 3 g2	N－22°－E	隅丸方形	1.70×1.66	50	外傾	平坦	人為	土師器片，土師質土器片	本跡→SD163
5555	S 3 c3	N－78°－E	円形	2.02×1.76	30	緩斜	U字状	人為		本跡→SD171
5565	Q 3 f5	N－51°－W	不整円形	0.78×0.72	69	外傾	U字状	人為	土師器片	

7　遺構外出土遺物（第777～781図）

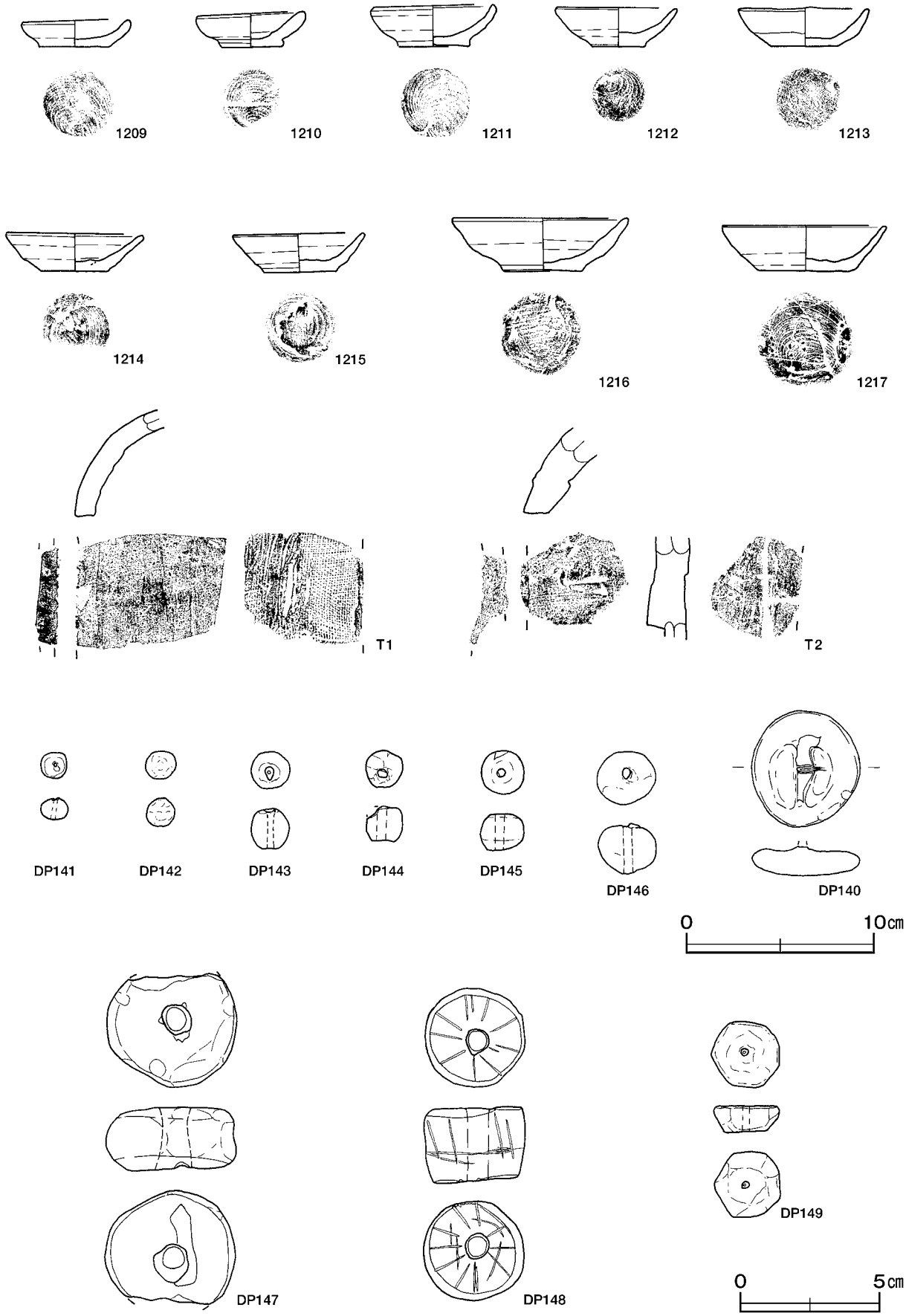
今回の調査で，出土した遺構に伴わない遺物のうち，特徴的なものを抽出して記載する。なお，解説は遺物観察表で示した。



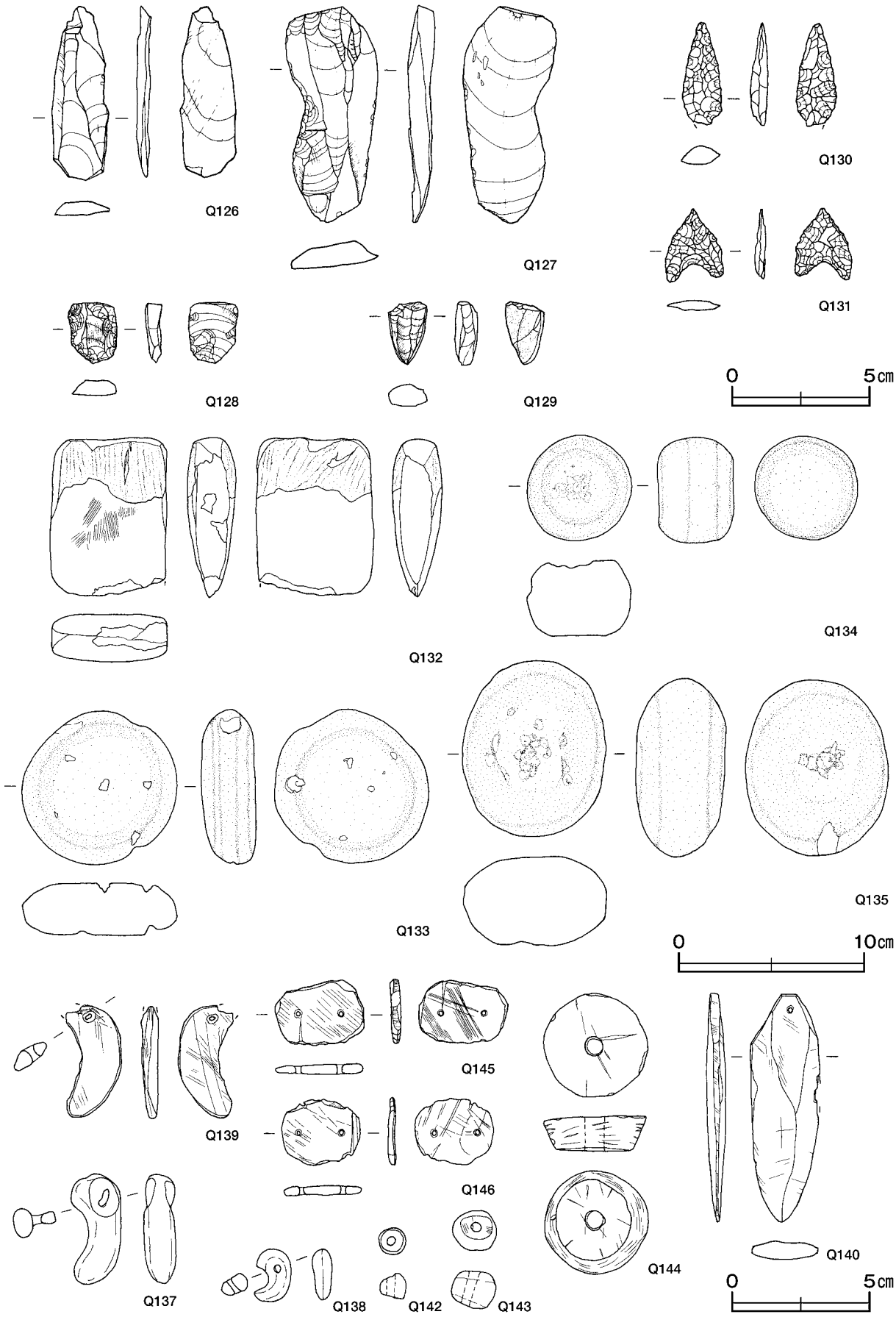
第777図　遺構外出土遺物実測図(1)



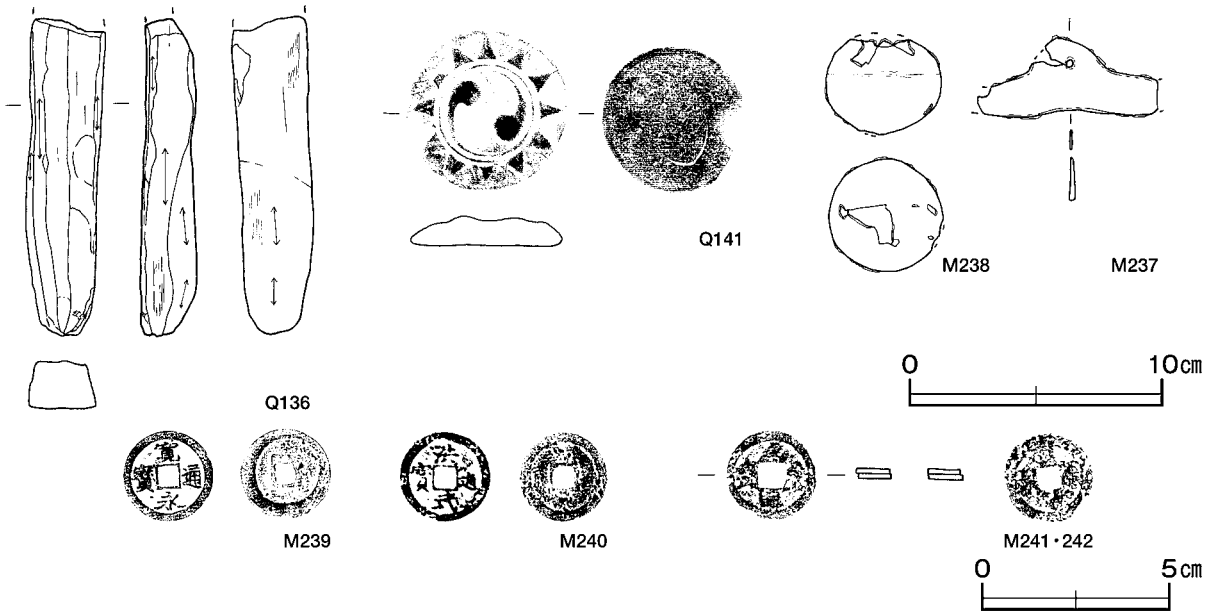
第778図　遺構外出土遺物実測図(2)



第779図　遺構外出土遺物実測図(3)



第780図　遺構外出土遺物実測図(4)



第781図　遺構外出土遺物実測図(5)

遺構外出土遺物観察表（第777～781図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP53	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石･石英･雲母	にぶい橙	普通	体部外面縦位の撚糸文	SI2595 掘り方埋土	早期前葉 PL141
TP54	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	－	長石･石英･赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面縦位の撚糸文	SB475 Ｐ１覆土	早期前葉 PL141
TP55	縄文土器	深鉢	－	(2.7)	－	長石･石英･雲母	にぶい褐	普通	体部外面縦位の撚糸文	SI2596 Ｐ１覆土	早期前葉 PL141
TP56	縄文土器	深鉢	－	(2.3)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面縦位の撚糸文	SI2681 覆土	早期前葉 PL141
TP57	縄文土器	深鉢	－	(3.7)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子	灰褐	普通	体部外面縦位の撚糸文	SK4165 覆土	早期前葉 PL141
TP58	縄文土器	深鉢	－	(2.6)	－	長石･石英･雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面縦位の撚糸文	SK4165 覆土	早期前葉 PL141
TP59	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石･石英･雲母	にぶい黄橙	普通	条痕文を地文とし，口唇部・体部を半截竹管による刺突文施文	表土	早期前葉 PL141
TP60	縄文土器	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英	橙	普通	ＲＬの単節縄文を地文とし，半截竹管による沈線　爪形文施文	第103号堀跡 覆土	前期前半 PL141
TP61	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子	橙	普通	貼付隆起帯　押圧文	第54号地下式壙 覆土	中期前半 PL141
TP62	弥生土器	広口壺	－	(3.4)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子	褐	普通	附加条一種縄文	SI2656 覆土	後期後半 PL141

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1200	土師器	坏	13.2	4.2	－	長石・石英	黒褐	普通	口辺部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り	SE69 覆土	65%
1201	土師器	坏	－	(2.7)	－	長石･石英･赤色粒子	橙	普通	体部外面ロクロナデ　下端回転ヘラ削り　内面ヘラ磨き	SK4493 覆土	10%　墨書「石」PL137
1202	須恵器	坏	[13.8]	4.5	[8.2]	石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り	SK4617 覆土	20%　墨書「國ヵ子□」PL137
1203	須恵器	坏	－	(1.5)	[6.4]	石英・雲母	灰黄	普通	体部内・外面ロクロナデ　下端手持ちヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向の手持ちヘラ削り	SK4493 覆土	20%　底部墨書「录」
1204	須恵器	蓋	[18.8]	(2.0)	－	長石・石英	灰白	良好	天井部左回りの回転ヘラ削り後つまみ貼り付け　つまみ径2.4cm　つまみ高1.0cm	SK4496 覆土	10% 墨書「奎」
1205	須恵器	平瓶	7.8	(10.2)	－	長石・石英	灰	良好	体部内・外面ロクロナデ	表土	25%
1206	土師器	甕	24.6	36.0	7.6	長石･石英･雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ後ナデ	第61号地下式壙 覆土	90%
1207	土師器	小形甕	[14.0]	15.6	[7.0]	長石･石英･雲母	橙	普通	口辺部内・外面横ナデ	第65号地下式壙 覆土	45%
1208	須恵器	円面硯	[11.0]	(1.3)	－	長石・雲母	黄灰	良好	硯面残存　体部内・外面ロクロナデ	SE82 覆土	15%
1209	土師質土器	小皿	5.6	1.4	3.8	長石･石英･赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部内面ナデ　底部回転糸切り後ナデ	SI2610 覆土	95%
1210	土師質土器	小皿	5.7	1.9	3.1	長石･石英･赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	Ｑ４ｇ0	100%
1211	土師質土器	小皿	6.3	2.2	3.8	長石･石英･雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	表土	95%
1212	土師質土器	小皿	6.3	2.1	2.8	長石・石英	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部内面ナデ　底部回転糸切り	Ｑ５ｉ4	80%
1213	土師質土器	小皿	6.9	2.1	3.6	長石･石英･雲母･赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	SB490 Ｐ２覆土	95%　PL136
1214	土師質土器	小皿	7.2	2.1	3.6	長石･雲母･赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　体部内面ナデ　底部回転糸切り	Ｒ４ｆ6	95%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1215	土師質土器	小皿	6.9	2.1	3.9	長石･石英･赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内･外面ロクロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り後ナデ	R４f6	95%
1216	土師質土器	小皿	9.0	2.9	4.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内･外面ロクロナデ 体部内面ナデ 底部回転糸切り後ナデ	SI2673覆土	95%
1217	土師質土器	小皿	8.4	2.5	5.2	長石･石英･雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面ロクロナデ　底部回転糸切り	表土	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
T１	丸瓦	(5.9)	(4.4)	1.2	(85.2)	長石	にぶい褐	不良	凸面ヘラ削り　凹面布目痕	Q４g0	
T２	丸瓦	(5.5)	(3.9)	1.9	(84.4)	長石･石英･雲母･赤色粒子	にぶい橙	不良	玉縁部一部残存　凸面ヘラ削り　凹面布目痕	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP140	鏡形土製品	6.2	5.8	(1.6)	52.4	土(長石･雲母)	鈕部欠損　ナデ　橙色	表土	PL138

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
DP141	土玉	1.4	1.1	0.2	2.4	土(長石･石英)	ナデ　二方向からの穿孔	SB474P3覆土	PL140
DP142	土玉	1.6	1.5	－	6.7	土(長石･石英)	ナデ　穿孔無し	SD152覆土	PL140
DP143	球状土錘	2.1	2.2	0.4	8.7	土(長石･石英)	ナデ　二方向からの穿孔	SD153覆土	PL140
DP144	球状土錘	1.9	1.9	0.6	3.8	土（長石）	ナデ　一方向からの穿孔	SD152覆土	PL140
DP145	球状土錘	2.3	2.0	0.5	11.5	土(長石･石英)	ナデ　一方向からの穿孔	第92号堀跡覆土	PL140
DP146	球状土錘	3.1	2.7	0.5	19.7	土(長石･石英･赤色粒子)	ナデ　一方向からの穿孔	SD151覆土	PL140
DP147	紡錘車	4.7	2.3	0.8	(43.6)	土(長石･石英･赤色粒子)	ナデ　二方向からの穿孔	SD153覆土	
DP148	紡錘車	3.6	2.7	0.8	40.8	土(長石･石英･赤色粒子)	ヘラ磨き　二方向のから穿孔　表・裏面放射状，側面縦位の線刻	S５b2	
DP149	紡錘車	2.4	1.0	0.24	7.4	土(長石･雲母)	ナデ　一方向からの穿孔	SK5340覆土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q126	剥片	6.2	2.1	0.6	5.9	安山岩	縦長剥片　背面に剥面を残す	SI2603覆土	PL141
Q127	剥片	7.8	3.3	0.9	23.1	珪質頁岩	縦長剥片　側縁部両側に丁寧な片面押圧剥離調整　背面に剥面を残す	SI2667覆土	PL141
Q128	剥片	2.2	1.8	0.6	2.4	黒曜石	側縁部両側に押圧剥離調整　背面に剥面を残す	SI2658覆土	PL141
Q129	細石刃核	2.3	1.4	0.7	2.8	黒曜石	縦長の剥離痕跡　背面に礫面を大きく残す	表土	PL141
Q130	有茎尖頭器	(3.6)	1.5	0.6	(3.1)	安山岩	茎部欠損　両面押圧剥離調整	SF16覆土	PL141
Q131	石鏃	2.6	2.1	0.4	1.3	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離調整	表土	PL141
Q132	磨製石斧	8.5	6.4	2.6	283.5	凝灰岩	丁寧な研磨　刃部・着装部使用のため欠損・摩滅	SK5522覆土	
Q133	磨石	8.4	8.3	2.8	132.0	安山岩	表・裏面を使用	表土	
Q134	磨石	5.7	5.6	4.2	478.6	安山岩	表・裏面を使用　中央部に敲打痕	表土	
Q135	敲石	9.5	7.8	4.8	159.5	安山岩	表・裏面を使用　表面中央部に敲打痕	第79号方形竪穴遺構覆土	
Q136	砥石	(12.5)	3.2	2.2	(104.3)	砂岩	端部欠損　砥面６面　断面六角形	R４c6	
Q137	勾玉	3.9	1.8	1.2	11.1	蛇紋岩	孔径0.6㎝　全面研磨　二方向からの穿孔　再穿孔	SK4631覆土	PL144
Q138	勾玉	1.9	1.4	0.7	2.4	蛇紋岩	孔径0.2㎝　全面研磨　二方向からの穿孔	SD181覆土	PL144
Q139	勾玉	4.0	1.9	0.6	(6.2)	滑石	孔径0.4㎝　全面研磨　二方向からの穿孔	表土	PL144
Q140	石製模造品	8.2	2.5	0.7	(18.2)	滑石	剣形　孔径0.2㎝　全面研磨　一方向からの穿孔	第96号堀跡覆土	PL144
Q141	石蹴遊具	6.2	6.0	1.1	52.5	ガラス	巴紋　三角文　青色	表土	PL143

番号	器種	径	厚さ	孔径	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
Q142	臼玉	0.9	0.9	0.3	1.1	蛇紋岩	全面研磨　一方向からの穿孔	SE73覆土	PL144
Q143	小玉	1.5	1.3	0.3	4.4	蛇紋岩	全面研磨　一方向からの穿孔	SX20覆土	PL144
Q144	紡錘車	3.7	1.3	0.7	24.4	粘板岩	全面研磨　一方向からの穿孔　表・裏面放射状，側面横位の線刻	R５c5	
Q145	双孔円板	3.2	0.4	0.2	5.0	滑石	全面研磨　一方向からの穿孔	SD153覆土	PL144
Q146	双孔円板	2.9	0.3	0.15	3.5	滑石	全面研磨　一方向からの穿孔	表土	PL144

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M237	火打具	3.2	(7.2)	0.3	(14.4)	鉄	山形　頂上部に孔有り	表土	
M238	鈴ヵ	(3.8)	4.6	0.07	(17.6)	鉄	中央部に溶接部　下部に２孔有り	SI2602覆土	PL147

番号	器種	径	孔径	厚さ	重さ	材質	特徴	出土位置	備考
M239	古銭	2.43	0.54	0.12	2.6	銅	寛永通寶　初鋳1636年　古寛永	SI2602覆土	PL148
M240	古銭	2.42	0.56	0.14	2.5	銅	洪武通寶　初鋳1368年　明銭　無背銭	R５c9	PL148
M241	古銭	2.42	0.60	[0.12]	[2.7]	銅	元豊通寶　初鋳1078年　北宋銭　行書　錆のため融着	表土	PL148
M242	古銭	2.42	0.60	[0.12]	[2.7]	銅	元豊通寶　初鋳1078年　北宋銭　行書　錆のため融着	表土	PL148

第８節　ま　　と　　め

1　はじめに

島名熊の山遺跡は，平成７年度に調査が開始され，現在も調査が継続している県内最大級の遺跡である。調査区域は便宜的に第１～16区に分けられており，第１～13区については第120・133・149・166・174・190・214・236・264集で既に報告されている。今年度は，遺跡北部の第14区，中央部の第４・７・９区の一部，南西部の第16区について整理を行った。これまでの調査で，古墳時代前期から平安時代にかけての集落遺跡であることが判明しているが，今年度整理分では，第９区の鋳造土坑，第16区の大規模な堀跡をはじめ，中・近世の遺構や遺物が多数確認されている。そこで，各調査区を概観するとともに，中世以降の島名熊の山遺跡の様相について，特に特徴のある遺構や遺物を取り上げて紹介し，若干の考察を加えたい。

2　各調査区の概要

ここでは，今年度整理を行った第４・７・９・14・16区のうち，遺跡中央部に位置する第７・９区，北部に位置する第14区，南西部に位置する第16区の様相について概観したい。なお，時期区分に関しては，既報告済みの調査区との整合性を保つために，『第190集』で示された土器の分類に基づき，第１・２期を４・５世紀，第３～５期を６世紀，第６～８期を７世紀，第９～11期を８世紀，第12～14期を９世紀，第15～18期を10～11世紀とする。

⑴　第７区

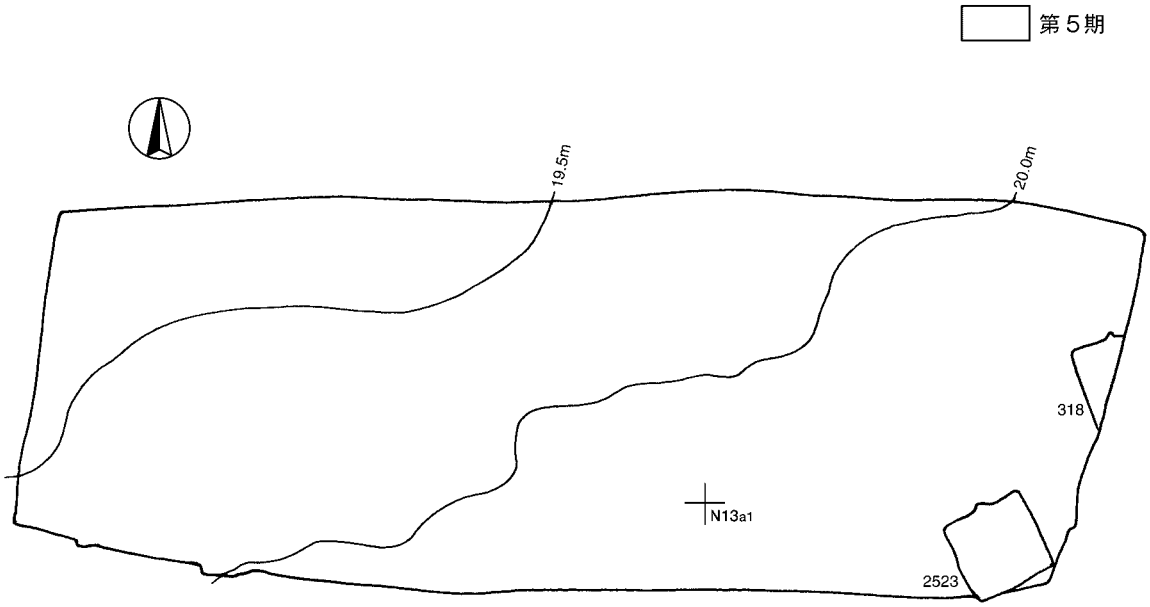
第７区は当遺跡の中央部に位置し，同区の北側の第２区は平成７・10・11年度に調査され，すでに『第120・174集』として報告されている。また，東側の第６区も平成８・９年度に調査され，『第133集』として報告されている。さらに，南側及び西側の第７区も平成９年度に調査され，『第149集』として報告されており，これらの調査報告を参考にしながら，当区を中心とした遺跡中央部について概観する。

古墳時代（第782図）

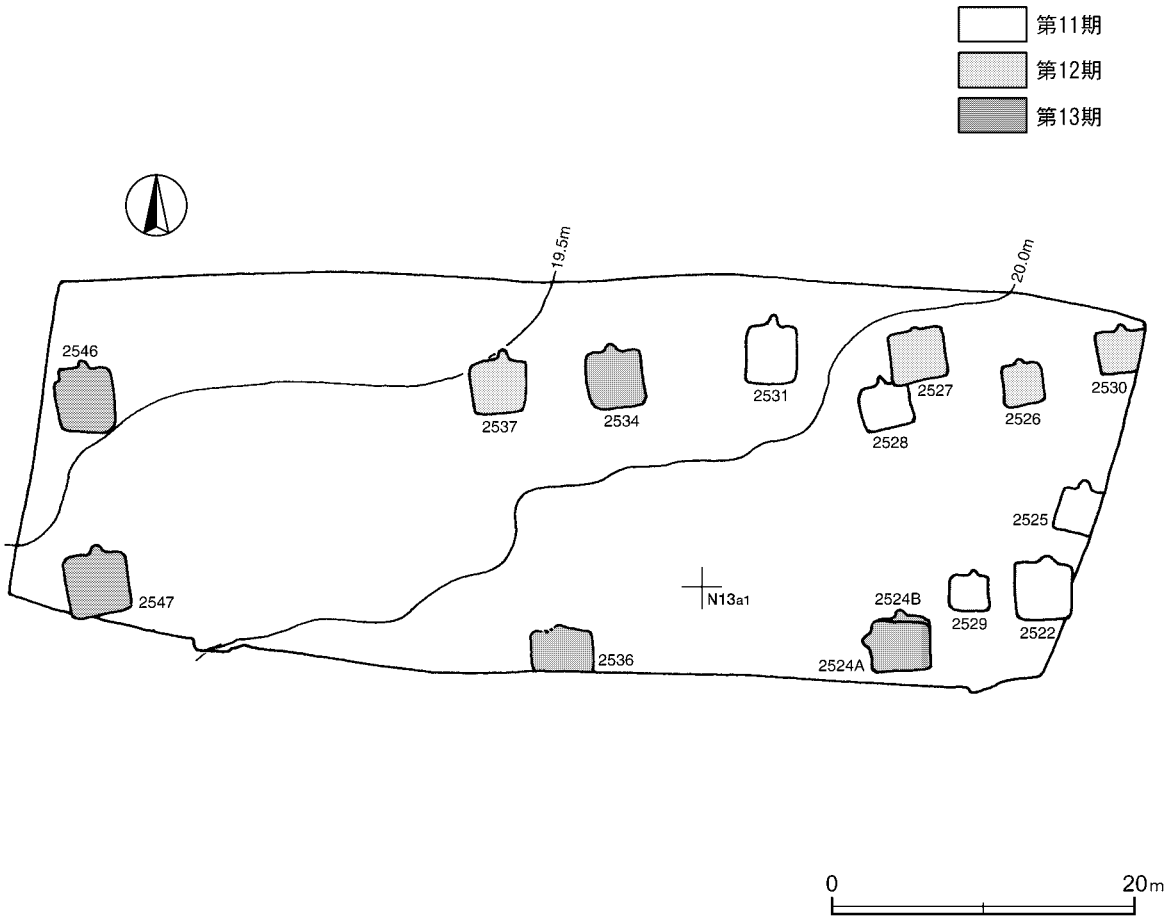
当区では，古墳時代前・中期の遺構は確認されていないが，東側の第６区では５世紀代の集落が確認されている。当区内に集落が出現するのは６世紀後葉にあたる第５期からで，竪穴住居跡２軒が該当する。この２軒は第６区に広がる集落の西端部に位置するもので，第318・2523号住居跡はいずれも一辺５ｍを超える中形住居である。さらに平成９年度に調査された西側の第７区からは第５期の竪穴住居跡７軒が確認されており，この時期の集落は，当区を挟んで東西に位置する標高約20mの台地上に広がっていたと理解できる。

奈良時代（第783図）

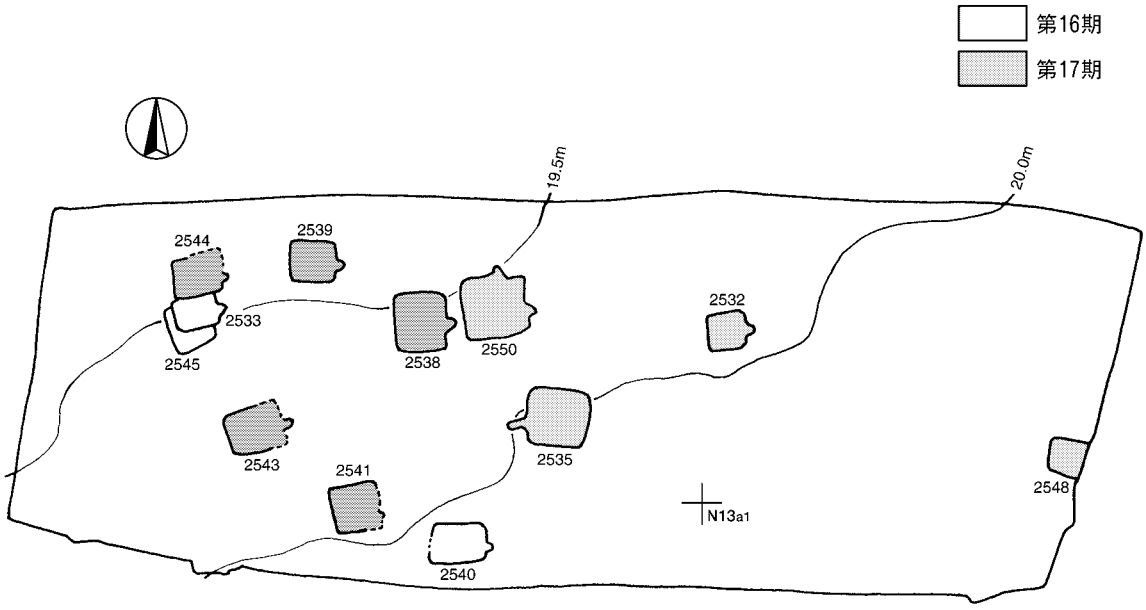
第５期以降，当区に遺構は確認されていないが，８世紀後葉の第11期に５軒の竪穴住居跡が確認されている。規模は異なるが主軸方向は真北に近く，いずれも当区の北東部に位置している。特に第2522号住居跡と第2529号住居跡は，軸線やその間隔から２軒１組の単位として存在していたものと考えられるが，この他の住居跡は確認できなかった。周辺部の調査では，第７区の南側と西側（平成９年度調査）から７軒，東側の第６区から７軒が確認され，北側の第２区を除いた周辺に集落の広がりが確認できる。またこの時期，北西50mの第８区には掘立柱建物群が立ち並ぶようになり，律令体制下の本集落の様相がうかがえる。



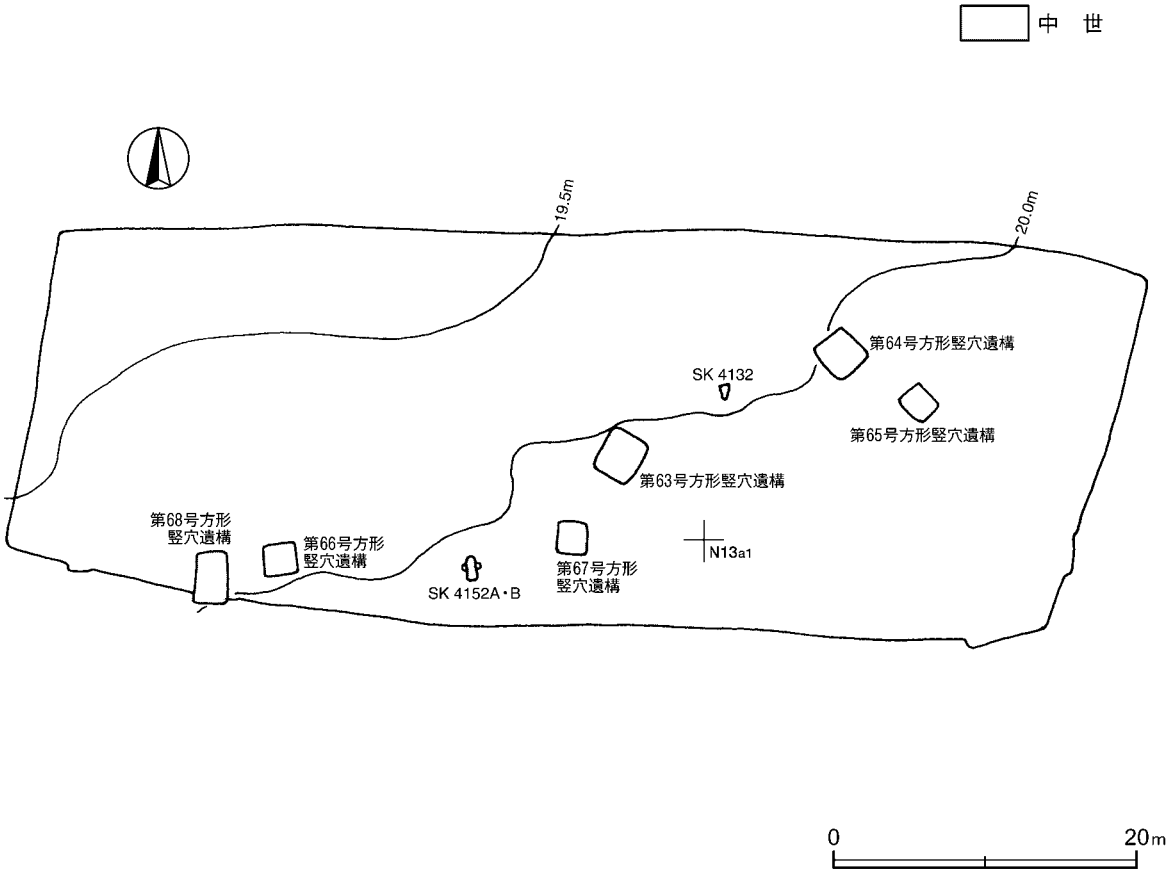
第782図　第７区集落変遷図（第５期）



第783図　第７区集落変遷図（第11～13期）



第784図　第７区集落変遷図（第16・17期）



第785図　第７区集落変遷図（中世）

平安時代（第783・784図）

９世紀前葉の第12期には竪穴住居跡６軒が確認されており，第2546号住居跡では，竈の両側を掘り込んだ棚状施設が検出されている。また，出土遺物としては第2547号住居跡や，南に45m離れた第604号住居跡から鉄鉗が出土しており，いずれも時期は９世紀中葉に比定されている。鉄滓や粒状滓などは検出されていないが，鉄鉗の出土から鍛冶関連遺構の存在が想定される。

９世紀中葉の第13期には竪穴住居跡４軒が確認されており，第2534号住居跡の床面からは鉄製鋤先が完形に近い状態で出土している。当遺跡で鋤先が出土した住居跡は５例目で，鋤先の所有について『第214集』では，「特定の在地有力者によって所有されていた[1]。」と指摘されており，単位集団における中心的な人物の居住が推測できる。また，第2524A号住居跡からは円面硯が出土しており，第2537号住居跡出土の転用硯とあわせ，９世紀前葉から中葉にかけてひとつの集落が形成されていたと考えられ，硯の出土は，第７区における集落の性格を考える上でも重要である。また，８世紀代まで第10～12区でしか確認されなかった硯が，９世紀中葉以降は第７～９区からも確認されるようになり，集落の性格を考える上で興味深い。

第14・15期の住居跡は確認されず，その後10世紀後半の第16期では，竪穴住居跡３軒が確認される。当遺跡では第15期以降，東竈の住居跡が増加する傾向にあり，当区西側には９軒が確認されている。第2533号住居跡からは「大」・「城」の墨書土器が出土し，第2545号住居跡からは，底部に「大」と箆書きされた土師器高台付椀が出土している。以前の調査で出土した文字資料については『第174・190集』において集成され，「大」・「城」の言葉の意味について『第190集』では，「大」は「地名，あるいは特定の人物に対する美称」と述べられている。また，「城」については遺跡全体から５例が出土しており，「８世紀前半に掘削された大溝を意識したもので，９世紀になっても溝を避けるように遺構が築かれていることから，後世の人々にとっても溝の存在が意識されていたものと考えられる[2]。」と述べられている。報告者は，前述したように「大」については，当遺跡の広い地域で確認されていることから集落内の特定の人物をさし，「城」については，後世の人々にとっても溝の存在が意識されていたことから，地域や場所を意味する言葉と推測している。また表採出土の須恵器坏「城内」については，溝区画の内側を意味するものと推測される。

11世紀前半の第17期には竪穴住居跡９軒が確認でき，当区全体に広がりが見られる。第2535号住居跡は，煙道部の細長い西竈と地床炉を持ち，南東コーナー部の床面から，雲母片岩が出土している。当遺跡では，炉と竈を有している住居跡は本年度調査分を含め14軒調査され，10世紀後半に比定され第10区に位置する第1345住居跡からは銅滓や坩堝，鋳型（小形仏）が出土しており，鋳造に関わる工房跡として報告されている。また，9世紀前葉に比定され第８区に位置する第918号住居跡からは鍛冶炉・鉄滓・粒状滓・鍛造剥片が確認され，鍛冶工房の様相を呈している。本跡では，炉の周りから焼土・炭化物が出土しており，雲母片岩が金床石の可能性もあると想定されたが，鍛冶に関わる遺物は全く出土していないため，工房的な様相は示しているがその可能性は薄い。

中世（第785図）

中世の遺構としては，方形竪穴遺構６基，火葬土坑３基が確認されている。

方形竪穴遺構については『第236集』で類型別に分類されているが，当区から検出された第63～68号方形竪穴遺構はいずれも柱穴を伴なわないグループに該当し，その機能などについては「住居，工房，倉庫とする多様な説があるが，居住者の社会的な階層，築造者の社会的な階層，遺構群を構成する中で与えら

れた機能など複雑な要素を含む遺構であり，機能はその検出状況で判断すべきである[3]。」と述べられている。

当区の遺構について見ていくと，第63・68号方形竪穴遺構では床に硬化面が確認されており，人の出入りが想定できることから倉庫的な機能を有していたと考えられる。また，第64号方形竪穴遺構の床面からは炭化物と焼土塊が確認され，有機物を燃した痕跡と考えることから住居的な機能を有していたと考えられる。さらに，第65号方形竪穴遺構の床面からは台石と思われる雲母片岩が検出され，工房的な機能を有していたと考えられる。当区におけるこれらの遺構は，標高20mの緩斜面上に北東から南西方向に並ぶように確認されており，ひとつの集合体を形成するように意識して構築されたと考えられる。

火葬土坑についても『第236集』で12基が集成されている。当区から検出された第4132・4152Ａ・4152Ｂ号土坑の形状は不整形及びＴ字形で，規模は長軸１m前後と小規模のものである。いずれも土坑内に通風孔を掘って，熱効率をあげたものであり，当遺跡から検出された火葬施設の大半が本遺構と同じ形状を示している。検出場所は，いずれも10世紀後半から11世紀前半の住居跡を掘り込み，単独で検出されている。『第236集』によると「火葬の場所と墓地との関係は，同一墓地内にその場所を設ける事例が多い[4]。」と述べられているが，当区においては周辺に墓域が検出されていないことや，火葬の場と墓域が同一墓地内に存在していないことから，『第236集』で述べられている15～16世紀よりも古い可能性が考えられる。また，当遺跡の西側に隣接する永仁５年（1297年）開基と伝えられる妙徳寺との関連性についても明確ではない。

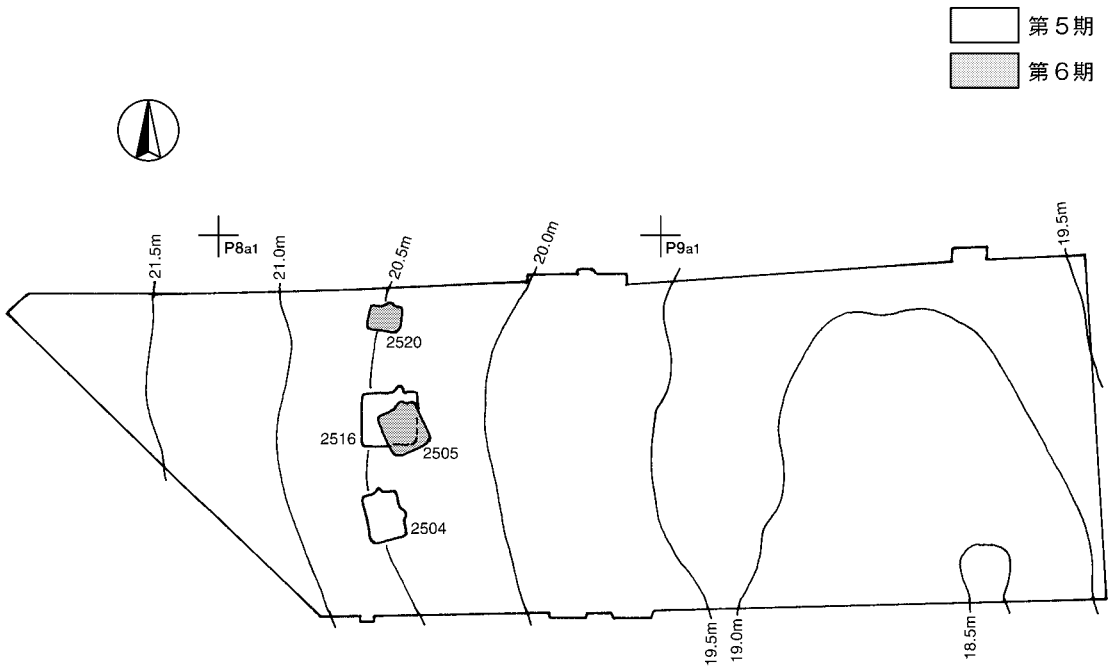
第4152Ｂ号火葬土坑の覆土中から，「城内」と書かれた墨書土器と小金銅仏の鋳型が出土している。鋳型は，表・裏一対で出土しており，鋳出したものの大きさは長さ５㎝，幅1.4㎝で，厚さは最大0.6㎝と推定される。当鋳型からその造形を明確に特定することはできないが立像であり，年代を明確にすることはできなかった。小金銅仏は下り松遺跡[5]（結城市・平安時代）出土例が約５㎝，本田屋敷遺跡[6]（千代川村・平安時代末）出土例が約８㎝，木原城跡[7]（美浦村・鎌倉時代）出土例が約5.5㎝などが知られているが，当鋳型の像形と類似するものはなく，大きさなどから懸仏あるいは菩薩像の頭上を飾る化仏とも推測される。また，当遺跡では，第７区の第16号井戸跡から10世紀後半に比定される天部立像，第10区中央部に位置する第1345号住居跡から銅滓が付着した坩堝片と小形仏の鋳型が出土しており，当遺跡における鋳物集団の存在が想定される。

⑵　第９区

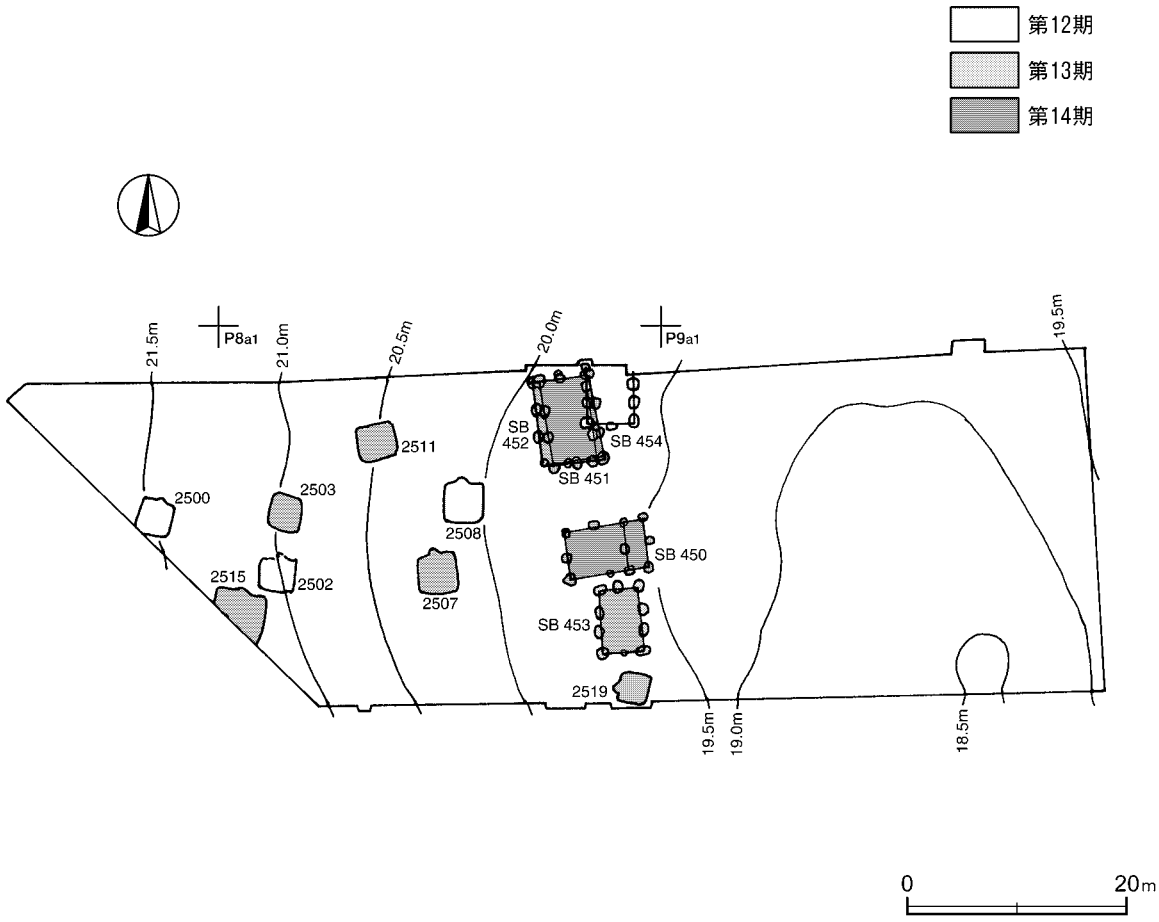
第９区は当遺跡の中央部やや南に位置し，北側の第８・９区は平成８・９年度に調査され，『第133・166集』において報告されている。また，東側の第10区は平成10・15年度に調査され，『第190・236集』において報告されている。南側の第９・12区の一部は未調査区域はあるものの平成14・15年度に調査され，『第214・236集』において報告されており，それらの報告を参考に，当区を中心とした遺跡中央部について概観する。

古墳時代（第786図）

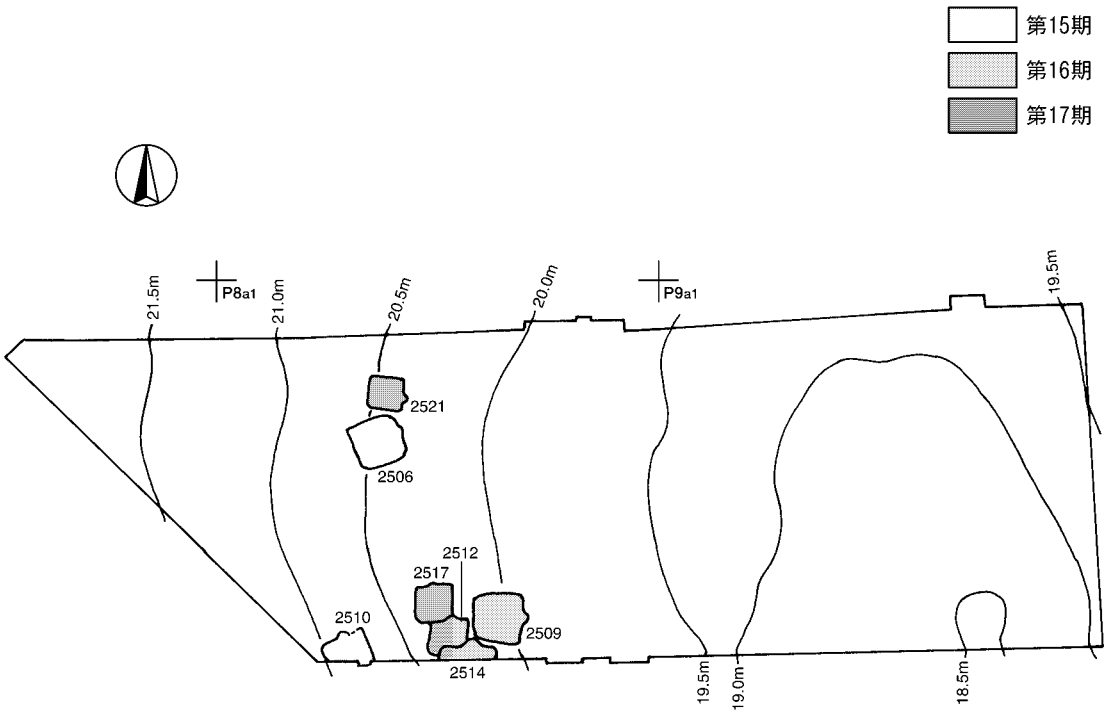
当区に集落が出現する時期は６世紀後葉の第５期からで，竪穴住居跡２軒が該当する。この時期は，熊の山遺跡の周辺部が大規模に開発され，それまで遺構が検出されなかった当区にも集落が形成されるようになる。遺跡南部の第12区では22軒が検出され，小さな谷津を挟んだ東側の第10区でも７軒の住居跡が検



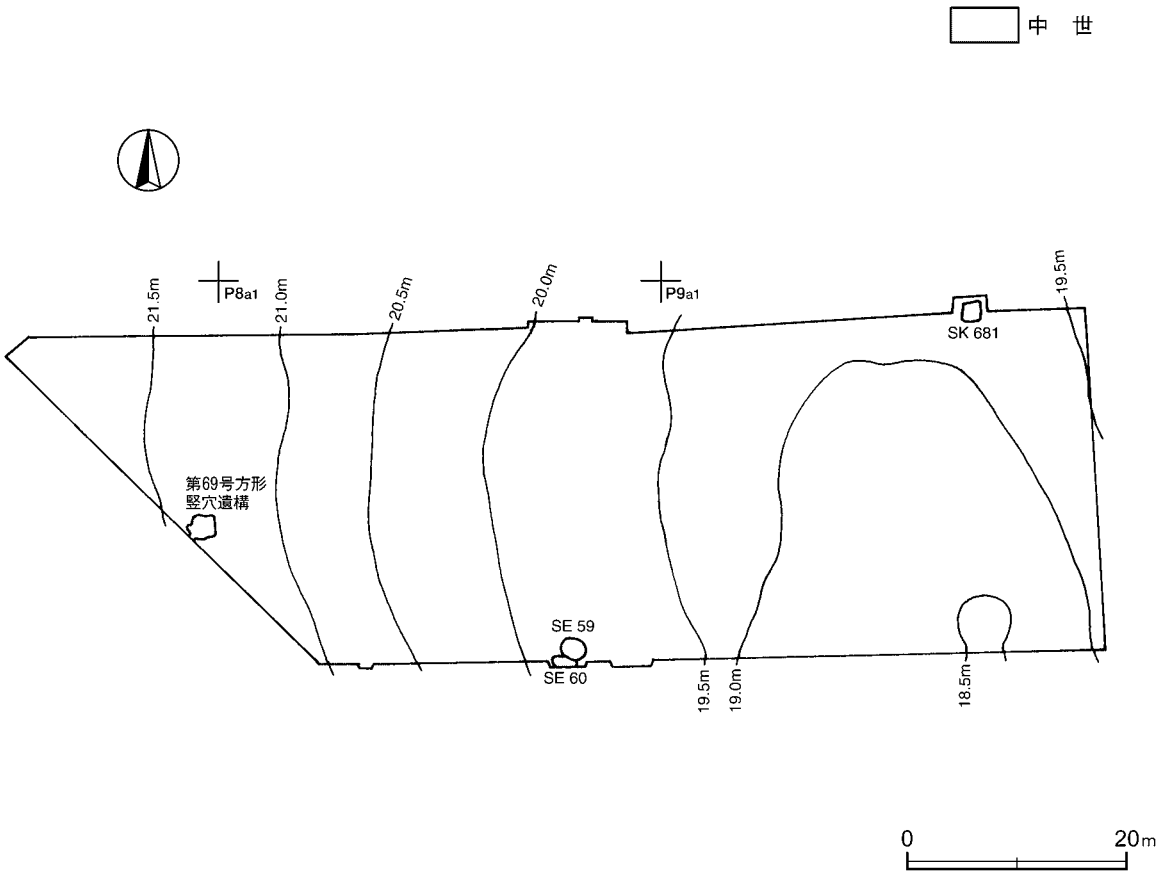
第786図　第９区集落変遷図（第５・６期）



第787図　第９区集落変遷図（第12～14期）



第788図　第９区集落変遷図（第15～17期）



第789図　第９区集落変遷図（中世）

出されて集落が拡大していることが確認されている。

続く第６期も引き続き集落が拡大する時期であり，竪穴住居跡２軒が検出されている。第12区では，標高22mほどの台地上から東縁辺部にかけて住居跡19軒が広がっており，その北端に本調査区が位置し，第10区では６軒が分布している。

平安時代（第787・788図）

当区で最も多くの遺構が確認されているのは９世紀代で，竪穴住居跡15軒，掘立柱建物跡５棟，土坑９基，鍛冶関連土坑４基が確認されている。掘立柱建物跡は，当区中央部に南北に延びるように検出されており，２×４間の側柱式の形状から倉庫であったと考えられる。また，本年度調査中の当区南側からも掘立柱建物跡が検出されており，さらに南に広がっている状況が確認されている。

当区の中央部には，南からの小さな谷津が入り込んでおり，その軸線から，掘立柱建物跡群はこれらの谷津を意識して建てられた可能性が考えられる。

９世紀前葉の第12期では，竪穴住居跡３軒，掘立柱建物跡１棟，鍛冶関連土坑４基が検出されている。第2508号住居跡からは「主」，第4125号鍛冶関連土坑からは「匠」と書かれた墨書土器がそれぞれ出土している。「匠」は第12区中央部に位置する第1578号住居跡からも出土しており，『第214集』では「島名八幡前遺跡の第86号住居跡から出土した墨書土器と筆跡が酷似している[8]。」と報告されている。このように文字資料からも島名八幡前遺跡[9]と密接に係わり合っていたと推測できる。また，調査区中央部の谷津からは第4119・4120・4125・4127号鍛冶関連土坑４基が検出され，遺構確認面での鉄滓の分布状況からも鍛冶関連の地域として利用されたと考えられる。

第13期では竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡２棟が検出されている。第2507号住居跡からは，判読できない墨書土器３点，第2515号住居跡からは「地田」と書かれた墨書土器１点と転用硯が出土している。この転用硯の出土は，集落の性格を考える上でも重要な資料である。

第14期では竪穴住居跡１軒，掘立柱建物跡２棟が検出されている。第2519号住居跡は西側に竈を有し，紡錘車や巡方，鉄鏃や墨書土器が出土している。巡方の出土は官人的な支配者層の存在を推測させるもので，転用硯や巡方が出土する当区周辺は，９世紀代において島名熊の山遺跡の中心的な集落であった可能性が考えられる。10世紀に入ると，それまで散在していた集団がひとつの地区に集合して集落を形成するようになり，集落の中心は東側の第10区へと移る。

当遺跡においては10世紀以降，東に竈をもつ住居が多くなり，当区では２軒確認されているが，北に竈をもつ住居跡も４軒確認されている。これは，東に竈をもつ住居の居住者と血縁的に別の集団と考えられ，また，東側に隣接する第10区でも北に竈をもつ住居跡が確認されている。

第15期では，竪穴住居跡２軒，第16期では竪穴住居跡３軒，第17期では竪穴住居跡２軒が確認されているが，住居の規模や出土遺物に大きな差異が認められないことから集落内における中心的な住居を特定することは難しく，第15・17期での住居跡の間隔は約40m離れており，住居が点在する状況を示している。

中世（第789図）

中世の遺構としては，鋳造土坑１基，井戸跡２基，方形竪穴遺構１基が確認されている。第681号鋳造土坑は調査区の北東部から検出され，その遺構の北側は『第166集』[10]ですでに報告されており，今回の調査で遺構全体の様相が明らかとなった。本土坑は一辺が２mほどの方形で，梵鐘（竜頭，撞座，乳），

燈籠の蓮華座，鰐口等の鋳型片や溶解炉の炉壁片など約400点が出土している。京都府京都大学構内遺跡[11]検出の梵鐘鋳造土坑や奈良県巨勢寺[12]検出の梵鐘鋳造土坑と比較して見ると，規模や出土遺物から本施設で梵鐘を鋳造した可能性が考えられ，『第166集』で報告されたような廃棄土坑ではなく，梵鐘鋳造土坑であると想定される。また，同時期に鰐口や燈籠が鋳造されており，具体的には明確ではないが，この時期の熊の山遺跡周辺での宗教の広まりを認識することができる。なお，本土坑については別項で記述する。

方形竪穴遺構や井戸跡については，当区内に中世の遺構が確認できないことから，現在調査中の南地区への遺構の広がりが想定される。

(3) 第14区

第14区は遺跡の北部にあたり，『第264集』で報告された第13区の西側に位置している。ここでは，隣接する第13区の様相を加味しながら，遺跡北部の様相について概観する。なお，文中では，東西方向に入り込んだ谷津の北側にあたる第13・14区を北部，谷津の南側にあたる第１～10区を中央部としている。

古墳時代（第790～792図）

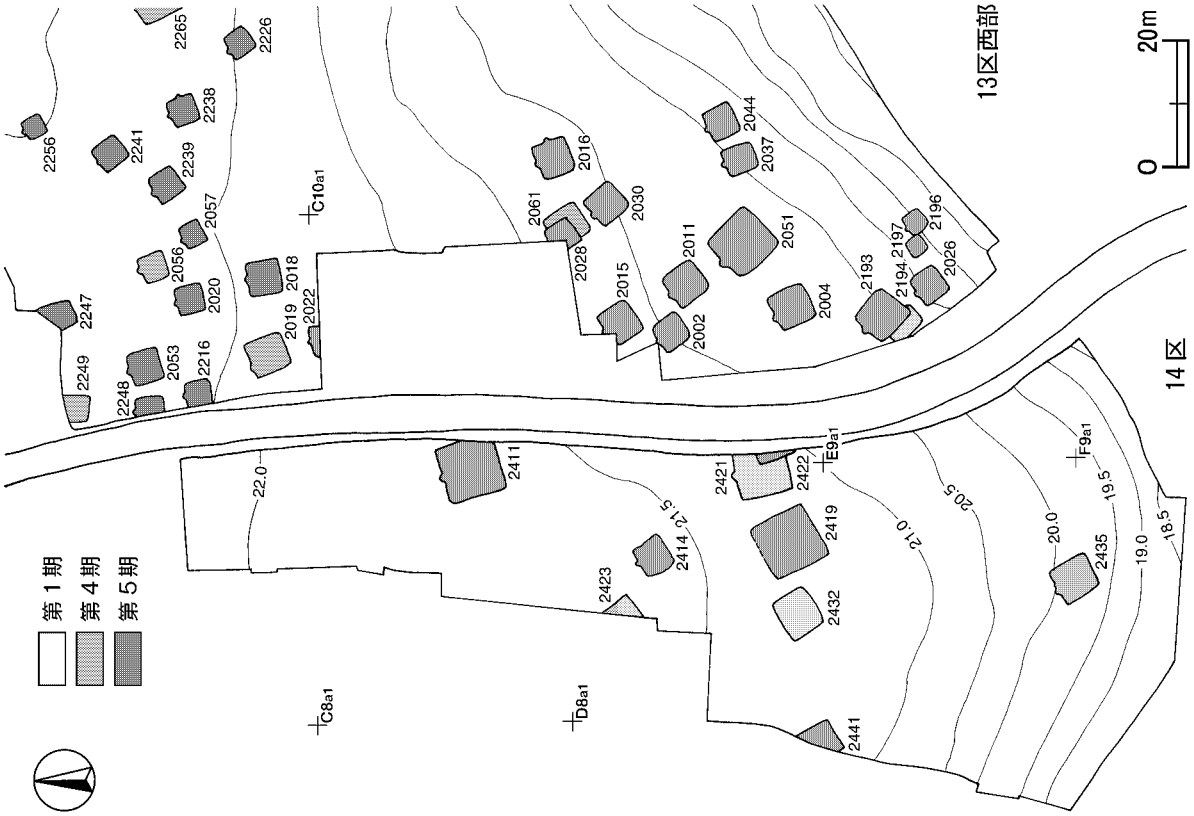
４世紀にあたる第１期は，熊の山の地に集落が出現する時期であり，当区では竪穴住居跡１軒が該当する。規模は一辺6.9mで，中央部の北寄りに炉を有している。第13区では同時期の竪穴住居跡４軒が確認されており，規模や構造，出土遺物に本住居跡との大きな差違は認められない。また，本住居跡の周囲では同時期の住居跡が確認されていないことや，第13区で確認された住居跡は，それぞれが30m以上の間隔をもって存在していることから，当期には各住居が最小単位となって存在していたものと考えられる。

続く第２・３期の遺構は確認されず，６世紀前半の第４期に再び遺構が確認されるようになり，竪穴住居跡２軒が該当する。当区の中央部東側に位置する第2421号住居跡は，一辺が８mを超える大形の住居であり，貯蔵穴を有する住居構造や多量の出土土器から，集落の中心的な住居であったと考えられる。また，調査区西端では第2423号住居跡が確認されており，さらに西側に集落が拡大する可能性が考えられる。

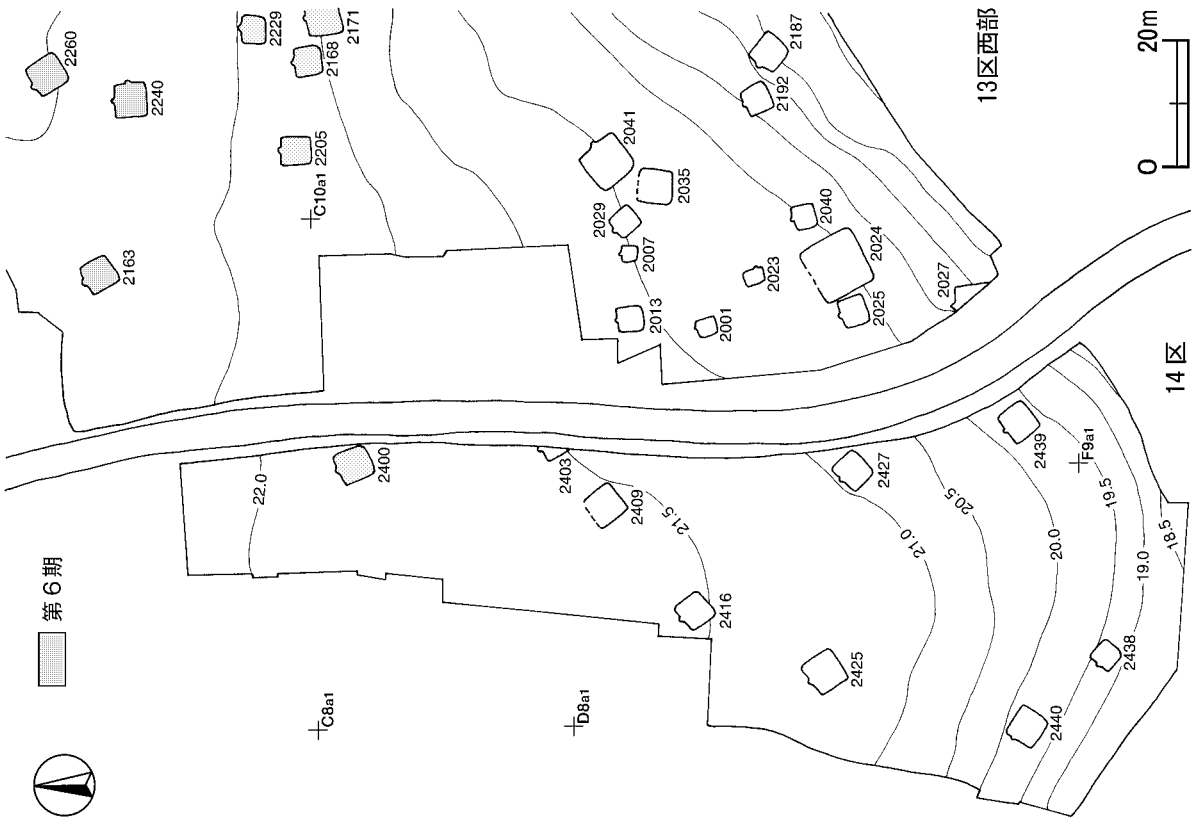
６世紀後葉の第５期になると，住居跡数の増加とともに，第４期の住居跡の間や前期まで遺構が検出されなかった南緩斜面部にも新たに住居が構築されて集落が拡大している。竪穴住居跡６軒が該当する。この時期は，熊の山遺跡を中心とした周辺部一帯が大規模に開発されて人口が急増した時期であり，北部全体で確認された竪穴住居跡数は48軒である。また，鉄製農具や祭祀具の出土数が増加する。

第６期も引き続き集落の繁栄期であり，竪穴住居跡９軒が該当する。北部全体で確認された竪穴住居跡数は45軒であり，集落の広がりはほぼ全域に及んでいる。また，第５期同様，鉄製農具や祭祀具の出土数の増加が確認されている。６世紀中葉の第４期以降，ほぼ同じ地域で住居跡が確認されていることから，それまで小集団を単位として分散，移動していた集団が，血縁的なつながりを持ちつつ住み替えを行うようになったと考えられる。また，当区における古墳時代後期の竪穴住居跡のほとんどが，主軸方向を北西に向ける規格性が見られるのに対し，南緩斜面部に位置する第2438・2440号住居跡だけが主軸方向を大きく西に向けている。出土遺物からは，北側平坦部の住居との間に明確な差違は認められないが，この２軒は，平坦部の住居群とは血縁的には別の集団とも考えられる。

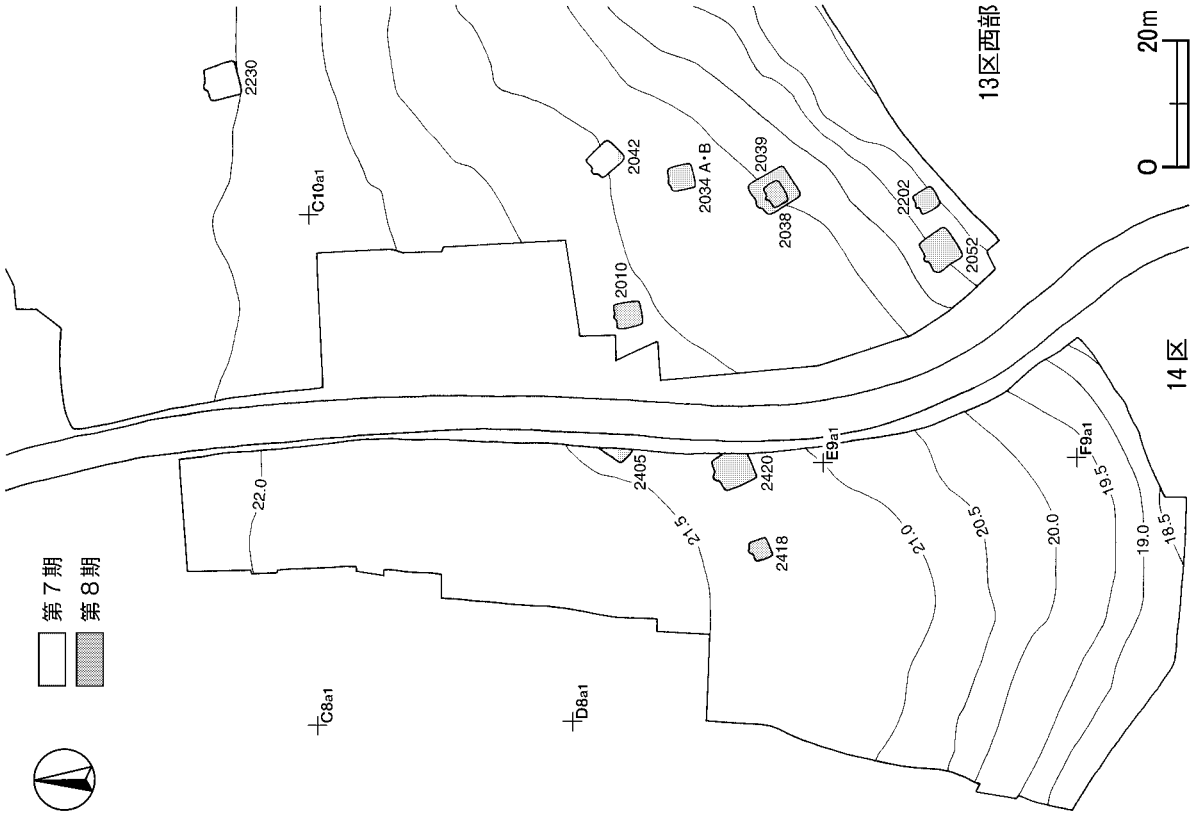
７世紀中葉の第７期の竪穴住居跡は２軒，第８期には１軒だけとなる。北部全体でも，第７期は14軒，第８期は７軒と６世紀代と比べて急激に住居跡数は減少しており，遺跡中央部と同様に，北部においても集落が一時的に衰退に向かう時期であったと考えられる。また，住居跡数は減少しているものの居住域は



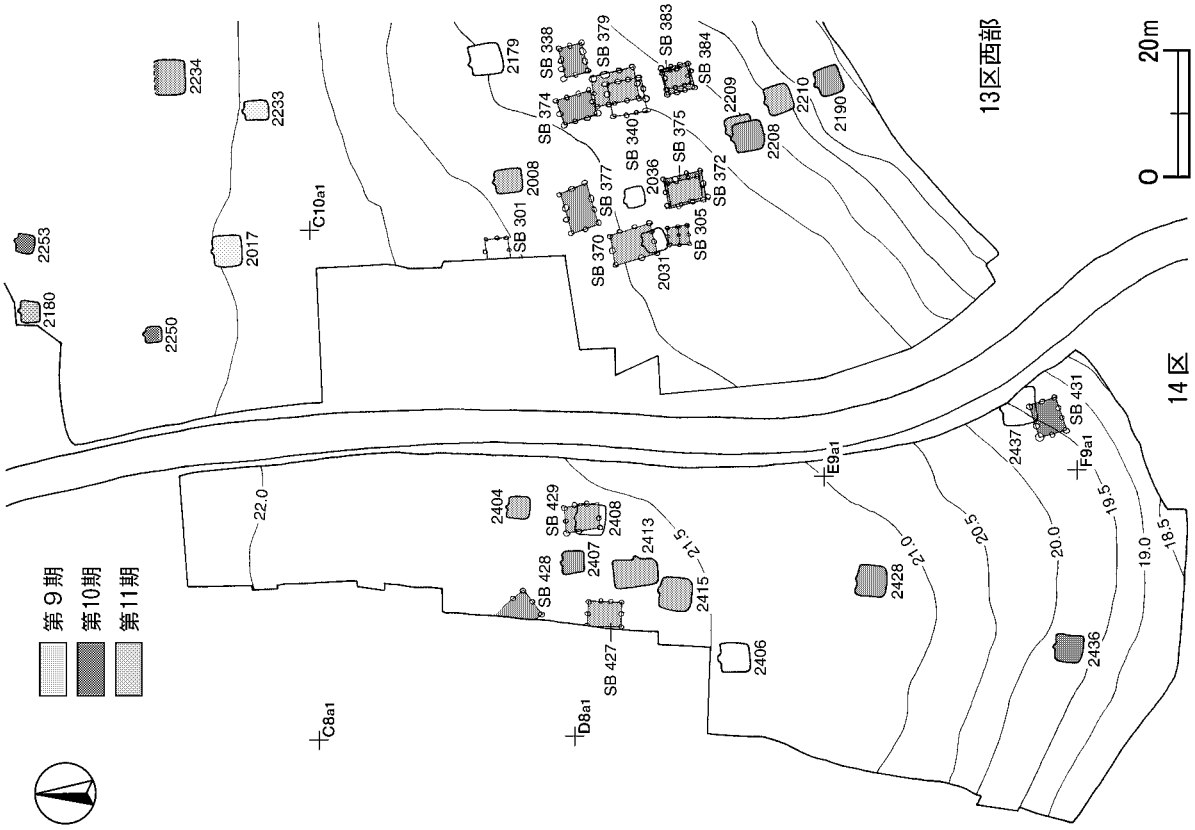
第790図　第14区集落変遷図（第１・４・５期）



第791図　第14区集落変遷図（第６期）



第792図　第14区集落変遷図（第７・８期）



第793図　第14区集落変遷図（第９～11期）

前期とほぼ同地域であることから，前代からの系譜を引く集団が引き続き居住していたものと考えられる。遺跡中央部では，６世紀後葉の第５期以降，余剰生産物の収納の場と考えられる掘立柱建物跡が確認されるようになるが，遺跡北部では，古墳時代を通じて掘立柱建物跡は確認されていない。

奈良時代（第793図）

奈良時代の第９期になると，それまで減少していた住居が再び増加し始め，当区では竪穴住居跡３軒が該当する。調査区中央の平坦部で２軒，南部の緩斜面部で１軒の住居跡が確認されているが，いずれも一定の距離を置いて分布し，集落としての明確なまとまりは認められない。２軒の竪穴住居跡が確認された調査区中央部では，第７期以降本期まで継続して住居跡が確認されており，律令制への過渡期においても，地縁・血縁的につながる集団が継続的に居住していたものと考えられる。また，遺跡中央部では，過去の調査から，律令制の開始とともに集落の再編が行われ，各遺構は真北を主軸方向とすることが指摘されており，当区でも同様の傾向が認められる。隣接する第13区では，主軸方向が北西に振れる竪穴住居跡が大半を占めていることから，別系譜の集団であったとも考えられる。北部全体では，竪穴住居跡10軒，掘立柱建物跡３棟が確認されており，遺跡北部において初めて掘立柱建物が出現する時期でもある。

続く第10・11期は，住居跡，掘立柱建物跡ともに急激に増加し，集落の拡大が顕著な時期である。新たに南側の緩斜面部に住居群が出現し，多数の掘立柱建物跡も確認され，北部全域に遺構の広がりが見られるようになる。当区では，第10・11期ともに，竪穴住居跡３軒が該当する。また，出土遺物が少量であるため詳細な時期は明らかでないが，奈良時代を通して４棟の掘立柱建物跡も確認されている。第13区南東部の谷津沿いでは，大形住居跡とともに６棟の掘立柱建物跡が確認されており，既報告済みの『第264集』では，「谷津に沿って掘立柱建物群が並ぶ様相からは，東方を流れる東谷田川を利用した水運との関連を容易に想起することが可能である。」[13]としているが，当区南部の谷津沿いから検出された掘立柱建物跡は１棟だけであり，水運を意識した居住体系は西側までは及んでいなかったと考えられる。

平安時代（第794図）

当区で確認された平安時代の遺構は，９世紀代の竪穴住居跡３軒，土坑１基だけであり，10世紀前半の第15期以降，いずれの遺構も確認されていない。住居跡はいずれも中央部に位置し，南緩斜面部からは姿を消している。第13区において，９世紀前葉の第12期は，集落としては繁栄期であるが中心が東へと移っていく時期であり，続く第13・14期は，集落の衰退期であると同時に集落が東へと移動する時期と捉えられている。当区の住居跡が少数であることからも，集落が東へ移動していった状況がうかがえる。

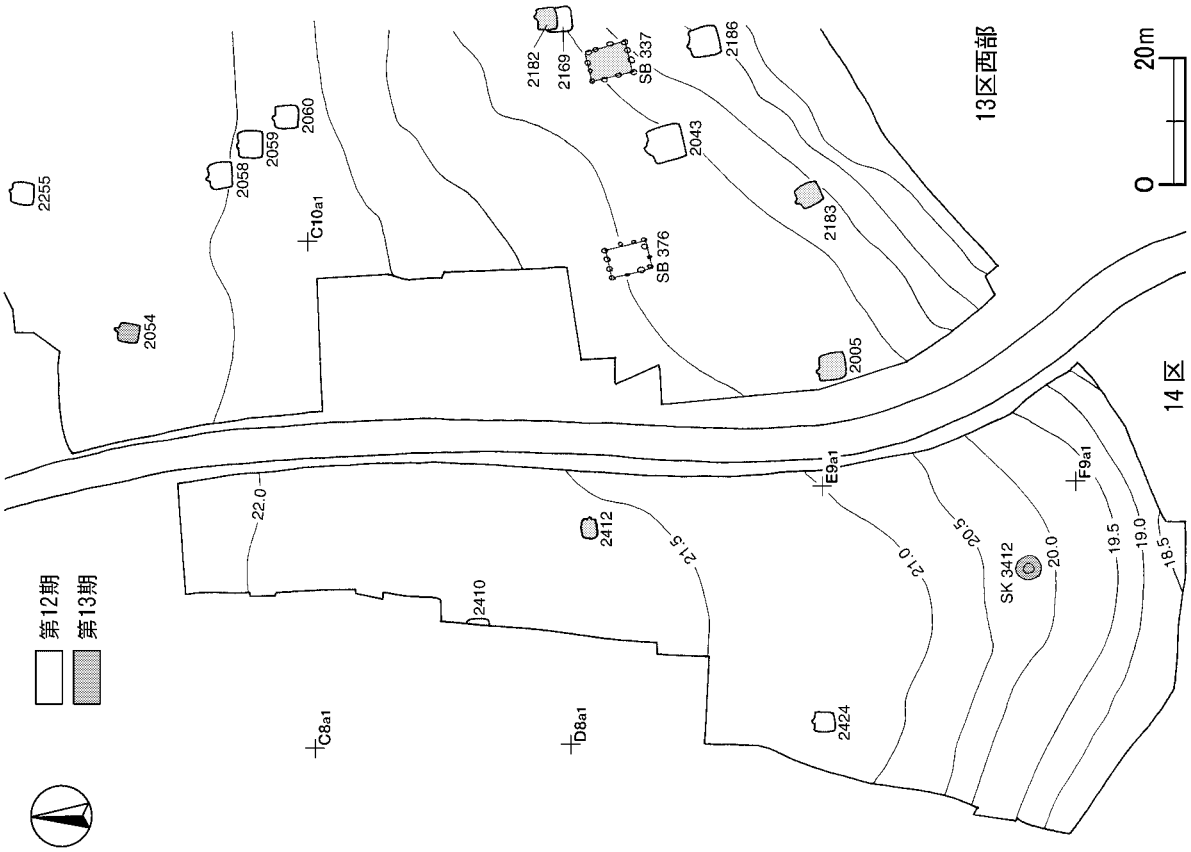
注目される遺構としては，円形の大形で底面に段を有する第3412号土坑が確認されている。当区南部の緩斜面肩部に位置しており，９世紀代の遺物が出土している。同様の形態をもつ遺構は，茨城県南部，千葉県北部，栃木県中央部にかけて検出されており，特に官衙関連遺跡からの検出例が多い。当遺跡においては過去に10基が報告されている。時期は，いずれの土坑も奈良時代から平安時代であり，台地縁辺部に位置している。このような円形で有段式の土坑を氷室として，有力者層の主催する饗宴に氷を供するための施設の一部とする説もあるが，本遺構の周辺から官衙的な遺構は検出されていない。過去の調査においては，遺跡中央部から須恵器大甕が多量の供膳具とともに出土している例や，「酒」と書かれた墨書土器の存在から，饗宴を主催することのできる有力者層の存在が想定される。

遺跡中央部では，11世紀前半の第17期においても90軒以上の竪穴住居跡が確認されており，11世紀後半

の第18期には急激な住居跡の減少が認められるが，遺跡北部において10世紀前半の第15期以降に確認された遺構は，竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡２棟にすぎない。遺跡中央部よりも約１世紀早く集落の終焉を迎えたものと考えられる。

中・近世

中・近世の遺構としては，掘立柱建物跡３棟，方形竪穴遺構３基，地下式壙３基，溝跡15条，火葬土坑８基，墓坑13基，柵跡１列のほか，形状から墓坑の可能性がある土坑84基が確認されている。地下式壙，火葬土坑，墓坑の多くは南緩斜面部に集中しており，北部に向かうほど散在する状態となる。また，南緩斜面部の墓坑密集地からは多数の小ピットが検出されており，墓坑に伴う卒塔婆等の掘り方の可能性も想定できる。同様の景観を示す第13区西部域とともに，中世以降の当地域は，墓域として機能していたと考えられる。また，当調査区で検出された15条の溝跡は，いずれも形状から区画溝または区画溝を兼ねた根切り溝と考えられるが，東側の第13区へと連続する溝跡は認められず，第13区と第14区との間の道路で終結しており，この場所が近世から道路として機能していた可能性が考えられる。



第794図　第14区集落変遷図（第12・13期）

(4) 第16区

第16区は当遺跡の南西部にあたり，既に報告されている第１～11区の南西側，第12区の西側に位置している。当区の地形は，東・南・西側の三方を谷津に囲まれた舌状台地を呈し，台地上の北東部が標高23.0ｍの最高所となっている。中央部にかけては平坦面が広がり，標高22.0～22.5m付近が傾斜変換点で西側へは緩やかに傾斜し，南側は急な傾斜となっている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡の多くは，北東部から中央部にかけた標高22.5～23.0mの台地上に集中し，一部は台地の縁辺部や斜面部にも展開している。

そこで，これまでに報告された調査成果を考慮しながら，当区の様相について概観する。なお中世以降については，別項で述べる。

古墳時代（第795・796図）

第１期は，当遺跡に集落が出現する時期であるが，当区で遺構は確認されていない。

第２期は５世紀代にあたり，当区では竪穴住居跡５軒確認されている。これまでの調査では，東谷田川沿いの台地縁辺部に小規模な集落が確認されているが，時期は５世紀前半を中心としており，集落の廃絶後は時期的な空白が想定されている。今回，当区で検出された住居跡の時期は，５世紀中葉から後葉に位置付けられ，当遺跡の空白期を埋める資料といえる。したがって，集落の形成には時期差が認められることから，東谷田川沿いに点在していた集団の一部が，当区周辺へ移住したと想定される。５世紀中葉は，当区中央部の台地縁辺部に第2638号住居跡が位置している。一辺７ｍを超える大形住居で，周辺には住居跡が確認されておらず，単独での存在と考えられる。南東コーナー部には径100㎝ほどの貯蔵穴があり，炉は３か所で，北部に位置する炉１・炉２は作り替えが行われている。出土遺物は土師器坏・甕・甑，刀子があり，土器類はほぼ完形の状態で壁際に集中していることから，壁際が収納空間として利用されていたと考えられる。５世紀後葉には，東部の台地上に一辺７ｍ前後と推定される大形の第2689号住居跡と一辺4.2～5.5mの中形住居跡３軒がまとまっており，小集団を形成している。第2689号住居跡は，北西コーナー部に長径145㎝ほどの貯蔵穴や，西壁側に間仕切り溝２条を有している。出土遺物は土師器坏・甕のほか，臼玉や双孔円板などの石製模造品が出土している。他の遺構との重複が激しいため全容は明らかではないが，規模や形状から集落の中心的な住居であったと考えられる。

６世紀前葉から中葉の第３・４期は空白期であり，当区で再び集落が確認されるようになるのは６世紀後葉の第５期である。当遺跡では，第４期に大形住居を中心に集団として結合の強化が見られ，第５期にはその単位集団が増加し，集団ごとに住居の主軸方向には統制がとられるようになる。また第５期は，当遺跡を中心とする周辺一帯が大規模に開発される時期でもあり，当遺跡は繁栄期を迎え，当区でも住居跡数は一挙に増加している。当区では竪穴住居跡17軒が該当し，台地上から斜面部まで集落の広がりが見られるようになり，調査区東部や中央部に10軒，南部の台地縁辺部や斜面部にも７軒が確認されている。当区東部には一辺７ｍを超える第2681号住居跡が位置し，その周辺を取り囲むように複数の中形住居が配置されている。いずれも主軸方向はおおむね北西方向を向いており，同一の集団を構成していたと考えられる。第2681号住居跡は，東および西壁側に３条ずつ間仕切り溝を有し，出土遺物は竈の周辺を中心に土師器坏・甕・甑，辻金具などが遺棄されていたほか，須恵器甕，鋤先なども廃絶後に投棄されている。また，南部の台地縁辺部から斜面部に位置する７軒の住居跡は，一辺４～６ｍの中形住居であり，主軸方向はおおむね北西を向いていることから，前述の集団に属する集団と考えられる。

第６期は住居跡数がさらに増加し，継続して繁栄期の様相を示している。竪穴住居跡は23軒で，分布の

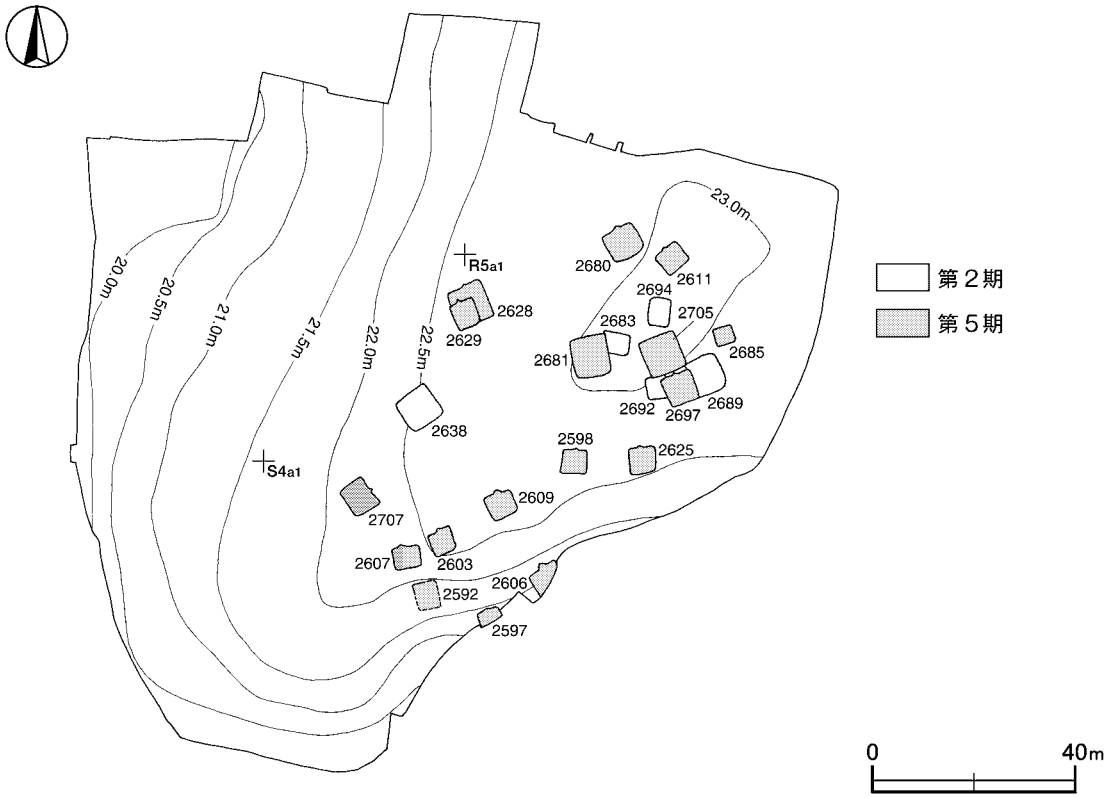
中心は台地上に移動している。北・東部に17軒，南部には６軒が確認されている。一辺６ｍを超える住居跡は９軒を数え，大形住居の増加が見られ，これら３か所には大形住居を中心とした集団が形成されている。北部の集団は，第2657号住居跡と３軒の中形住居で構成され，第2657号住居跡の竈の灰層中からは，土玉・小玉・管玉など10点が出土している。東部の集団は，第2666号住居跡を中心に数多くの住居跡がまとまっており，他の集団と比べて各住居の鉄器や紡錘車，玉類の保有率が高く，集落内における優位性が認められる。中心となる第2666号住居跡は，東および西壁側に間仕切り溝がそれぞれ３条ずつ検出されており，主柱穴が６か所，支柱穴が３か所と計９本の柱を有することから堅固な上屋構造であったと推定される。出土遺物は土師器坏・鉢・甕などのほか，北東・南西コーナー部から土玉や球状土錘などの土製品20点が出土している。住居の規模や構造や集団の優位性から，前期の中心的な住居であった第2681号住居跡とのつながりが想定される。また，第2666号住居跡から南西20mほどに位置する第2698号住居跡は，北西・北東コーナー部を中心に土師器甕が多量に出土している。口縁部および底部から個体数を算出すると47個体を数え，出土状況は住居の廃絶後に投げ込まれた様相を示している。このように一括投棄された玉類や甕の出土例は，集落の廃絶に伴う廃棄行動として注目される。

７世紀中葉にあたる第７期は，当遺跡が一時的に衰退する時期である。当区でも竪穴住居跡は６軒に減少し，北東部から東部の台地上に２軒，南部から南東部の斜面部に４軒が確認されているだけである。東部に位置する第2677号住居跡は一辺８ｍ，南東部に位置する第2634号住居跡は一辺6.5mといずれも大形で第2662・2677号住居跡，第2624・2634号住居跡は，それぞれ近接して主軸方向もおおむね一致しており，同一の集団と想定される。なお，当区では第７期以降，９世紀後葉の第14期まで，当遺跡内でも最大級（上位３位以内）の大形住居が継続して営まれている。当期の住居数の減少にみられる集落の再編以降，当遺跡の集落形成のなかで，一定の立場を保持し続けた集団の居住域と捉えられる。

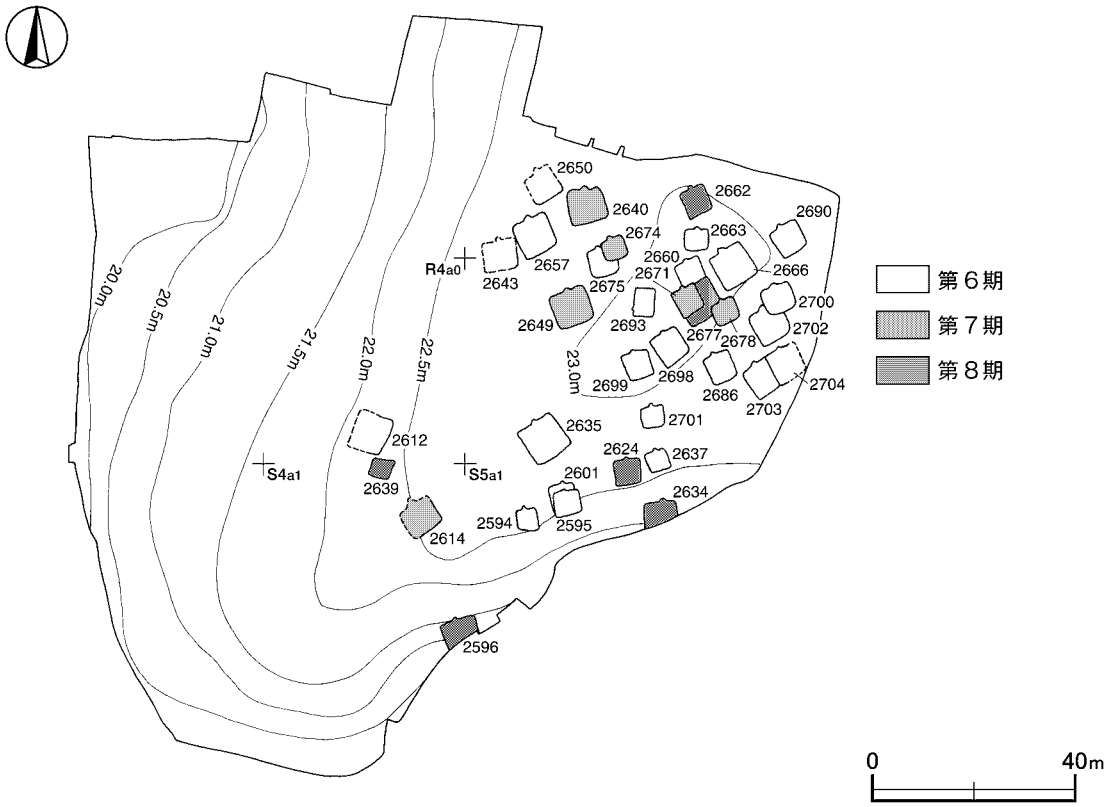
第８期は，竪穴住居跡６軒が該当する。北部から東部の台地上に６軒が存在し，一つのまとまりを構成し，斜面部に住居跡は見られなくなる。第2693号住居跡を除く５軒の主軸方向は，おおむね北西方向を向いている。北部に位置する第2693号住居跡は，長軸5.5m，短軸4.0mの長方形で，各期を通じて当区唯一の西竈の住居である。南壁際には多量の粘土塊が堆積しており，Ｐ３の覆土上層には，焼土や炭化材が堆積している。出土遺物は土師器坏・甑・小形甕，須恵器坏，石製紡錘車，鉄滓などである。住居の形状や多量の粘土塊，Ｐ３の堆積状況から何らかの手工業生産に関わる工房の可能性が考えられる。第2640・2649号住居跡は，一辺７ｍを超える大形住居であり，その他４軒は一辺４～６ｍの中形住居である。出土遺物は土器類のほか，３軒の住居跡から鎌１点，鏃２点，不明鉄製品４点が出土しており，集落内での鉄製品の保有率が高くなる傾向が見られる。また，鉄製品については，それまで大形住居を中心に出土していたが，当期ではいずれも中形住居から出土している。鉄製品の普及に起因するものか，主屋と倉庫といった機能差によるものかは即断できないが，鉄製品の管理体制には変化が認められる。

奈良時代（第797図）

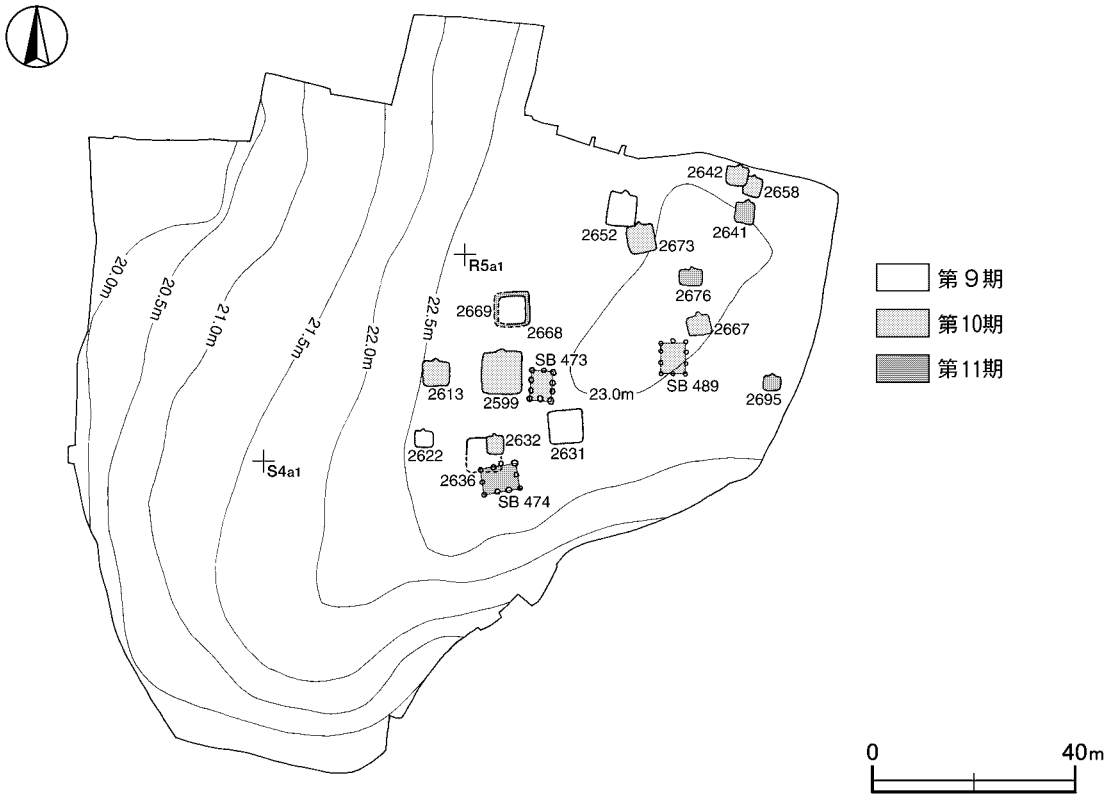
８世紀前葉にあたる第９期は，遺跡中央部に一辺70mの方形区画溝が開削され，さらに，遺跡内の住居跡は形態が均質化し，主軸方向が真北方向を指すようになる。このような様相は，律令体制による居住域の統制が図られた結果と考えられる。当区では，竪穴住居跡５軒が該当し，それらは北部・中央部の台地上に10～20mと一定の間隔を保って配列している。北部に位置する第2652号住居跡は，長軸6.5m，短軸5.5mの長方形で，北東コーナー部に貯蔵穴を有している。主柱穴は６か所で，堅固な構造の住居である。



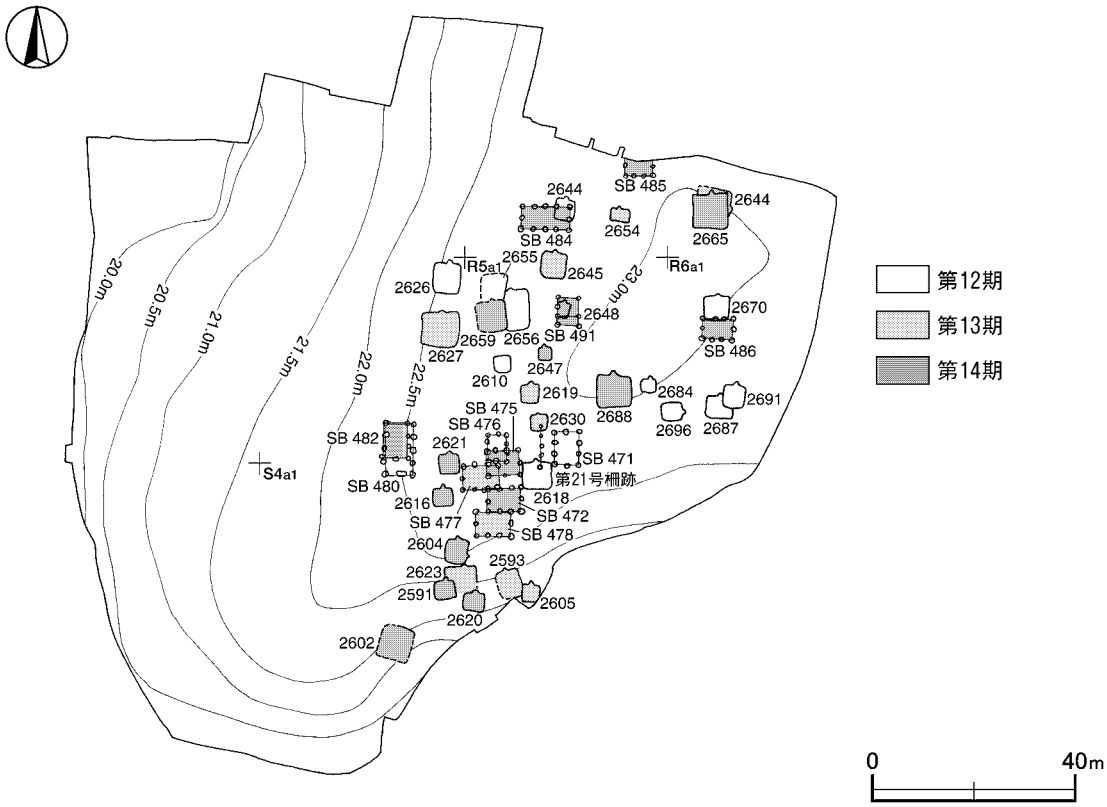
第795図　第16区集落変遷図（第２・５期）



第796図　第16区集落変遷図（第６～８期）



第797図　第16区集落変遷図（第９～11期）



第798図　第16区集落変遷図（第12～14期）

中央部に位置する第2631号住居跡は，一辺6.5mほどの大形住居で，主柱穴が４か所，支柱穴が２か所と計６本の柱を有し，第2652号住居跡と同様に堅固な構造である。２軒とも規模や形状，出土遺物から中心的な住居であったと想定され，出土遺物は土師器坏・甕，須恵器蓋などのほか，石製勾玉・双孔円板，刀子・鏃などが出土している。また，第2631号住居跡の出現以後，中央部には継続的に大形住居が形成されていることから，当期は，中心的な住居が東部から中央部へ移る過渡期に位置付けられる。

第10期は，遺跡中央部に整然と配置された掘立柱建物群が出現し，集落域を取り囲むように大溝が巡らされている。当区は，大溝の区画からは外れるものの，北東部から中央部の台地上に竪穴住居跡７軒と掘立柱建物跡２棟が確認されている。住居跡は，いずれも主軸が真北方向を向いており，前期に続いて主軸方向は統制がとられている。中央部に位置する第2599号住居跡は一辺8.5mで，遺跡内でも当期の最大規模の住居である。出土遺物は土師器甕や須恵器蓋のほか，土玉，石製勾玉・双孔円板，刀子・鏃・紡錘車・火打具などが出土している。本住居跡の東側には第473号掘立柱建物跡，さらにその東側20mほどの位置に第489号掘立柱建物跡が位置している。２棟は桁行３間×梁行２間でほぼ同規模の側柱建物であり，主軸方向もおおむね一致していることから倉庫としての機能が想定される。その他の住居跡は，一辺４～５mに均質化しており，小形化の傾向を示している。また，６軒の住居跡から刀子・鏃・紡錘車・火打具が出土しており，鉄製品の保有率が高いのも当期の特徴に挙げられる。

第11期には，以前として遺跡の中央部には掘立柱建物群が建ち並び，大溝による区画も踏襲されている。当区は，竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡１棟が確認され，住居跡数はやや減少して，規模の小形化が進んでいる。北東部から中央部の台地上には，一辺6.5mほどの第2668号住居跡を中心に，一辺４～4.5mの中形住居や３m以下の小形住居が一定の間隔で点在しており，主軸方向は４軒とも真北方向を向いている。第2668号住居跡は平安時代の住居と重複しており，出土遺物も少ないため全容は明らかでない。

平安時代（第798・799図）

９世紀前葉の第12期になると，当区では増加傾向に転じ，竪穴住居跡11軒，掘立柱建物跡３棟，柵跡１列が確認されている。住居跡はいずれも台地上に位置し，中央部から南部に６軒，東部に５軒の２集団に分けられる。中央部に位置する第2656号住居跡は，一辺7.5mほどの当期最大級の住居跡である。前述したように，第９期から同じ場所での建て替えが行われており，集落の中心は調査区中央部に移ってから代々住み替えが行われ，中心部は世襲的に踏襲されたと考えられる。南部には，東から第471・476・480号掘立柱建物跡が同じ桁行方向で並んでいる。第471・480号掘立柱建物跡は柱穴の規模が大きく，柱間寸法が広いことから居宅の機能が想定され，小規模な第476号掘立柱建物跡は倉庫と考えられる。また，第471号掘立柱建物跡の西側に並行する第21号柵跡は，本建物跡の西側を遮断する簡易的な塀と考えられる。第471・476・480号掘立柱建物跡は，大形住居である第2618号住居跡から住み替えのために建設されたと考えられる。東部では，第2696号住居跡が東竈である以外，おおむね北方向を向いており，主軸方向はほぼ一致している。出土遺物は大形住居から双孔円板や石製管玉，中形住居を中心に刀子・鏃・鎌・手斧・縁金具・釘などの鉄製品が出土しており，鉄製品の保有率は高い傾向を示している。

第13期は，竪穴住居跡９軒と掘立柱建物跡３棟が該当する。住居跡は，北東部から中央部の台地上に６軒，南部の斜面部に３軒が位置し，弧を描くように点在しており，再び斜面部にも住居が形成されるようになる。当期以降，主軸方向の振れ幅は大きくなり，また一辺3.5mほどの小形住居跡が４軒を数え，さらに小形化する傾向が認められる。中央部の台地縁辺部に位置する第2627号住居跡は，一辺7.0mほどの

当期最大の住居跡である。出土遺物は，土師器高台付椀，須恵器坏・高台付坏・蓋・甕のほかに灰釉陶器瓶も見られる。また，北東部に位置する第2664号住居跡の竈からは「田」と刻書された土師器高台付皿と須恵器円面硯片が出土し，いずれも集団の中心的な住居と考えられ，有力者層の存在がうかがわれる。掘立柱建物跡は，南部の台地縁辺部に３棟が集中しており，第477・478・482号掘立柱建物跡が該当する。規模や形状はほぼ同一であり，配置からは倉庫としての機能が想定され，倉庫群を形成していたと考えられる。

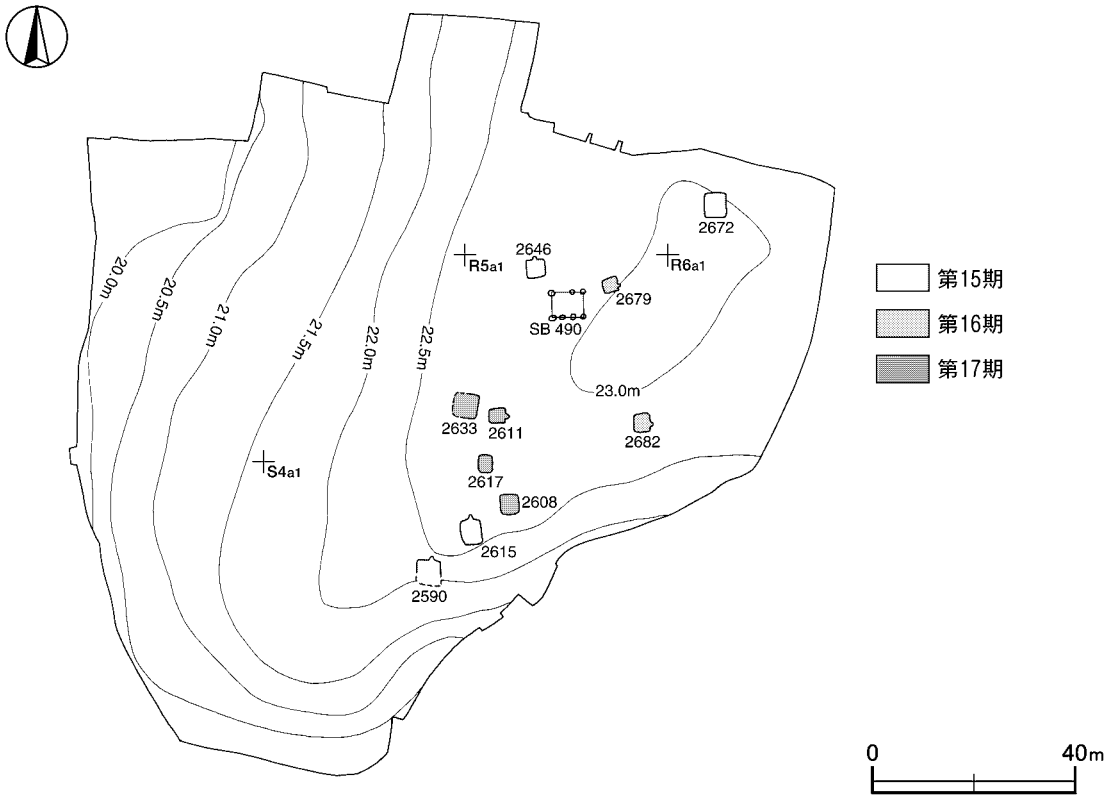
第14期には，住居跡数はわずかに増加し，竪穴住居跡11軒と掘立柱建物跡５棟が確認されている。住居跡は規模がさらに小形化し，一辺４m以下のものが半数を占めるようになる。鋤先・鏃・刀子などの鉄製品や砥石は小形住居跡を中心に出土しており，小形住居は倉庫的な機能も有していたと考えられる。東部から中央部の台地上には，一辺７mほどの第2665・2688号住居跡と，一辺５mほどの第2659号住居跡が位置し，互いに20～30mの間隔を空け，それぞれ単独で存在している。その間には倉庫と想定される掘立柱建物跡４棟が点在している。第2665号住居跡は一辺７mほどの住居跡で，前期の第2664号住居跡と同位置にあり，同住居跡からの建て替えが想定される。竈は作り替えが行われており，床面には４面の貼床が認められ，短期間に４回以上の貼り替えが行われている。遺物は土師器坏・高台付椀・高台付皿などのほか，灰釉陶器椀や「杢」，「口」，「石□□」，「土」と書かれた墨書土器も出土しており，前期から引き続き有力者の居宅として機能したと考えられる。第2659号住居跡からは，灰釉陶器椀が出土し，中央部の集団の中心的な住居と考えられる。また，南部の斜面部には６軒がまとまっており，一つの集団を形成している。第2616・2621号住居跡は，一辺3.5mほどの小形住居跡であり，東側には桁行方向を同じにする第472・475号掘立柱建物跡が位置している。建物は，規模や形状からいずれも倉庫としての機能が想定される。

10世紀前半の第15期になると住居跡数は急激に減少し，以後当区では，集落が衰退していく傾向が認められる。竪穴住居跡４軒と掘立柱建物跡１棟が確認されており，住居跡はいずれも一辺４m台の中形住居で，主軸方向はおおむね北方向である。北部の２軒は30mほどの間隔をあけて点在し，南部の台地縁辺部では２軒が隣接している。出土遺物は土師器が主体となり，坏・高台付椀・皿などが出土している。南部の台地縁辺部に位置する第2615号住居跡からは「高」と刻書された土製紡錘車が出土し，北東部の第2672号住居跡からは，「石」と墨書された須恵器高台付皿が出土している。第2672号住居跡は，第13期の第2664号住居跡から継続して同位置での建て替えが行われており，いずれも刻書土器や墨書土器が出土していることから，血縁的なつながりをもつ有力者層の居宅と想定される。また，調査区中央部の第490号掘立柱建物跡は，規模や形状から倉庫と考えられる。

第16期は竪穴住居跡２軒が該当し，掘立柱建物跡は確認されていない。住居跡は一辺３m台の小形住居で，中央部に約20mほどの間隔で点在しており，いずれも東竈である。出土遺物は土師器坏・高台付椀・小皿・甕などで，当期から小皿が器種組成に加わるようになる。また，鏃・鎌・刀子の鉄製品に加え，各住居跡から鉄滓が出土しており，鉄の精錬から鉄製品の製造までの工程が集落内で行われていた可能性がある。

11世紀前半の第17期には，調査区南側の台地縁辺部に４軒のまとまりが認められる。第2633号住居跡が一辺5.5mを超える規模で，当期では大形の住居であるが，後世の堀や土坑に掘り込まれているため全容は不明である。その他の住居跡は一辺３m台の小形住居で，いずれも東竈である。出土遺物は，前期と同様に土師器坏・高台付椀・小皿・甕などである。

第18期は，当遺跡における集落の終末期であり，当区では住居跡が確認されておらず，集落は一早く終焉を迎えている。以後，中世段階まで遺構形成が認められない空白地となっている。



第799図　第16区集落変遷図（第15～17期）

3　島名熊の山遺跡の竪穴住居跡について

島名熊の山遺跡において確認された竪穴住居跡数は，今回の報告分を含めて2000軒以上に達する。各調査区における住居跡数の増減や集落の分布については既刊行の報告書で紹介されており，以下のような点が指摘されている。

・４世紀に集落が形成され，６世紀後半以降になると集落は台地上を覆い尽くすようになる。

・奈良時代，平安時代になっても集落が継続して営まれており，中でも奈良時代初頭における集落の様相の変化は劇的である。

・律令体制の衰退期においても安定して集落が展開している。

そこで，これらの点について，蓄積された資料を基に再度検証したい。なお，他の遺構に掘り込まれているため全容が明らかでない住居跡や一部が調査区域外に延びている住居跡も認められており，各項目の総数は調査軒数と一致しない。時期区分に関しては，既報告分との整合性を保つために，『第190集』で示された土器の分類に基づき，第１・２期を４・５世紀，第３～５期を６世紀，第６～８期を７世紀，第９～11期を８世紀，第12～14期を９世紀，第15～18期を10～11世紀とする。

⑴　時代別検出住居跡数

これまでに確認された竪穴住居跡を時代別に分類すると，古墳時代790軒（40.5%），奈良時代394軒（20.2%），平安時代767軒（39.3%）であり，縄文時代・弥生時代の住居跡は確認されていない。これまでの調査で，縄文時代の陥し穴７基が検出され，縄文土器片も出土していることから，縄文時代から人々の生活の場であったと考えられるが，当地に集落が形成されるのは古墳時代前期以降である。

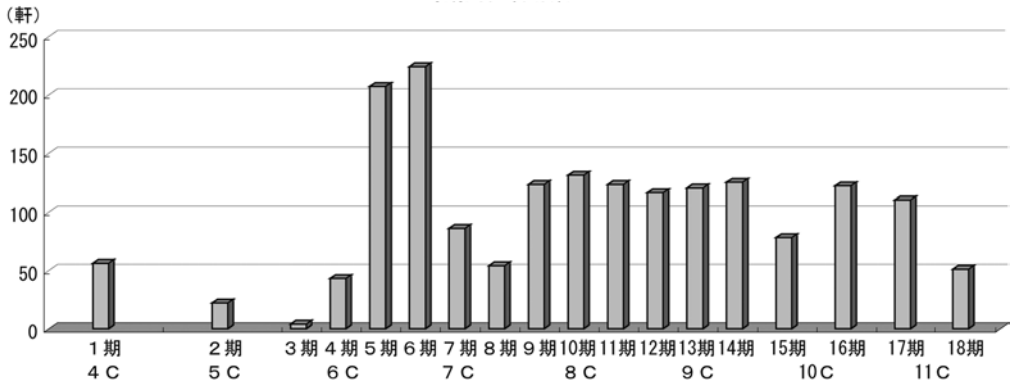
⑵　竪穴住居跡数の推移

次に，時期ごとの集落の盛衰について概観したい。当遺跡において最初に住居跡が確認されるのは４世紀の第１期で，小規模な集団の出現期と捉えられる。６世紀前葉の第３期には４軒が確認されるが，第４期以降再び増加の傾向を示し，６世紀後葉から７世紀前葉の第５・６期に古墳時代で最大の繁栄期を迎える。当期は，住居跡の分布が遺跡全体に及ぶようになることや鉄製農具の出土状況からも，当遺跡一帯が大規模に開発され，人口が急増した時期であったと考えられる。当遺跡の南側に位置する島名前野東遺跡や島名八幡前遺跡と同様に，７世紀中葉から後葉の第７・８期になると住居跡数は急減する。しかし，この時期においても50軒以上の住居跡が確認されており，律令制への過渡期においても，当地では地縁・血縁的につながる集団が継続的に居住していたことが推測できる。

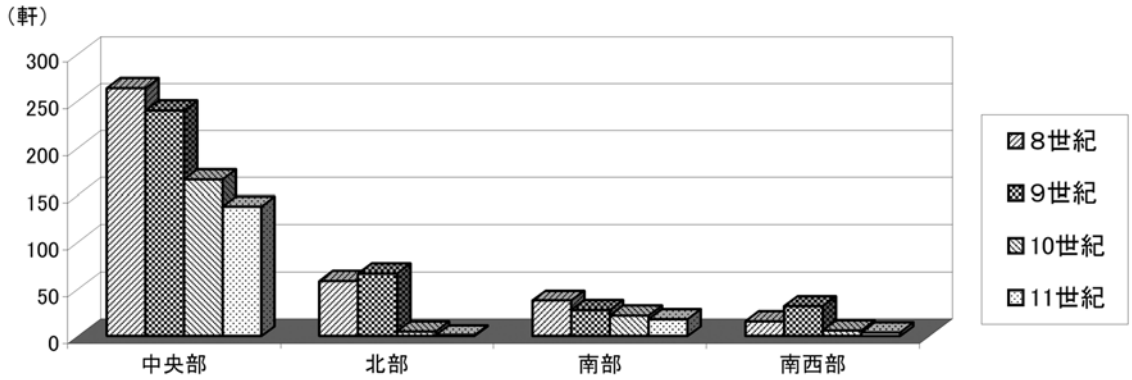
奈良時代の第９期になると住居跡数は再び増加の傾向を示し，８世紀中葉の第９期以降平安時代の第14期まで，116～131軒と，各期ともほぼ同数の住居跡が検出されている。このことから人口を支えるための生活基盤の安定がうかがえ，鉄製農具の普及とともに，農業の盛行やそれに伴う経済力の充実が計られたと考えられる。律令期における当地は河内郡島名郷に比定されており，確認された住居跡数の多さからも，中心的な集落であったことが裏付けられる。

その後，10世紀前半の第15期以降減少傾向を示すものの，11世紀まで継続して集落が営まれていた様子がうかがえる。そして，11世紀後半の第18期を最後に竪穴住居跡は確認されなくなる。竪穴住居から平地式住居へと居住形態が変化した時期とも考えられるが，生活痕は認められず，中世への連続性は確認できない。なお，住居跡数の減少は遺跡内で一様ではなく，遺跡北部，南西部では，遺跡中央部よりも約１世紀早い10世紀後半に，竪穴住居跡はほぼ姿を消している。

時期別住居跡数



地域別住居跡数の推移（奈良時代・平安時代）



⑶　住居規模の変化

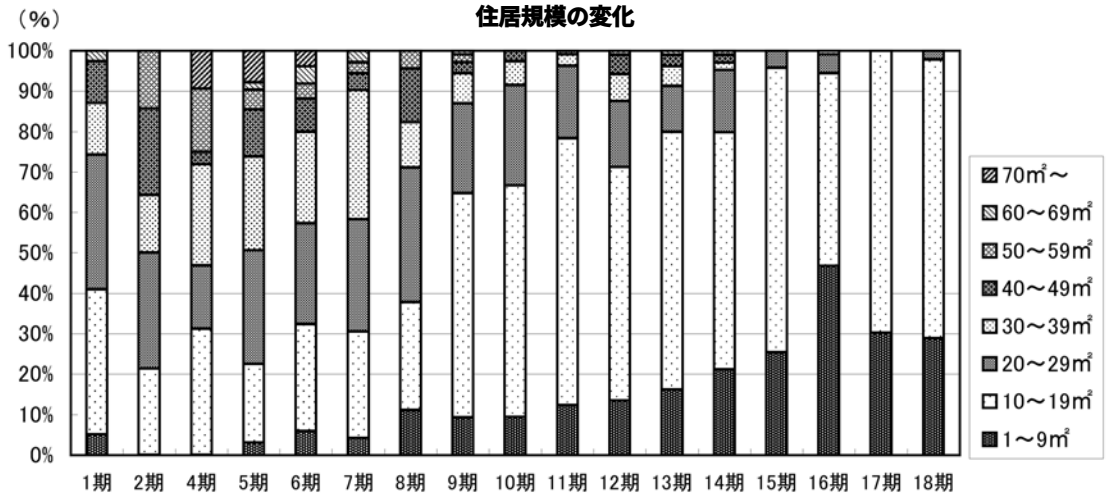
次に，時期を追って竪穴住居跡の規模の変化ついて確認したい。当遺跡で確認された竪穴住居跡の平面形はいずれも方形または長方形である。なお，第３期については，確認住居跡数が４軒であるため，グラフからは除外している。

古墳時代前・中期ともに，中心となる規模は10～29㎡である。４世紀代の第１期は，10～19㎡が36%，20～29㎡が33%であるのに対して，５世紀代の第２期には，10～19㎡が21%，20～29㎡が29%の他，第１期には13%であった40㎡以上の割合も35%となり，住居跡が大形化する傾向が見られる。

古墳時代後期になるとさらに大形化が進行する。６世紀中葉の第４期は，前期までと同様に10～29㎡の住居跡が半数近くを占めているが，30～39㎡の割合が25%となり，70㎡を超える住居跡も確認されるようになる。当遺跡において最も多くの住居跡が確認される第５・６期は，住居跡が最も大形化する時期でもあり，100㎡を超える大形の住居跡も確認されている。また，古墳時代後期を通して各規模の割合に大きな差違が認められないことから，血縁関係を同一とする集団が継続的に居住していたことがうかがえる。その後，住居跡数の減少とともに小形化の傾向を見せ，第７期以降になると70㎡以上の住居跡は確認されていない。

関東地方の竪穴住居跡について，南関東（東京都・神奈川県・千葉県）と，北関東（茨城県・埼玉県・栃木県・群馬県）を対比させて分析した宮本長二郎氏は，『平均規模は，南関東では前期27.8㎡，中期28.２㎡，後期32.1㎡と時代の下降にしたがって増大しているが，北関東では前期25.8㎡，中期31.1㎡，後期22.2㎡と中期に最も大きく，後期には南関東とは反対に小型化する。』また，『30㎡以上の中・大規模で比較すると，南関東では前期29.7%，中期49.6%，後期44.6%，北関東では前期30.5%，中期43.0%，後期26.8%で，前・中期には両地方で同様の傾向を示すが，後期に大きな差を生じている。』[14]としている。同様の手法で当遺跡を分析すると，平均規模は，前期24.6㎡，中期30.3㎡，後期30.7㎡，30㎡以上の割合は，前期25.6%，中期50.0%，後期43.9%となり，いずれの値も南関東の統計値と近似している点が興味深い。

奈良時代の第９期になると，10～19㎡の割合が半数以上を占めるようになる。50㎡以上の大形住居跡も３軒が確認されるだけとなり，住居の小形化は急速に進行する。奈良時代を通じて同様の傾向が見られ，９世紀中葉から後葉の第10・11期では，50㎡以上の住居跡は確認されていない。この急激な変化からは，律令制の確立に伴う社会体制の変化や集落の再構築の様子がうかがえる。



平安時代においても，奈良時代と同様に10～19㎡の住居が中心であるが，小形化はさらに進行し，９㎡以下の割合が増加する。10世紀後半の第16期には，９㎡以下の割合が47%に達し，10世紀以降に確認された30㎡以上の住居跡は１軒だけである。また，奈良時代から平安時代にかけて，住居規模は均一化の様相を呈するようになる。そのために，集落内において支配的立場にあった住居の特定や身分的差違については，遺構の面から掌握することが難しい。

⑷　検出住居跡数と標高

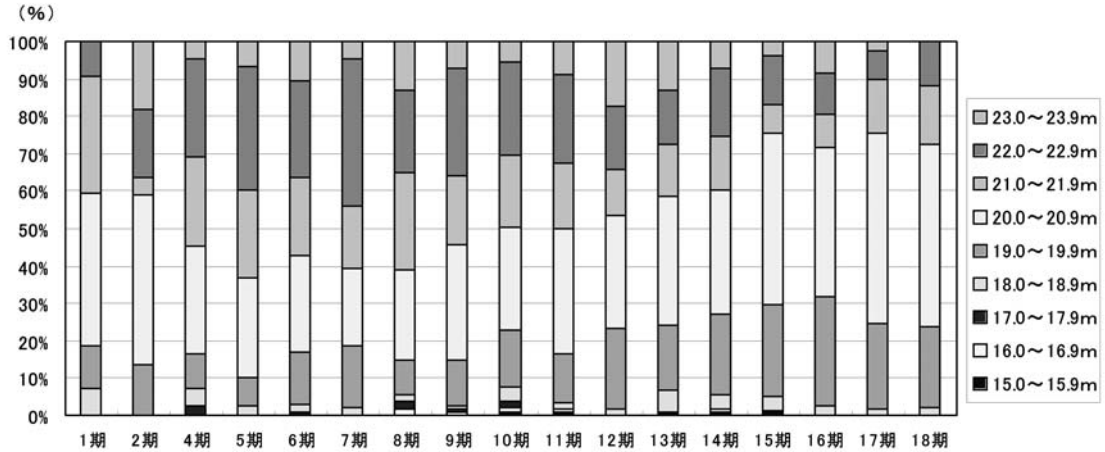
当遺跡は東谷田川に面した台地上の縁辺部に位置しており，台地上の標高は20.0～23.0mである。また，遺跡の中央部と北部との間には谷津が入り込み，遺跡北部・南部・南西部の南側，中央部の東側は緩斜面となっている。住居跡は，標高15.5～23.4mの範囲で確認されており，各期ともに20.0～22.9mに集中するが，時期的な差違も認められる。そこで，立地する標高の違いについて，集落の分布と関連させながら確認したい。なお，第３期については，確認住居跡数が４軒であるため，グラフからは除外している。

古墳時代前期の第１期は，全体の72.2%が標高20.0～21.9mに位置しており，その中でも40.7%が20.0～20.9mに集中している。続く第２期においても20.0～20.9mの割合が45.5%に達し，前期と同様の傾向を示しているが，22.0m以上の割合が増加している。両期とも台地の東縁辺部からの検出例が多い。

古墳時代後期は，住居数が急増して台地上の全域で集落が確認されるようになる時期である。古墳時代前・中期と比べて，より標高が高い位置からの検出例が増加していることからも，大規模な開発と，それに伴う居住域の拡大がうかがえる。

奈良時代・平安時代を通して住居跡の分布は台地上の全域に及んでいるが，古墳時代と比べて，標高が低い位置からの検出例が増加してくる。時代が下るにつれて低い位置の割合が増加しており，これは，遺跡北部や中央部において，標高が高い北西側から標高が低い東側へと集落が移動している様子と一致している。また，資料からは，10世紀前半の第15期以降に21.0m以上の割合が急激に減少し，20.0～20.9mの割合が半数近くを占めるようになることが読みとれる。この時期は，遺跡北部・南西部において住居数が急激に減少する時期と一致しており，確認された住居跡の多くが遺跡中央部の南東域に集中していることとの関連が考えられる。なお，17.0m以下の住居のほとんどは，遺跡最南部に位置する第12区の南側で確認されている。

立地標高の変化



以上，竪穴住居跡数の推移，住居規模の変化，検出住居跡数と標高の３つの観点から，当遺跡の竪穴住居について検証を試みた。使用した資料は竪穴住居跡だけであり，掘立柱建物跡等の他の遺構についての確認がなされていないため，遺跡全体の性格を語るには不十分であるが，今回の資料分析の結果から考えられる特徴は以下の通りである。

・古墳時代前期の４世紀以降に竪穴住居が確認されるようになるが，古墳時代前・中期の住居跡数は調査面積に対して少数であり，小規模な集団が出現し小移動を繰り返していた時期と考えられる。

・古墳時代後期の第５・６期に住居跡数が急増する。住居の分布も遺跡全体に及ぶようになることから，大規模な開発と人口増加に伴う集落の拡大が考えられる。また，住居規模もこの時期が最大となる。

・第７・８期になると住居跡数が減少傾向を示すが，最減期においても50軒ほどが確認されており，律令期への連続性が認められる。

・奈良時代に入ると住居跡数が増加し，11世紀まで継続して集落が営まれている。ただし，集落の衰退期は遺跡全体で一様ではなく，11世紀前半までほぼ同数の住居跡が確認され，11世紀後半に急激に減少する中央部に対して，北部および南西部では，10世紀後半以降，竪穴住居跡はほとんど検出されていない。

・律令期に入ると住居規模は急激に小形化し，また，均一化してくる。このことからは当遺跡が律令制に組み込まれていった様子がうかがえる。

表65　時期別住居規模一覧表

面　積	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	16期	17期	18期	総計(軒)
1～9㎡	2				5	11	3	5	10	11	13	14	17	22	18	51	30	13	225
10～19㎡	14	3	1	10	32	49	19	12	60	67	70	60	67	62	50	52	68	31	727
20～29㎡	13	4	2	5	46	46	20	15	24	29	19	17	12	16	3	5		1	277
30～39㎡	5	2		8	38	42	23	5	8	7	3	7	5	2		1			156
40～49㎡	4	3		1	19	15	3	6	3	3	1	5	3	2					68
50～59㎡		2		5	8	7	2	2	2			1		1					30
60～69㎡	1				3	8	2		1				1						16
70～79㎡				2	5	2													9
80～89㎡				1	5	2													8
90～99㎡					2	2													4
100～109㎡					1	1													2
平均面積(㎡)	24.6	30.3	21.9	33.3	34.1	30.2	27.2	25.1	19.5	17.9	15.8	18.2	16.8	15.6	12.2	11.1	11.8	11.6	1522(軒)

表66　時期別標高一覧表

標　高	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期	16期	17期	18期	総計(軒)
15.5～15.9m										1	1		1	1	1				5
16.0～16.4m									1	1				1					3
16.5～16.9m								1		1	1								3
17.0～17.4m				1		2		1	1	2									7
17.5～17.9m																			0
18.0～18.4m	2		1	1	1	2	2		1	3		1	6	2	1	1			24
18.5～18.9m	2			1	4	3		1		2	2	1	1	3	2	2	2	1	27
19.0～19.4m	3			1	5	8	6	2	4	12	6	13	6	7	5	14	8	6	106
19.5～19.9m	3	3		3	11	22	8	3	11	8	10	12	15	20	14	20	17	5	185
20.0～20.4m	17	6	1	9	32	27	12	8	23	22	26	23	22	22	24	26	36	19	355
20.5～20.9m	5	4	1	3	24	31	6	5	15	14	15	12	19	20	11	21	20	6	232
21.0～21.4m	7	1		7	26	26	10	4	16	14	13	8	11	9	5	8	12	2	179
21.5～21.9m	10		1	3	22	19	4	10	6	11	8	6	6	9	1	2	4	6	128
22.0～22.4m	1	3		4	31	30	13	9	20	25	18	12	11	13	5	8	4	4	211
22.5～22.9m	4	1		7	38	28	21	3	15	8	11	8	6	10	5	5	4	2	176
23.0～23.4m		4		2	14	23	4	7	9	7	11	20	16	9	3	10	3		142
総計（軒）	54	22	4	42	208	221	86	54	122	131	122	116	120	126	77	117	110	51	1783(軒)

4　中・近世の遺構と遺物

前述したように，第９・16区では中世・近世の遺構や遺物が数多く検出されている。ここでは，その遺構や遺物について若干の考察を加え，当遺跡の新たな性格が表出できればと考える。

⑴　梵鐘鋳造遺構と鋳物師

第９区からは，梵鐘鋳造に関わる遺構が検出された。ここでは，検出状況について検討し，さらに京都府京都大学構内遺跡[15]・埼玉県金井Ｂ遺跡[16]・神奈川県宮ヶ瀬遺跡群[17]で検出されている梵鐘鋳造土坑等と比較して，当遺跡における遺構の特徴や周辺施設との比較検討を加えてみたい。また，出土遺物や本県における鋳物師の集成から当遺跡の鋳物師についても迫りたい。

ア　第681号土坑について

島名熊の山遺跡第９区で検出された第681号土坑は，平成９年度にその北半分が調査され，梵鐘の竜頭，鰐口，灯籠の蓮華座の鋳型片が出土した。その後，平成13年の調査において遺構全体の様相が明らかになった。遺構は，西に緩やかに傾斜している標高20.0mほどの緩斜面部に位置しており，長軸2.15m，短軸2.05mの隅丸方形で，地山を35～40㎝掘り込んでいる。底面には，中央部の東西方向に幅24㎝，長さ129㎝，深さ10㎝の掘り込みが検出され，焼土や炭化物も確認された。遺物は，梵鐘の乳，鰐口，燈籠の蓮華座等の鋳型片の他，溶解炉の送風口部片や溶解炉壁片など約400点が確認された。

この遺構を，京都大学構内遺跡検出の梵鐘鋳造土坑や奈良県巨勢寺[18]検出の梵鐘鋳造土坑と比較すると，規模や出土遺物などから本遺構で梵鐘を鋳造した可能性が高い。既刊の『166集』[19]では廃棄土坑と報告されているが，今回の調査で梵鐘鋳造土坑であると断定できる。

イ　鋳造遺跡の様相

近年，梵鐘の鋳造遺跡の検出例も多くなり，その様相も明らかになりつつある。現在，仏具生産の鋳造土坑は，全国で50数基[20]が報告されている（表67）。

古代の鋳造遺跡では，７世紀末から８世紀初頭に操業した滋賀県木瓜原遺跡が現在確認されている中で最古の遺跡である。鋳型の検出例としては奈良県田中廃寺があり，時期は７世紀後半とされている。また，現存する最古の梵鐘は，京都府妙心寺と福岡県大宰府観世音寺のもので，７世紀後半には梵鐘の製作技術が日本に確立したものと考えられ，８世紀以降，各地に鋳造遺跡が見られるようになる。

中世の遺跡としては，長野県寺平遺跡，福岡県鉾の浦遺跡，京都大学構内遺跡などで検出されており，江戸時代の遺跡としては，宮ヶ瀬遺跡群が知られている。

ウ　梵鐘鋳造遺構の構造について（第800～802図）

ここでは，他の遺跡の鋳造土坑と本跡の状況を比較し，本跡における遺構の特徴について述べる。

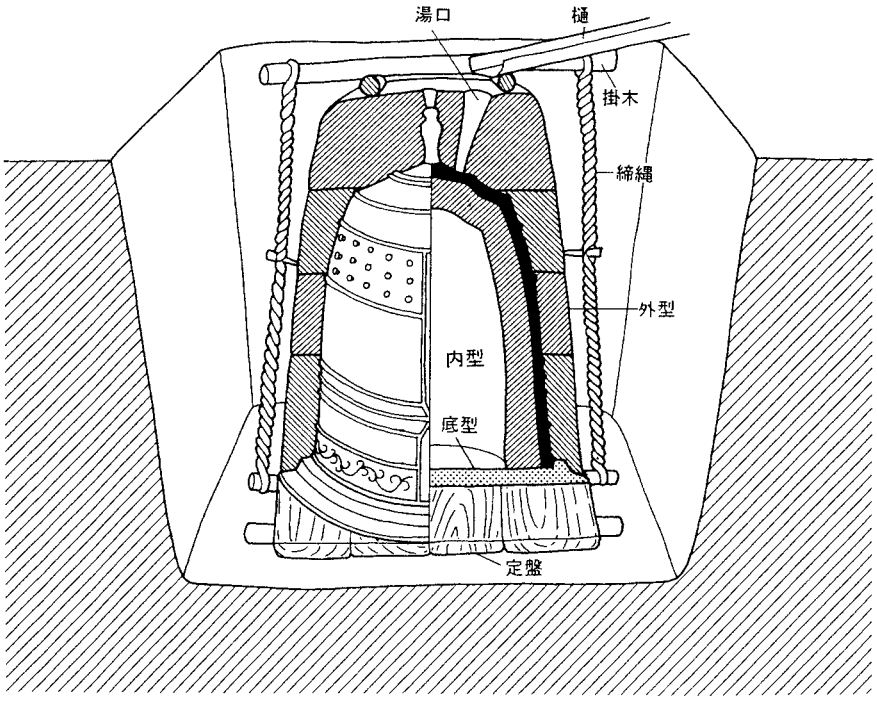
まず，梵鐘の鋳造状況については第800図[21]を参考にされたい。内型と外型を設置する粘土魂を「底型」と呼び，この粘土魂を載せるための台が「定盤」である。京都大学構内遺跡 AP22区で検出された第257号土坑の底面からは，梵鐘鋳造のための円形の「底型」が検出されている。表面は酸化焼成されて赤褐色を呈している。底型の構造には多少の違いが認められ，京都大学構内遺跡の土坑や兵庫県多可寺跡遺跡[22]の例では，底形の中央部には詰まっているが，木瓜原遺跡の例では円形の空間となっている。

また，寺原遺跡の例でも円形の空間が見られ，その部分には砂が詰まっており，この穴は空気抜きの穴であったと考えられている。

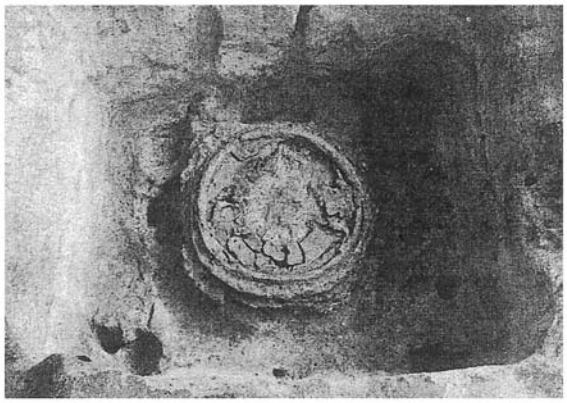
この他，巨勢寺遺跡からは，底部に木板を４枚敷き並べた定盤が検出されている。また，岩手県白山社遺跡[23]でも，定盤の板３枚が残って検出されている。さらに「定盤」の上に「内型」・「外型」が残存していた例としては，多可寺跡遺跡，大分県豊後国分寺[24]，福岡県鴻臚館跡などがある。

このように，低部に明確な痕跡を残している遺構もあり，京都大学構内遺跡 AP22区の土坑 SK245では底面に溝が平行に２条掘り込まれ，その両端に円形の掘り込みが認められた例もある。この溝や掘り込みは，湯入れ時に溶湯やガスの圧力によって鋳型が動くのを防ぐためのもので，木材を定盤の下部と最上の鋳型の上部に組んで，その両端に縄を掛け，縄を拠ることによって生まれる張力を利用して鋳型を固定させる仕掛けである。この掛木を据える為の溝や掘り込みと考えられている。

特徴的な４つの事例を紹介する。一例目は京都大学構内遺跡 AP22区の土坑 SK245で，平行に掛けた掛木に２本の短い棒や釘を用いて固定する「お神輿型」。二例目は兵庫県牧野・町西遺跡[25]の平行に掛けた掛木に１本の短い棒を固定した痕跡のある「エの字型」。三例目は岐阜県野口廃寺[26]の十字に２本の掛木を組んだ痕跡が確認されている「十字型」。四例目は，島名熊の山遺跡の幅広の溝を一方向に掘り込んだ「一字型」である。このように定盤・底型が鋳造当時の様相を留めるものや，溝の形状が異なるものなどが知られており，幅広の溝を一方向に掘り込んだ本遺構の「一字型」は他に例が無い。この溝を使って鋳型をどのように固定したかは明らかにできないが，鋳造土坑に土砂を詰め込んで，湯入れ時に鋳型がずれないようにしていた木瓜原遺跡の例などを考えれば，当遺跡でも同様に固定したと考えられる。



第800図　梵鐘の鋳造状況（「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より）

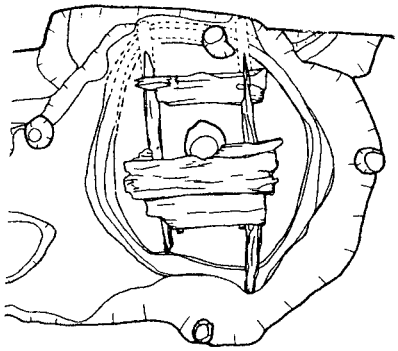


京都・京都大学構内遺跡 AP22区 SK257

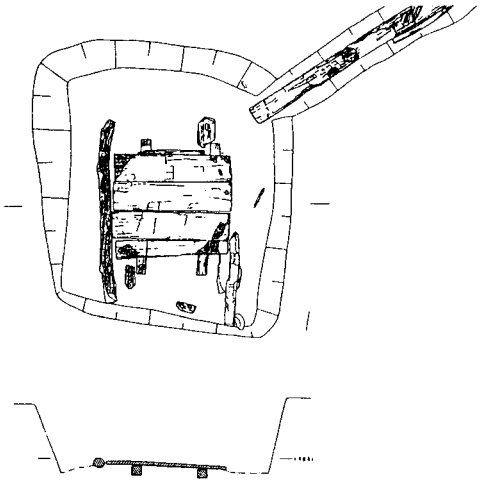
兵庫・多可寺跡

大分・豊後国分寺跡

奈良・巨勢寺



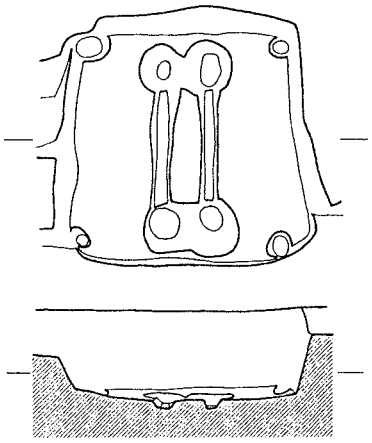
岩手・平泉白山社遺跡



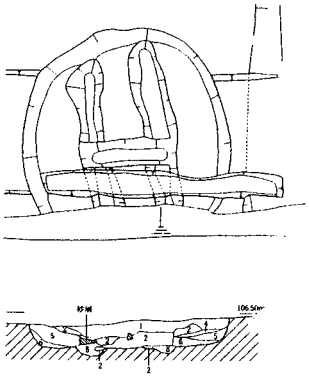
奈良・巨勢寺

0　4m

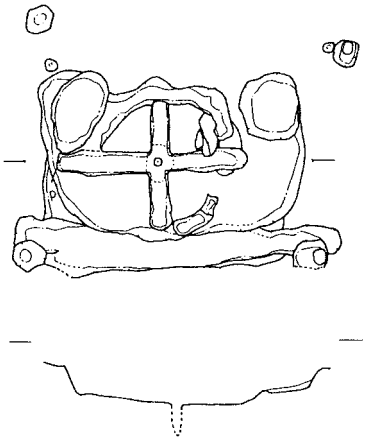
第801図　梵鐘鋳造土坑①（「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より）



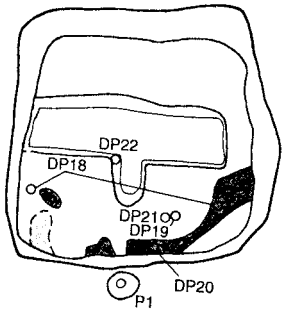
京都・京都大学構内遺跡 AP22区 SK245



兵庫・牧野・町西遺跡



岐阜・野口廃寺



島名熊の山遺跡・第681号土坑

0　4m

第802図　梵鐘鋳造土坑②（「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より）

表67　鋳造土坑遺跡一覧表

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
1	真福寺遺跡	13世紀後葉	大阪府南河内郡 美原町黒山	鍋鋳型・梵鐘鋳型・溶解炉	鋳造土坑	大阪府教育委員会・大阪府文化財センター「真福寺遺跡」1997年３月
2	枚方田中家鋳物工場跡	江戸時代	大阪府枚方市 枚方上之町	鍋釜黎梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	枚方市教育委員会「田中家鋳物工場跡」『枚方市文化財調査報告』36　2000年
3	徳大寺遺跡	古代	大阪府箕面市粟生間谷東・茨木市宿久庄	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	廣瀬時習他　「徳大寺遺跡」『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』1999年６月
4	京都大学教養部構内ＡＰ22区	９～10世紀	京都市左京区吉田二本松町			五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』1984年３月
				梵鐘鋳型・鏡鋳型・溶解炉	梵鐘鋳造土坑	五十川伸矢「鴨東白河の鋳造工房―京都大学構内の鋳造に関する遺跡―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』1988年３月
5	京都大学医学部構内ＡＮ18区	13世紀前葉	京都市左京区吉田近衛町	梵鐘鋳型	溶解炉	五十川伸矢・宮本一夫「京都大学医学部構内ＡＮ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』1988年３月
6	広隆寺	９世紀後半～10世紀初	京都市右京区 太秦蜂岡町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	石尾政信「広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報』第５冊２　1972年７月
7	丹波国分寺跡	９世紀	亀岡市国分	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	亀岡市教育委員会調査
8	東大寺戒壇院東地区	８世紀中葉	奈良市雑司町		大型鋳造土坑	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る』（1990年発掘調査速報展11図録）1991年　ｐ.35
9	山田寺跡	鎌倉時代	奈良県桜井市山田	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	奈良文化財研究所『大和山田寺跡』（『奈良文化財研究所学報』63）2002年
10	田中廃寺跡	７世紀後半	奈良県橿原市田中町	梵鐘龍頭鋳型		奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る』（1990年発掘調査速報展11図録）1991年　ｐ.27
11	巨勢寺跡	９～10世紀	奈良県御所市 大字古瀬		鋳造土坑	奈良県教育委員会『巨勢寺』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』87）2004年２月　ｐｐ.35－36
12	飛鳥池遺跡	江戸時代	奈良県高市郡明日香村大字飛鳥池	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	奈良国立文化財研究所調査
13	川原寺寺城北限	７世紀末	奈良県高市郡 明日香村	鉄羽釜鋳型	鋳造土坑	奈良文化財研究所『川原寺寺城北限の調査』2004年３月

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
14	天満１号墳	中世	和歌山県有田郡 吉備町藤並	梵鐘鋳造遺構		吉備町教育委員会調査
15	長尾遺跡	９世紀	滋賀県大津市 滋賀里町長尾	梵鐘鋳型・溶解炉	梵鐘鋳造土坑	林博道「梵鐘を鋳造した遺跡の調査」 『月刊文化財』176号　1978年
						林博道「長尾遺跡の梵鐘鋳造跡」『古代研究』27　1982
16	坂本八条遺跡	平安後期	滋賀県大津市 坂本本町		梵鐘鋳造遺跡	大津市教育委員会「滋賀里穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅲ」 1985年３月
17	木瓜原遺跡	７世紀末～８世紀	滋賀県草津市 野路町		梵鐘鋳造土坑	滋賀県教育委員会「木瓜原遺跡」1996年３月
19	辻遺跡	18～19世紀	滋賀県栗東市辻	梵鐘鋳型	溶解炉	栗東町出土文化財センター調査
20	多可寺跡	８世紀末	兵庫県多可郡 中町鍛冶屋	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	神崎勝「多可寺跡出土の梵鐘鋳造遺構」『古代研究』27　1982年
						妙見山麓遺跡調査会『播磨産銅史の研究』1986年３月
21	白水遺跡	11世紀前半	兵庫県神戸市西区 伊川谷町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	神戸市教育委員会「白水遺跡第４次」1999年
22	西安田・長野遺跡Ａ地点	中世後期	兵庫県多可郡中町西 安田・長野		梵鐘鋳造遺構	山仲進他「西安田遺跡」『兵庫県多可郡中町　西安田長野遺跡群 調査報告（Ⅱ）』妙見山麓遺跡調査会調査会　2000年10月
23	清水・タカアゼ遺跡	13～14世紀	兵庫県多可那 加美町清水		梵鐘鋳造遺構	加美町教育委員会「清水・タカアゼ遺跡　実績報告書」1987年
24	鹿野宮ノ前遺跡	15世紀または 17世紀前半	兵庫県西脇市 鹿野町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	西脇市教育委員会「鹿野宮ノ前遺跡・比延前田遺跡Ⅱ」『西脇市文化財調査報告書』14　2004年
25	牧野・町西遺跡	13世紀	兵庫県多可郡中町		鋳造土坑	多可郡中町教育委員会「牧野・町西遺跡Ⅲ」　2005年
26	政所遺跡	平安後期	岡山市加茂	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	岡山県古代吉備文化財センター「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138　1999年３月
27	田村廃寺跡	奈良時代	香川県丸亀市 田村町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	宮崎哲治「Ⅷ．田村遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報平成11年度』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　2000年
28	大浦遺跡	平安時代	徳島市名東町	梵鐘鋳型	密教法具鋳型	一山典・滝山雄一「大浦遺跡（徳島県）」『佛教藝術』174　1987年
29	上喜来蛭子～中佐古遺跡	16世紀前半	徳島県阿波郡 市場町上喜来	鰐口鋳型		藤川智之「上喜来蛭子～中佐古遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』vol・２　1990年度　1991年３月　ｐｐ.31－34
30	前田遺跡	江戸時代	徳島県板野郡 土成町土成字前田	梵鐘鋳型		徳島県埋蔵文化財センター『徳島県埋蔵文化財センター年報』vol．４　1992年度　1993年７月
						山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27　1984年
31	鉾ノ浦遺跡	13世紀後半～ 14世紀前半	福岡県太宰府市 鉾ノ浦	各種鋳型		山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡一筑前大大宰府鋳物師の解明－」『仏教芸術』174号　1987年
						太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡』xvⅡ（『太宰府市の文化財』53）2001年３月
32	鴻臚館跡	室町時代 ・11世紀	福岡市中央区城内	梵鐘鋳造土坑		福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅰ」第270集　1991年
33	小路遺跡	13世紀後半～ 14世紀前半	福岡県浮羽郡 浮羽町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	福岡県教育委員会「流川地区遺跡群」『福岡県文化財調査報告書』171　2002年
34	智恩寺跡	鎌倉時代	大分県豊後高田市 大字鼎		梵鐘鋳造遺構	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『国東六郷山本山本寺智恩寺』1992年３月
35	豊後国分寺跡	奈良時代			梵鐘鋳造土坑	大分市教育委員会「豊後国分寺跡」『平成10年確認調査概要報告書』1999年３月
36	大山廃寺跡	11世紀末	愛知県小牧市大山		梵鐘鋳造遺構	小牧市教育委員会「大山廃寺発掘調査概報」1979年
37	金屋遺跡	室町時代末	岐阜県恵那郡 坂下町本郷	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	坂下町教育委員会「金屋・星の宮遺跡」1975年
38	野口廃寺	古代	岐阜県各務原市		鋳造土坑	各務原市埋蔵文化財調査センター「野口廃寺Ａ地区の発掘調査報告書」『各務原市文化財調査報告書』13　1993年３月
39	寺平遺跡	南北朝～ 室町時代	長野県上伊那郡 飯島町本郷	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	友野良一「寺平遺跡の梵鐘鋳造跡」『月刊文化財』194　1979年
						飯島町教育委員会「寺平遺跡」1980年
40	篠尾廃寺跡	平安時代初頭	福井市篠尾町	龍頭鋳型		福井県教育委員会「篠尾廃寺調査概要」1972年
41	豊原寺跡	14世紀後葉～ 15世紀前葉	福井県坂井郡 丸岡町豊原		鋳造遺跡	丸岡町教育委員会「豊原寺跡Ⅱ」『華厳院跡第２次発掘調査概報』1981年３月
42	一乗谷朝倉氏遺跡第64・65次調査	16世紀	福井市城戸ノ内町	梵鐘鋳型		福井県立朝倉氏遺跡資料館「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」1989年３月　ｐ．24
43	原山遺跡	江戸時代	新潟県糸魚川市 大野	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	新潟県教育委員会『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第50集　1988年３月
44	宮ケ瀬遺跡群北原（No.９）遺跡	18世紀前半	神奈川県愛甲郡清川村大字宮ケ瀬	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	市川正史　長谷川正「宮ケ瀬遺跡群Ⅲ北原（Ｎｏ・９）遺跡（１）内長福寺址」『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告』21　1993年２月
						神奈川県考古学会・神奈川教育委員会『第15回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』1991年
45	関鋳物跡遺跡	江戸時代	東京都国立市	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	国立市教育委員会「東京都国立市関鋳物跡遺跡」『国立市文化財調査報告』43　2000年

No.	遺跡名	年代	所在地	出土遺物	検出遺構	参考文献
46	下総国分寺跡	奈良時代	千葉県市川市	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	千葉県埋蔵文化財センター2004年度調査
47	金井遺跡Ｂ区	13世紀	埼玉県坂戸市大字新堀字金井	鍋鋳型・梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	赤熊浩一「金井遺跡Ｂ区」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集　1994年10月
48	金平遺跡	13世紀	埼玉県比企郡嵐山町金平	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	嵐山町遺跡調査会「金平遺跡Ⅱ」　2000年
49	金谷遺跡	中世	茨城県桜川市金谷	鍋鋳型・磬鋳型	鋳造関連土坑	茨城県教育財団「金谷遺跡Ⅰ」225集　2004年３月
50	島名熊の山遺跡	中世	茨城県つくば市島名	梵鐘鋳型・鰐口・燈籠蓮華座	梵鐘鋳造土坑	茨城県教育財団「島名熊の山遺跡ⅩⅢ」280集　2007年３月
51	川俣城跡	19世紀	福島県伊達郡川俣町	鍋鋳型・梵鐘鋳型	溶解炉	川俣町教育委員会「川俣城跡の概要」1995年
52	白山社遺跡	12世紀	岩手県平泉町	梵鐘鋳型	梵鐘鋳造土坑	八重樫忠郎「岩手県平泉町白山社遺跡検出梵鐘鋳造遺構について」『鋳造遺跡研究会資料』６　1996年９月
						八重樫忠郎「平泉・白山社遺跡の梵鐘鋳造遺構」　『季刊考古学』62　1998年
53	堤沢山遺跡	12世紀	秋田県本荘市境沢山	梵鐘鋳型・磬鋳型	鋳造土坑	秋田県埋蔵文化財センター2004年度年報22　2005年３月

（五十川伸矢「日本古代・中世の鋳造技術」『銅鉄の金属生産とその流通に関する研究』より引用　一部加筆）

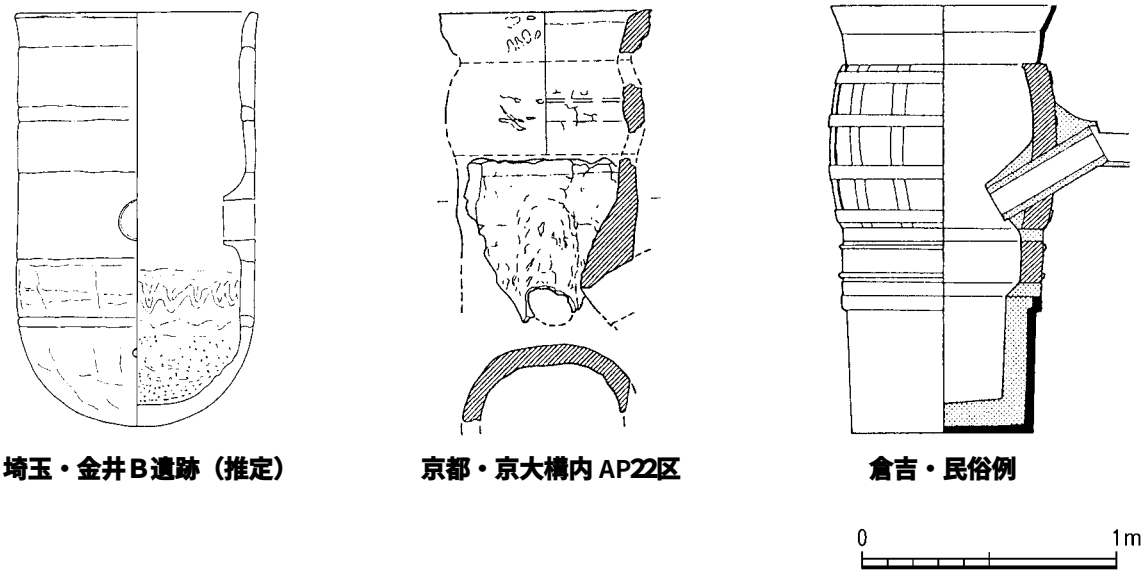
エ　溶解炉（第803図）

一般的に，鋳造遺構の脇に溶解炉を設置して銅を溶かし，その湯を樋を通して鋳型の頂部（湯口）から注ぎ込んで鋳込みすることは知られている。

当遺跡では溶解炉を据えたと思われる遺構は確認されなかったが，溶解炉の炉壁片や溶解炉羽口と思われる炉壁片が出土していることから，溶解炉の存在が考えられる。当遺構出土の溶解炉羽口の外側には，赤紫色でアメ状の溶解物が付着しており，溶解炉の外側と内側の境目部分の炉壁と考えられる。溶解炉羽口の残存部から羽口部の直径を推定すると，内径で約16cmを測ることができる。

これまでの全国における溶解炉の検出例は少なく，古代のものでは岡山県政所遺跡，中世では金井Ｂ遺跡，京都大学構内遺跡，大宰府の鉾の裏遺跡が知られ，中世末では福岡県室町遺跡，江戸時代では宮ヶ瀬遺跡等がある。金井Ｂ遺跡の溶解炉は，粘土を素材とし円筒状に形造られ「ル」・「こしき」・「上こしき」に分割され，防湿用の粘土を貼りこんだ上に炉を自立させて設置していたと考えられている。

第803図は，金井Ｂ遺跡・京大構内遺跡 AP22区出土の溶解炉の残片から復元したものである。この復元された溶解炉を鳥取県倉吉市の民俗例と比較しても形態的に酷似しており，本遺跡の溶解炉壁片は，中世における溶解炉の形態を示すものとして貴重な資料になるものと考えられる。

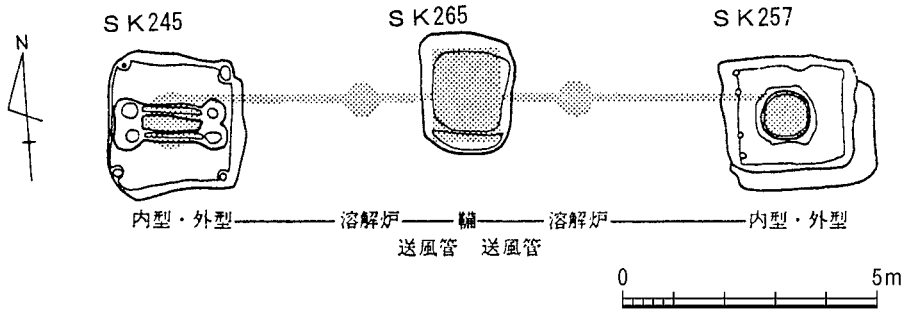


第803図　溶解炉集成図

オ　送風装置（第804図）

鞴（送風装置）は，古代から踏鞴があったと想定されている。京都大学構内遺跡のAP22区では，鋳造土坑SK257・SK245の中間にSK265があり，その内部には，溶解炉の残片が廃棄され，底部には遺跡地には見られない良質の白色粘土が貼られていた[27]。このことから，この粘土は踏鞴の底部の構築材と想定されている。また，金井Ｂ遺跡からは長方形に浅く掘られた部分に白色粘土を貼り込んだ整地作業面に粘土と礫で構築された鞴座が検出されている。

当遺跡では，踏鞴と見られる遺構は確認できないものの，長径10～20cmほどの白色粘土ブロックが第681号土坑の覆土中から確認されており，京都大学構内遺跡や金井Ｂ遺跡の白色粘土の出土状況などから考えると，本遺構の近くに白色粘土と礫などで構築された鞴座の存在を想定することができる。



第804図　梵鐘鋳造工房の復元図（「日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究」より）

カ　鋳造遺物について

第681号鋳造土坑から出土した鋳型及び溶解炉壁片は約67.5kgである。明確に分類できる部位は，梵鐘の竜頭１点（196.1ｇ）・撞座２点（24.6ｇ）・乳16点（約11ｇ）鰐口14点（2.2kg），燈籠蓮華座10点（4.4kg）であり，この他溶解炉羽口と思われる破片が確認できる。次に鋳型片及び溶解炉について述べる（表68）。

表68　鋳造遺物一覧表

鋳型片	梵鐘	竜頭	196.1ｇ
		撞座	24.6ｇ
		乳	11ｇ
	鰐　口		2.2kg
	蓮華座		約　4.4kg
	その他		約　31kg
溶解炉壁片			約　23.3kg
やかもと			約　4kg
その他			約　2.2kg
合　計			約　67.5kg

ａ　梵鐘（竜頭・撞座・乳・紐帯）（第805図）[28]

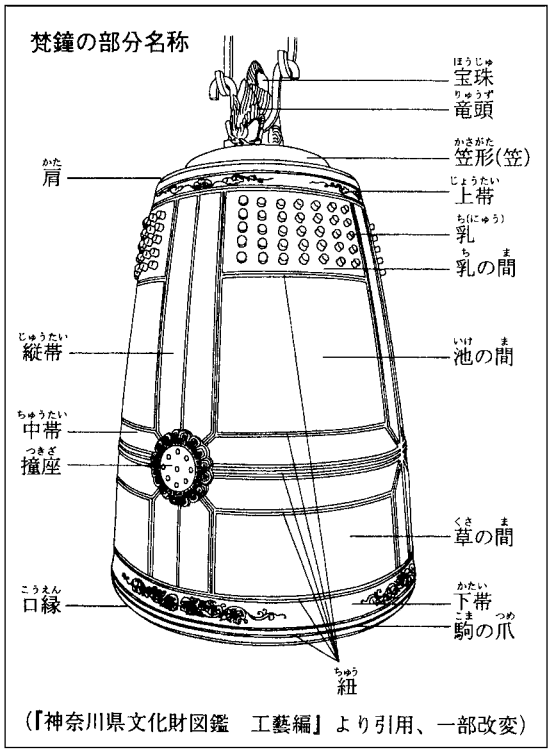
竜頭の鋳型片は，『第166集』で報告された第681号土坑出土のＰ６（第197図）で，縦髪の部分がある。長さ5.7cmほどで５本の溝を確認することができる。撞座の鋳型は，『第166集』で報告された第681号土坑出土のＰ７（第197図）であり，竜頭として報告されているが円形の窪みや楕円形の掘り込みなどから撞座の一部と考えられる。

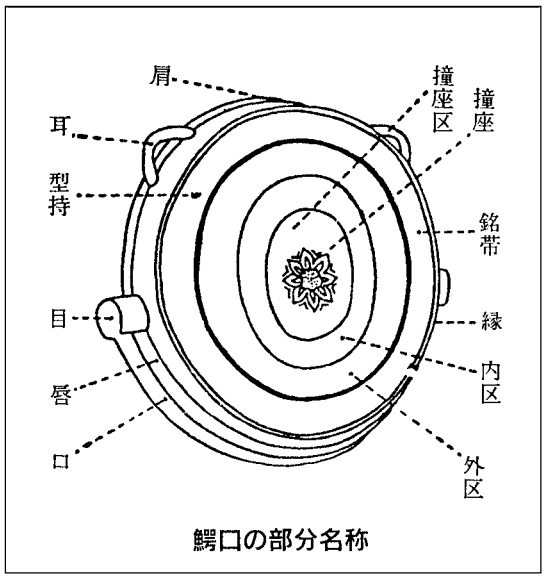
乳の鋳型片は大小合わせて16点（11ｇ）が出土している。型の大きさは１cmほどの６角形状で，残存する部分での乳径は約２cm，最大で３cm近くになるものと推測され，一段の円丘状を呈していると考えられる。鋳型の表面は被熱で還元され，濃い灰色に変色して，硬くしまっている。

この他，紐帯の突帯と思われる溝を有した鋳型片２点（257ｇ）が出土しており，その形状から縦位のもので，溝の間隔は約1.5cmである。

b　鰐口（第805図）[29]

鰐口と思われる鋳型片は，既報告分も含めて９点が出土しており，推定直径は16cm前後と考えられる。鋳型片は色調等の違いから，２個体以上の鰐口を鋳造したものと考えられる。鋳型からは銘文などは確認されず，型持の幅は1.5cmで外区とは３本の突線で区画されている。鋳型の表面は全体的に灰白色に変色し，硬くしまっている。





第805図　梵鐘・鰐口の部分名称図（「祈りの造形－中世霞ヶ浦の金工品－」霞ヶ浦郷土資料館より）

c　燈籠の蓮華座

蓮弁文が施されている鋳型片は既報告分も含めて10点が出土しており，８～９条からなる線状の浮き彫りで蓮弁を表現している。蓮華座の直径は33～36cmと推定され，鋳型片の中には平面をもつものが６点確認できることから，鋳型はレンガ状に積み上げて据え置かれたものと考えられる。前述したように一部にほぞ孔を有する鋳型片も確認されており，レンガ状に積み上げた鋳型を固定するためのものと考えられる。鋳型片の表面は，下位が濃い灰色，上位にかけては灰白色に変色して硬くしまっている。また鋳型片の表面には型離れをよくするための「くろみ」といわれる炭の粉が確認できる。

銅製の燈籠は，栃木県二荒山神社のものが有名であるが，今回の鋳型片と比較すると二荒山神社のものは蓮弁の外側の線が強く表現されているのに対して，当遺跡出土の鋳型はどれも同じ線の強さで表現されており，違いが認められる。この違いからこれらの新旧関係を明らかにすることはできないが，二荒山神社のものは1292年に三村六郎守季によって造られたことが銘文から分かる。この三村六郎守季は茨城県つくば市で活躍した鋳物師と推定されており，詳細は次項で記述する。

d　やかもと

「やかもと」と呼ばれる赤褐色を呈する鋳型を焼くときに使用するレンガ６点（約４kg）が確認されている。

e　溶解炉壁片

炉壁片は約23kg出土しており，その胎土や形状から４つのグループに分類することができる。

①　内面に赤紫及び黒色でガラス状の溶解物と緑青が付着し，胎土に小礫を含み火熱で還元して暗灰色を呈するもの。

②　内面の溶解物が赤紫から白色化して細かな気泡が現れ，緑青が付着している炉壁片で，胎土にすさや小礫を含み，火熱で還元して暗灰色を呈するもの。

③　外側の酸化粘土層が剥離した状態の破片であり，胎土は細かな砂粒を含み，火熱で還元して灰色を呈するもの。

④　表面が酸化により灰色に変色し，表面にひび割れが認められ，胎土はすさや小礫混じりの灰色粘土を含むもの。

溶解炉の部位については，京都大学構内遺跡では「最上部は黄褐色を呈し，端部は外側に開いている。胴部は灰褐色を呈し，表面がひび割れしているもの。その下部は，表面がガラス状に溶解し羽口が取り付く。湯だまりは検出されなかった。」と報告され，宮瀬遺跡群では，「炉壁の胎土は各部位ともほぼ同じで，径３～10㎜の小礫を混じえて粗く，色調は橙茶褐色を呈する。」と報告されている。また，五十川伸矢氏[30]からは，「下位はぐつぐつしたもの。中位は表面がざらざらしていて，ひび割れしているもの。上位は赤く焼けただれているもの。」との概略的なご教示を受けている。

これらに準じて，①～④のグループを溶解炉の部位に当てはめてみると，最上部に該当する溶解炉壁片は確認できなかった。胴部は，④が該当し，12.5kgが出土している。胴部下部は，①・②・③が該当し①の下に②が，②の下に③が位置するものと考えられ，①は約500ｇ，②は3.5kg，③は約７kgが出土している。しかし，湯だまりに該当する溶解炉壁片は確認できなかった。

キ　鋳造遺構をもつ遺跡の形態

ここで，他の遺跡の鋳造遺構と比較し，当遺跡の性格について考えてみたい。村上伸二氏[31]は，中世前半の東国における鋳造工房の形態を４つに分類している。

①　河内系鋳物師主導の継続して営まれた拠点的工房

金井遺跡Ｂ区（埼玉県坂戸市），二反田遺跡（埼玉県日高市），金谷遺跡（茨城県岩瀬町）

②　河内系鋳物師による短期間操業の出吹き工房

金平遺跡（埼玉県嵐山町），宿ヶ谷戸遺跡（埼玉県東松山市）

③　在地鋳物師による鉄製錬・鋳造・鍛冶と総合的継続操業された小規模工房

深沢遺跡（埼玉県嵐山町）

④　都市・鎌倉における工房の実態が不明な小規模工房

島名熊の山遺跡から検出された遺構は，梵鐘鋳造土坑１基のみであるが，梵鐘・鰐口・燈籠などの仏具製作を目的とした鋳造施設である。またその規模や遺構数から，計画的・短期間のうちに操業した出吹き工房であることが想像できる。前述した分類の中では，②のグループに近いと考えられ，大型鋳物を鋳造できる技術をもった鋳物師と在地物師との協働も想定しておく必要がある。

鎌倉時代の関東地方においては,鎌倉の大仏鋳造に見られるように河内系鋳物師による幕府や北条氏,そして有力御家人等による権力を背景にした操業の可能性が考えられる。しかし，本跡では，河内系と特定できる鋳型が確認できなかったため,「短期間操業の出吹き工房」の可能性が高いと推測される。

ク　茨城県内の鋳物師

茨城県内の鋳物師[32]について古記録や現存する鰐口[33]，梵鐘[34]を集成し，さらに当遺跡の鋳物師についても考えてみたい（表69～71）。

県内で現存する最古の梵鐘は，鎌倉時代前期に鋳造された極楽寺（現土浦市等覚寺蔵）の梵鐘で，建永元年（1206），小田城主筑後入道尊念（八田知家）が寄進したものである。13世紀後半を代表する梵鐘には土浦市般若寺のものがあげられ，銘文には「大日本常州信太庄般若時建冶元年（1275）乙亥八月廿七日己丑時正第二　大勸進源海　願以此功徳　普及於一切　我等與衆生　皆共成仏道　大工丹治久友　大工千門重延」と記されている。この梵鐘は，建冶元年（1275）８月の製作で，大工は鎌倉大仏の鋳造に参加した丹治久友であり，丹治久友と併記される千門重延は地方鋳物師と考えられている。五十川伸矢氏によると，「有力鋳物師といえども鋳物生産が定着していない所で，梵鐘のような大型鋳物の「出吹き」を行なうには，要因や材料の手配などが非常に困難なため，地方の鋳物師とその配下の作業集団の協力を得たと見るべきで，それ以外の場合は製品を搬送した。」[35]と推定している。

13世紀末では，二荒山神社の大燈籠（1292）製作の三村六郎守季があげらる。守季の本貫地三村（現つくば市）は，常陸守護小田氏の本拠地小田一帯に隣接した郷名であり，彼らは常陸守護所近傍に住む鋳物師であったと推測されている。

鎌倉末期を代表する梵鐘には，常陸国久慈西郡戸崎村蓮光寺（現常陸大宮市）の梵鐘があり，延慶二年（1309）製作で，大工は沙弥善性である。その銘は鋳物師大工と見えるので，在地鋳物師集団の長と考えられる。この沙弥善性の作例は，他に２例が知られており，一つは正和丙辰（1316）常州鹿島郡宝雲山安福禅寺の梵鐘である。二つ目の例は，応長元年（1311）下州印東庄八代郷船方薬師寺の梵鐘であり，「応長元年太歳辛亥十一月日」の銘文が残っている。現在この梵鐘は千葉県成田市の東勝寺に保管されている。沙弥善性は，常陸国から下総国にかけて活動した大工で，本拠地は宍戸荘鳴井であり，現在の八郷町東成井と考えられている。この鳴井は宍戸荘のはずれであり，当地を本拠地としていた宍戸氏との関係が推定される。

また，奥州岩城郡石森忠教寺（現福島県いわき市）の梵鐘は，応安元年（1368）の製作であり，常州久慈西郡横瀬（現常陸大宮市）大工円照の銘が記されている。

南北朝以降を代表する梵鐘には，常州路信太庄大和村県端龍山崇源禅寺（現つくば市）の梵鐘があり，応安五年（1372）の製作である。銘文には，大神兼弘・守重の名が見え，常陸中郡荘の岩瀬町大神（現桜川市）を本拠地とする鋳物師と見られている。戦国期では，永正十三年（1516）に鋳造された下総香取郡勝福寺の鰐口があげられる。また，鋳物師である広沢定吉は，戦国末期に至るまで真壁氏の保護を受け，真壁領内を中心に営業を展開していたといわれている。

その後近世に入ると，真壁には，常陸を代表する小田部氏［創業正保期（1644～1648）頃］が鋳物師として創業していたことが知られている。

表69　茨城県の鋳物師

	鋳物師	本拠地	現在地	寺院名	鋳造物	時　期
13世紀末	三村六郎守季	南野荘三村	つくば市三村	日光二荒山神社	銅製燈籠	1292
14世紀初頭	沙弥善性	穴戸荘成井	八郷町東成井	蓮光寺	梵　鐘	1309
14世紀中葉	円　照	久慈西郡横瀬	常陸大宮市	忠教寺	梵　鐘	1368
14世紀後半	大神兼弘	常陸・中郡荘	岩瀬町　大神	崇源寺	梵　鐘	1372
16世紀初頭	広沢定吉	真　壁	桜川市（元　真壁町）	勝福寺	鰐　口	1516
近　世	小田部氏	真　壁	桜川市（元　真壁町）	－	－	－

表70　茨城県の梵鐘一覧表

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
1	等覚寺 （旧　極楽寺）	建永年間 （1206～ 1207）	河内鋳物師系	総高：135.0㎝ 身高：100.0㎝ 撞座中心高： 25.7㎝ 口径：73.5㎝	不明	土浦市	陽鋳　「鋳顯極楽寺鐘　奉 大将軍・・・　建永□□　筑 後入道尊念」	筑後入道尊念 （八田知家）
2	神竜寺	宝治元年	－	－	不明	亡失	宝治元年丁丑十月十五日	土浦市神竜寺の古鐘『古今鐘銘集』
3	（常陸国多珂郡） 荒川八幡宮	康元二年	大工丹治国光	－	不明	亡失		『新編常陸国誌』
4	般若寺	建治元年 （1275）	丹治久友 千門重延	総高：100.0㎝ 身高：　－ 撞座中心高：－ 口径：約60㎝	不明	土浦市	「大日本常州信太庄般若時 建治元年（1275）乙亥八月廿 七日己丑時正第二　大勸進源 海　願以此功徳　普及於一切 　我等與衆生　皆共成仏道 大工　丹治久友　大工　千門 重延」	
5	常陸州中郡庄 長福禅寺	正応二年	梵鐘大工行正	－	不明	亡失	正応二年	『集古十集』
6	常陸国久慈西郡 戸崎村　蓮光寺	延慶二年	大工 沙弥善性	－	不明	亡失	延慶二年大歳己酉二月二十一 日	
7	下州印東庄八代 郷船方　薬師寺	応長元年	大工 沙弥善性	－	不明	成田市 東勝寺	応長元年太歳辛亥十一月日	
8	常州鹿島郡宝雲 山安福禅寺	正和丙辰 （五年）	大工 宍戸鳴井善性	－	不明	亡失	正和丙辰（五年）三月十四日	大檀那菩薩戒尼観 心　『集古十集』
9	下総国下幸島郡 辺田村聖徳寺	元応三年	－	－	不明	亡失	元応三年辛酉二月廿三日	『随意集』
10	海雲山長勝寺	文治元年 （1185）	甲斐権守 卜部助光	総高：115.0㎝ 身高：84.8㎝ 竜頭高：24.5㎝ 口径：66.3㎝	不明	潮来市		大旦那北条高時 大施主下総国主 千葉五郎禅門道暁
11	－	（鎌倉末期）	－	－	不明	亡失		常陸国円融寺 旧鐘　『禅居集』
12	華蔵院	暦応二年	大工　　円阿 小工　橘則正	－	常陸州檜沢吉祥山 浄国禅寺	那珂湊市	暦応二年九月廿五日	大檀那式部丞源義 長
13	－	康永三年 （1344）	大工 神屋　行家	－	下総国相馬郡安楽 寺	千葉市立郷土 資料館	康永三年甲甲十一月一日	大檀那尼覚妙
14	－	貞和六年	－	－	（常陸国久慈東郡 西金砂山）	亡失	貞和六年庚寅正月十八日	大旦那源茂重 『古今鐘銘集』
15	－	延文六年	－	－	（常陸国 南野庄小田） 竜勝寺	亡失	延文六年丑歳	大檀那小田孝朝 『新編常陸国誌』
16	－	応安元年	常州久慈西横瀬 大工　円照	－	奥州岩城郡 石森忠教寺	亡失	応安元戊申小春日	『友山録』
17	－	（南北朝後期）	－	－	常陸国久慈東 三和河内田谷寺	亡失		市河寛斎旧蔵拓本
18	－	応安五年	大工　右兵衛尉 大神兼弘	－	常州路信太庄 大和村県端雄山 崇源禅寺	亡失	応安五年壬子四月五日	
19	－		当国中部住 左衛門尉守重	－	大蔵山福泉寺	亡失		『新編常陸国誌』
20	－	永徳三年	－	－	久慈郡利員村 鏡徳寺	亡失		『新編常陸国誌』
21	下妻市 大宝八幡宮	嘉慶元年	大工　沙弥道善	－	武蔵州騎西県 渋江郷金重村 金鳳山平林禅寺	亡失		
22	－	応永乙亥 （二年）	大工大和守 卜部家光	－	（下総国結城郡） 覚城山華蔵寺	亡失	応永乙亥（二年）七月日	大檀那結城中務大 輔藤原沙弥聖朝他 『新編武蔵風土記』
23	－	応永丁丑 （四年）	－	－	常州小鶴庄北□□ 堂天王寺	亡失	応永丁丑（四年）八月十二日	玉造村天王宮のも の『常陸国郡郷考』
24	玉里村・円妙寺	応永十年	－	－	常州南郡 田余青木山 王堂円妙寺	亡失	応永十年癸未　11月八日	檀那家長
25	－	宝徳二年	－	－	左都東郡 西岡田郷善養寺	亡失		『新編常陸国誌』
26	－	長禄二年	大工下野国宇都 宮 住人大和七郎	－	常陸国那珂 西太古山清音寺	亡失	長禄二年戊寅六月吉日	源駿河守義堅 （大檀那か） 『大日本地名辞書』
27	－	文明八年	－	－	下総州下川辺庄 桜井郷六国山 東昌禅寺	五霞村 東昌寺	文明八年六月廿四日	大檀那梁田河内守 持助 鐘は鎌倉期のも の，銘文は追刻

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
28	－	天文（七年）（1537）	大工　石井静阿弥	－	常州八溝山（下の坊）	亡失	天文（七年）竜集戊戌冬十月吉	大檀那源朝臣義篤『白河古事考』
29	－	永禄十季（1567）	古島隼人丞助信彫刻之	－	伊佐郡奥崎郷下館村王叟山定林禅寺	下館市足林寺	永禄十季丁卯三月八日	大檀那水谷兵部大輔藤原勝俊鐘は鎌倉期のもの，銘文は追刻
30	－	元亀四年	大工根本三郎左衛門	－	常州佐竹寄神保黒沢村下野宮近津山	亡失		大檀那佐竹次郎朝臣義重井南鶴寿丸『水府寺志料附録』
31	－	天正十九年	－	－	（鹿島郡）神宮寺	－		『新編常陸国誌』
32	加茂宝幢院	永享三年（1431）	－	総高：150㎝ 身高：　－ 撞座中心高：－ 口径：77㎝	不明	玉造町高須		玉造城主平憲幹が寄進
33	－	文禄二年	－	－	（常陸国）水戸城大手橋	－		
34	－	文禄四年	－	－	下総国古河隆岩寺	－		大檀那小笠原秀正『古河誌』
35	－	慶長元年	－	－	常州新治郡柿岡光明山常林寺	－		『新編常陸国誌』

（『中世常陸における「職人」の存在形態－鋳物師・鍛冶を中心として－』より引用，一部加筆）

表71　茨城県の鰐口一覧表

No.	名称	制作年代	作者	寸法	寄進先	所在地	銘文	備考
1	大宮神社	正嘉元年（1257）	－	直径：27.7㎝ 厚　：14.2㎝	不明	玉里村上玉里	陽鋳　正嘉元年　大丁才巳（1257）　十二月八日敬白	撞座素文
2	如意輪時	嘉暦三年（1328）	－	－	不明	友部町西方		同銘素文の鰐口が県立歴史館に保管
3	－	貞和五年（1349）	鳴井鋳物師（鳴井善性）	直径：16.6㎝	不明	瓜連町古徳	貞和五年（1349）	瓜連町常福寺南西1㎞　一括出土
4	獄南澤観音堂（獄南山慈眼院）	貞和五年（1349）	鳴井鋳物師（鳴井善性）	直径：29.0㎝ 厚　：10.8㎝	不明	岩間町	「常州完戸庄泉郷岳南澤観音堂之鰐口　（聖観音種子）貞和五年己丑（1349）別當僧祐尊」	
5	安楽寺	文和弐年（1352）	大工　神屋行家	直径：31.5㎝	不明	龍ヶ崎市川原代町	「総州相馬郡河原代安楽寺鰐口也，天台竪者賢海法印住之砌，文和弐年（1352）□巳六月十九日，大勧進沙門栄金」	
6	上戸観音院	観応三年（1352）	鳴井鋳物師（鳴井善性）	直径：29.0㎝ 厚　：9.0㎝	不明	牛堀町	「上福寺　願主内蔵国安　観応三年（1352）五月十八日」	
7	羽黒権現	応永廿四年（1397）	－	－	不明	北茨城市		羽黒権現跡出土
8	大宮神社	応永十年癸未（1403）	－	直径：33.0㎝ 厚　：7.3㎝	不明	霞ヶ浦安食	「常州國南野庄安餝郷大宮応永十年癸未（1403）三月廿八日浄超敬白」	
9	リュウガイ遺跡	應永廿年（1413）	－	直径：29.0㎝ 厚　：9.0㎝	不明	那珂町	陰刻　・「鹿島大明神常州久慈西門部郷　應永廿年（1413）九月廿七日施主敬白」　・「久慈西門辺　八万宮　應永十八年（1411）十二月旦那敬白」	
10	大宮神社	享禄四年（1531）	－	－	不明	玉造村加茂	「享禄四年（1531）辛卯夏吉日」「大旦那平時勝」	『水府志料』に見えるが現在亡失
11	天王宮	文明十三年（1481）	－	－	不明	亡失	宍戸庄住吉村文明十三年二月十五日	住吉住人太郎次郎（願主か）『新編常陸国誌』
12	那珂西郡粟宮原山	天文廿二年（1533）	－	－	那珂西郡粟宮原山	亡失	天文廿二年七月	大山村薬師堂鰐口『新編常陸国誌』
13	奉懸依神開田村金沢十二天	永禄六癸亥（1563）	－	－	奉懸依神開田村金沢十二天	亡失	永禄六癸亥九月吉日	『新編常陸国誌』
14	長林寺	永禄十一季（1568）	－	－	不明	栃木県足利市	「常荔河内庄小茎郷東林寺鎮守御宝前　奉寄進尾荔住僧干泛永禄十一季（1568）戊辰　二月吉日」	現在の牛久市新地町東林寺
15	（依上保）上沢村八龍神	元亀二年（1571）	－	－	（依上保）上沢村八龍神	亡失		『水府志料』
16	－	天正弐年（1574）	大工　烏山将監	－	不明	不詳	天正弐年甲戌霜月吉日常州信太庄□□船子	大檀那祐義法印烏山は信太庄内
17	－	天正七年（1579）	－	－	下総国相馬郡府河郷十一面観音	－	天正七年己卯今月吉日	大旦那平貞継・継信
18	常蓮寺	天正十二年（1584）	－	－	（那珂東郡戸村）常蓮寺	亡失	天正十二年甲六月十六日	寄進瀧田伊賀守道興『水府志料』

（『中世常陸における「職人」の存在形態－鋳物師・鍛冶を中心として－』より引用，一部加筆）

ケ　妙徳寺

鋳造遺構の検出された第９区は，小字名が前道場と呼ばれている地区で，鋳造遺構の第681号土坑から西へ100mの所には妙徳寺が位置している。『谷田部の歴史』[36]によると，妙徳寺（吉祥山文殊院）は，永仁五年（1297）に一遍上人の弟子・一阿了向が道場として開基したもので，時宗に属している。現在の本堂は文永二年（1862），庫裡（こうち）は文政十二年（1829）に建立されたもので，山門は鐘楼となっており，「寛延二年（1749）己巳秋九月吉日鋳造」の梵鐘があったことが伝えられている。

この梵鐘の鋳造年は江戸時代であり，この時期の梵鐘の特徴は，飾りが多くて銘文が長い点があげられる。しかし，出土した鋳型の特徴は，文様や銘文に当たる部位は確認されておらず，同じく出土している燈籠の蓮華座や鰐口の形状からも近世ではなく，中世に鋳造されたものと考えられる。したがって，当遺跡出土の鋳造関係遺物と妙徳寺の梵鐘などとの直接的な関連は認められない。

コ　妙徳寺建立期の田中荘（島名郷）

永仁五年（1297年）に妙徳寺が建立されているが，この当時の社会の情勢について考えてみたい[37･38]。

島名熊の山遺跡は，古代には河内郡島名郷の拠点集落であったが，中世に入って，当島名郷も田中荘に組み込まれる。『吾妻鏡』の文治四年（1188）三月には「常陸国村田・田中・下村等庄事」との記載が見られ，八条院領荘園として立荘された。田中荘はつくば市から旧谷和原村にかけた地域と比定されており，この地域は常陸平氏の大掾直幹を中心に開発が行なわれ，その子下妻広幹が荘園の下司職を掌握した地域である。

建久四年（1193）６月，大掾義幹は殺害され，12月には下妻広幹が殺害された。その後田中荘は，八田知家が知行し，13世紀はじめには嫡子知重が家督を譲り受け，その後九郎知氏が田中氏の祖となっている。弘安八年（1285）の霜月騒動では，御家人安達泰盛方についた田中筑後五郎左衛門尉，田中筑後四郎が自殺して，田中荘は没収され，地頭職は北条氏となり，後に北条得宗領となった。

ほぼ同じ頃，当遺跡から南に１㎞に位置する，島名前野東遺跡には１町四方の堀に囲まれた方形居館が出現する。この居館内に居住した在地有力者については不明であるが，13世紀末の当遺跡の所在する島名地区一帯を治めたものと考えられる。

建武の新政以降，田中荘は小田氏の支配下となり，室町時代になると，小田氏支配下の平井手氏が面野井城を構えて島名・面野井を治めたといわれている。

サ　島名熊の山遺跡の鋳物師

島名熊の山遺跡の鋳物師については，燈籠の鋳型片からはつくば市三村に本貫地を置いたとされる三村六郎守季の存在が浮かんでくる。出土鋳型片と，三村六郎守季製作の日光市二荒山神社の銅製燈籠を比較すると，二荒山神社のものは蓮弁の外側の線が強く表現されているのに対して，本跡出土の鋳型片はどれも同じ線の強さで表現されている。作風の違いがあり，三村六郎守季の関わりについては不明であり，またこの違いは製作時期と見ることができる。これらの鋳型片は，蓮弁を線状の浮き彫りで表現しているところに特徴がある。千葉隆司氏は，同様の特徴は，石岡市東成井（旧八郷町）の，広福院阿弥陀如来坐像（鉄仏）に見られると報告している[39]。石岡市東成井は穴戸荘鳴井にあたり，この地を本拠地にしていた沙弥善性の製作したものと想定されるが，特定するまでには至っていない。いずれにしても，本跡で鋳造した鋳物師集団は，県内に拠点を置く鋳物師の可能性が高いと考えることができる。

この他の，梵鐘の竜頭や撞座，鰐口の鋳型片からは，鋳物師を特定できるような特徴的な鋳型片は確認されていない。

次に，鋳造された梵鐘や鰐口，燈籠の納入先についてであるが，まず最も近い場所に位置する妙徳寺に納められたと想定できるが，前述したように時期差もありそれらを明確にすることはできなかった。納入先については，東を流れる東谷田川を利用して東谷田川流域の神社や寺に運ばれた可能性を考えておきたい。

最後に，当梵鐘鋳造遺構が機能した時期については，妙徳寺創建の時期と，鋳物師三村六郎守季や沙弥善性の活躍した13世紀末から14世紀初頭と一致する事や，島名前野東遺跡において北条得宗家の存在が想定できることなどから，13世紀末から14世紀初頭にかけて，当梵鐘鋳造遺構が機能したと推定できる。また，今回の調査報告では妙徳寺の南側第16区の様相も明らかとなっている。妙徳寺正面からは，直線的に延びる16世紀前半の参道が確認され，墓坑やその他の遺構がこの時期急増していることから，この時期に妙徳寺が最も繁栄した時期と考えられる。この当時島名は小田氏に支配されており，小田氏の権力を背景にした鋳物操業の可能性も考えられる。以上，梵鐘等が鋳造された時期については２期が想定されるがいずれにしても鋳造時期を特定するまでには至っていない。

今回，梵鐘鋳造遺構の検出に伴ない，鋳型片や鋳物師の集成からその時期や鋳物師の特定について，考察を試みたが，いずれも明確に特定することはできなかった。今後とも引き続いてこの梵鐘鋳造遺構の検討を重ねていきたいと考えている。今後，当遺跡周辺の発掘調査の進展によって，鋳物師の解明や地域社会における宗教の広がりが解明されることを期待したい。

⑵　第16区における中・近世出土遺物の様相（第806・807図）

当区では，古墳時代から平安時代までの集落跡のほか方形竪穴遺構，地下式壙，井戸跡，土坑など中・近世の遺構が多数確認されており，土師質土器や陶器が出土している。特にそれらは，堀跡や溝跡からまとまって出土しており，当区の中世後半から近世初頭にかけての出土遺物の様相を知り得る資料となっている。そこで，堀跡や溝跡，道路跡から出土した土師質土器や陶器の中の残存率の良いものを取り上げ，土師質土器の小皿（口径が10㎝以下のもの）を中心に，土師質土器の皿，内耳鍋，甕，擂鉢（以下小皿，皿，内耳鍋，甕，擂鉢とそれぞれ表記する。）の特徴について以下にまとめてみたい。時期については，出土遺物や遺構の重複から４時期の分類が可能である。

ちなみに小皿や皿は，いずれもロクロ成形で底部が回転糸切りのものであり，手づくね成形のものは確認されていない。なお，各時期の年代観は共伴する陶器を基準にしており，『瀬戸市史陶磁史篇四』で示された編年を参考に１世紀を２時期区分し，第Ａ期を15世紀後半，第Ｂ期を16世紀前半，第Ｃ期を16世紀後半，第Ｄ期を17世紀前半としている。

第Ａ期

第96号堀跡，第176号溝跡出土の小皿２点と皿１点，陶器１点が該当する。小皿は口径5.5㎝，器高1.6㎝のもの（１），口径7.9㎝，器高2.3㎝のもの（２），皿は口径12.0㎝，器高3.1㎝のもの（３）があり，いずれも口径に比して底径が大きく，２分の１以上である。２・３は底部がわずかに突出し，体部との境が認められる。体部は外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに内彎している。また口縁端部までナデが施され，薄くなる。体部外面にはロクロナデによる稜もわずかに認められる。寸法は異なるが，器形は類似

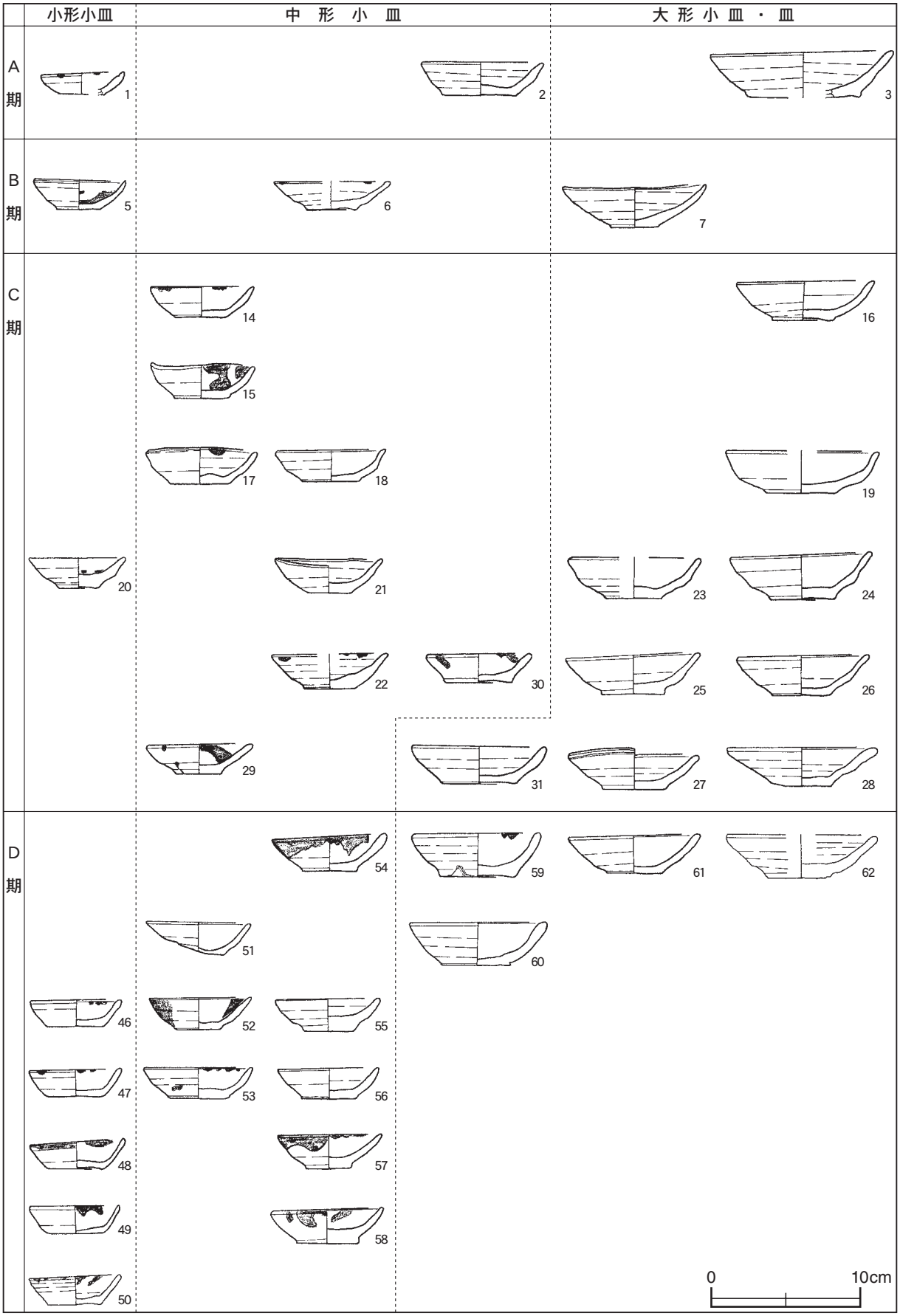
して扁平化している。内耳鍋については，いずれも細片のため器形など不明である。共伴する陶器は15世紀中葉から後葉に比定される古瀬戸産の直縁大皿（４）である。

第Ｂ期

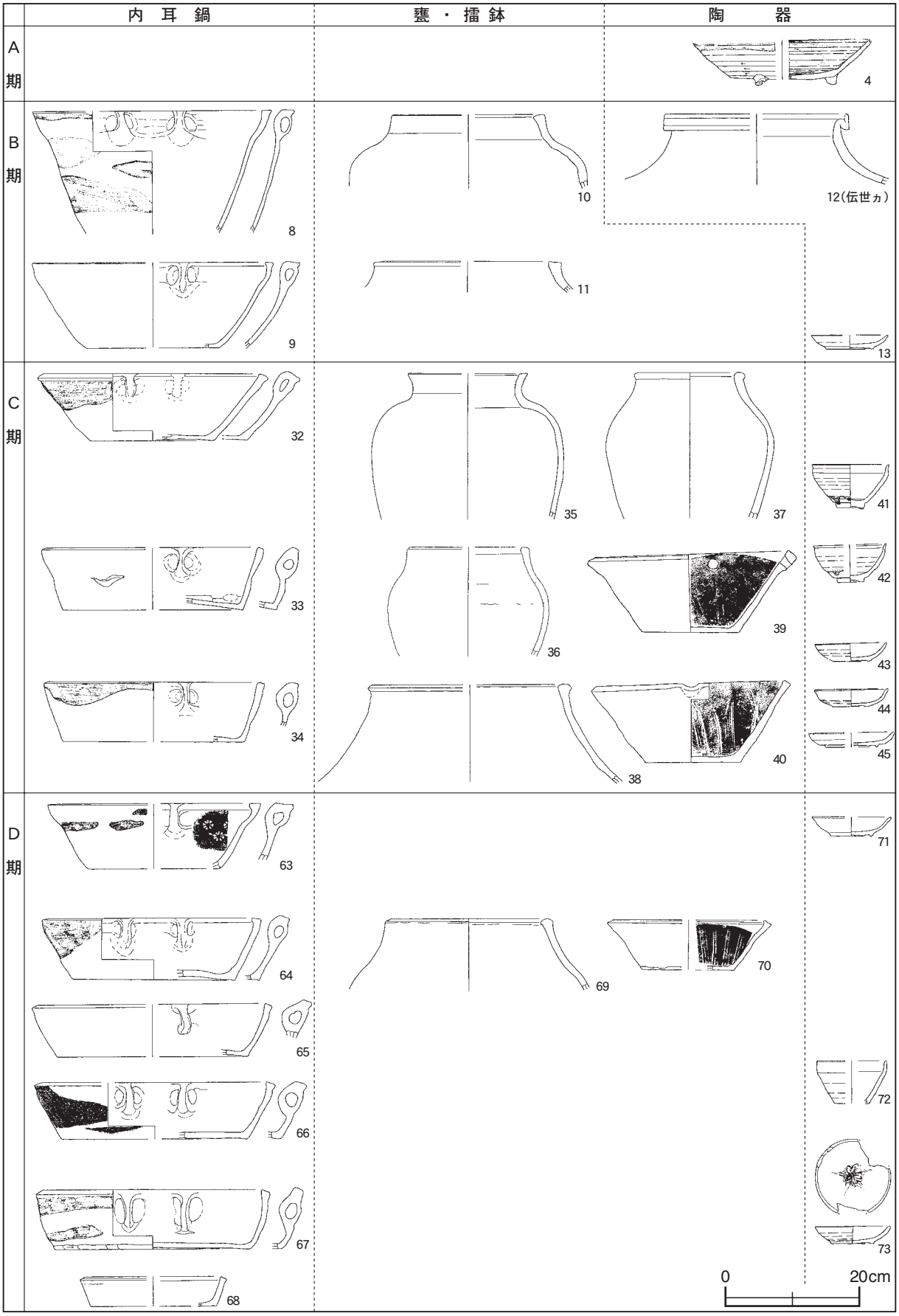
第95号堀跡，第155号溝跡，第16号道路跡出土の小皿３点，内耳鍋２点，甕２点，陶器２点が該当する。小皿は口径が６㎝前後のもの（５），７～８㎝のもの（６），９～10㎝のもの（７）と１点ずつではあるが大中小に分類できる。底径はいずれもＡ期より小さくなり，口径に比して底径は２分の１以下になる。また底部の突出が認められ，体部との境はＡ期よりも明瞭となる。体部は大きく外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに内彎し，口縁端部までロクロナデが施され薄くなる。５・７は丁寧なロクロ成形であり，体部外面はなめらかであるが，硬質である。６は強いロクロナデによって体部に稜ができ，わずかに凹凸が認められ，これらはＣ期に近い様相を示している。内耳鍋は口径35㎝，器高15㎝ほどの寸法であり，口径に比して器高は５分の２から２分の１と高く，土鍋形が主体である。いずれも体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部でほぼ直立している。また口縁端部が幅広のもの（８）と幅広で内側につまみ出されるもの（９）が見られる。耳は体部上位につき，体部内面はナデによって口縁部と体部の境に稜が認められる。甕は口径24㎝ほどで，口縁部から頸部，胴部へと弧状に径が大きくなり，常滑産の甕を意識した器形と想定され，胴部上位が最大径となる。口縁端部が内側につまみ出されるもの(10)と，外側につまみ出されるもの(11)も見られる。共伴する陶器は13世紀後半から14世紀に比定される常滑産の甕（12）や廃絶後に廃棄されたと考えられる16世紀後葉に比定される長石釉が施された瀬戸・美濃系丸皿（13）である。

第Ｃ期

第92～94・97～99・103号堀跡，第151号溝跡出土の小皿18点，内耳鍋３点，甕４点，擂鉢２点，陶器５点が該当する。小皿はＢ期に続いて，大中小に分類できる。中形の小皿は口径７㎝前後とＢ期よりも小さくなり，口径に比して底径はほぼ２分の１になる。大形の小皿は多く見られるようになり，口径に比して底径はほとんどが２分の１以下となる。また底部が突出し，体部との境がＢ期より明瞭になる。強いロクロナデにより体部と口縁部に稜ができ，凹凸はＢ期よりもはっきりとしてくるものが多く見られるようになる。また体部が外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに内彎しているもの（14～16）や直立気味に外反しているもの（17～19），口縁部で外反しているもの（20～27）や大きく外反しているもの（28），外傾して直線的に立ち上がっているもの（29～31）とに分けられ，口縁端部が肥厚するもの（28・30・31）も見られる。14～16はＢ期の様相に類似しており，当期の中でもＢ期に近い時期のものと考えられる。内耳鍋は口径32㎝，器高９㎝ほどの寸法で，Ｂ期よりも器高は低くなり，焙烙形になる傾向が認められる。32は口径に比して器高が３分の１と低く，体部は大きく外傾して直線的に立ち上がっている。口縁端部は幅広で内側と外側へつまみ出され，耳は体部上位についている。33・34は口径に比して器高が３分の１以下とさらに低くなっている。体部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁端部は平坦面をもちシャープである。耳は体部上位についている。体部中位で器壁が薄くなり口縁端部に向かって徐々に厚くなる。甕は口径が16～29㎝ほどで，口径より頸部の径が小さくなる器形で，口縁端部が外側にシャープにつまみ出されているもの（35）とＢ期とほぼ同じ器形であり，口縁端部が内側につまみ出されているもの（36），外側につまみ出されているもの（37・38）が見られる。擂鉢は口径29㎝，器高12㎝，底径14㎝ほどの寸法であり，体部が外傾して直線的に立ち上がって口縁部で肥厚するもの（39）と肥厚しないもの（40）が見られる。



第806図　土師質土器（小皿・皿）の変遷



第807図　土師質土器（内耳鍋・甕・擂鉢），陶器の変遷

いずれも内面に５条１単位の擂り目が認められる。共伴する陶器は16世紀後葉に比定される瀬戸・美濃系天目茶碗(41・42)，鉄釉が施された瀬戸・美濃系丸皿(43・44)，長石釉が施された瀬戸・美濃系丸皿(45)である。

第Ｄ期

第100・101号堀跡，第150・152・161・163・166号溝跡出土の小皿17点，内耳鍋６点，甕１点，擂鉢１点，陶器３点が該当する。小皿は前期と同様に大中小に分類できる。Ｃ期に比べると全体的に小形化する傾向にあり，口径が６㎝前後のもの（46～50）が多く見られるようになる。口径に比して底径が大きく２分の１以上で，底部の突出は認められず，体部は外傾して直線的に立ち上がっている。また器壁は薄く硬質である。中には口縁端部が肥厚するもの（46）も見られる。これらはＣ期までに見られなかった新しいタイプのものである。中・大形の小皿では強いロクロナデによって体部に稜が認められるもの（51～62）や口縁端部が肥厚するもの（54・59・60）が見られ，前期の様相を継承していることからＣ期に近い時期と考えられる。また中形小皿の中には，底部が厚手になるもの（55～58）も見られるようになる。内耳鍋は口径が20～35㎝，器高が4.5～10㎝と寸法に幅があるが，器高はＣ期よりも低くなる傾向にあり，焙烙形が主体になる。63・64は口径に比して器高が３分の１以上であり，器形や調整はＢ期の様相を示している。65・66の器形や調整はＣ期の様相を示しており，当期の中でもＣ期に近い時期のものと考えられる。67は直立気味に内彎して立ち上がり，口縁端部は幅広になる。耳は体部の上位からやや下につくようになり，当期の特徴となる。68は口径20㎝，器高４㎝ほどの規模で，かなり小形化している。甕（69）は口径が24㎝ほどで，器形はＢ期とほぼ同じである。また口縁端部が外側・内側につまみ出され，断面三角形を呈している。擂鉢（70）は口径が23㎝，器高８㎝，底径14㎝ほどの寸法で，Ｃ期より小形で扁平化している。体部は外傾して立ち上がり，口辺部でさらに外傾している。口縁端部は内側につまみ出され，内面には３条１単位の擂り目が認められる。共伴する陶器は16世紀中葉の瀬戸・美濃系の灰釉端反皿（71），17世紀前半の瀬戸・美濃系天目茶碗（72），志野系の鉄絵皿（73）である。

以上のことから小皿を大中小に分けて考えると，小形小皿は，器壁が厚く，体部が内彎して立ち上がるものから，器壁が薄く，体部が外傾して直線的に立ち上がり硬質なものへと変化し，中・大形の小皿は，底径比が大きく扁平形で，体部が外傾して立ち上がって口縁部で内彎するものから，底径比は小さく，体部が外傾して立ち上がって口縁部で直立気味に外反し，さらに大きく外反するものへと変化することが想定される。また，中・大形小皿の調整では，Ａ期からＣ期にかけて底部の突出が認められて体部との境が明瞭になり，Ｂ期からＣ期にかけて強いロクロナデによる体部の凹凸がはっきりし，Ｃ期からＤ期にかけて口縁端部が肥厚してくる傾向が認められる。内耳鍋は大形で器高の高い土鍋形から小形で器高の低い焙烙形へと変化し，耳の位置は体部上位からやや下がっていく傾向が認められたが，甕や擂鉢は出土数が少ないため明確な傾向はつかめなかった。今回は限られた遺物の中から変遷する様相を見たが，先述したことは当区における傾向把握であり，今後も調査成果をもとに比較検討を図っていく予定である。

⑶　第16区における中・近世遺構の様相

ア　遺構の分析

第16区の中・近世の遺構は，掘立柱建物跡，方形竪穴遺構，地下式壙，堀跡，溝跡，道路跡，井戸跡，土坑などが多数確認されている。当調査区は，永仁五年（1297年）の開山が伝えられる妙徳寺の南方70mに位置している。調査前の土地利用図によると，妙徳寺からの参道が台地の西側縁辺部に沿って延びており，調査区中央を南北に縦断している。検出された堀跡や溝跡の一部はこれと重複し，古い段階の参道に伴うものと考えられ，周辺に展開するその他の遺構群とともに，中世後半から近世初頭にかけての土地利用の状況を知り得る好資料となっている。ここでは，これらの遺構の様相を概観し，さらに，調査区域内における中・近世の景観復元を試みたい。以下，遺跡景観の基軸となる堀跡・溝跡・道路跡，それらに付随する掘立柱建物跡・方形竪穴遺構・地下式壙・井戸跡などの遺構，土坑群の順で述べる。

堀跡・溝跡・道路跡（第808図）

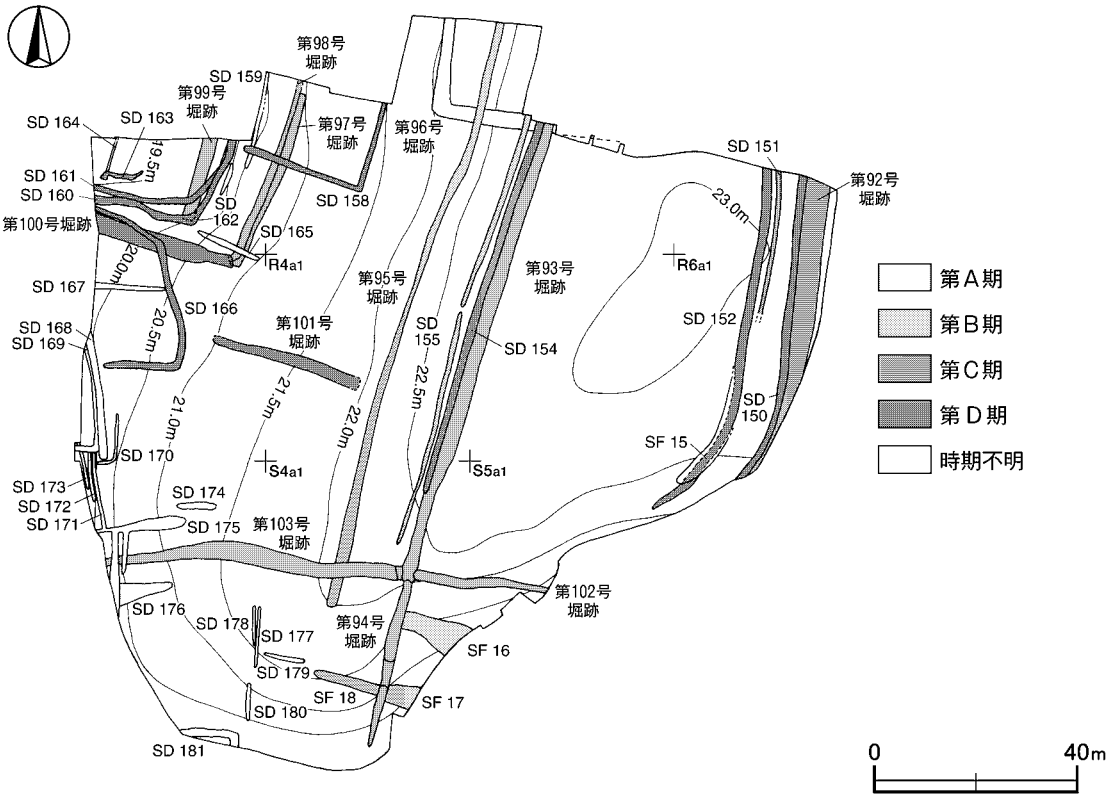
前項の出土遺物の検討から，以下のような変遷を追うことができる。

第Ａ期	第Ｂ期	第Ｃ期	第Ｄ期
（15世紀後半）	（16世紀前半）	（16世紀後半）	（17世紀前半）
第96号堀跡 →	第95号堀跡 →	第92～94・99・102・103号堀跡→	第101号堀跡
		第97号堀跡 → 第98号堀跡 →	第100号堀跡
第176号溝跡→	第155号溝跡→	第151号溝跡 →	第150・152・158・160
			161・163・164・166号溝跡
	第16～18号道路跡 →	→	第152号溝跡→第15号道路跡

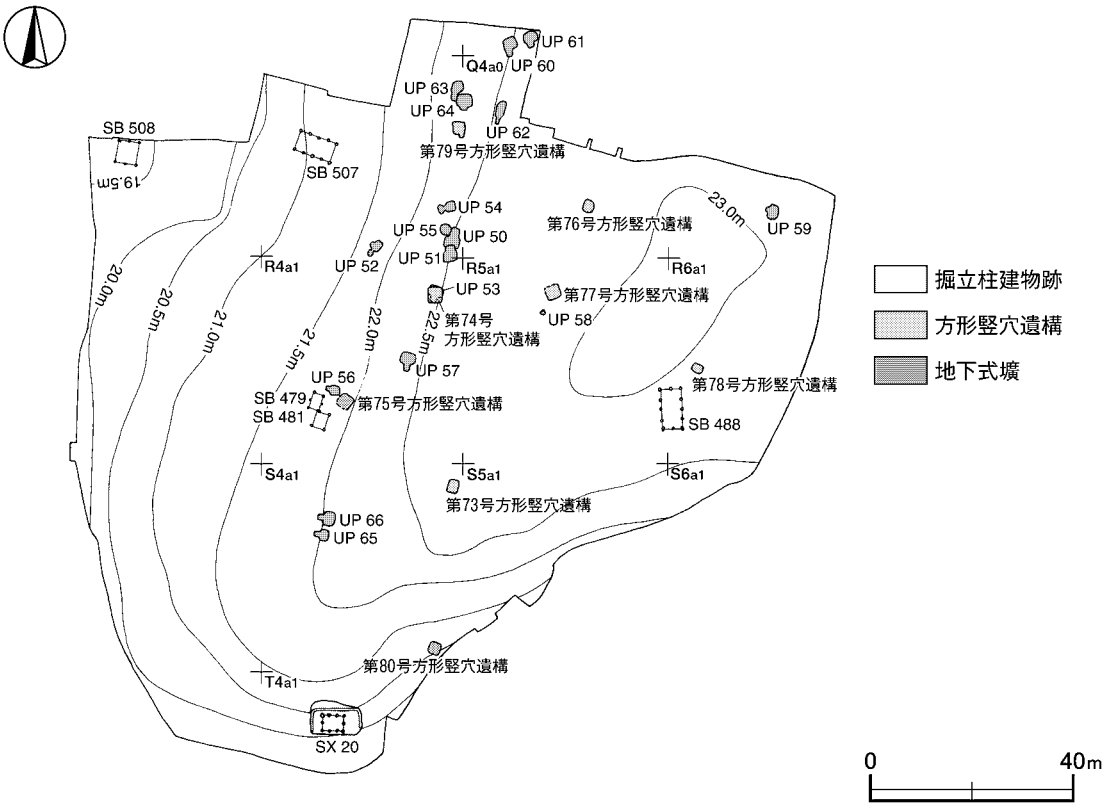
15世紀後半の第96号堀跡は，調査区北部に位置している。平面Ｌ字状で，断面薬研状を呈し，南北の主軸方向はＮ－６°－Ｅで，規模の最大値は上幅324㎝，下幅36㎝，深さ176㎝である。覆土上層にはローム層や常総粘土層の大粒のブロックが多量に含まれ，北・東側から人為的に埋め戻されている。こうした堆積状況から，掘削時の廃土で構築された土塁の存在が想定され，土塁は堀の内側肩部に設けられていたと考えられる。また，覆土の最下層にはグライ化した粘土層が堆積しており，機能時には常時滞水した状態であったことを示している。出土遺物は，土師質土器（小皿・内耳鍋・擂鉢）のほか，陶器（古瀬戸直縁大皿，常滑系甕），石器（砥石・石臼）などがある。その他，調査区南西端に第176号溝跡があり，覆土中層から坩堝に転用された土師質土器小皿や鞴羽口，多量の鉄滓（5.54㎏以上）が出土している。鉄滓は大形の椀形滓が大半を占め，至近に精錬鍛冶に関連する工房が存在した可能性がある。

16世紀前半は，調査区中央の台地縁辺部に第95号堀跡，第155号溝跡がＮ－18°－Ｅの方向で平行しており，ほぼ直線的に延びている。第95号堀跡は断面逆台形で，上幅254㎝，下幅60㎝，深さ86㎝，第155号溝跡は断面Ｕ字状で，上幅120㎝，下幅68㎝，深さ56㎝である。妙徳寺の参道と重複した位置にあることから，古い段階の参道の道路側溝に相当すると考えられ，復元される路面幅は９～12mである。両跡は調査区南部の斜面部上段で止まり，延長線上のやや標高が下がった位置から，第16～18号道路跡が東側へ延びている。出土遺物は，土師質土器（小皿，内耳鍋）が多く，陶器（瀬戸・美濃系碗・皿・大皿，志野系皿，常滑系甕）や石器（石臼，茶臼，砥石）なども少量見られる。

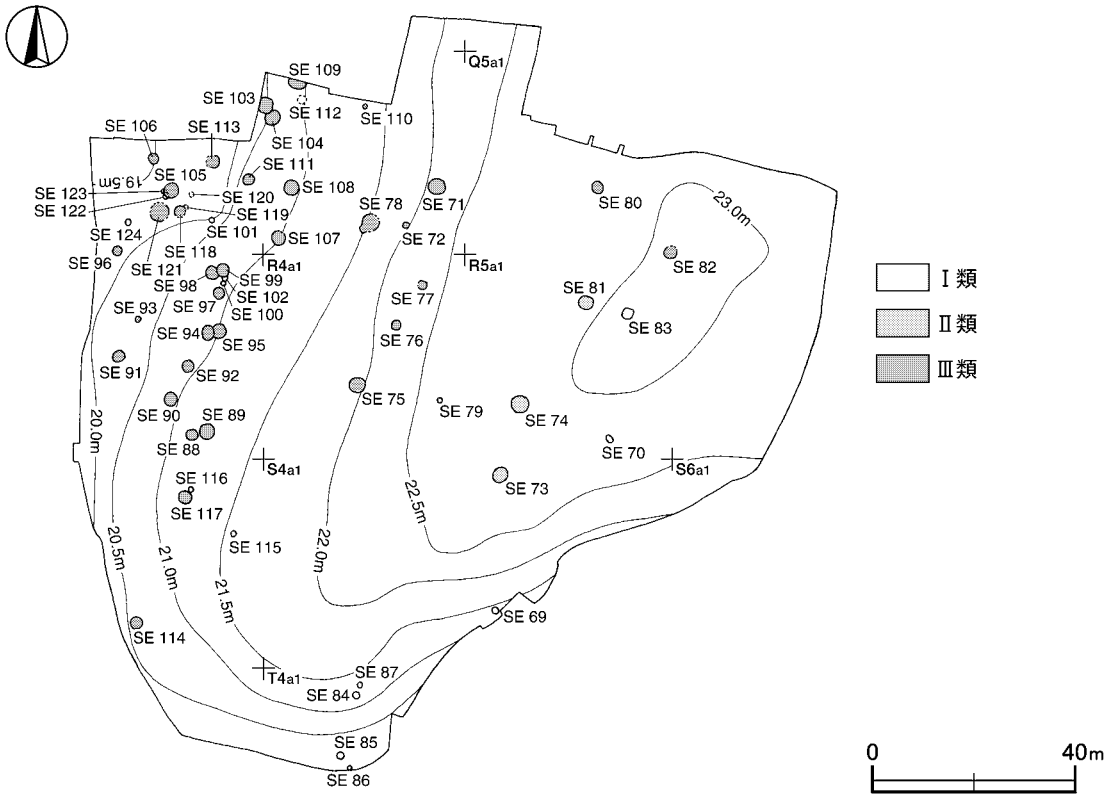
16世紀後半は，調査区域一帯に堀が巡らされている。調査区中央には第93号堀跡があり，その南端から南へ第94号堀跡，東へ第102号堀跡，西へ第103号堀跡が延びている。第93・103号堀跡の接点や第94



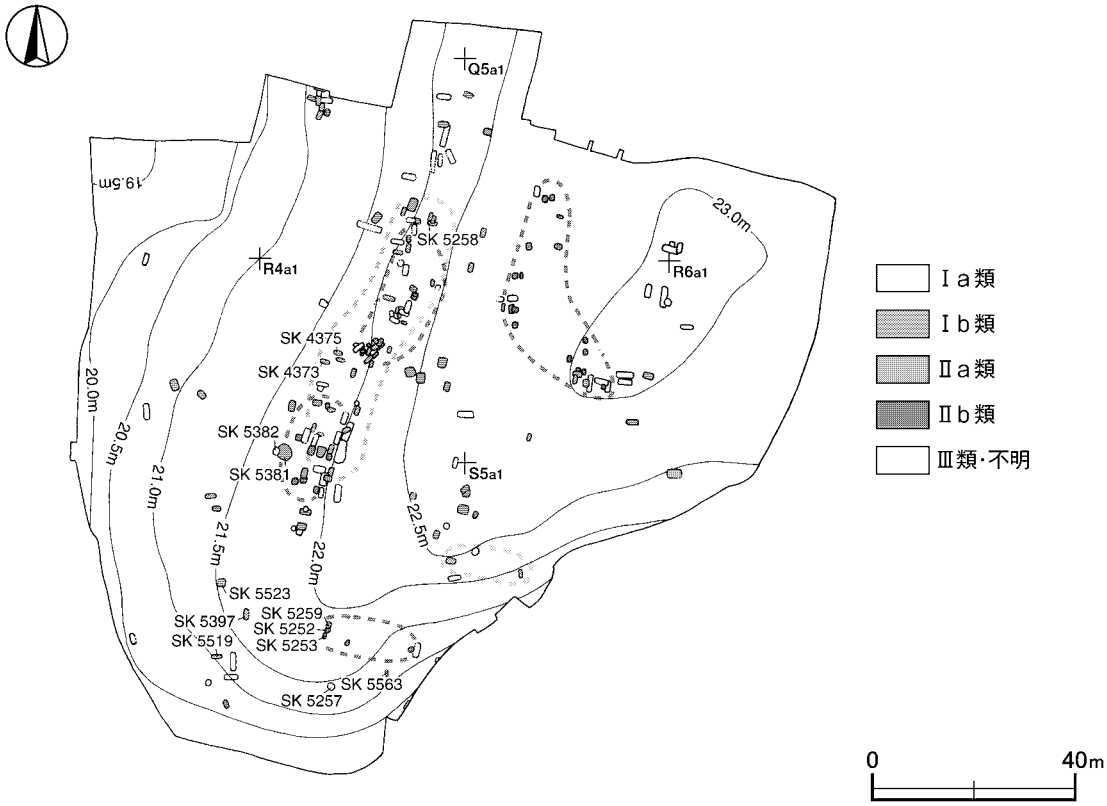
第808図　第16区中・近世遺構配置図（堀跡・溝跡・道路跡）



第809図　第16区中・近世遺構配置図（掘立柱建物跡・方形竪穴遺構・地下式壙）



第810図　第16区中・近世遺構配置図（井戸跡）



第811図　第16区中・近世遺構配置図（土坑）

号堀跡の南側は土橋状に地山が掘り残されていることから，参道の位置は前代から踏襲されていると考えられ，第93・94号堀跡は，その道路側溝として機能していたと考えられる。その他，調査区東辺部に第92号堀跡，北西部に第97～99号堀跡が新たに開削されている。規模は，第92号堀跡が断面逆台形状を呈し，上幅540㎝，下幅92㎝，深さ223㎝，第93・99・103号堀跡が断面薬研状で，上幅250～425㎝，下幅40～78㎝，深さ163～183㎝，第97・98・102号堀跡が断面U字状で，上幅186～214㎝，下幅50～80㎝，深さ74～88㎝である。これらの堀は，前代に比べて規模も大きく，直線的であり，区画としての機能が強化されている。堀浚いの痕跡も認められ，定期的に維持管理されていた状況が看取される。また，第97号溝の覆土中位には人為的に踏み固められた平坦面が存在し，ある程度埋没した段階で道路としても利用されている。主な遺物としては，第99号堀跡から瀬戸・美濃系鉄釉丸皿が２点重なった状態で，第102号堀跡からは馬骨一体分がそれぞれ出土しており，堀の廃絶に伴い何らかの儀礼的な行為があった可能性がある。また各堀跡からは，土師質土器（小皿・内耳鍋・擂鉢），陶器（瀬戸・美濃系天目茶碗・碗・皿・瓶類・擂鉢・香炉，志野系皿，常滑系甕），磁器（龍泉系青磁皿）などが多量に出土しており，種類や器種も豊富である。その他，石器（石臼・茶臼・砥石），石塔（五輪塔・宝篋印塔），鉄製品（鏃），古銭（元符通寶・永楽通寶）が出土している。

17世紀前半は，調査区中央に第101号堀跡と第154号溝跡，北部西寄りに第158号溝跡，北西部に第100号堀跡と第158・160・161号溝跡が位置し，東部には，第150・152号溝跡が７～９ｍの間隔で平行している。第100・101号堀跡は東西方向で，断面形は薬研状である。規模は，第100号堀跡が上幅370㎝，下幅60㎝，深さ168㎝，第101号堀跡が上幅256㎝，下幅48㎝，深さ104㎝である。第100号堀跡は，覆土中位に人為的に踏み固められた平坦面が認められ，道路としても機能している。両跡からの出土遺物は他の溝跡より古い様相を示しており，土師質土器（小皿・内耳鍋・擂鉢・火鉢），陶器（瀬戸・美濃系天目茶碗・碗・瓶類・香炉），磁器（龍泉系青磁輪花皿），石器（石臼・砥石）などが数多く出土している。溝跡は，上幅110～190㎝，下幅40～60㎝，深さ30～80㎝で，断面はU字状を呈している。多くが前代の堀による区画を踏襲するように掘削されているが，規模はかなり縮小化しており，道路側溝や排水溝としての機能に重点が移った感がある。溝跡からの出土遺物は土師質土器（小皿・内耳鍋），陶器（志野系皿，常滑系甕・擂鉢），石器（石臼・砥石）であるが，出土量は少ない。

掘立柱建物跡・方形竪穴遺構・地下式壙・井戸跡（第809・810図）

掘立柱建物跡は５棟が該当し，調査区東部の台地縁辺部に１棟，西側の斜面部に４棟を確認している。堀や溝で区画されたブロックごとに単一棟で存在している。特に斜面部の建物跡は，近接する堀・溝跡と桁行方向が平行または直交するように配置されている。構造は，桁行４間の側柱建物が２棟，桁行２間以下の小規模な建物が３棟で，前者は倉庫，後者は簡易な小屋や小堂としての機能が想定される。時期は，関連する堀・溝跡の年代観や重複関係から，17世紀前半と考えられる。また，掘立柱建物を伴う遺構として，第20号不明遺構がある。第20号不明遺構は，調査区南端の斜面部中段に位置している。斜面部は段切りされ，桁行３間，梁行２間の側柱建物を構築し，建物の背面には排水溝を設けている。五輪塔，宝篋印塔，石幢などの石塔類の部材が多数出土しており，供養堂などの草堂と推定される。時期は，石塔類の形状から16世紀前半と考えられる。

方形竪穴遺構は８基が該当し，台地上から縁辺部にかけて散在している。構造は，２～３か所の柱穴を持つものが５基，柱穴が確認されないものが３基である。いずれも床の硬化が弱いため，居住以外の

目的で使用されたと考えられる。主な遺物としては，第73号方形竪穴遺構の鉄鏃，第79号方形竪穴遺構の瀬戸・美濃系陶器灰釉平碗，貝類（アカニシ），第80号方形竪穴遺構の五輪塔水輪・宝篋印塔基礎部などが出土しているが，いずれも原位置は保っておらず，遺構の廃絶後に廃棄されたものと考えられる。第74号方形竪穴遺構から15世紀後半，第75・78・79号方形竪穴遺構から16世紀前半の土師質土器小皿や内耳鍋などが出土しており，検出遺構の中では古い様相を示している。

地下式壙は17基確認されており，このうち15基は調査区中央の堀・溝跡の西側に位置している。主軸方向は溝・堀跡と平行あるいは直交しており，堀・溝跡を意識した配置がとられている。分布状況は主軸方向を同じくして並列するものや重複した位置で作り替えが行われているものが見られるほか，土坑群を取り囲むように２～５基からなるまとまりを形成しており，一定の区域内で継続して構築された状況を示している。第51号地下式壙から瀬戸・美濃系陶器灰釉端反皿片，第57号地下式壙から土師質土器小皿，擂鉢，第52号地下式壙から土師質土器小皿など，15世紀後半から17世紀前半の遺物が出土しているが，いずれも天井部の崩落後に混入したものであり，時期は明確でない。重複関係から第53・59号方形竪穴遺構が16世紀前半よりも古く位置付けられる。

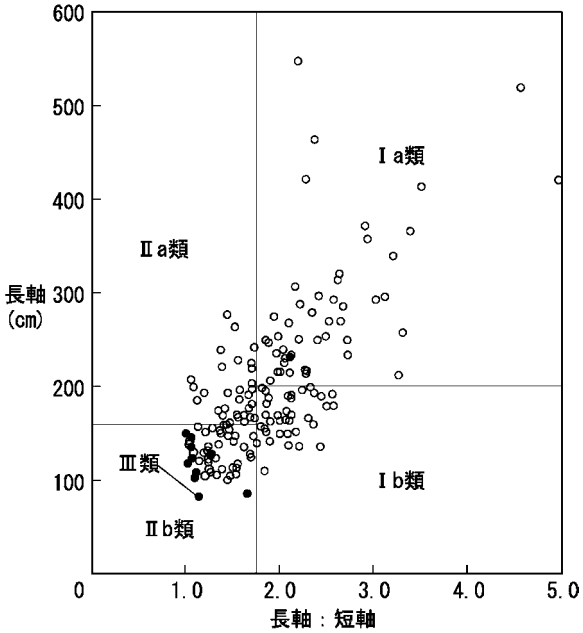
井戸跡は56基が該当し，掘り方の形状からⅠ～Ⅲ類に分類される。Ⅰ類は，円筒状の井戸跡で，台地縁辺部と斜面部中段から下段に分布している。重複関係は堀・溝跡や他の類型の井戸に掘り込まれている例が多く，古い様相を示している。Ⅱ類は，漏斗状の井戸跡で，台地上，台地縁辺部，斜面部中段から下段に分布が見られる。15世紀後半から17世紀前半の遺物が出土していることから，当期における一般的な形状であったと考えられる。Ⅲ類は，二段掘りまたは漏斗状で，井戸枠を埋設した版築状の埋土が見られる。台地縁辺部及び斜面部中段に並ぶように配置されており，井戸の掘削位置は区画等による規制が働いていた可能性がある。出土遺物の時期は，16世紀後半代が多い傾向にあり，各類型の中では新しい様相を示している。以上，重複関係や出土遺物からⅠ類からⅢ類への変遷が想定される。

土坑群（第811図）

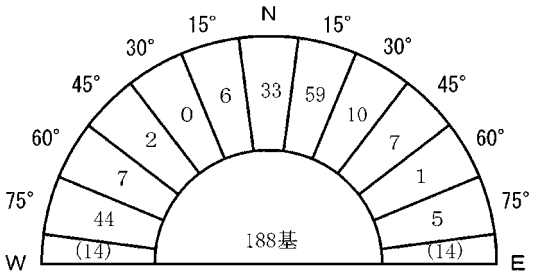
土坑は，性格不明なものを除く227基が該当し，廃棄土坑，粘土貼り土坑，火葬土坑，墓坑，墓坑や柱穴の可能性がある土坑を確認している。ここでは，墓坑９基，粘土貼り土坑４基，墓坑の可能性がある土坑175基の計188基の土坑について分析を行い，土坑群の性格を再検討したい。分析にあたっては，形状からⅠ～Ⅲ類に大別し，Ⅰ・Ⅱ類は大きさからそれぞれａ・ｂ小類に細分した。

Ⅰａ類は，長軸と短軸の比が1.76以上の細長い長方形で，長軸の長さが２m以上の大形の土坑で，53基が該当する。北東部の最高所にあたる標高23.0m付近と標高22.0mの台地縁辺部付近，中央の堀・溝跡の西側に密な分布域があり，斜面部中段にも散在している。主軸方向は，南北方向（N－30°－W～N－30°－E）が51%，東西方向（N－60°～90°－

土坑の規模と形状



土坑の主軸方向



W，N－60°～90°－E）が45%である。中央部を南北に縦断する堀・溝跡と主軸方向（N－17°～18°－E）が平行・直交するものは63%で，各類型の中で最も高い値を示しており，配置には堀や溝による規制が強く働いていたことがうかがえる。出土遺物は，第4225号土坑から龍泉系青磁稜花皿片，第4269号土坑から寛永通寶（古寛永）5枚が融着した状態で出土しているほか，図示できなかったものの第4439・4654号土坑から古銭（不明），第4339号土坑から刀子，第4375号土坑から鎌，第4252・4660・4368・5521号土坑から釘がそれぞれ出土している。

Ⅰｂ類は，長軸と短軸の比が1.76以上の細長い長方形で，長軸の長さが2.0m以下の小形の土坑である。42基が該当し，底面に炭化物が堆積している第4249・4258・4373～4375号土坑や粘土貼り土坑の第5397号土坑は本類に属する。分布域は調査区中央の堀・溝跡の西側に24基が集中しているほか，北西部や南部にも数基からなるまとまりが見られる。主軸方向は南北方向が48%，東西方向が33%，その他が19%で，中央の溝・堀跡と平行・直交するものは57%であり，中央の溝・堀跡を意識した配置がとられている。遺物は，第5519号土坑から宝篋印塔の笠部が横転した状態で出土しているほか，第5372号土坑から土師質土器小皿，第4164号土坑から鏃，第4343号土坑から釘がそれぞれ出土している。

Ⅱａ類は，長軸と短軸の比が1.75以下の隅丸長方形もしくは方形で，規模が1.61m以上の大形の土坑である。33基が該当し，粘土貼り土坑の第5381・5523号土坑は本類に属する。標高21.0～22.5mの台地縁辺部から斜面部上段にかけて広範囲に散在しており，分布状況に堀・溝跡との関連性は認められない。南北方向と東西方向が39%，その他が22%で，主軸方向にもばらつきが見られる。出土遺物は，第4708・4213号土坑から土師質土器小皿，第4199・5373号土坑から古銭(皇宋通寶，永楽通寶)，第5282号土坑から鏃，第4298号土坑から釘，第4270号土坑から煙管吸口部がそれぞれ出土している。

Ⅱｂ類は，長軸と短軸の比が1.75以下の隅丸長方形もしくは方形で，規模が1.60m以下の小形の土坑である。38基が該当し，調査区南部において人骨が確認された第5252・5253・5259号土坑は本類に属する。第5252・5253・5259号土坑は臥屈葬，第5259号土坑では永楽通寶のみで構成された六道銭が副葬されている。中央の堀・溝跡の東西に分布域が見られ，東側では調査区北部，西側では中央部以南に集中している。主軸方向は，南北方向が66%と優位を占め，東西方向が24%，その他が10%となっている。中央の堀・溝跡と平行・直交するものが50%で，他の類型と比べると堀・溝による規制は弱い傾向にある一方，正方位を指向する割合が34%と高いことも特徴に挙げられる。遺物は，先述の人骨や六道銭のほか，第4520・5251号土坑から古銭（開元通寶，元豊通寶），第4473号土坑から釘が出土している。

Ⅲ類は，円形状を呈する土坑である。11基が該当し，台地上から斜面部上段にかけて点在している。第5257号土坑は底面に径98cmの溝状の凹みがあり，桶の底部の圧痕と推定される。また，粘土貼り土坑の第5382号土坑は，底部に長径86cm，短径52cmの楕円形状の落ち込みが認められる。いずれも座葬の桶棺を埋設した墓坑の可能性が高く，時期は17世紀代と考えられる。

イ　第16区における中・近世の景観復元

以上の分析結果を踏まえ，調査区域における景観変遷を試みたい。前項の時期区分に従い，第Ａ期を

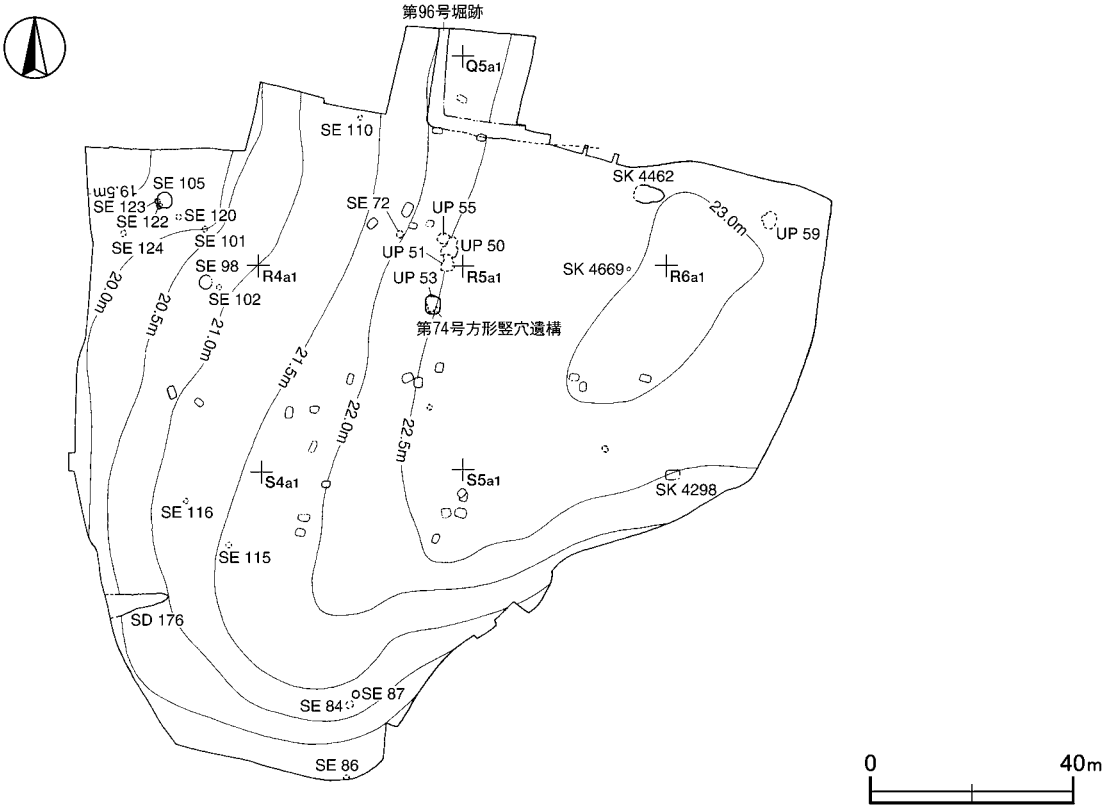
15世紀後半，第Ｂ期を16世紀前半，第Ｃ期を16世紀後半，第Ｄ期を17世紀前半としている。ただし，中・近世の遺構は出土遺物が少ないため，個々の時期を特定することが出来なかった。ここでの復元案は，遺跡景観の基軸となる堀跡・溝跡・道路跡との関連性や遺構の分布状況の特徴等から，最も符合する時期を推定したものであり，必ずしも存続期間の長短や同時期内での機能的な形態差は反映していない。

第Ａ期（第812図）

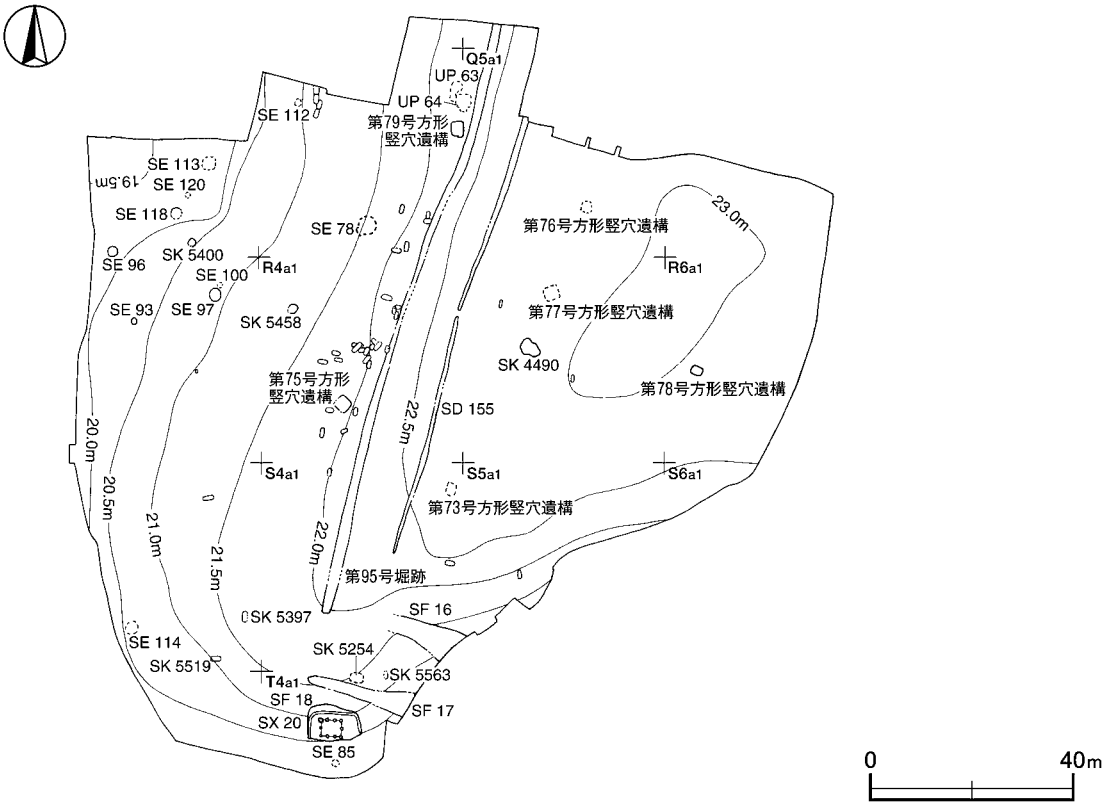
当区において中世段階の開発が始まる時期であり，調査区北部に第96号堀跡が開削される。第96号堀跡は，ほぼ直角に屈曲するＬ字状の平面形で，断面薬研状の大形の堀である。堆積状況から堀の内側肩部に土塁の存在が想定され，堀の内外を区画する性格に加え，防御的機能も備えていたと考えられる。調査区域が限られるため内部施設は確認されておらず，妙徳寺に直接伴うものか，在地有力者層の居館等に関連するものかは不明である。第96号堀跡より南側では，区画を明示するような施設は認められないことから，堀の外側へは土地利用に対する制約が及ばなかったと推測される。遺構は，台地上に廃棄土坑の第4462・4669号土坑，台地縁辺部に第74号方形竪穴遺構や第53・59号地下式壙があり，斜面部中段より下位に第176号溝跡や井戸跡が分布している。井戸跡は，円筒状や漏斗状の掘り方をもつⅠ・Ⅱ類が主体で，いずれも素掘りの井戸である。土坑群は，Ⅱａ類が当期に該当すると考えられ，台地縁辺部から斜面部上段にかけて散在する点や主軸方向に規則性が認められないなどの特徴が当期の遺構配置と符合する。土坑の性格は不明な点が多いが，方形に近い形状や一辺２ｍを超える規模から，方形竪穴遺構に類似するものも含まれている可能性がある。その他，当期の土地利用をうかがえる遺物として，第176号溝跡から一括廃棄された多量の鉄滓が出土しており，調査区南西部に精錬鍛冶に関わる工房の存在が推定される。

第Ｂ期（第813図）

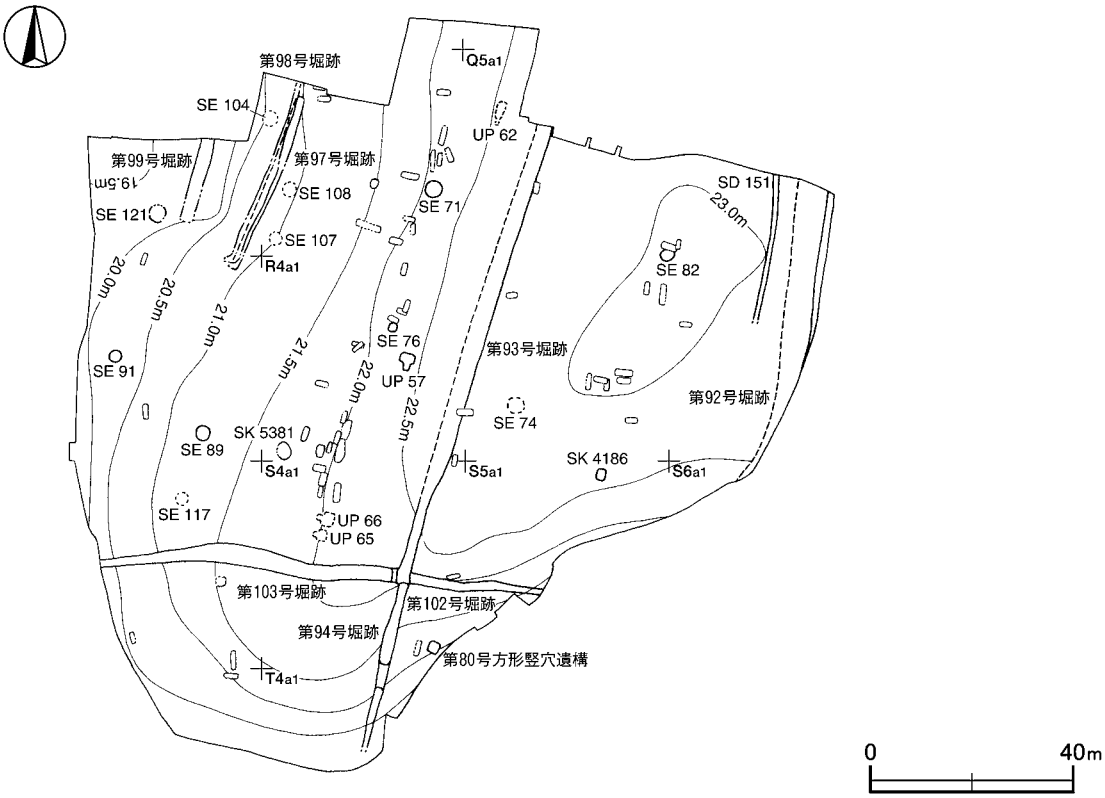
調査区中央の台地縁辺部に沿って妙徳寺の参道が出現する時期である。第93号堀跡と第155号溝跡は，その道路側溝に相当し，９～12mの路面幅が復元される。さらに，参道の南側から第16～18号道路跡が東側へ延びており，南東部の谷津から台地上への経路も当期に整備されている。参道の出現により台地部と斜面部の地理的な境界が明示され，当期以降の土地利用は参道を中心に展開していくこととなる。当期の遺構としては，第20号不明遺構，第75・78・79号方形竪穴遺構，第93・96・97号井戸跡，廃棄土坑の第4490・5400・5458号土坑などがあり，土坑群はⅠｂ類が該当すると考えられる。調査区南端に位置する第20号不明遺構は，３間×２間の側柱建物を伴い，周辺から五輪塔・宝篋印塔・石幢など石塔類の部材が多数出土している。供養堂としての機能が推定され，また，参道と道路との交点付近に位置していることから，妙徳寺の寺域の南限を示すものと考えられる。土坑群Ⅰｂ類は，五輪塔の空風輪が出土した第5563号土坑，宝篋印塔の笠部が出土した第5519号土坑，粘土貼り土坑の第5397号土坑のほか，底面に炭化物が堆積した第4249・4258・4373・4374・4375号土坑などがある。分布域は，調査区中央部の第93号堀跡の西側に密集しているほか，第155号溝跡の南東側にも数基からなるまとまりが認められ，参道を意識した配置がとられている。一方，台地上の高所ではほとんど検出されておらず，参道周辺と台地上での土地利用状況の違いを反映している。遺物としては，第20号不明遺構や第5519・5563号土坑から出土した石塔類が注目され，遺構，遺物の面で宗教色が顕在化する時期として捉えられる。



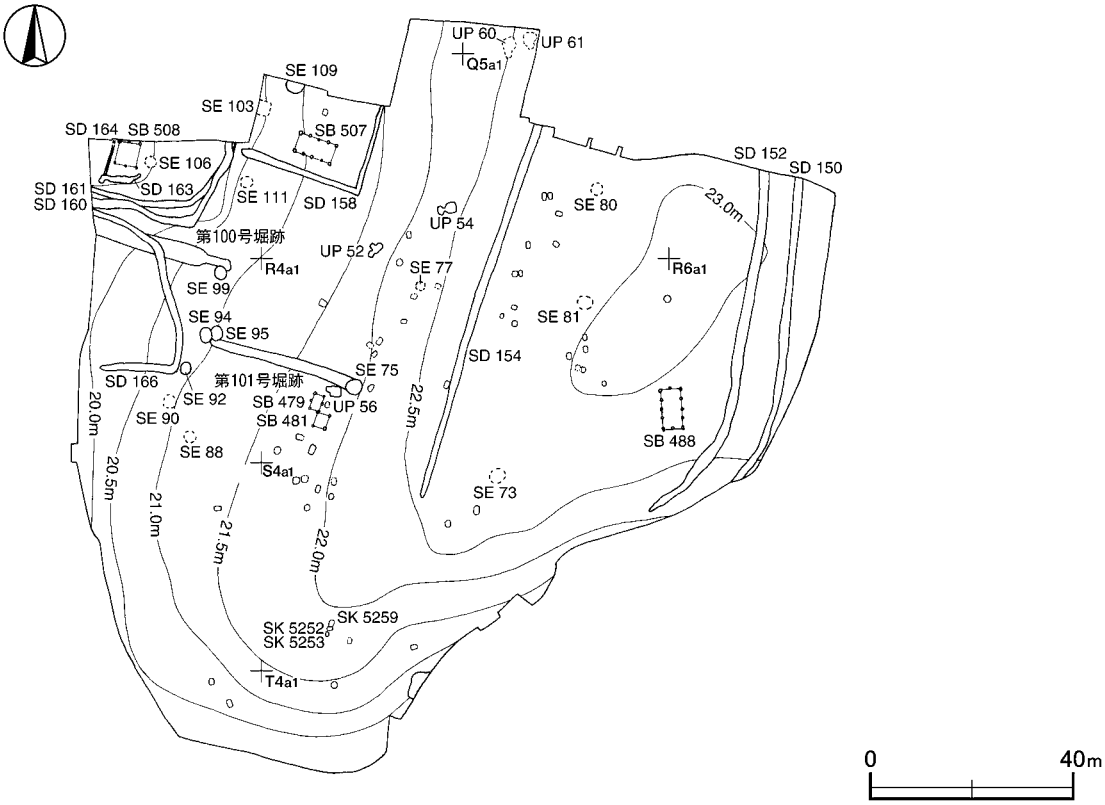
第812図　第16区第Ａ期（15世紀後半）復元図



第813図　第16区第Ｂ期（16世紀前半）復元図



第814図　第16区第Ｃ期（16世紀後半）復元図



第815図　第16区第Ｄ期（17世紀前半）復元図

第Ｃ期（第814図）

調査区域全体に堀が掘り巡らされる時期である。調査区中央の参道の位置には第93堀跡があり，その南端からは第94・102・103号堀跡が延びている。さらに，調査区東辺部には第92号堀跡と第151号溝跡，北西部には第97～99号堀跡が新たに掘削されている。これらの堀跡は断面形が逆台形や薬研状を呈し，前期に比べて規模も大きく直線的で，区画としての機能が強化されている。遺構は，第80号方形竪穴遺構，第57号地下式壙，第71・76・82・89・91・121号井戸跡，粘土貼り土坑の第5381号土坑などが確認され，また，配置や主軸方向から第62・65・66号地下式壙，土坑群Ⅰａ類が該当すると考えられる。土坑群Ⅰａ類は，各類型の中で堀の方向に対する意識が最も強く，主軸は東西方向と南北方向にほぼ限定される。参道西側の集中部は，北と南の２か所に分かれ，標高23.0m付近の台地上にも新たに分布域が形成されている。井戸跡は，漏斗状の掘り方をもつⅡ類に加え，井戸枠を埋設したⅢ類が見られるようになる。Ⅲ類は第Ｃ・Ｄ期の中で，斜面部に直線的に並ぶ傾向が見られ，掘削位置には区画等による規制が働いていた可能性がある。当期の出土遺物は，堀跡を中心に土師質土器，瀬戸・美濃系，志野系，常滑系の各種陶器類，龍泉系青磁，石臼，茶臼，砥石などの石器類，五輪塔，宝篋印塔などの石塔類，古銭（元符通寶・永楽通寶）など出土量が多く，内容も豊富である。背景に妙徳寺の経済的な繁栄が想定される。

第Ｄ期（第815図）

第Ｄ期は近世初頭の17世紀前半にあたり，第100・101号堀跡，第150・152・154・158・160・161・163・166号溝跡，第479・481・488・507・508号掘立柱建物跡，第52・56号地下式壙，第75・92・94号井戸跡，土坑群Ⅱｂ・Ⅲ類，第30～32号ピット群などが該当する。この中で，第100・101号堀跡は，覆土下層から出土した遺物が前代の特徴を残しており，他の溝跡より古い様相を示している。したがって，第100・101号堀跡の廃絶をもって，堀による区画から溝による区画へ移行したと考えられる。当期には掘立柱建物跡が出現し，堀や溝で区画された範囲内に単一棟で存在している。土坑群Ⅱｂ類は，調査区東部の台地上のほか，第154号溝跡の東西に分布域が見られ，東側は調査区北部，西側は中央部以南に集中している。調査区南部に位置する第5252・5253・5259号土坑からは人骨が確認され，埋葬状況は臥屈葬であり，第5259号土坑には六道銭が副葬されている。主軸方向は，溝の方向に対する意識が弱まる一方で，正方位を向くものの出現率が高くなる傾向がある。出土遺物は少量で，土師質土器や常滑系甕が散見する程度である。

ウ　小結

以上，中・近世の遺構の様相から，第16区における景観変遷を検討してきた。最後に変遷の概要と問題点について触れておきたい。

第16区は，11世紀前半の集落廃絶後，中世後半まで空白地となっている。中世の遺構が確認されるのは15世紀後半であり，Ｌ字状に巡る第96号堀跡が開発の初現となる。防御的な性格が推定されるものの，同時期の関連遺構が確認されておらず，今後の調査に依るところが大きい。16世紀前半には，中央に妙徳寺の参道が整備され，周辺には墓域が展開した可能性があり，南端部には供養堂と思われる小堂が設置される。16世紀後半は，堀によって調査区域全体が大規模に区画・整備されており，出土遺物の内容も豊富で，経済的にも繁栄期の様相がうかがえる。17世紀前半に区画の機能が堀から溝へ縮小し，以後，

明確な遺構形成は認められなくなるが，参道及び道路の機能はその後も踏襲されて，今日に至っている。

中・近世の遺構の性格を考える上で，土坑群の位置付けが重要な問題となる。土坑群の分布状況は，堀・溝跡と主軸方向の関係から，台地縁辺部から斜面部に散在する段階，参道の整備に伴い，堀・溝の周辺に集中する段階，堀周辺の集中域が南北に分散し，台地上にも展開する段階，参道の北東・南西側及び台地上に分布する段階へと推移し，Ⅱａ類→Ⅰｂ類→Ⅰａ類→Ⅱｂ類・Ⅲ類の変遷過程が想定される。五輪塔・宝篋印塔などの石塔類や古銭等が出土しており，Ⅰｂ類では底面に炭化物が堆積する土坑，Ⅱｂ類では人骨等が確認されていることから，墓坑の可能性が高いと考えられる。しかし，臥屈葬を主体とする中世の墓制のなかで，伸展葬と思われる細長い長方形の土坑（Ⅰａ・Ⅰｂ類）が多数存在するのは再検討を要する課題であるが，現状では第16区の中・近世の景観変遷案と表出した問題点を提示するに留め，再度検証を行いたい。

註

1）稲田義弘　飯泉達司　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ　島名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第214集　財団法人茨城県教育財団　2004年３月
2）稲田義弘　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ　島名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第190集　財団法人茨城県教育財団　2002年３月
3）松本直人　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅺ　島名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第236集　財団法人茨城県教育財団　2005年３月
4）註３）に同じ
5）川津法伸　平石尚和　「一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書　下り松遺跡・油内遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第145集　財団法人茨城県教育財団　1999年３月
6）伊藤玄三ほか　「村岡遺跡群発掘調査報告書」『千代川村埋蔵文化財報告書』第４集　千代川村教育委員会　1998年３月
7）千葉隆司他　『祈りの造形－中世霞ヶ浦の金工品－』霞ヶ浦郷土資料館　2000年10月
8）註１）に同じ
9）青木仁昌　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ　島名八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第201集　財団法人茨城県教育財団　2003年３月
10）矢ノ倉正男　小林孝　川上直登　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　島名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第166集　財団法人茨城県教育財団　2000年３月
11）五十川伸矢　飛野博文　「第２章　京都大学教養学部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター　1985年３月
12）河上邦彦　木下亘　「巨勢寺」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第87冊　奈良県立橿原考古学研究所　2004年２月
13）田中幸夫　酒井雄一　田月淳一　松本直人　桑村裕　「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ　島名熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財報告』第264集　財団法人茨城県教育財団　2006年３月
14）宮本長二郎　『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版　1996年７月
15）註11）に同じ
16）赤熊浩一　「坂戸市　金井遺跡　Ｂ区住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅸ－」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994年10月
17）市川正史　長谷川正　「宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ　北原（№９）遺跡⑴　北原（№９）遺跡内長福寺址　宮ヶ瀬ダム建設に伴なう調査」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告』21　神奈川県立埋蔵文化財センター　1993年２月
18）註12）に同じ
19）註10）に同じ
20）五十川伸矢　「日本古代・中世の鋳造技術－鋳造土坑から復元される鋳造技術－」『日本中世における銅鉄生産とその流通に関する研究』　2005年９月
21）註７）に同じ
22）神埼勝　「多可寺跡出土の梵鐘鋳造遺構」『古代研究』27　元興寺文化財研究所　1984年
23）八重樫忠郎　「岩手県平泉町白山社遺跡検出梵鐘鋳造遺構について」『鋳造遺跡研究会資料』６　1996年９月
24）河野史郎　「豊後国分寺跡」『平成10年確認調査概要報告書』大分市教育委員会　1999年３月

25）多可郡中町教育委員会　「牧野・町西遺跡」Ⅲ　2005年
26）各務原市埋蔵文化財調査センター「野口廃寺Ａ地区の発掘調査報告書」『各務原市埋蔵文化財調査報告書』13　1993年３月
27）註20）に同じ
28）註７）に同じ
29）註７）に同じ
30）京都橘大学教授五十川伸矢氏に梵鐘鋳造土坑の形態や周辺装置，並びに鋳造遺物についてご教授頂いた。
31）村上伸二「中世前半東国の鋳造工房」『シンポジウム　中世日本の鋳物生産－日本列島の西と東－』京都橘大学　2006年９月
32）市村高男　「中世常陸における「職人」の存在形態」『戦国期職人の系譜』角川書店　1989年４月
33）註32）に同じ
34）註32）に同じ
35）五十川伸矢　「鋳造工人の技術と生産工房」『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告　名著出版1992年10月
36）谷田部の歴史編さん委員会　「谷田部の歴史」谷田部町教育委員会1975年９月
37）茨城県史編集委員会　『茨城県史　中世編』茨城県　1986年３月
38）野内正美他　「図説　土浦・石岡・つくばの歴史　茨城県の歴史シリーズ」郷土出版　2004年11月
39）千葉隆司　「地名と考古学　－中世鋳造遺跡からの歴史叙述－」『婆良岐考古　第28号』　婆良岐考古同人会　2005年５月

参考文献

・井川達雄　「竪穴住居跡の統計的傾向－上越新幹線関係遺跡発見の竪穴式住居の傾向－」『研究紀要９』　財団法人群馬県埋蔵文化財事業団　1992年３月
・石野博信　『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館　1990年３月
・大町　健　『日本古代の国家と在地首長制』　校倉書房　1986年12月
・原島礼二　『古代東国の風景』　吉川弘文館　1993年３月
・山岸良二編　『原始・古代日本の集落』　同成社　2004年９月
・川村満博　「つくば市小泉館跡出土の非ロクロ成形かわらけについて」『研究ノート』９号　財団法人茨城県教育財団　2000年６月
・川村満博　「茨城県南部を中心に見た12世紀後半～15世紀のロクロ成形かわらけについて」『研究ノート』12号　財団法人茨城県教育財団　2003年６月
・白田正子　「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について」『研究ノート』７号　財団法人茨城県教育財団　1998年６月
・宇留野主税　「真壁城跡本丸出土資料の再検討」『Archaeo-Clio』第６号　東京学芸大学考古学研究室　2005年３月
・桜川市教育委員会「史跡真壁城跡Ⅲ－外曲輪中央部・東部・北部の概要調査－」『史跡真壁城跡発掘調査報告』第３集　2006年
・つくば市教育委員会　『史跡小田城跡－第45次調査（周辺曲輪確認調査Ⅱ）概要報告－』　2003年３月
・つくば市教育委員会　『史跡小田城跡－第48次調査（本丸跡確認調査Ⅳ）概要報告－』　2004年３月
・つくば市教育委員会　『史跡小田城跡－第48次調査（本丸跡確認調査Ⅴ）概要報告－』　2005年３月
・瀬戸市史編纂委員会　『瀬戸市史　陶磁史篇　四』　第一法規出版　1993年９月
・稲田義弘　「島名熊の山遺跡の様相について」『古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内郡を中心として－茨城県考古学協会シンポジウム』茨城県考古学協会　2005年２月
・五十川伸矢　「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗資料館研究報告　中・近世における東国と西国』第46集　1992年12月
・網野喜彦　石井進　『中世都市と商人職人』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告　名著出版　1992年10月
・網野喜彦　五十川伸矢他　『中世を考える　職人と芸能』吉川弘文館　1992年12月
・五十川伸矢他　「銅と鉄の鋳造」『鉄と銅の生産の歴史　古代から近世初頭にいたる』　雄山閣　2002年２月
・土浦市立博物館　「土浦市立博物館第18回特別展　中世の霞ヶ浦と律宗　よみがえる仏教文化の整地」土浦市立博物館　1997年２月
・若林幸子　廣瀬時習他　「箕面市粟生間谷東・茨木市宿久庄所在　徳大寺遺跡　国際文化都市特定土地区画整理事業に伴なう発掘調査報告書」『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第45集　財団法人　大阪府文化財調査研究センター　1999年６月
・坪井良平　「梵鐘実測図集成」『奈良国立文化財研究所史料』第37・38冊　1993年６月

写　真　図　版

第4区
完掘状況

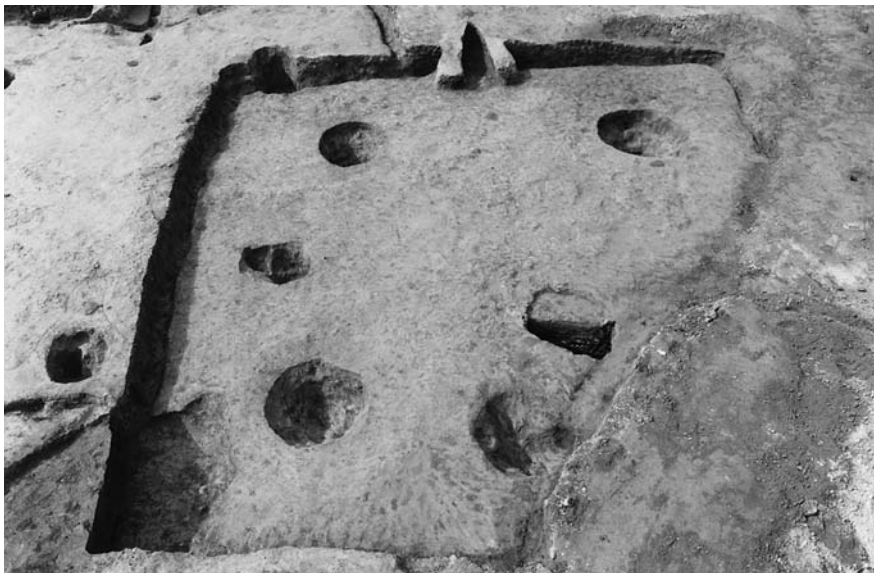
第1006号住居跡
完掘状況

第1006号住居跡
遺物出土状況

第1001号住居跡
完　掘　状　況

第1001号住居跡
遺物出土状況

第1001号住居跡竈
遺物出土状況



第16号住居跡
完掘状況

第2813号住居跡
完掘状況

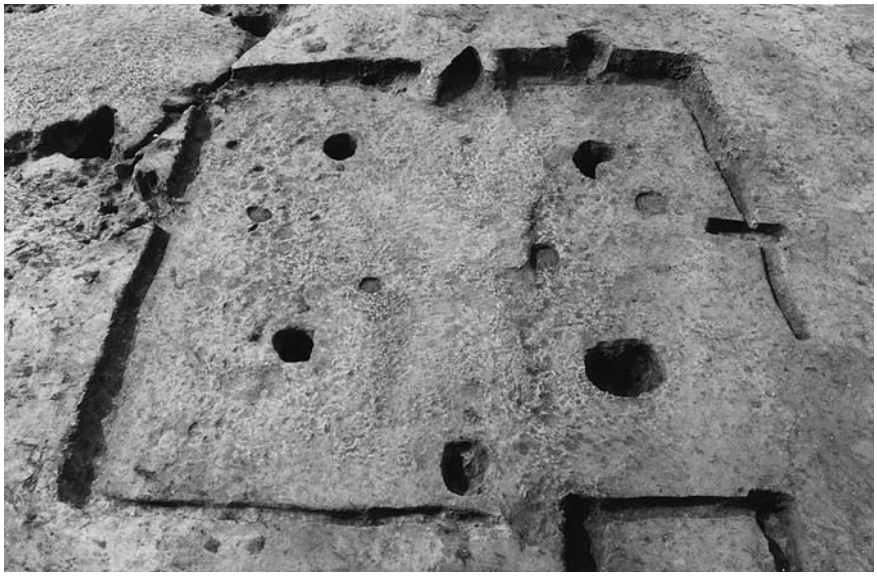
第2813号住居跡竈
完掘状況

第2818号住居跡
完　掘　状　況

第2818号住居跡竈
完　掘　状　況

第2818号住居跡
遺物出土状況

第2818号住居跡
遺物出土状況



第2819号住居跡
完掘状況

第1000号住居跡
完掘状況

第1030号住居跡
完　掘　状　況

第2811号住居跡
完　掘　状　況

第2811号住居跡竈
完　掘　状　況

第2816号住居跡
完掘状況

第2816号住居跡
遺物出土状況

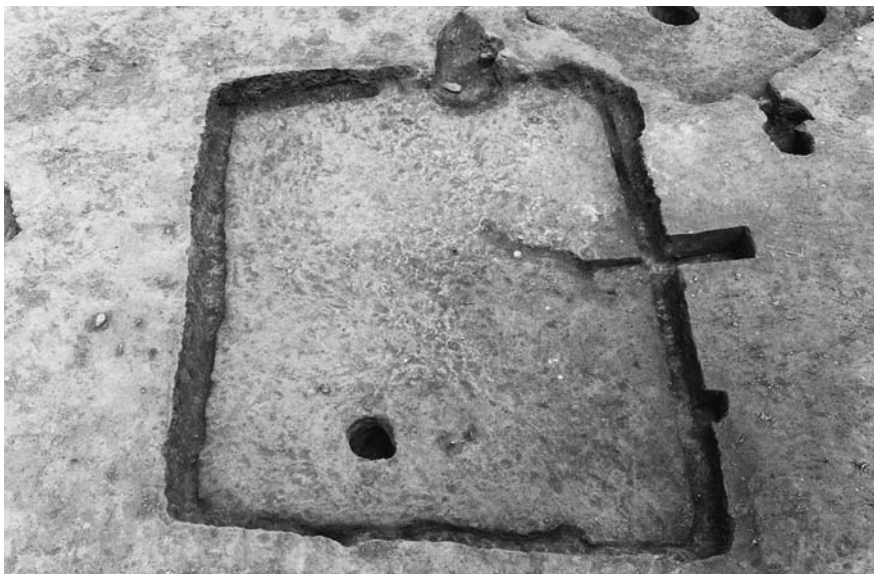
第2816号住居跡
遺物出土状況

第2821号住居跡
完　掘　状　況

第2821号住居跡
遺物出土状況

第2822号住居跡竈
遺物出土状況

第2827号住居跡
遺物出土状況



第2812号住居跡
完掘状況

第2812号住居跡竈
遺物出土状況

第2824号住居跡
完掘状況

第2824号住居跡竈
遺物出土状況

第130号溝跡
完掘状況

SI 29-2

SI 29-5

SI 1001-6

SI 1001-7

SI 1001-21

SI 1001-17

SI 1001-20

SI 1001-20

第29・1001号住居跡出土土器

SI 1001-15

SI 1001-16

SI 1001-10

SI 1001-9

SI 1001-19

SI 1001-14

SI 1001-18

SI 1006-26

第1001・1006号住居跡出土土器

SI 2813-28

SI 1006-24

SI 1006-23

SI 2813-27

SI 2818-40

SI 2818-42

SI 2818-41

SI 2818-39

第1006・2813・2818号住居跡出土土器

SI 2818-37

SI 2818-38

SI 2826-48

SI 2826-48

SI 2818-43

SI 2818-43

第2818・2826号住居跡出土土器

SI 2818-35

SI 2818-34

SI 988-49

SI 2816-60

SI 1030-54

SI 2812-70

SI 2824-74

SI 2812-69

SI 2824-77

SI 2824-78

第998・1030・2812・2816・2818・2824号住居跡出土土器

SI 2822-66

SI 2821-63

SI 2812-71

SI 2812-73

SI 2816-DP7

SK 4955-DP10

SI 16-DP1

SI 1006-DP4

SI 1001-DP3

SI 29-Q1

SI 988-Q2

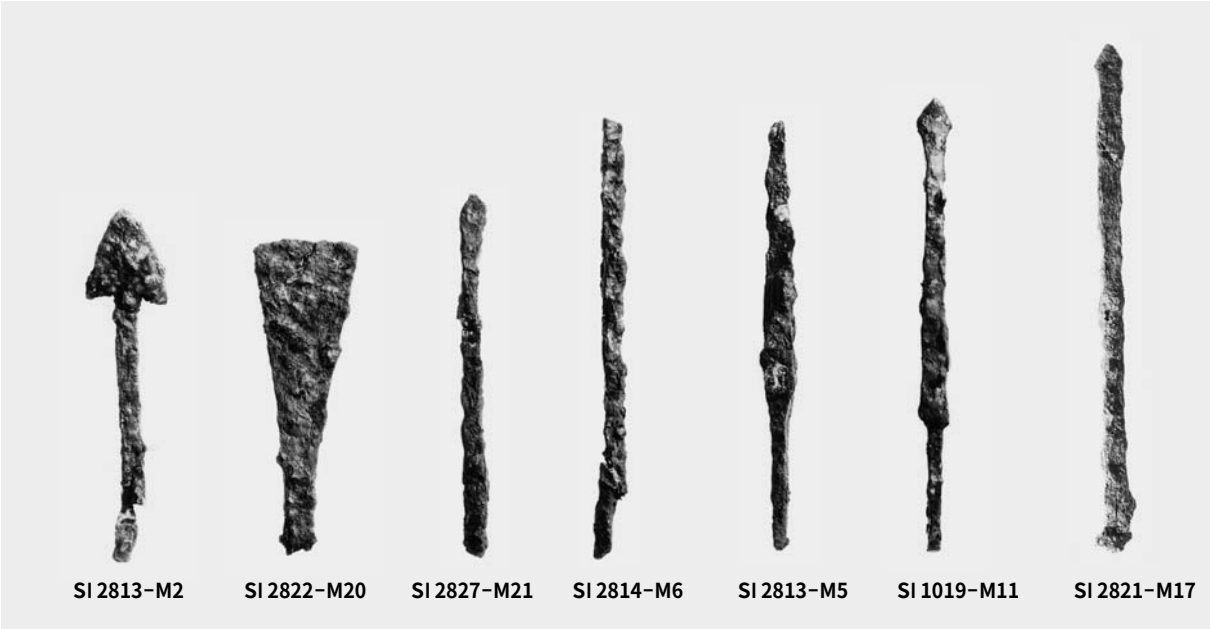
遺構外-Q8

SI 2818-DP6

遺構外-Q7

遺構外-Q6

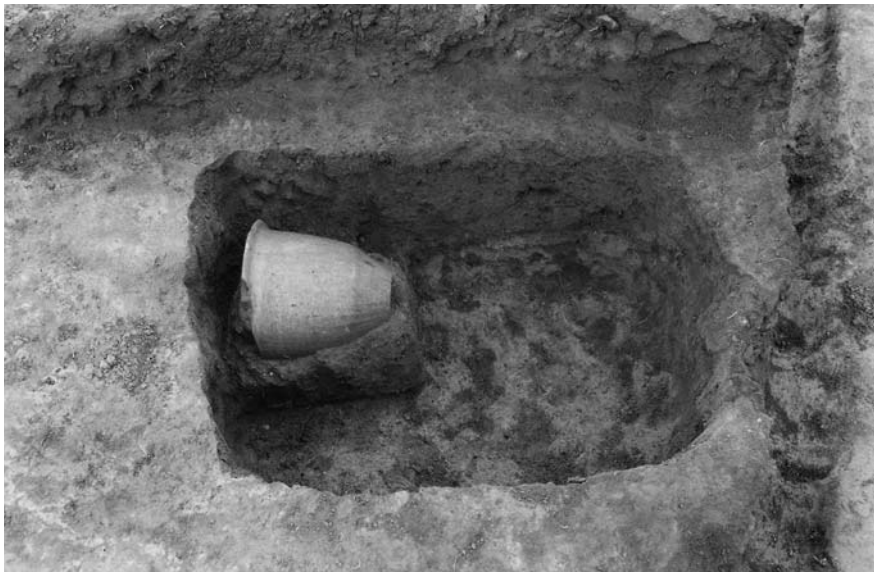
第2812・2821・2822号住居跡出土土器
出土土製品・石器・石製品


SI 2813-M2
SI 2822-M20
SI 2827-M21
SI 2814-M6
SI 2813-M5
SI 1019-M11
SI 2821-M17
SI 2822-M19
SI 2822-M18
SI 2816-M15
SI 2813-M3
SI 2818-M8
SI 2813-M4
SI 1030-M12
SI 1030-M14

出土鉄製品

第　7　区
完　掘　状　況

第2523・2529号住居跡
完　掘　状　況



第2523号住居跡貯蔵穴
遺　物　出　土　状　況

第2528号住居跡
遺物出土状況

第2525号住居跡
完掘状況

第2525号住居跡
遺物出土状況

第2537号住居跡
完掘状況

第2537号住居跡
遺物出土状況

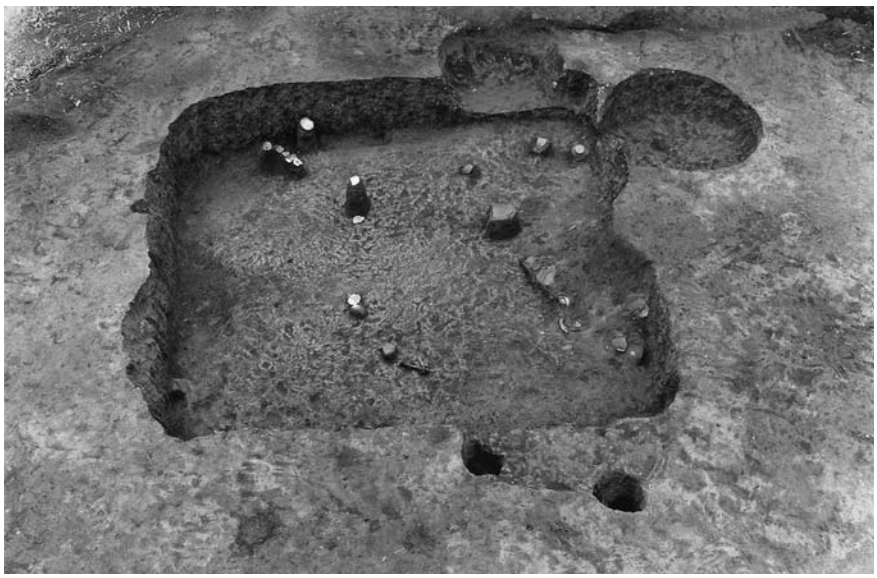
第2537号住居跡竈
遺物出土状況

第2546号住居跡
完　掘　状　況

第2546号住居跡
遺物出土状況

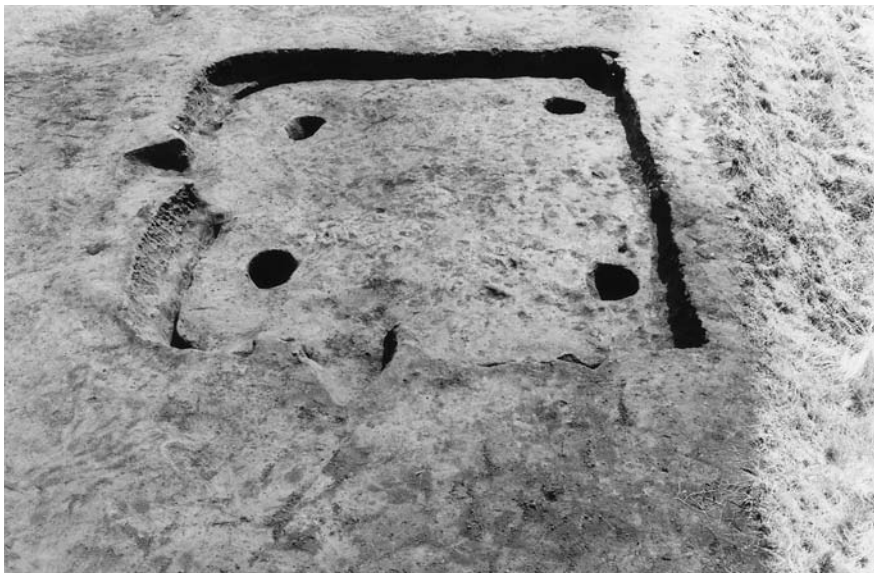
第2546号住居跡竈
完　掘　状　況

第2547住居跡
完掘状況



第2547号住居跡
遺物出土状況

第2547号住居跡
遺物出土状況



第2524A号住居跡
完　掘　状　況

第2524A号住居跡
遺物出土状況

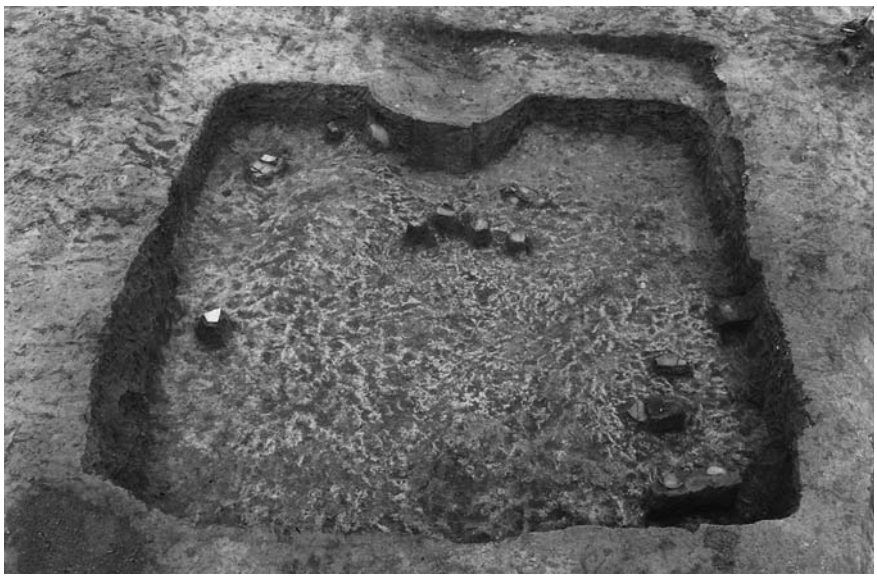
第2524A号住居跡
遺物出土状況

第2524A号住居跡竈
完　掘　状　況

第2524B号住居跡
完　掘　状　況

第2524B号住居跡竈
完　掘　状　況

第2527号住居跡
完掘状況

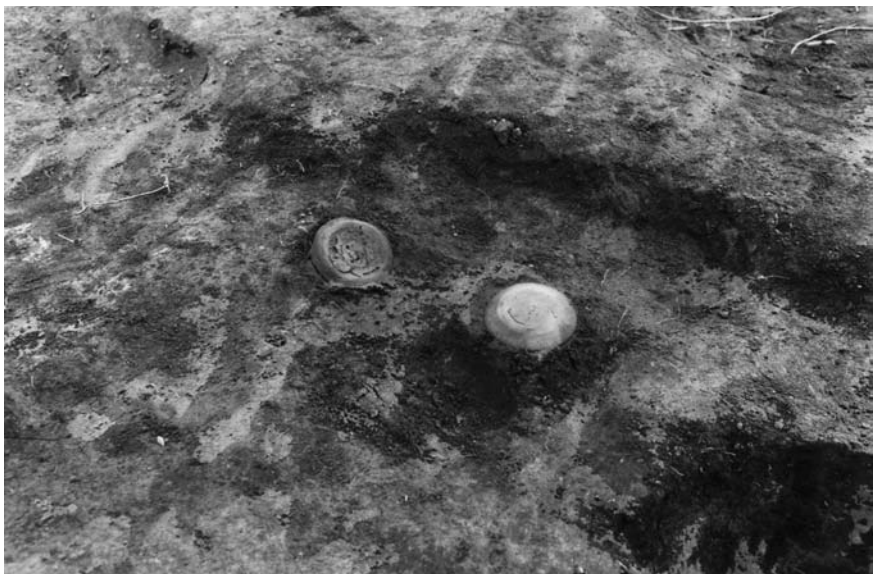


第2534号住居跡
遺物出土状況

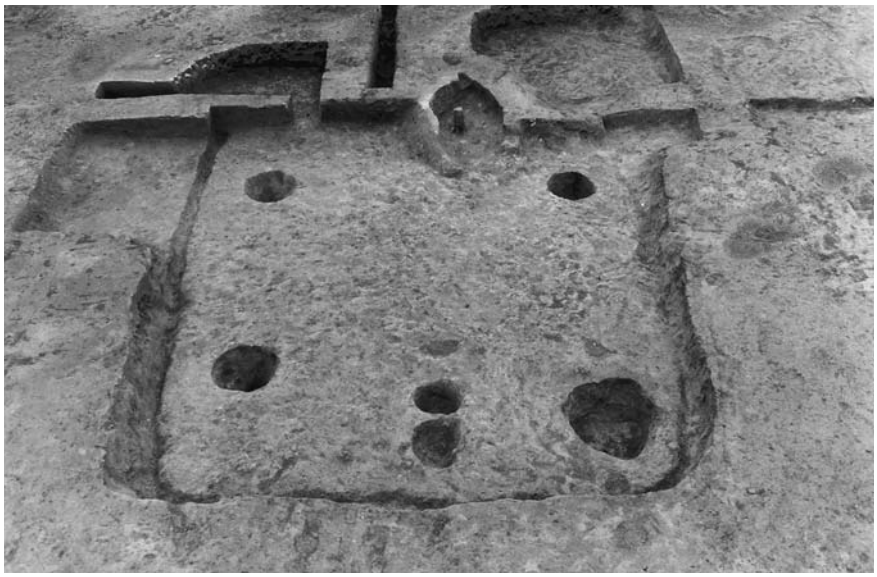
第2534号住居跡
鉄製品出土状況

第2535号住居跡竈
遺物出土状況

第2539号住居跡竈
完掘状況



第2541号住居跡
遺物出土状況



第2543号住居跡
完　掘　状　況

第2543号住居跡
遺物出土状況

第2550号住居跡
完　掘　状　況

第2550号住居跡
遺物出土状況

第2550号住居跡
遺物出土状況

第2550号住居跡竈1
遺物出土状況

第2550号住居跡竈2
完　掘　状　況

第4132号土坑
完　掘　状　況

第4152A・B号土坑
完　掘　状　況

SI 2523-86

SI 2522-93

SI 2529-102

SI 2531-104

SI 2523-87

SI 318-85

SI 2523-91

SI 2523-91

第318・2522・2523・2529・2531号住居跡出土土器

SI 2531-103

SI 2531-105

SI 2524-110

SI 2524-111

SI 2528-98

SI 2528-100

SI 2523-90

SI 2523-90

第2523・2524・2528・2531号住居跡出土土器

SI 2524-112

SI 2524-113

SI 2525-114

SI 2525-115

SI 2525-117

SI 2525-116

SI 2525-120

SI 2525-120

第2524・2525号住居跡出土土器

SI 2534-136

SI 2546-190

SI 2534-137

SI 2537-142

SI 2537-143

SI 2537-144

SI 2537-145

SI 2537-146

SI 2525-118

SI 2525-119

第2525・2534・2537・2546号住居跡出土土器

SI 2543-174

SI 2538-158

SI 2535-140

SI 2543-177

SI 2550-216

SI 2550-219

SI 2537-152

SI 2534-139

第2534・2535・2537・2538・2543・2550号住居跡出土土器

SI 2537-151

SK 4152B-234

SI 2543-175

SI 2547-194

遺構外-237

SI 2547-195

SI 2548-207

遺構外-240

SI 2547-200

SI 2537-147

第2537・2543・2547・2548号住居跡，第4152B号土坑，遺構外出土土器

SI 2550-221

SI 2550-220

SI 2550-222

SI 2550-223

SI 2550-224

SI 2550-226

SI 2550-227

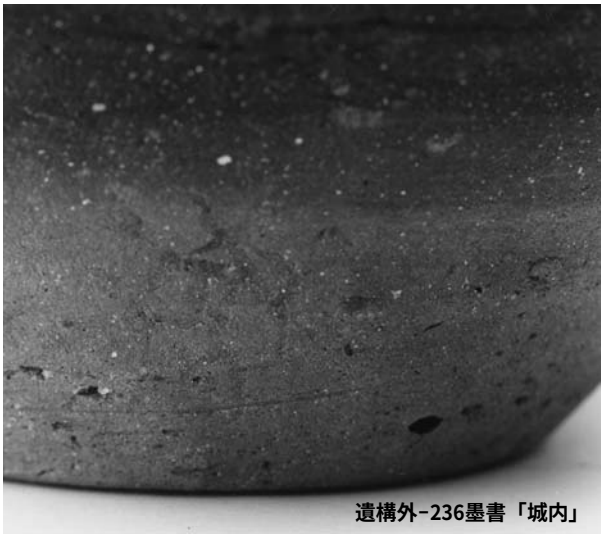
SI 2550-228

SI 2550-229

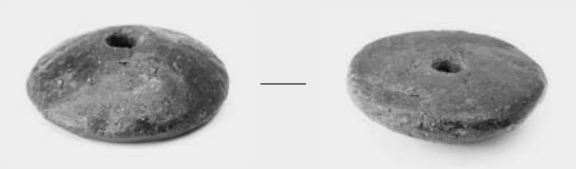
SI 2539-164箆書き「大ヵ」

SI 2545-188箆書き「大ヵ」

遺構外-239刻書「川」


遺構外-236墨書「城内」

第2539・2545・2550号住居跡，遺構外出土土器



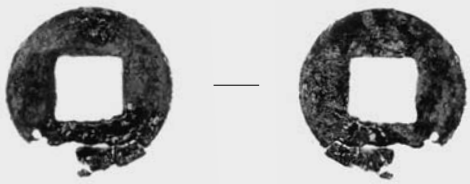
SI 2548 DP12

SI 2546-Q13

SK 4152A DP13

SK 4152A DP14

SI 2539-M35



SI 2547-M39

SI 2550-M40

SI 2546-M36

SI 2538-M32

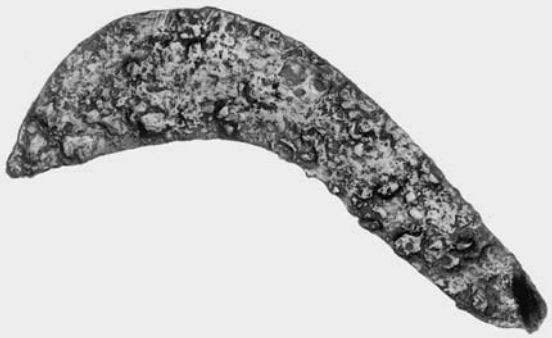
SI 2534-M29

SI 2547-M38

出土土製品・石器・石製品・鉄製品

SI 2528-M24 SI 2522-M22 SI 2538-M33 SI 2529-M26

SI 2546-M37



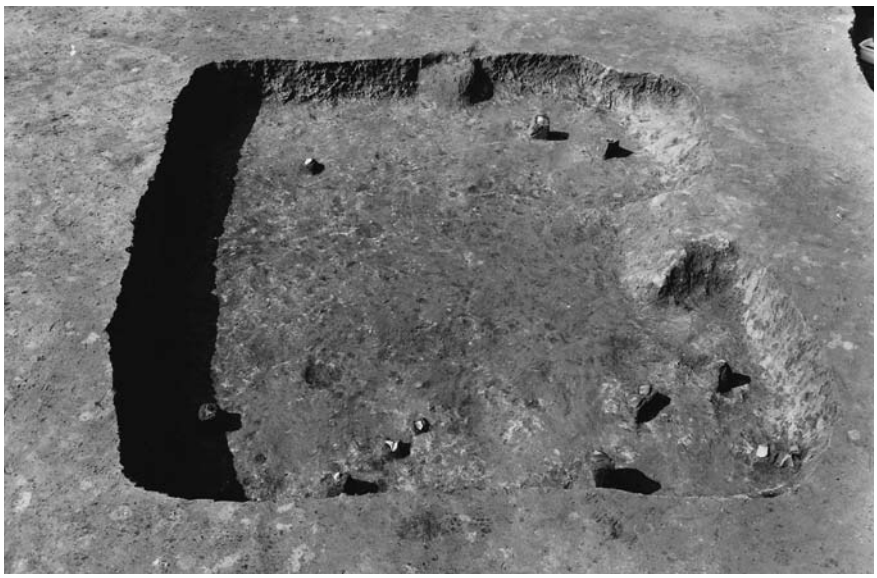
SI 2537-M31

SI 2534-M30

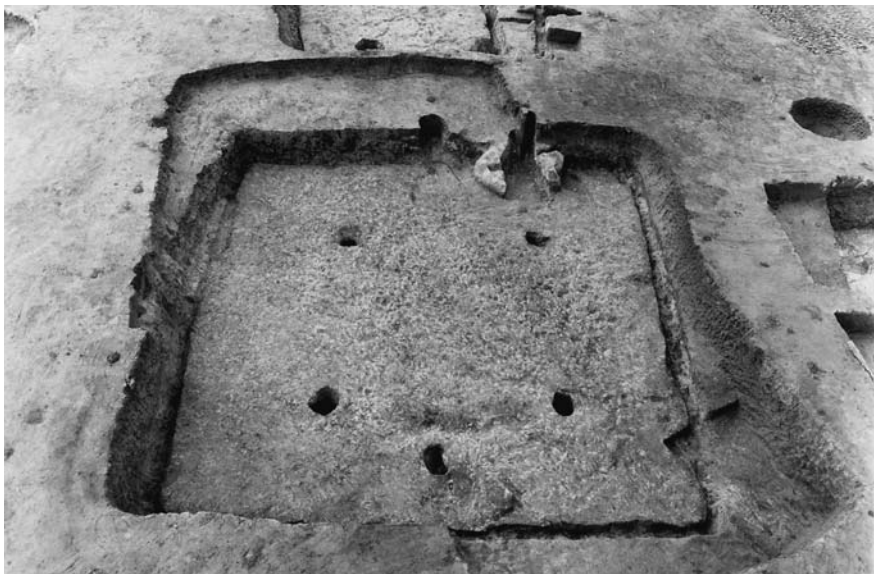
出土鉄製品

第9区
完掘状況

第2504号住居跡
完掘状況



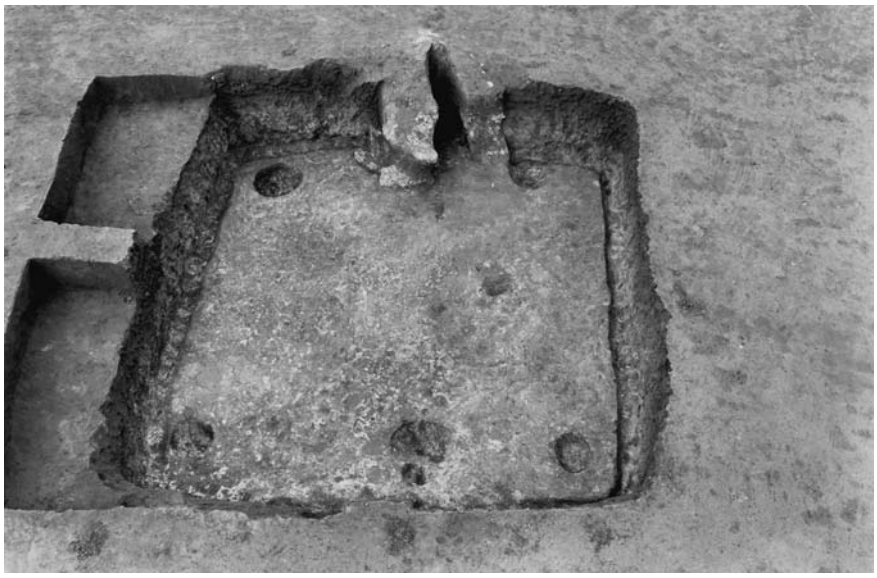
第2504号住居跡
遺物出土状況



第2516号住居跡
完掘状況

第2516号住居跡
竈1遺物出土状況

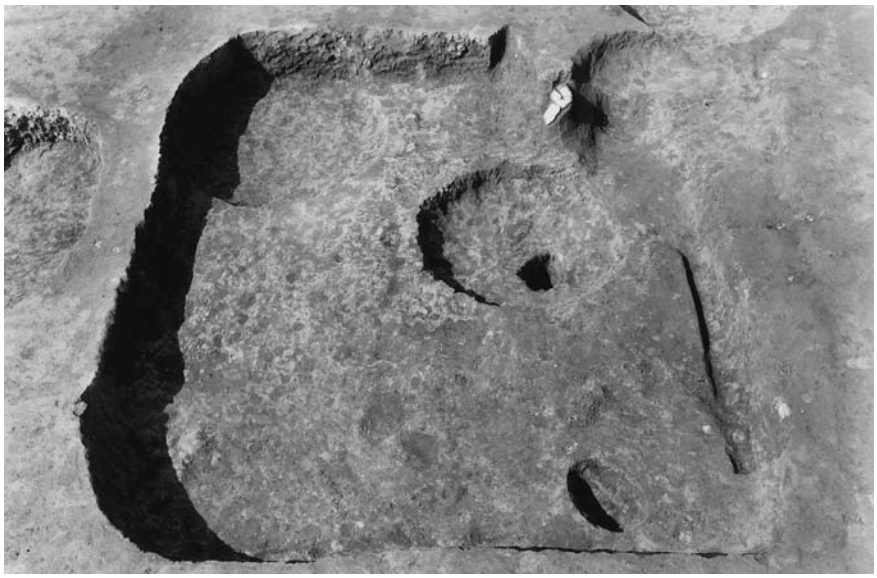
第2516号住居跡
竈2完掘状況



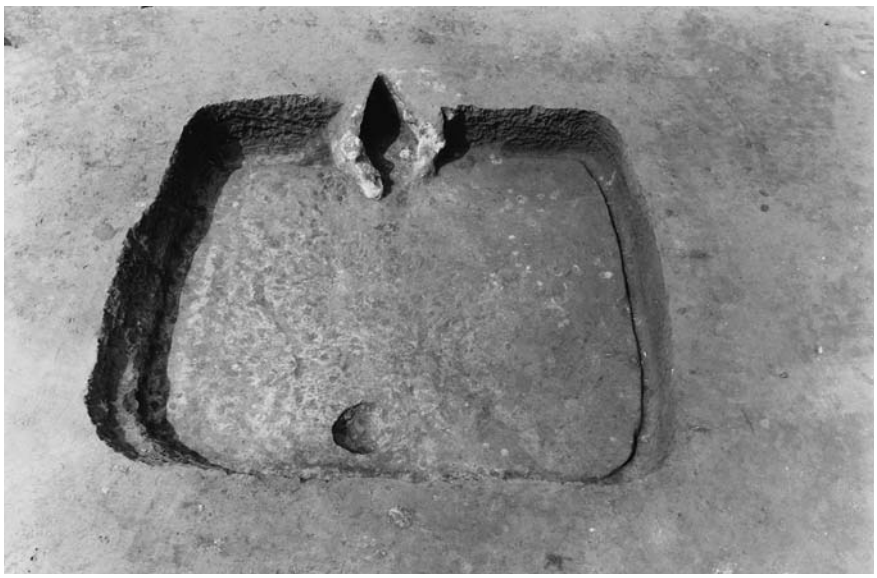
第2508号住居跡
完掘状況

第2508号住居跡
遺物出土状況

第2508号住居跡
遺物出土状況



第2503号住居跡
完掘状況



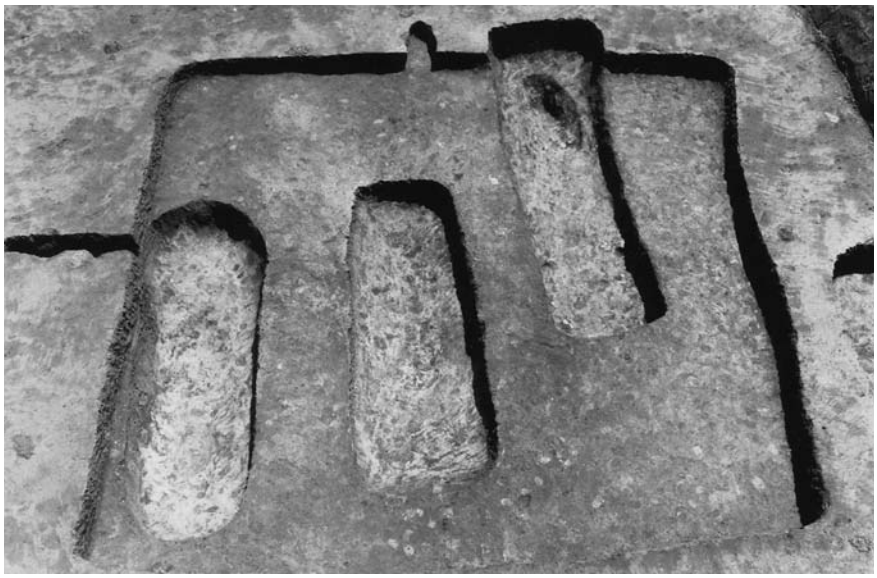
第2507号住居跡
完掘状況

第2507号住居跡
遺物出土状況

第2515号住居跡
完　掘　状　況

第2519号住居跡
完　掘　状　況

第2519号住居跡竈
完　掘　状　況

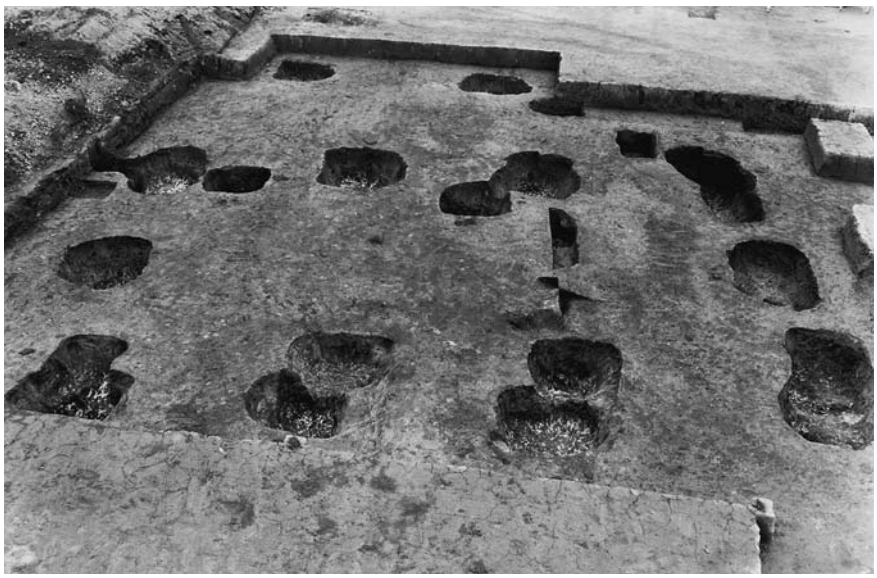


第2509号住居跡
完掘状況

第2521号住居跡
完掘状況

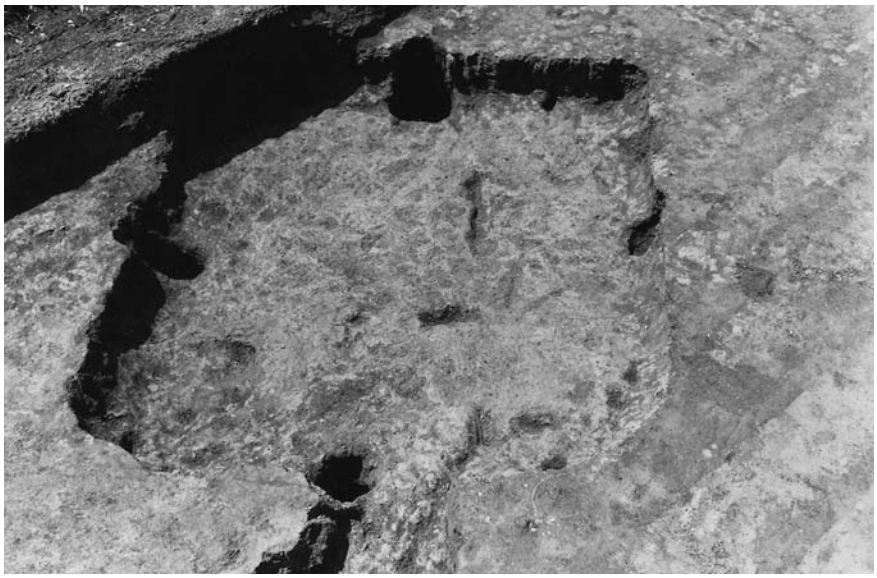
第2521号住居跡
遺物出土状況

第454号掘立柱建物跡
完　掘　状　況



第451・452号
掘立柱建物跡
完　掘　状　況

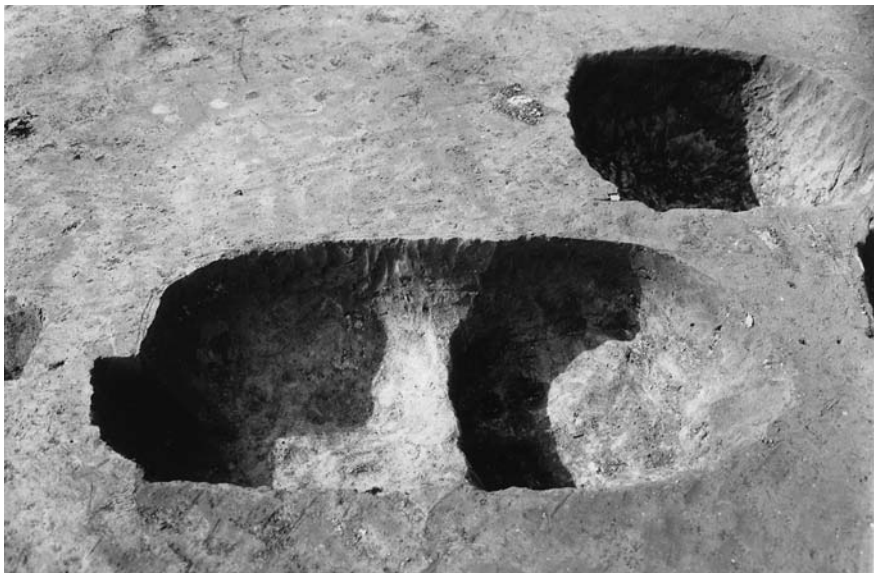
第450号掘立柱建物跡
完　掘　状　況



第69号方形竪穴掘立遺構
完　掘　状　況

第 7 号道路跡
完　掘　状　況

第 7 号道路跡
完　掘　状　況

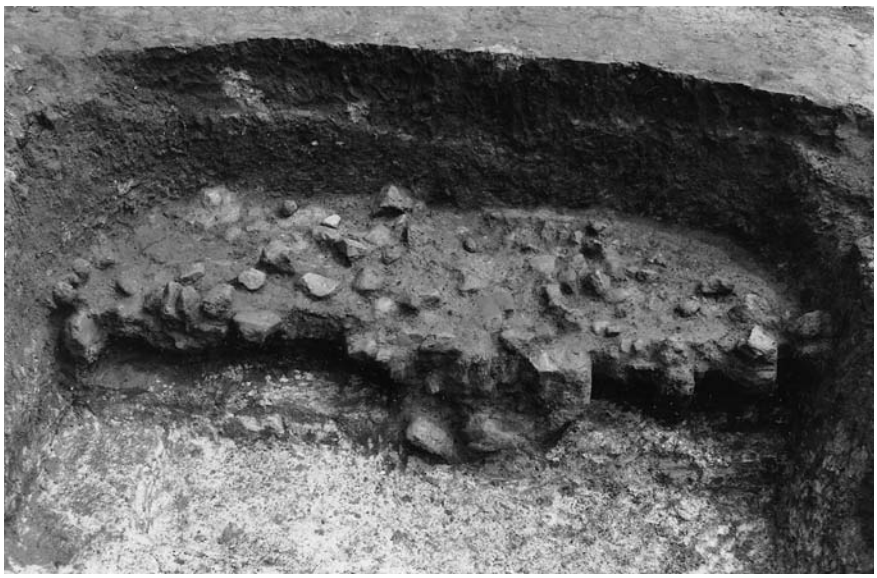


第4125号土坑
完掘状況

第4125号土坑
遺物出土状況

第4127号土坑
完掘状況

第 681 号 土 坑
完 掘 状 況



第 681 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 681 号 土 坑
土 層 断 面 状 況

SI 2516-254

SI 2503-276

SI 2503-274

SI 2511-318

SI 2508-303

SI 2507-295

SI 2512-322

SI 2508-302

SI 2507-290

SI 2512-323

第2503・2507・2508・2511・2512・2516号住居跡出土土器

SI 2514-327

SI 2521-341

SI 2521-342

SI 2507-296

SI 2507-298

SI 2508-304

SI 2508-305

SK 4086-356

SI 2519-335墨書「□」

SI 2508-309

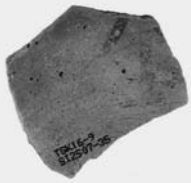
SI 2519-340

第2507・2508・2514・2519・2521号住居跡，第4086号土坑出土土器

SK 4080-355

SK 4073-352

遺構外-367



SI 2507-294墨書「口上」

SK 4125-363

SI 2515-329

SB 453-348

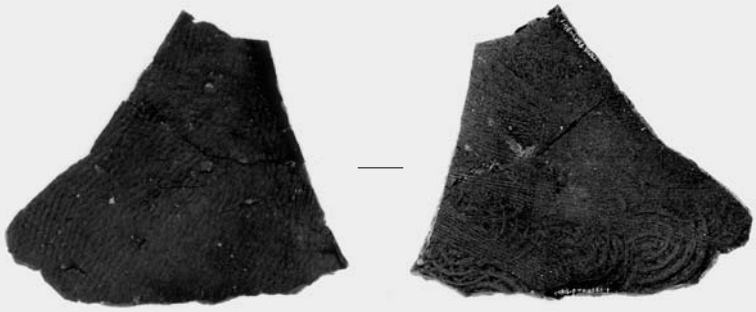
SK 4125-364

SB 454-349

第2507・2515号住居跡，第4073・4080・4125号土坑，第453・454号掘立柱建物跡，遺構外出土土器

遺構外-DP23

SI 2504-DP15



SK4086-TP18

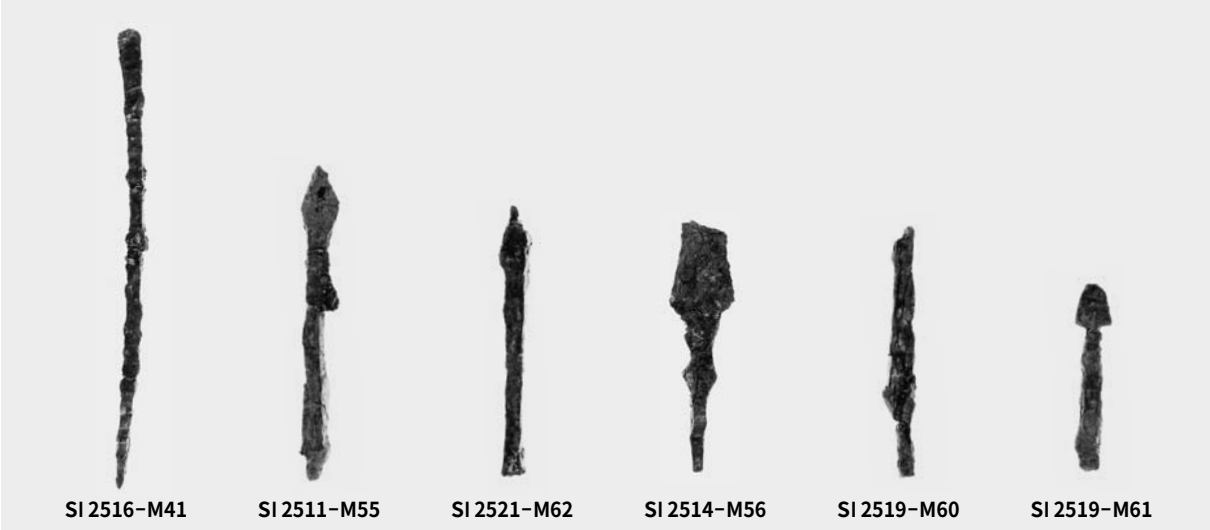
SI 2508-307墨書「主」

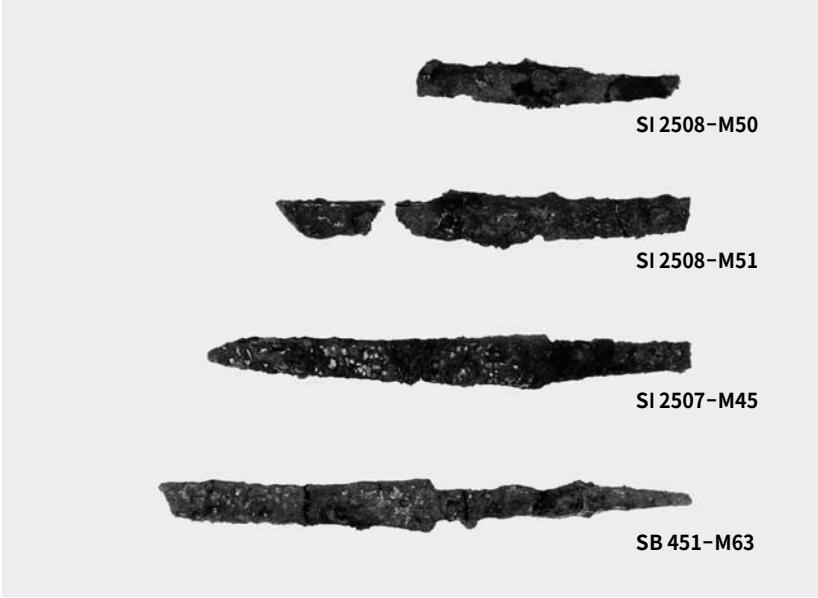
SK 4117-360箆書き「□」

SK 4125-363墨書「区」

SI 2515-328墨書「地田ヵ」

第2508・2515号住居跡，第4086・4117・4125号土坑出土土器，出土土製品





出土土製品，石製品，鉄製品

SK 4125-M66

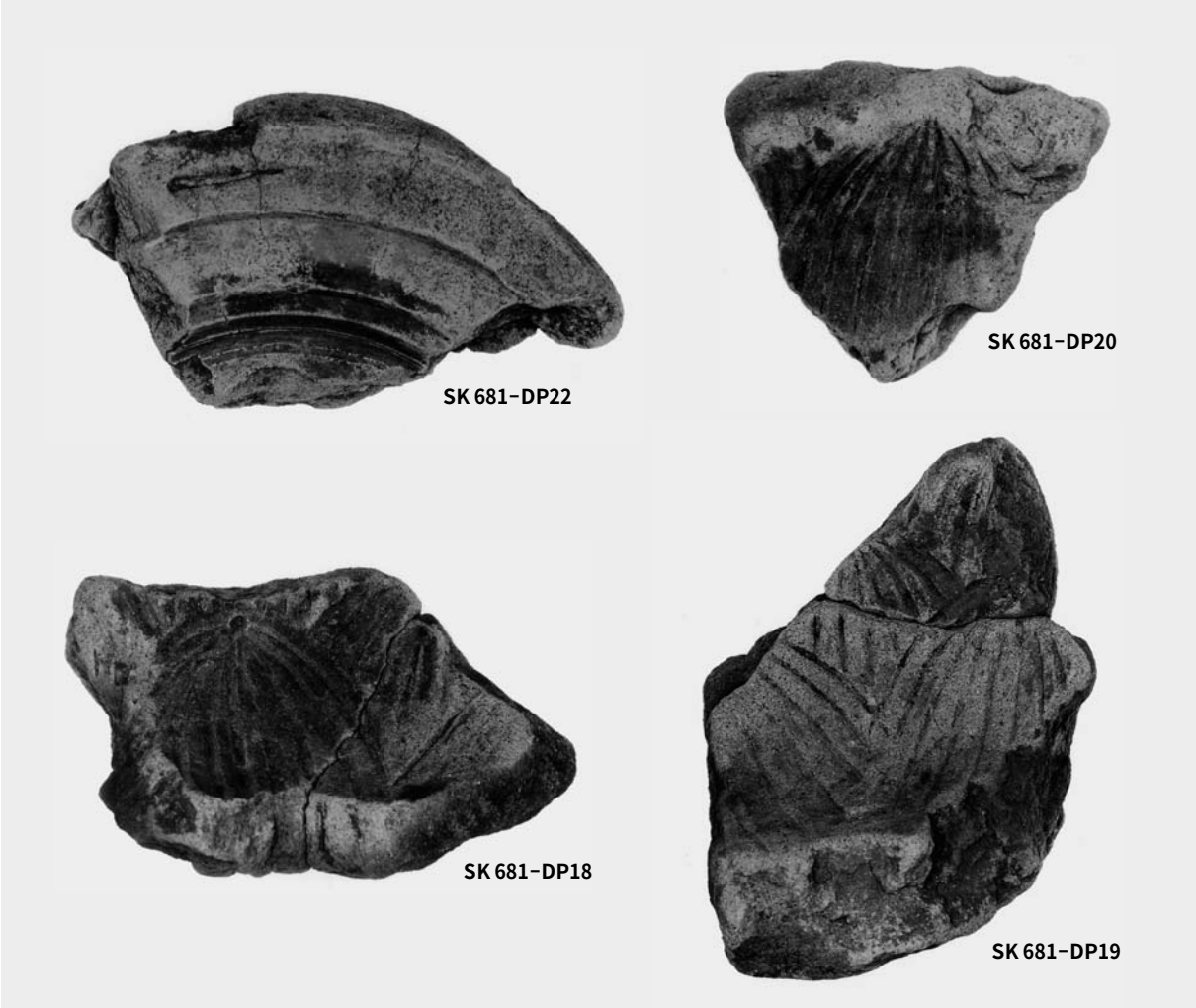
SK 4125-M67

SK 4125-M68

SK 4127-M71

SK 4127-M72

遺構外-M82


SK 681-DP22

SK 681-DP20

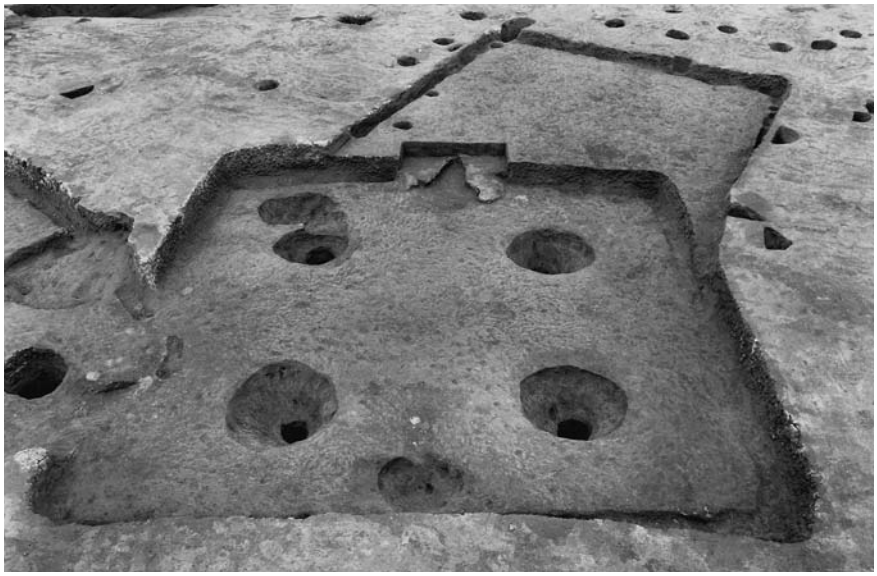
SK 681-DP18

SK 681-DP19

出土鋳型片，鉄滓

第14区中央部
完掘状況

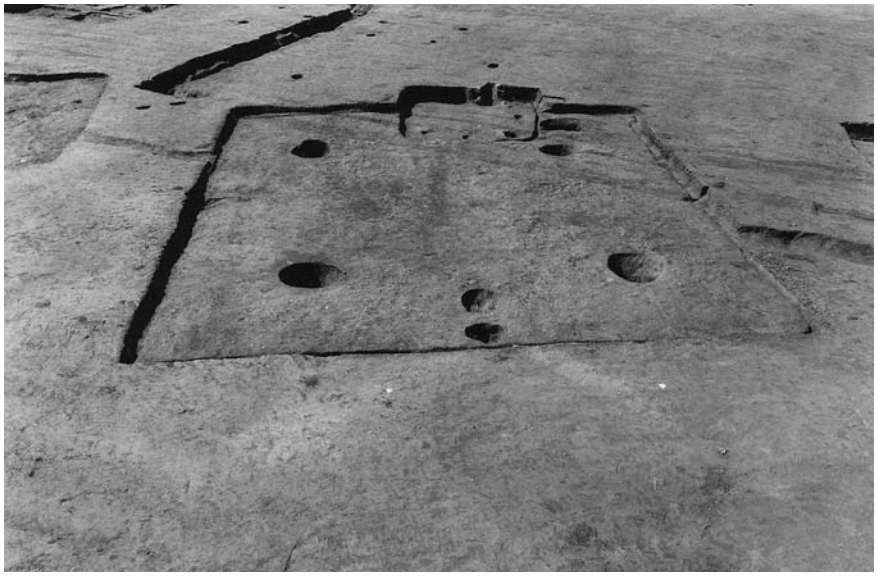
第14区南部
完掘状況



第2414号住居跡
完掘状況

第2400号住居跡
完　掘　状　況

第2400号住居跡
遺物出土状況



第2418・2419号住居跡
完　掘　状　況

第2411号住居跡
完掘状況

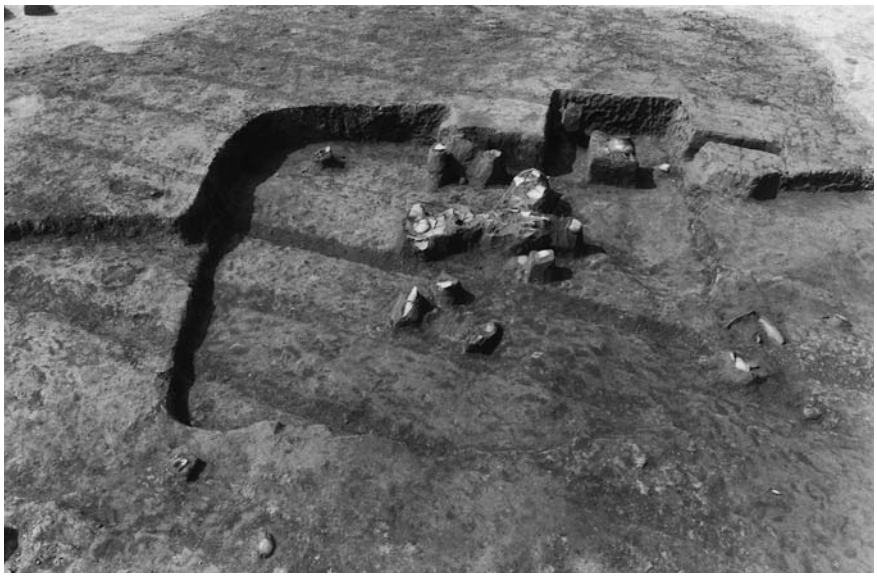
第2411号住居跡竈
遺物出土状況

第2411号住居跡
遺物出土状況

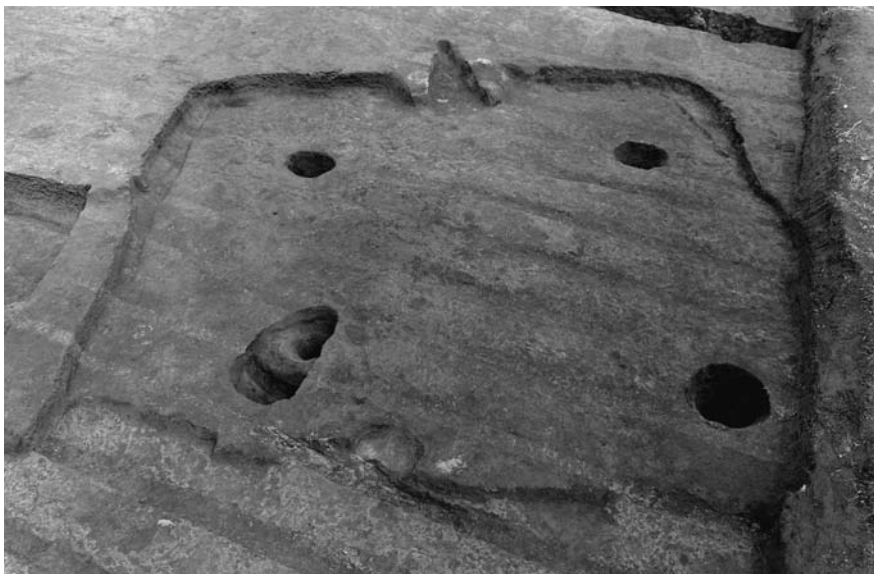
第2416号住居跡
完　掘　状　況

第2416号住居跡竈
完　掘　状　況

第2418号住居跡
完　掘　状　況



第2418号住居跡
遺物出土状況

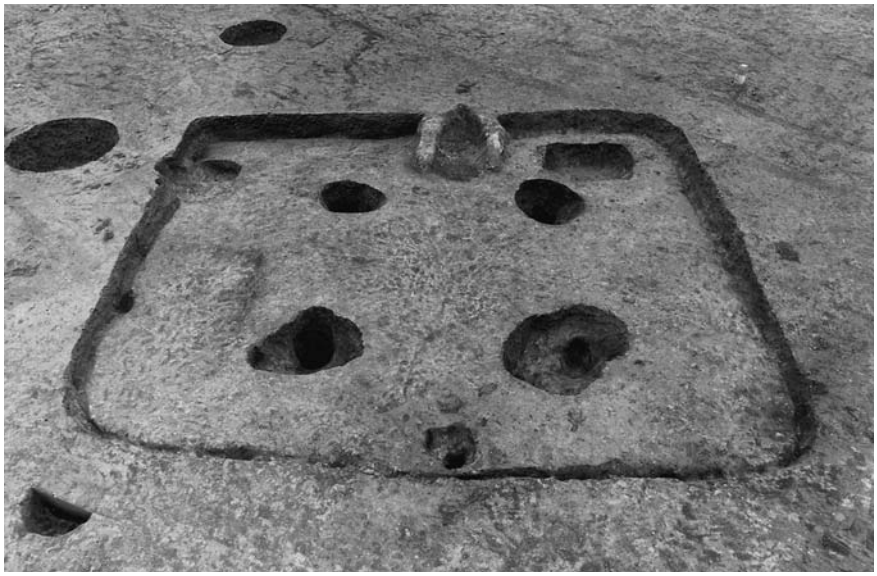


第2420号住居跡
完掘状況

第2420号住居跡竈
遺物出土状況

第2421号住居跡
完　掘　状　況

第2421号住居跡
遺物出土状況

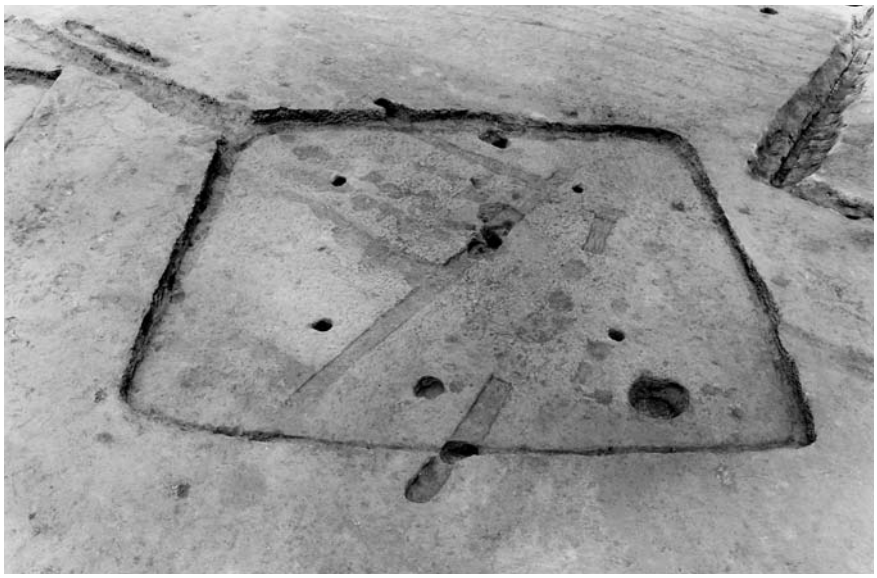


第2427号住居跡
完　掘　状　況

第2425号住居跡
完掘状況

第2425号住居跡
遺物出土状況

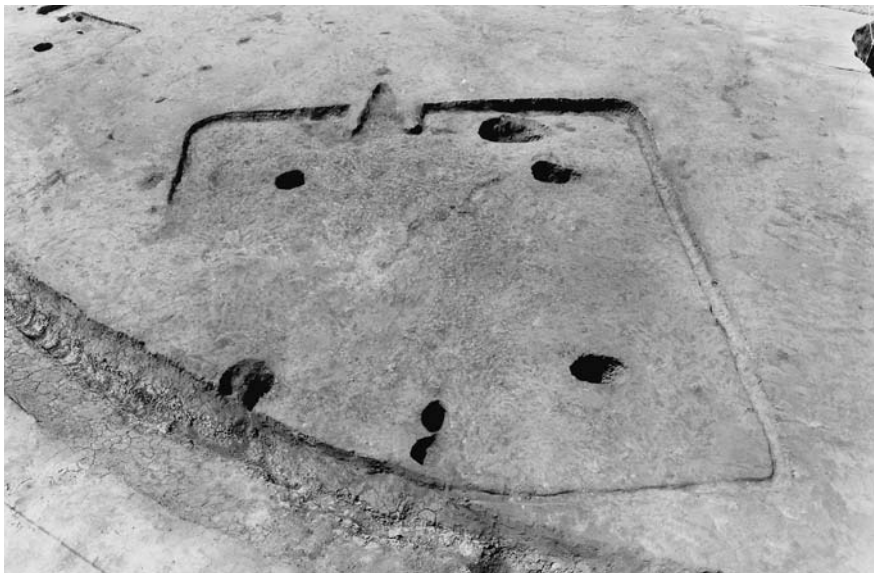
第2438号住居跡
遺物出土・完掘状況



第 2432 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第2432号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況

第 2432 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第2435号住居跡
完掘状況

第2435号住居跡
遺物出土状況

第2435号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況

第2404号住居跡
完　掘　状　況

第2404号住居跡竈
遺物出土状況

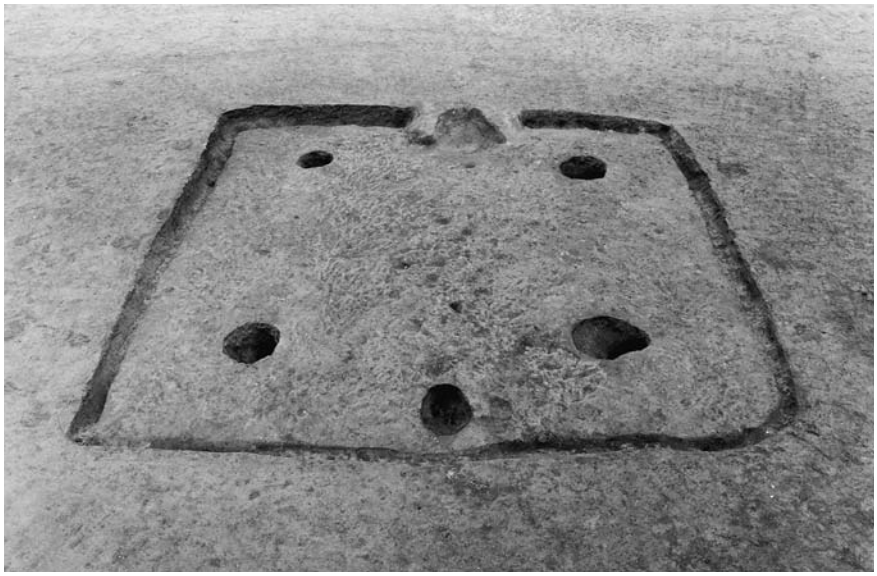
第2406号住居跡
完　掘　状　況

第2407号住居跡
完　掘　状　況

第2407号住居跡竈
完　掘　状　況

第2408・2409号住居跡
完　掘　状　況

第2415号住居跡
完　掘　状　況



第2428号住居跡
完　掘　状　況

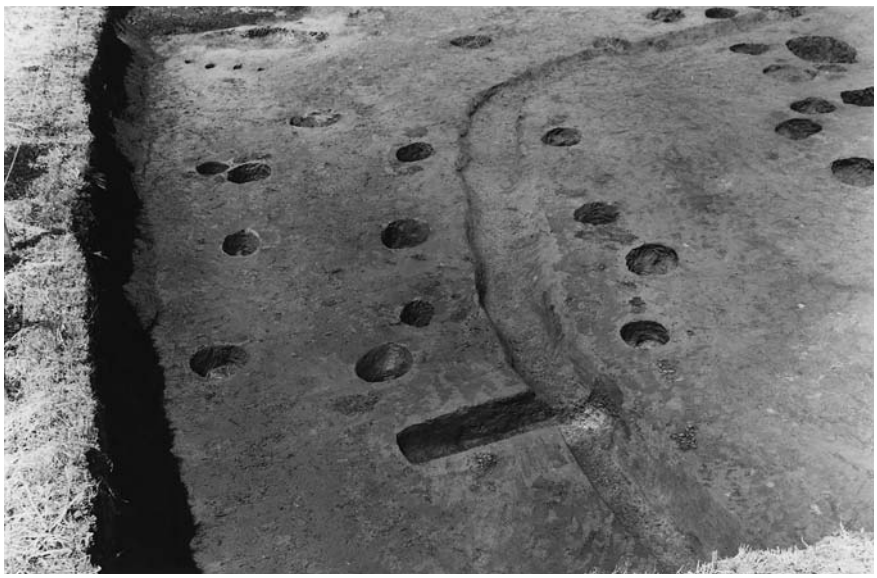
第2428号住居跡
掘り方完掘状況

第2437号住居跡
完掘状況

第47号地下式壙
完掘状況

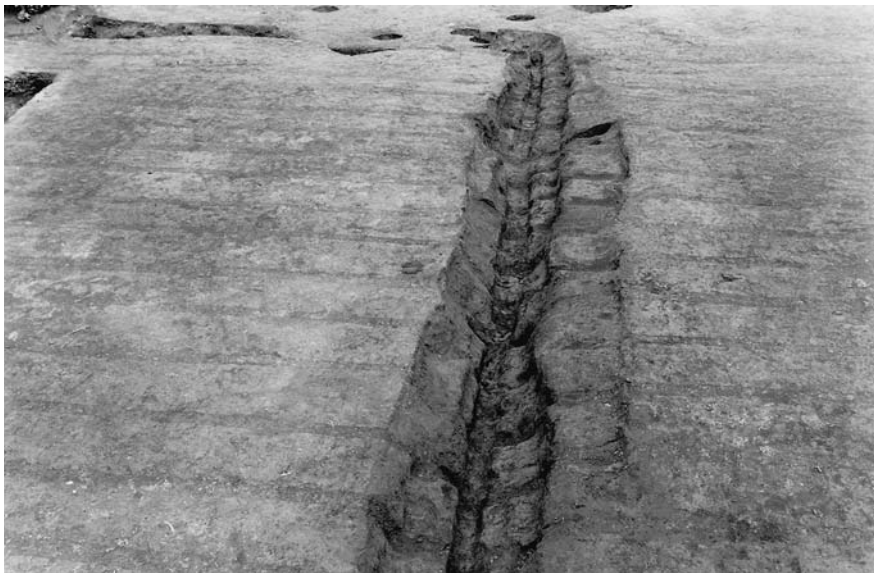
第48号地下式壙
完掘状況

第427号掘立柱建物跡
完　掘　状　況



第430号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第431号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

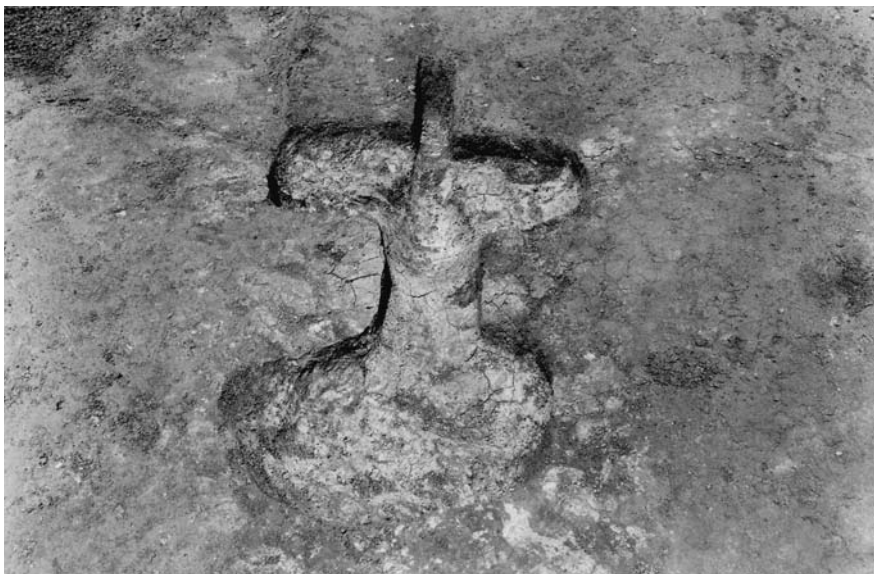


第 138 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 141 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 144 号 溝 跡
完 掘 状 況

第 3412 号 土 坑
完 掘 状 況



第 3385 号 土 坑
完 掘 状 況

第3449・3552号土坑
完 掘 状 況

SI 2413-482

SI 2425-434

SI 2418-408

SI 2432-440

SI 2419-416

SI 2418-409

SI 2432-444

SI 2432-443

第2413・2418・2419・2425・2432号住居跡出土土器

SI 2400-375

SI 2400-378

SI 2400-376

SI 2403-385

SI 2400-372

SI 2400-374

SI 2400-377

SI 2400-373

SI 2400-384

SI 2400-384

第2400・2403号住居跡出土土器

SI 2411-394

SI 2411-393

SI 2411-391

SI 2411-392

SI 2400-380

SI 2400-383

SI 2400-382

SI 2400-379

第2400・2411号住居跡出土土器

SI 2416-405

SI 2411-395

SI 2441-466

SI 2423-429

SI 2411-399

SI 2411-399

SI 2411-400

SI 2411-400

第2411・2416・2423・2441号住居跡出土土器

SI 2420-418

SI 2425-432

SI 2411-396

SI 2423-430

SI 2411-397

SI 2421-426

SI 2400-381

SI 2411-398

第2400・2411・2420・2421・2423・2425号住居跡出土土器

SI 2425-433

SI 2421-421

SI 2435-448

SI 2421-422

SI 2414-404

SI 2414-404

SI 2421-427

SI 2421-427

第2414・2421・2425・2435号住居跡出土土器

SI 2435-450

SI 2435-449

SI 2435-447

SI 2435-453

SI 2435-451

SI 2435-452

SI 2435-456

SI 2435-457

第2435号住居跡出土土器

SI 2412-498

SI 2404-469

SI 2407-475

SI 2415-484

SI 2435-459

SI 2435-459

SI 2435-454

SI 2404-470

第2404・2407・2412・2415・2435号住居跡出土土器

遺構外-TP31

遺構外-TP33

遺構外-TP32

遺構外-TP34

遺構外-DP48

遺構外-DP47

遺構外-DP46

SI 2440-DP42

SI 2411-DP28

SI 2425-DP41

SI 2420-DP34

SI 2422-DP39

SI 2406-Q32

SD 148-Q38

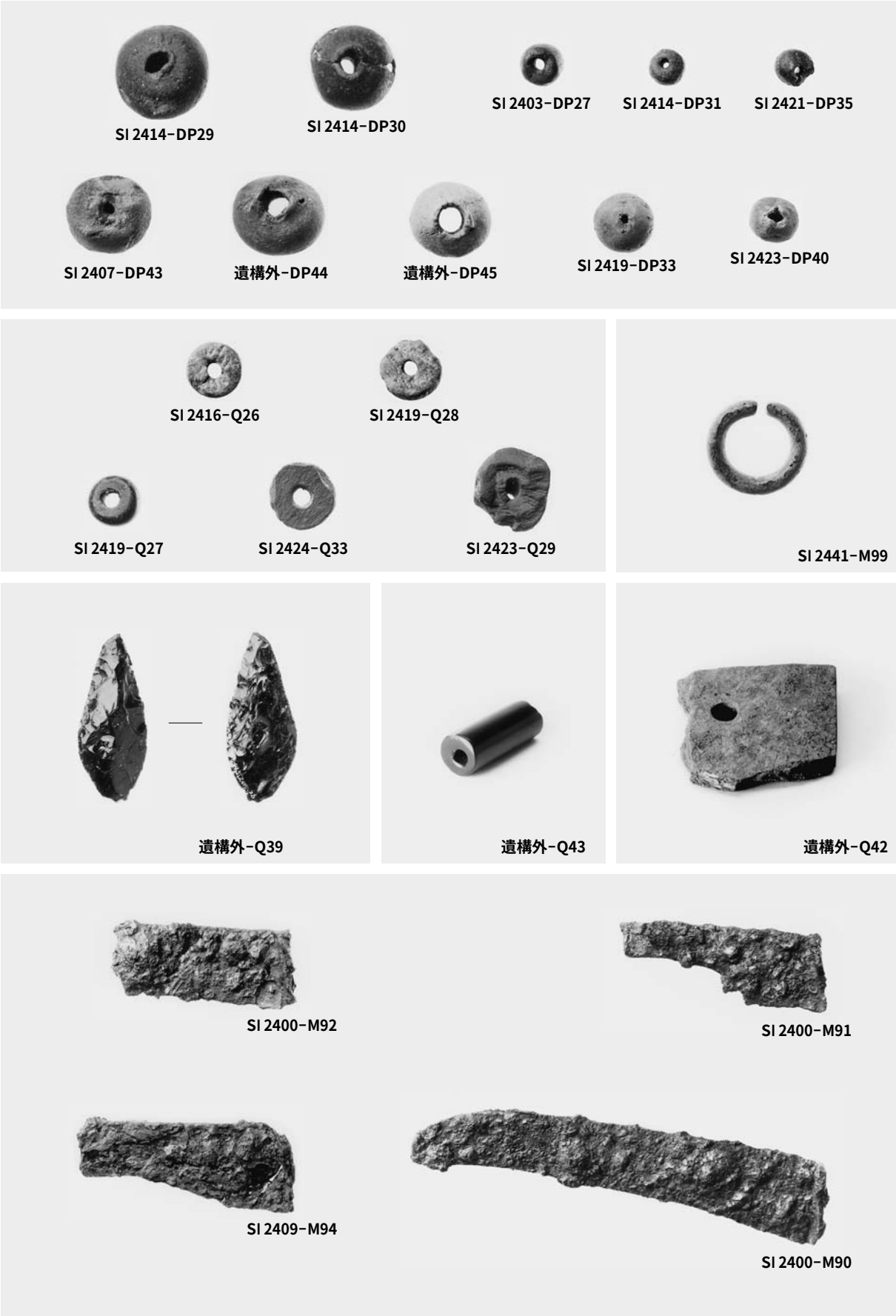
遺構外-Q41

SK 47-Q35

SD 139-Q36

SI 2430-Q30

出土土器・土製品・石器



出土土製品・石器・石製品・鉄製品・銅製品

SI 2427-M97

SI 2437-M104

SI 2437-M103

SK3398-M106

遺構外-M111

SI 2429-M98

SK 3412
-M105

SI 2415-M102

遺構外-M110

遺構外-M113

遺構外-M109

SI 2400-M84

SI 2400-M89

SI 2400-M87

SI 2400-M85・86

SI 2411-M96

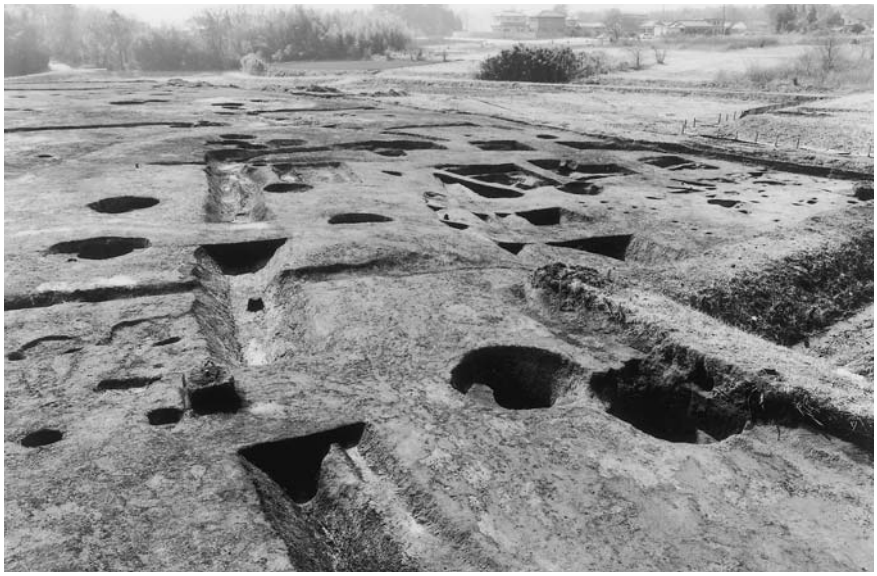
SK 3429-M107

SK 3511-M108

出土鉄製品・銅製品

第 16 区 東 部
完 掘 状 況

第 16 区 南 部
完 掘 状 況



第 16 区 北 西 部
完 掘 状 況

第2594号住居跡
完掘状況

第2596号住居跡
完掘状況

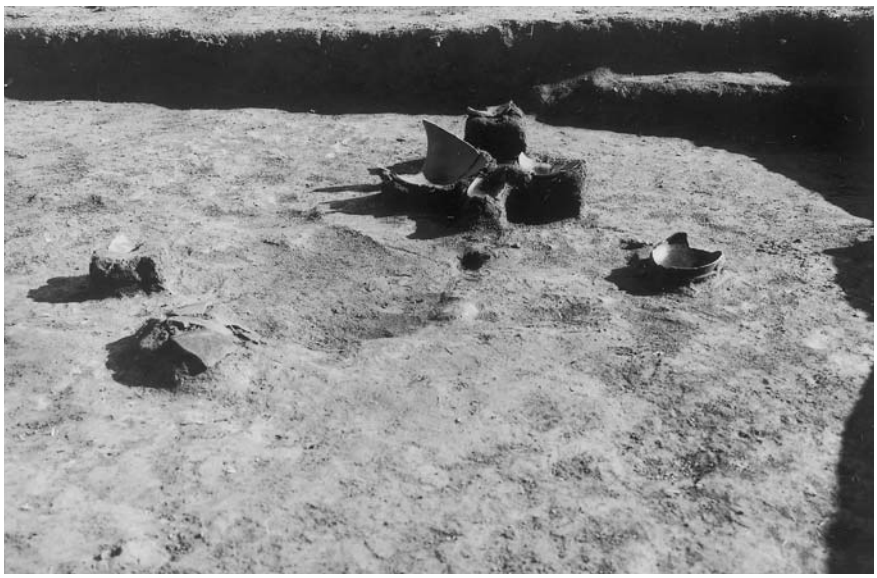
第2596号住居跡竈
完掘状況

第2601号住居跡
完　掘　状　況

第2601号住居跡
遺物出土状況

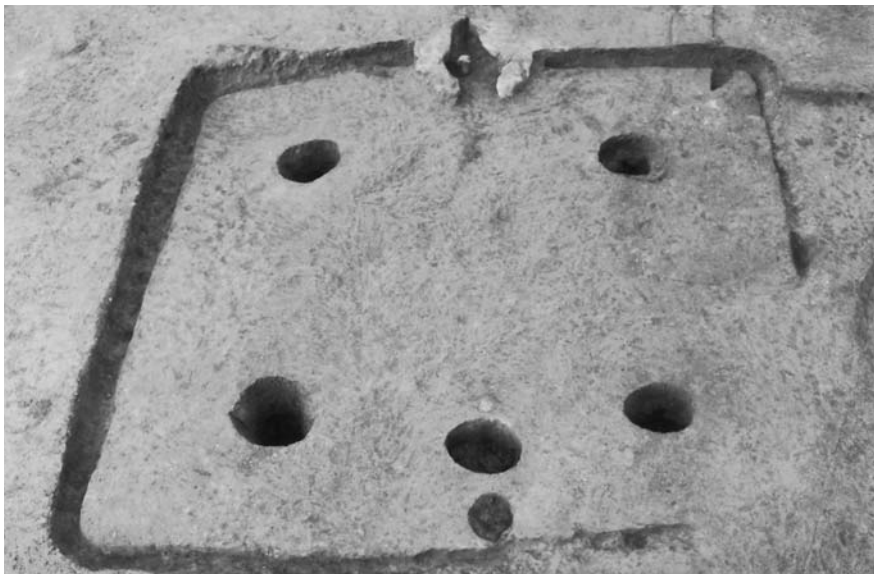
第2609号住居跡
完　掘　状　況

第 2609 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



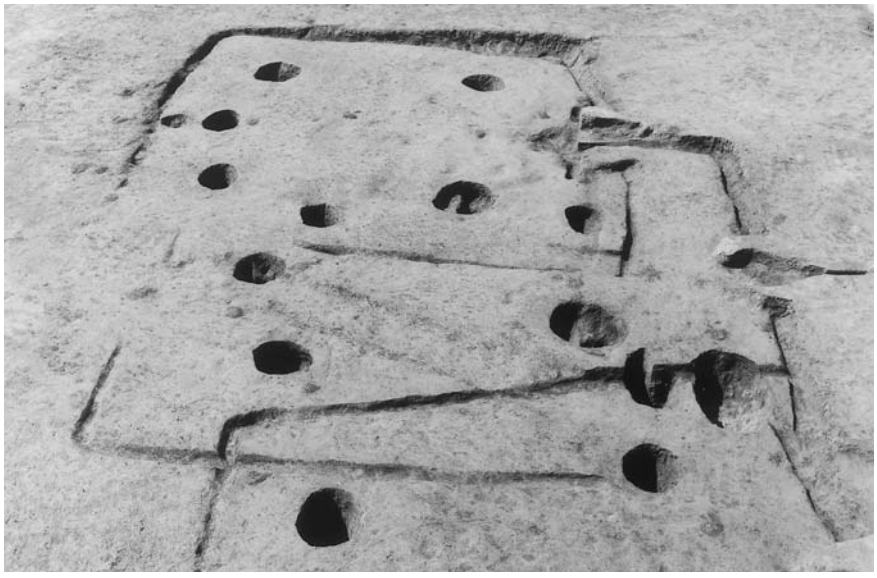
第 2609 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第2609号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況



第2624号住居跡
完　掘　状　況

第2624号住居跡竈
完　掘　状　況



第2625号住居跡
完　掘　状　況

第2625号住居跡
遺物出土状況

第2625号住居跡竈
遺物出土状況

第2635号住居跡
完掘状況

第2657号住居跡
完掘状況

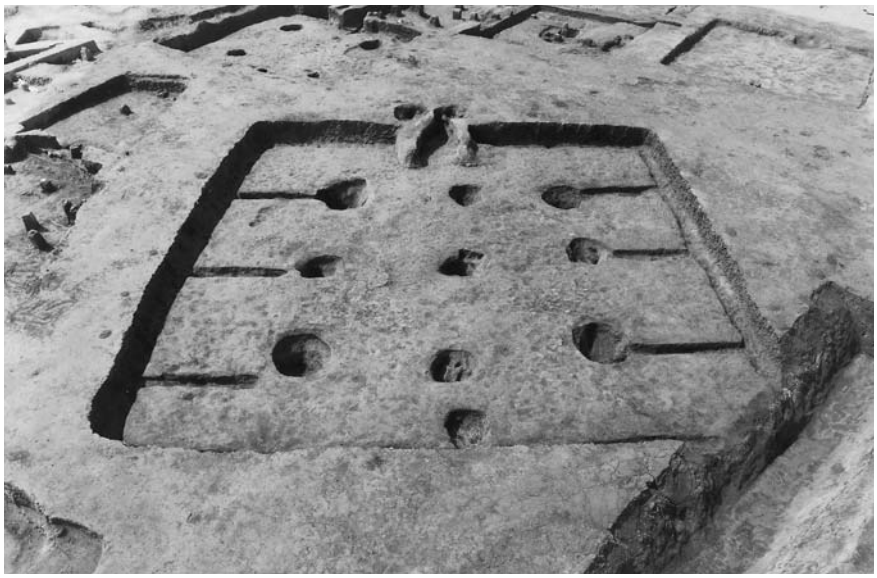
第2657号住居跡
遺物出土状況

第2657号住居跡
遺物出土状況

第2657号住居跡竈
完　掘　状　況

第2671号住居跡
完　掘　状　況

第2671号住居跡竈
遺物出土状況



第2666号住居跡
完　掘　状　況

第2666号住居跡
遺物出土状況

第2666号住居跡竈
遺物出土状況

第2666号住居跡竈
完　掘　状　況

第2675号住居跡
完　掘　状　況

第2677号住居跡
完　掘　状　況

第2681号住居跡
完掘状況

第2681号住居跡
遺物出土状況

第2681号住居跡
遺物出土状況

第 2681 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第2681号住居跡貯蔵穴
遺 物 出 土 状 況

第2681号住居跡竈
遺 物 出 土 状 況

第2685号住居跡
遺物出土状況

第2685号住居跡
遺物出土状況

第2685号住居跡
遺物出土状況

第2685号住居跡竈
完　掘　状　況

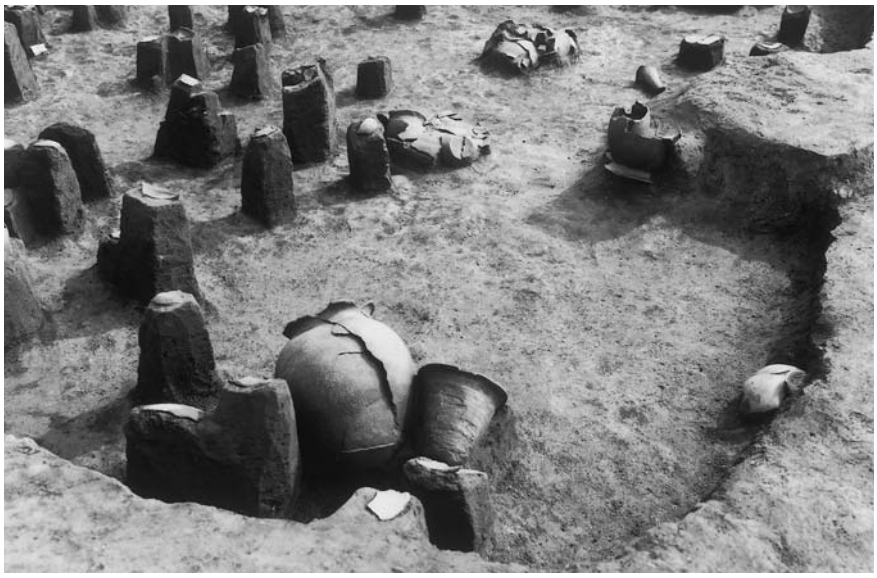
第2693号住居跡
完　掘　状　況

第2693号住居跡
遺物出土状況

第2692号住居跡
遺物出土状況

第2698号住居跡
完掘状況

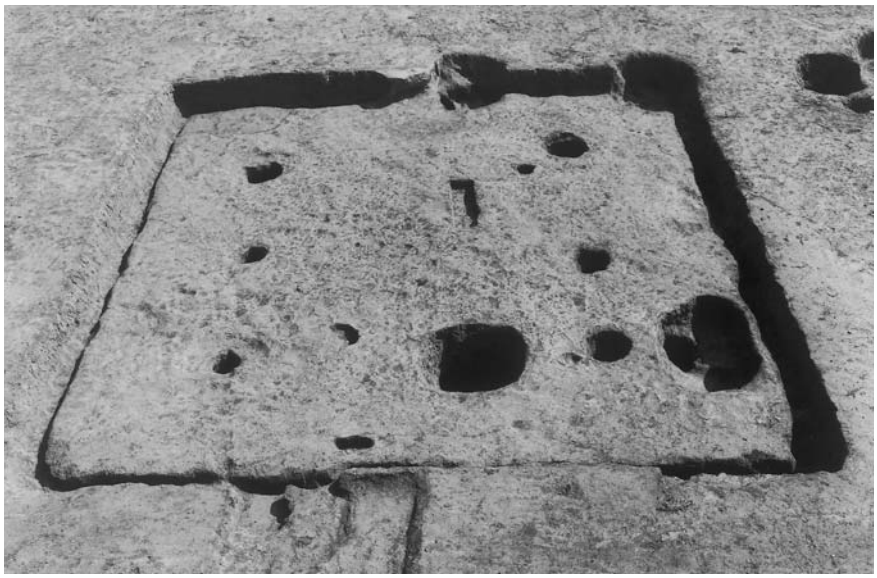
第2698号住居跡
遺物出土状況



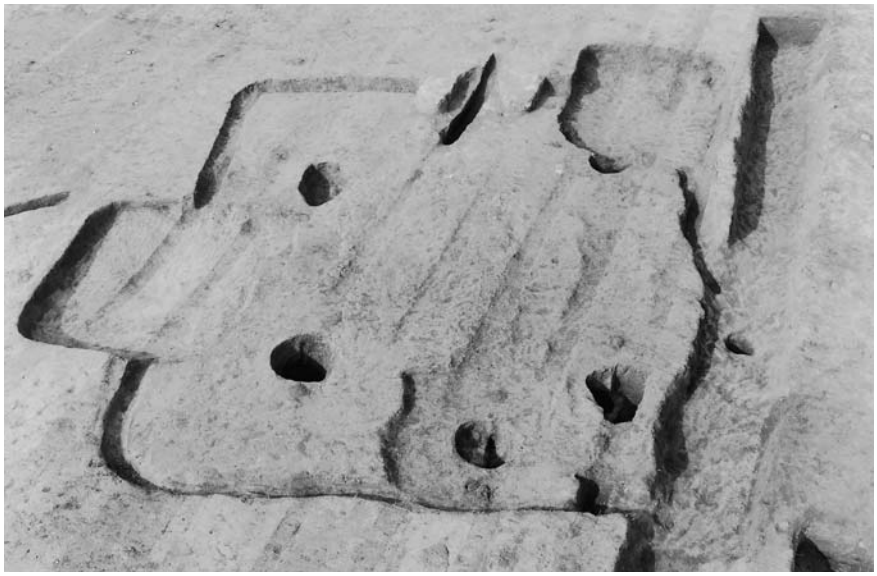
第2698号住居跡
遺物出土状況

第2698号住居跡
遺物出土状況

第2699号住居跡
完掘状況

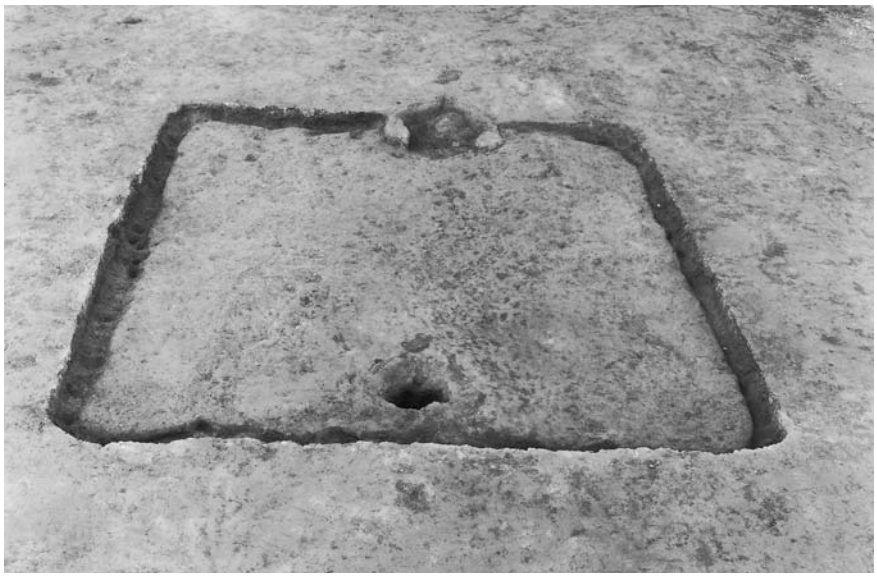


第2631号住居跡
完　掘　状　況



第2613号住居跡
完　掘　状　況

第2613号住居跡
遺物出土状況



第2641号住居跡
完掘状況

第2667号住居跡
完掘状況

第2667号住居跡
遺物出土状況

第2642号住居跡
完　掘　状　況

第2673号住居跡
完　掘　状　況

第2673号住居跡竈
完　掘　状　況

第2605号住居跡
完掘状況

第2605号住居跡竈
遺物出土状況

第2605号住居跡竈
遺物出土状況

第2620号住居跡
完　掘　状　況

第2620号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況

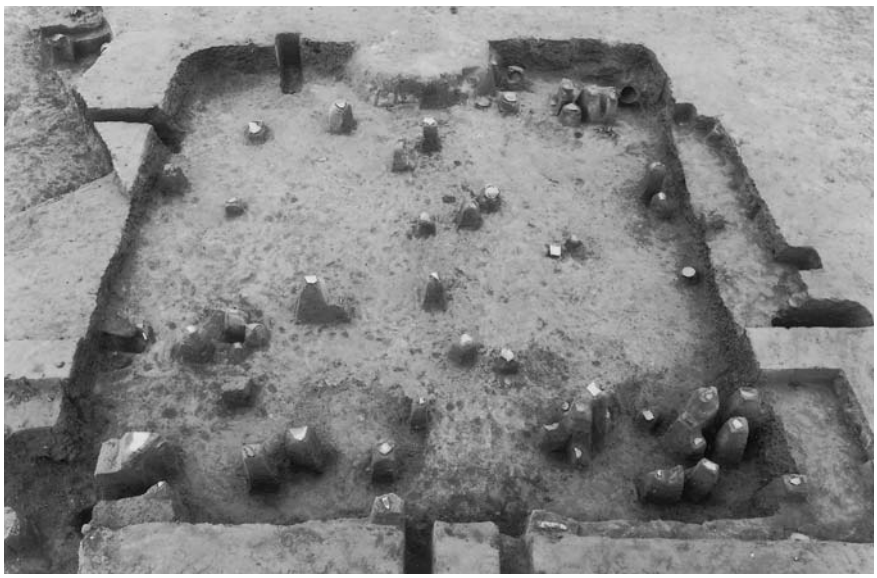
第2623号住居跡
完　掘　状　況

第2619号住居跡
完　掘　状　況

第2619号住居跡竈
遺物出土状況

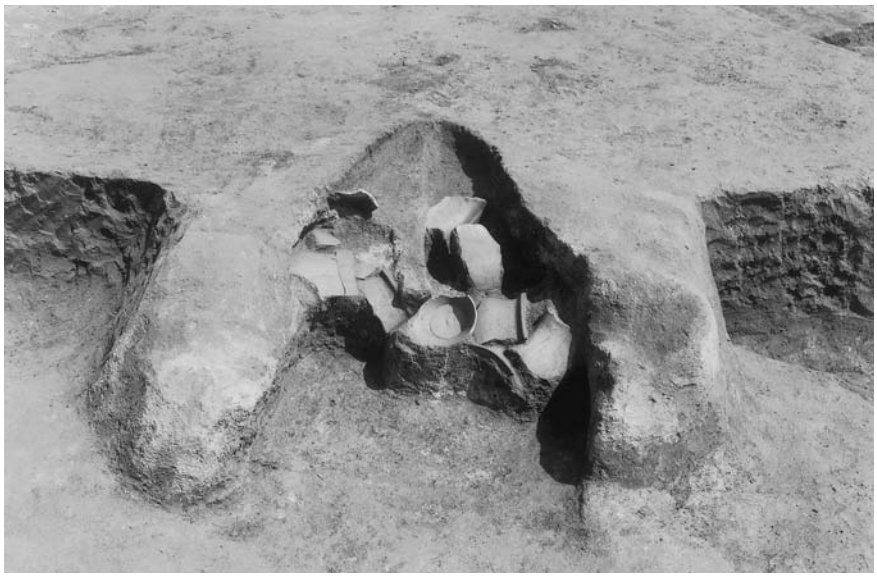
第2665号住居跡
堆　積　状　況

第2670号住居跡
完掘状況



第2670号住居跡
遺物出土状況

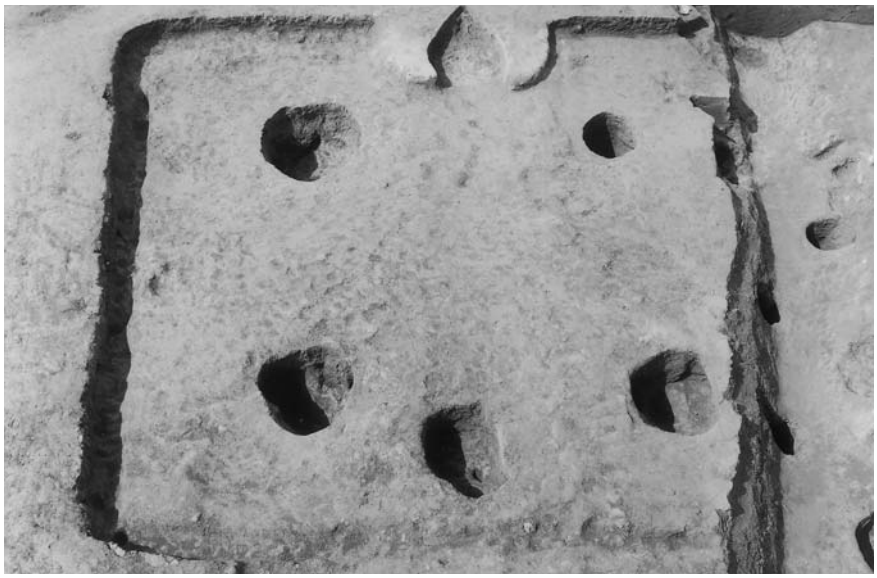
第2670号住居跡
遺物出土状況



第2670号住居跡竈
遺物出土状況

第2691号住居跡
完掘状況

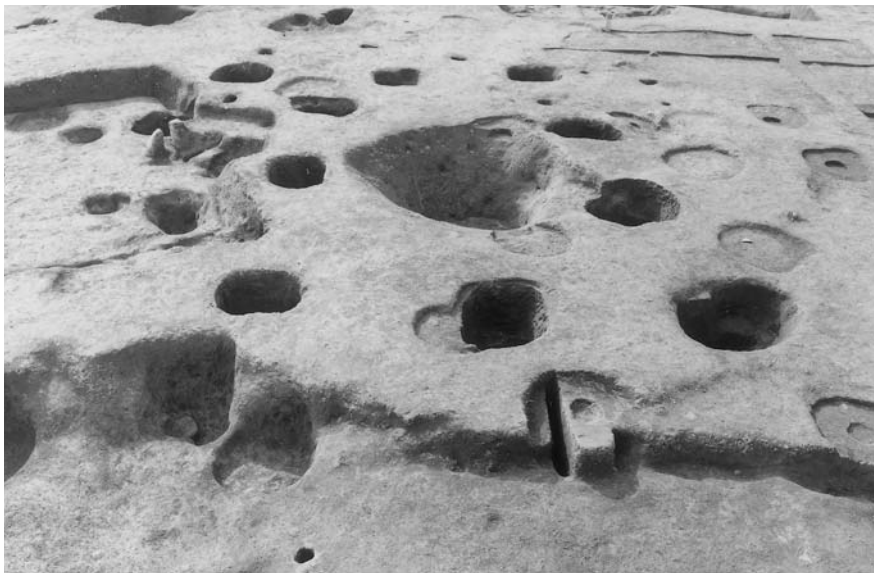
第2691号住居跡
遺物出土状況



第2687号住居跡
完　掘　状　況

第2687号住居跡竈
遺物出土状況

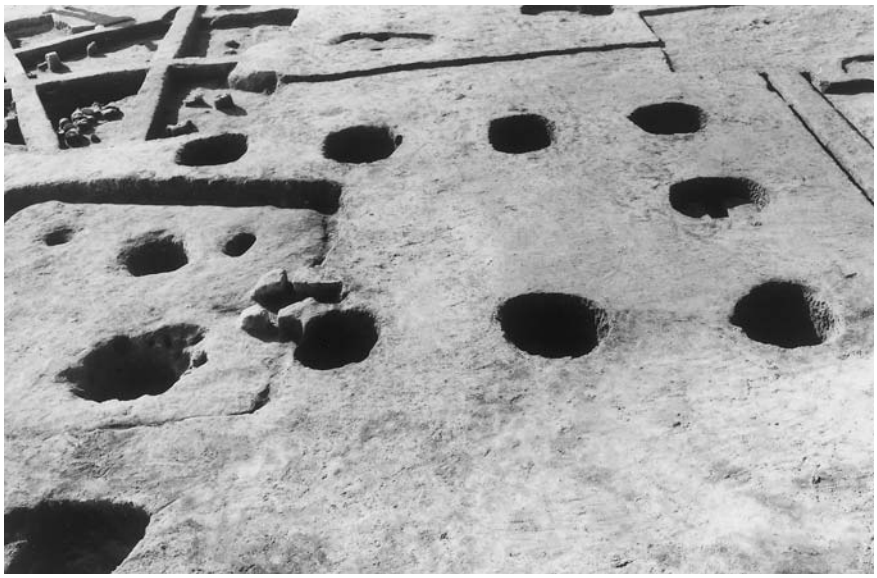
第2696号住居跡
完　掘　状　況



第474号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第486号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第473号掘立柱建物跡
完　掘　状　況



第471号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第507号掘立柱建物跡
完　掘　状　況

第７号陥し穴
完　掘　状　況

第51号地下式壙
完　掘　状　況

第57号地下式壙
完　掘　状　況

第59号地下式壙
完　掘　状　況

第 76 号 井 戸 跡
完 掘 状 況

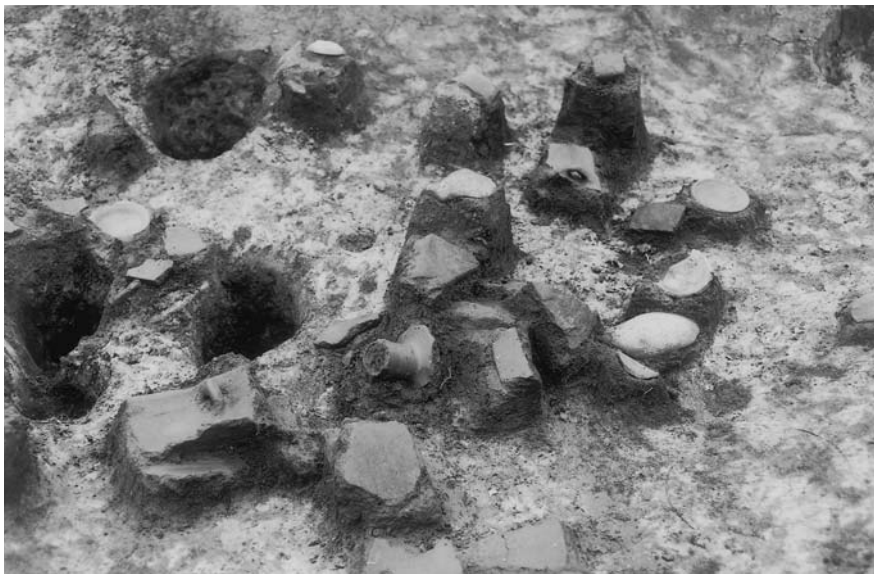
第 89 号 井 戸 跡
完 掘 状 況

第 109 号 井 戸 跡
完 掘 状 況

第5519号土坑(墓坑)
遺 物 出 土 状 況

第5259号土坑(墓坑)
人 骨 出 土 状 況

第5252・5253号土坑(墓坑)
人 骨 出 土 状 況



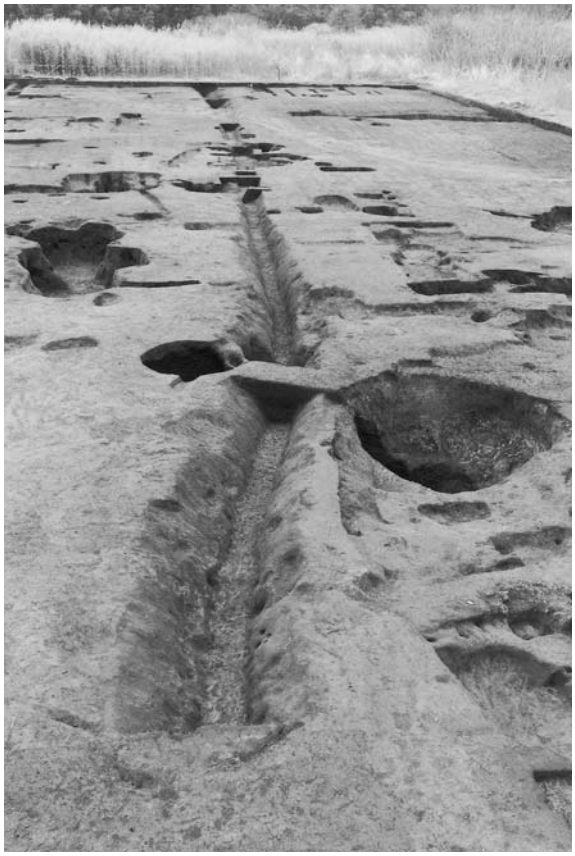
第5458号土坑（廃棄土坑）
遺　物　出　土　状　況

第20号不明遺構
完　掘　状　況

第20号不明遺構
遺物出土状況

第92号堀跡・第150号溝跡完掘状況

第93号堀跡・第154・155号溝跡完掘状況



第95号堀跡完掘状況

第102号堀跡完掘状況

SI 2594-510

SI 2595-519

SI 2594-513

SI 2595-527

SI 2594-515

SI 2629-607

SI 2595-530

SI 2595-530

第2594・2595・2629号住居跡出土土器

SI 2601-552

SI 2650-622

SI 2601-549

SI 2597-535

SI 2601-550

SI 2601-553

SI 2597-545

SI 2597-546

SI 2597-546

第2597・2601・2650号住居跡出土土器

SI 2606-572

SI 2606-571

SI 2606-573

SI 2606-576

SI 2606-574

SI 2625-595

SI 2603-558

SI 2625-594

SI 2635-609

SI 2606-570

第2603・2606・2625・2635号住居跡出土土器

SI 2638-614

SI 2638-612

SI 2638-615

SI 2657-626

SI 2657-627

SI 2657-628

SI 2638-617

SI 2638-617

第2638・2657号住居跡出土土器

SI 2660-629

SI 2666-641

SI 2609-584

SI 2666-642

SI 2661-632

SI 2609-583

SI 2609-581

SI 2609-582

第2609・2660・2661・2666号住居跡出土土器

SI 2681-671

SI 2681-680

SI 2681-683

SI 2681-678

SI 2681-677

SI 2681-668

SI 2681-681

SI 2681-682

SI 2681-670

SI 2681-675

第2681号住居跡出土土器

SI 2681-672

SI 2681-673

SI 2681-669

SI 2681-676

SI 2681-684

SI 2681-679

SI 2681-691

SI 2671-644

SI 2681-686

SI 2681-688

第2671・2681号住居跡出土土器

SI 2680-662

SI 2680-667

SI 2686-701

SI 2689-705

SI 2693-714

SI 2693-716

SI 2685-698

SI 2685-697

第2680・2685・2686・2689・2693号住居跡出土土器

SI 2678-659

SI 2690-706

SI 2692-709

SI 2694-725

SI 2692-708

SI 2694-719

SI 2692-711

SI 2694-720

SI 2692-713

SI 2694-723

第2678・2690・2692・2694号住居跡出土土器

SI 2699-760

SI 2698-732

SI 2698-738

SI 2698-739

SI 2698-757

SI 2698-757

SI 2690-707

SI 2690-707

第2690・2698・2699号住居跡出土土器

SI 2698-749

SI 2698-741

SI 2698-745

SI 2698-743

SI 2698-747

SI 2698-746

第2698号住居跡出土土器

SI 2698-748

SI 2698-740

SI 2698-742

SI 2698-751

SI 2698-744

SI 2698-752

第2698号住居跡出土土器

SI 2676-821

SI 2703-773

SI 2701-766

SI 2701-765

SI 2599-781

SI 2641-803

SI 2669-815

SI 2669-816

SI 2701-768

第2599・2641・2669・2676・2701・2703号住居跡出土土器

SI 2613-786

SI 2613-788

SI 2667-810

SI 2642-804

SI 2667-812

SI 2642-806

SI 2667-814

SI 2667-814

第2613・2642・2667号住居跡出土土器

SI 2687-1000

SI 2695-823

SI 2696-1015

SI 2645-931

SI 2684-998

SI 2670-979

SI 2670-981

SI 2670-978

SI 2670-980

SI 2670-982

第2645・2670・2684・2687・2695・2696号住居跡出土土器

SI 2605-863

SI 2605-865

SI 2691-1010

SI 2691-1009

SI 2691-1012

SI 2691-1013

SI 2687-1006

SI 2687-1006

SI 2696-1019

SI 2619-891

第2605・2619・2687・2691・2696号住居跡出土土器

SI 2627-920

SI 2590-827

SI 2627-919

SI 2604-848

SI 2620-896

SI 2647-935

SI 2620-897

SI 2647-934

SI 2627-925

SI 2620-898

第2590・2604・2620・2627・2647号住居跡出土土器

SI 2664-943

SI 2665-968

SI 2665-966

SI 2665-953

SI 2665-954

SI 2665-950

SI 2665-957

SI 2665-957

SI 2665-977

SI 2665-977

第2664・2665号住居跡出土土器・陶器

SI 2672-991

SI 2608-875

SI 2693-717

SI 2665-971

第97号堀跡-1069

第97号堀跡-1068

第98号堀跡-1078

第99号堀跡-1082

第99号堀跡-1083

第97号堀跡-1074

第99号堀跡-1081

第2608・2665・2672・2693号住居跡，第97・98・99号堀跡出土土器・陶器

第92号堀跡-1046

第92号堀跡-1047

第93号堀跡-1051

第95号堀跡-1059

第95号堀跡-1058

第96号堀跡-1066

第100号堀跡-1084

第100号堀跡-1085

第100号堀跡-1086

第100号堀跡-1089

第100号堀跡-1090

第100号堀跡-1088

第96号堀跡-1065

第100号堀跡-1096

第100号堀跡-1092

第101号堀跡-1104

第92・93・95・96・100・101号堀跡出土土器・陶器

第101号堀跡-1103

第101号堀跡-1101

第101号堀跡-1099

第101号堀跡-1102

第101号堀跡-1098

第101号堀跡-1100

第103号堀跡-1108

第103号堀跡-1105

第103号堀跡-1106

第103号堀跡-1107

第103号堀跡-1109

SD 150-1114

第103号堀跡-1112

第103号堀跡-1111

第103号堀跡-1110

第103号堀跡-1110

第101・103号堀跡，第150号溝跡出土土器・陶器

SD 152-1118

SD 152-1117

SD 152-1116

SD 161-1128

SD 163-1124

SD 163-1125

SD 166-1129

SD 176-1126

第78号方形竪穴遺構-1031

UP 57-1041

UP 57-1042

SE 71-1147

SE 76-1150

SE 97-1141

SE 97-1140

SE 82-1134

SK 4669-1160

SK 4708-1181

第78号方形竪穴遺構，第57号地下式壙，第152・161・163・166・176号溝跡，第71・76・82・97号井戸跡，第4669・4708号土坑出土土器

SK 5336-1195

SK 5400-1165

SK 5400-1163

SK 5458-1168

SK 5400-1164

SK 5400-1166

SK 5458-1169

SK 5458-1170

SK 5514-1198

遺構外-1213

SX 20-1186

SX 20-1187

SK 4186-1191

SK 4669-1162

第4186・4669・5336・5400・5458・5514号土坑，第20号不明遺構，遺構外出土土器・陶器

SI 2647-934「本」

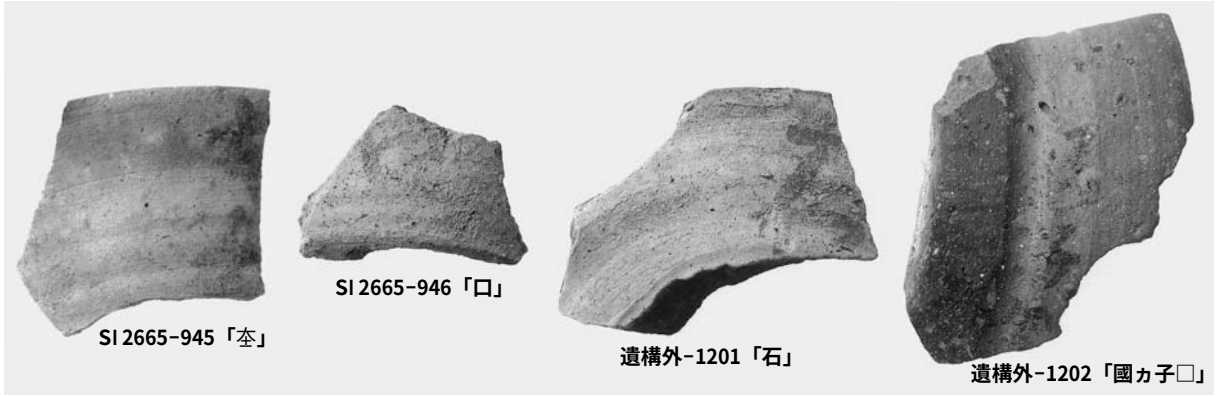
SI 2665-954「石□□」

SI 2672-991「石」

SI 2665-967「土□」

SK4186-1191「一」

SI 2664-943「田カ」


SI 2665-945「本」
SI 2665-946「口」
遺構外-1201「石」
遺構外-1202「國ヵ子□」

出土墨書・刻書土器

SI 2606-DP54

SI 2698-DP119

SI 2606-DP55

SI 2685-DP112

SI 2637-DP66

SI 2681-DP111

SK4194-DP139

SI 2686-DP114

遺構外-DP140

SI 2602-DP127

SI 2602-DP127

出土土製品

SI 2666

DP91

DP90

DP94

DP93

DP92

DP89

DP95

DP98

DP96

DP97

DP83

DP84

DP85

DP100

DP99

DP86

DP87

DP88

SI 2671-DP105

SI 2626-DP133

SI 2609-DP60

SI 2609-DP61

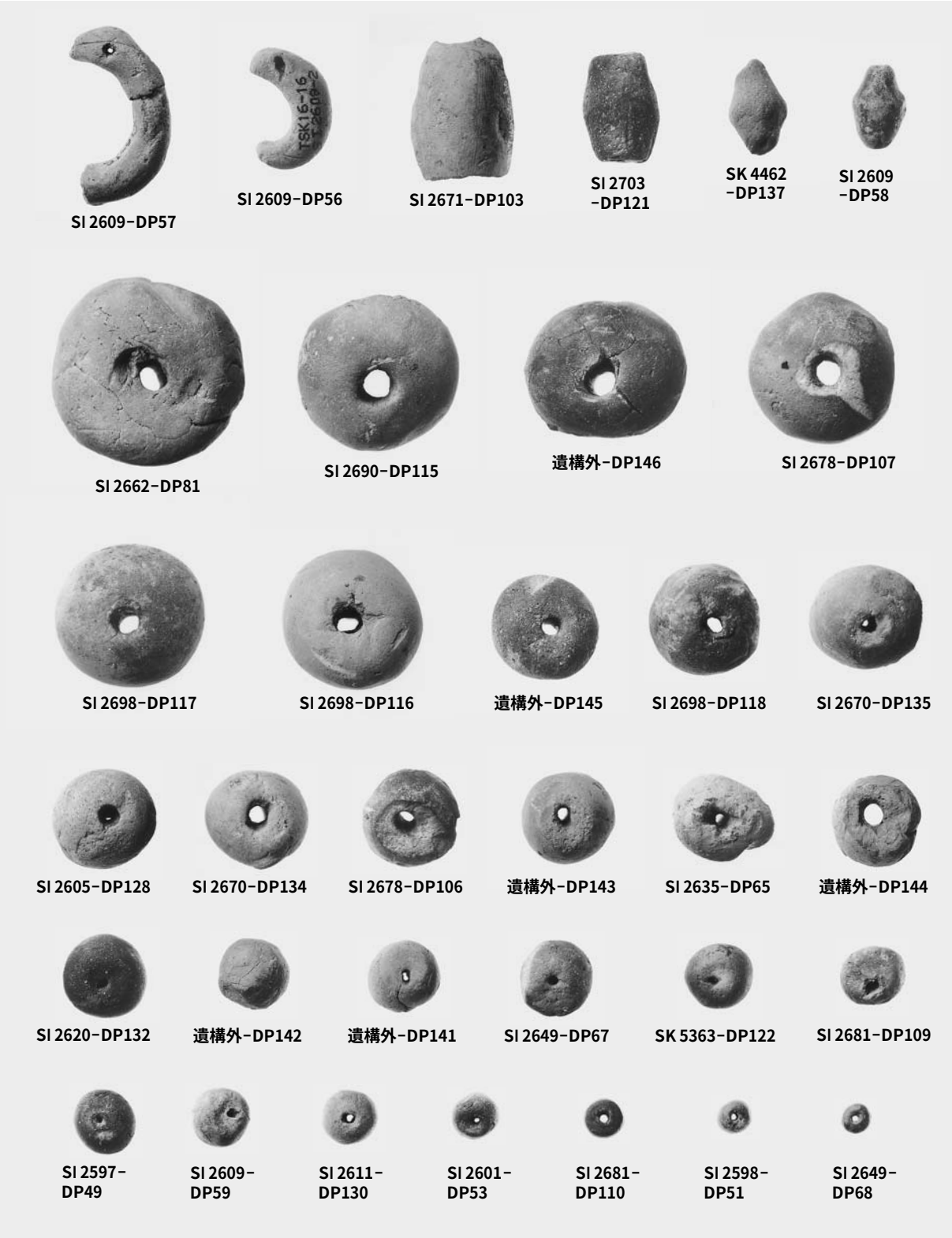
SI 2605-DP129

SI 2686-DP113

SI 2609-DP62

SI 2615-DP131

出土土製品

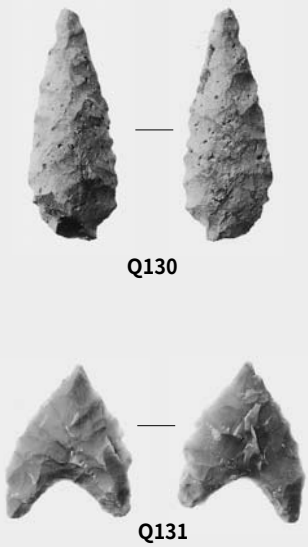

SI 2609-DP57
SI 2609-DP56
SI 2671-DP103
SI 2703 -DP121
SK 4462 -DP137
SI 2609 -DP58
SI 2662-DP81
SI 2690-DP115
遺構外-DP146
SI 2678-DP107
SI 2698-DP117
SI 2698-DP116
遺構外-DP145
SI 2698-DP118
SI 2670-DP135
SI 2605-DP128
SI 2670-DP134
SI 2678-DP106
遺構外-DP143
SI 2635-DP65
遺構外-DP144
SI 2620-DP132
遺構外-DP142
遺構外-DP141
SI 2649-DP67
SK 5363-DP122
SI 2681-DP109
SI 2597- DP49
SI 2609- DP59
SI 2611- DP130
SI 2601- DP53
SI 2681- DP110
SI 2598- DP51
SI 2649- DP68

SI 2657
DP70
DP71
DP72
DP73
DP74
DP77
DP76
DP75
DP78
DP79

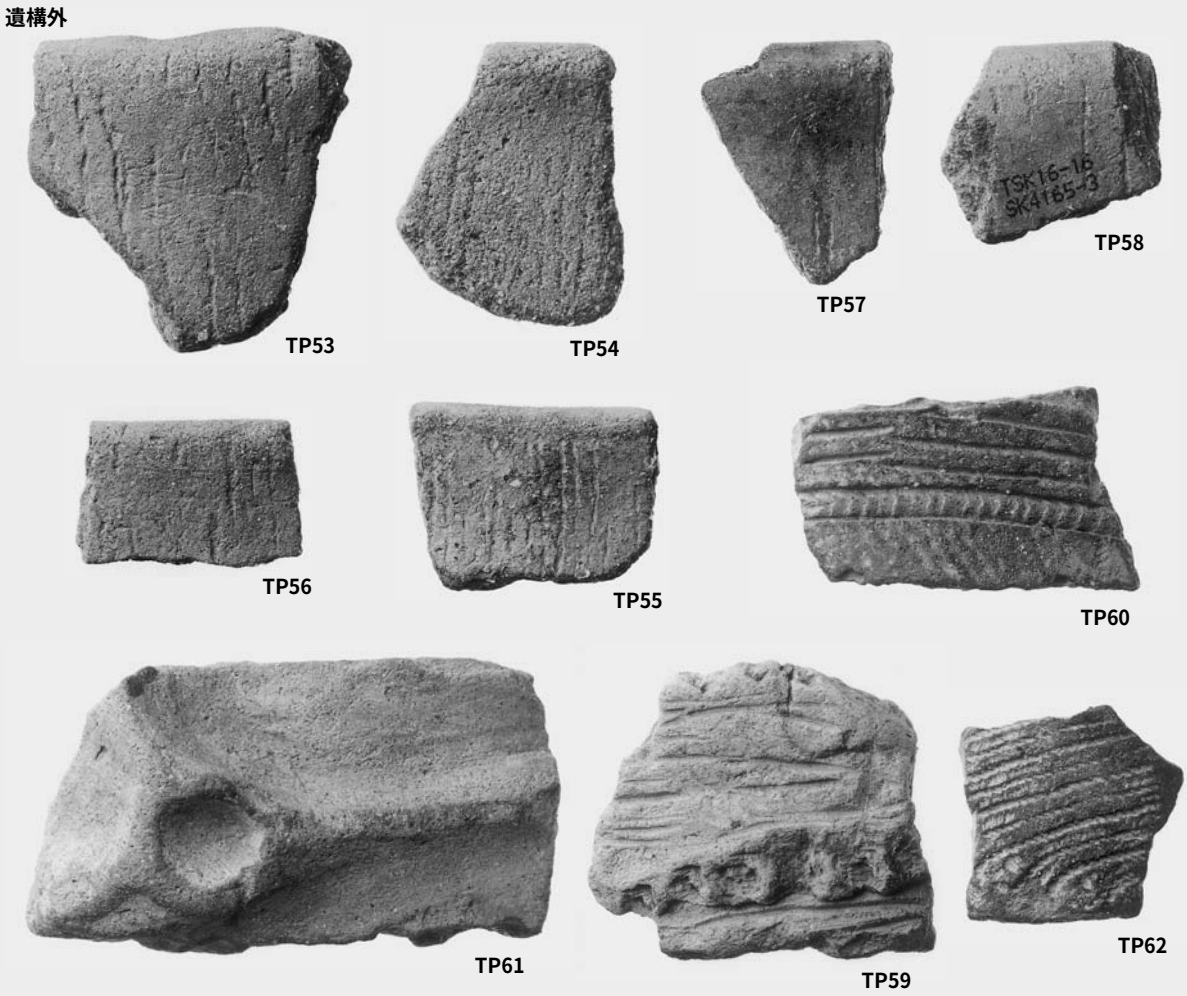
出土土製品

遺構外

遺構外



遺構外



出土土器・石器

SI 2670-Q91

SI 2693-Q57

SI 2605-Q79

SI 2627-Q86

SI 2703-Q64

SI 2703-Q65

SI 2673-Q76

SI 2690-Q56

SI 2666-Q49

SI 2691-Q92

SI 2668-Q75

SI 2645-Q88

SI 2620-Q83

第96号堀跡-Q100

第96号堀跡-Q101

SE 76-Q116

出土石器・石製品

SX 20-Q120

SK 5563-Q118

PG 32-Q119

第102号堀跡-Q103

第80号方形竪穴遺構-Q94

SD 176-Q111

SX 20-Q123

第102号堀跡-Q104

SK 5519-Q117

SD 151-Q108

SD 155-Q109

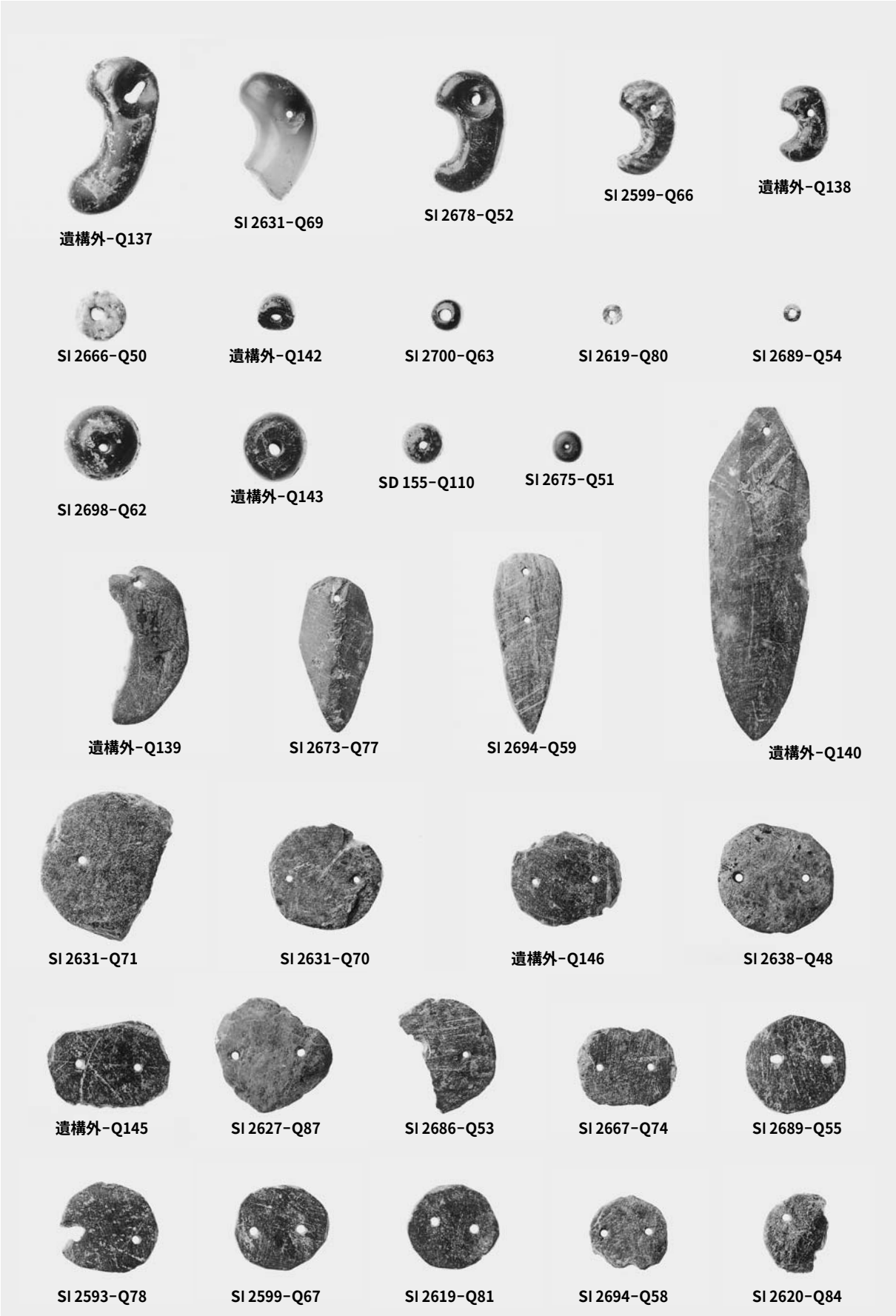
第103号堀跡-Q105

SK 5398-Q124

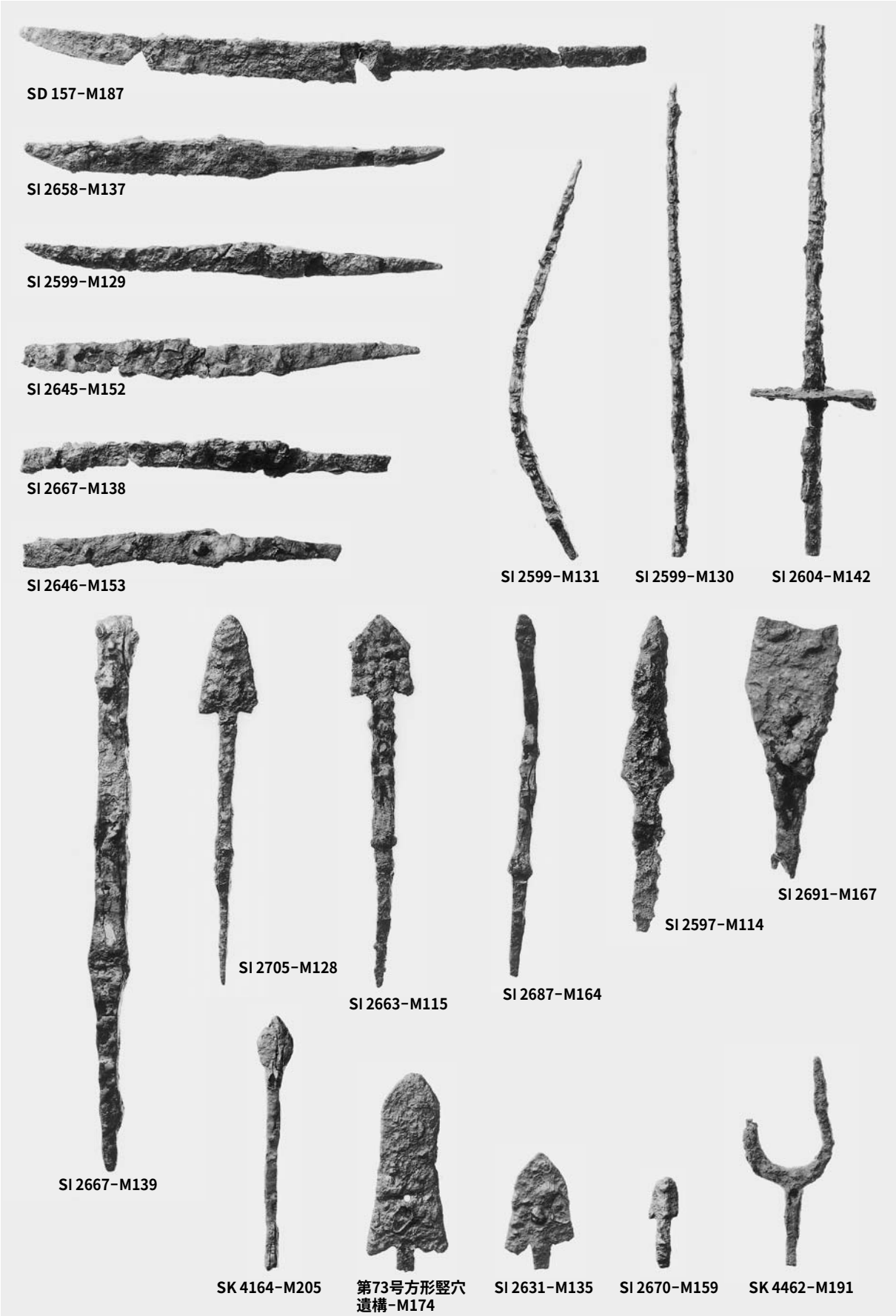
SK 5398-Q125

遺構外-Q141

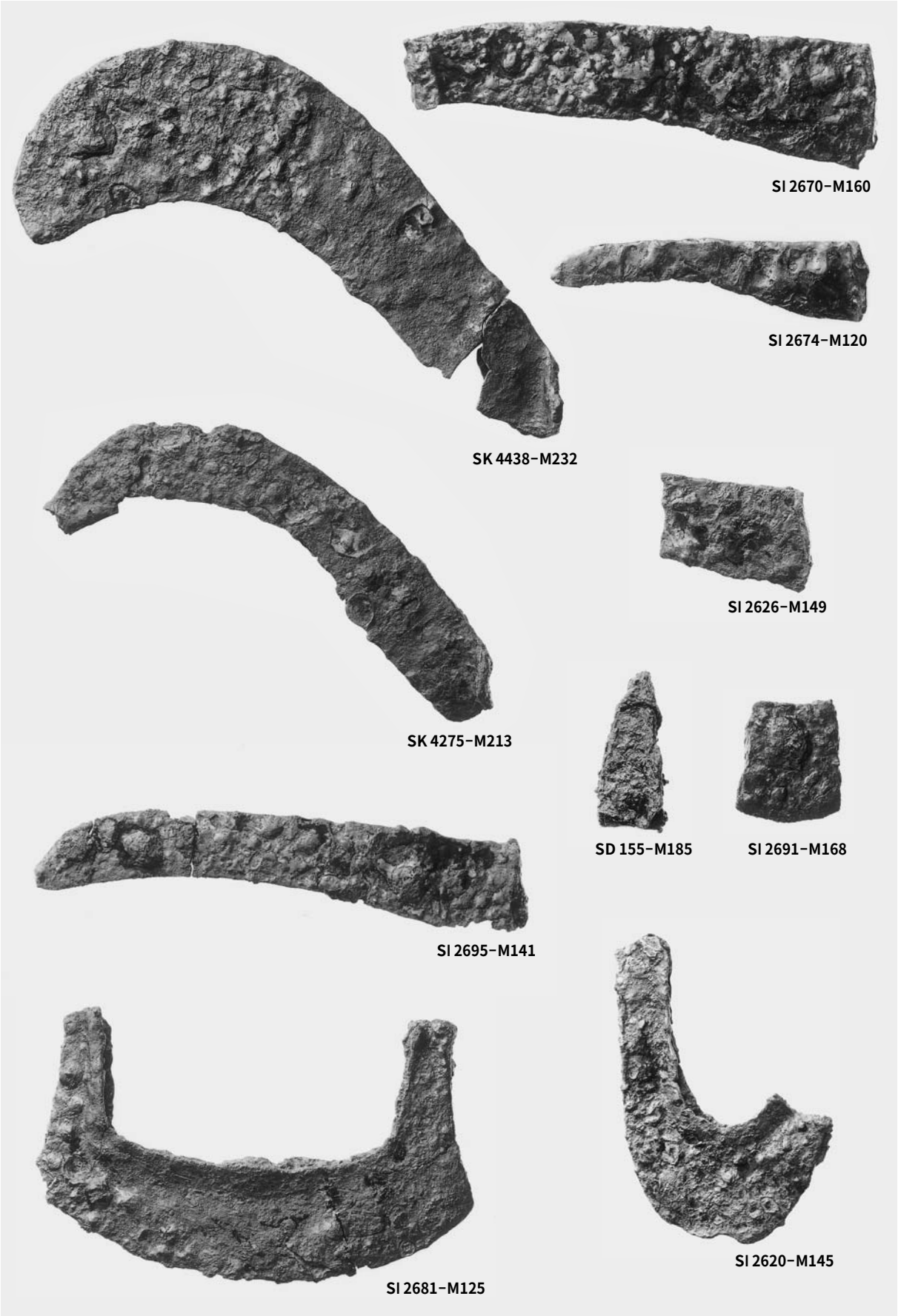
出土石器・石製品・ガラス製品


遺構外-Q137
SI 2631-Q69
SI 2678-Q52
SI 2599-Q66
遺構外-Q138
SI 2666-Q50
遺構外-Q142
SI 2700-Q63
SI 2619-Q80
SI 2689-Q54
SI 2698-Q62
遺構外-Q143
SD 155-Q110
SI 2675-Q51
遺構外-Q139
SI 2673-Q77
SI 2694-Q59
遺構外-Q140
SI 2631-Q71
SI 2631-Q70
遺構外-Q146
SI 2638-Q48
遺構外-Q145
SI 2627-Q87
SI 2686-Q53
SI 2667-Q74
SI 2689-Q55
SI 2593-Q78
SI 2599-Q67
SI 2619-Q81
SI 2694-Q58
SI 2620-Q84

出土石製品


SD 157-M187
SI 2658-M137
SI 2599-M129
SI 2645-M152
SI 2667-M138
SI 2646-M153
SI 2599-M131
SI 2599-M130
SI 2604-M142
SI 2691-M167
SI 2597-M114
SI 2705-M128
SI 2663-M115
SI 2687-M164
SI 2667-M139
SK 4164-M205
第73号方形竪穴
遺構-M174
SI 2631-M135
SI 2670-M159
SK 4462-M191

出土鉄製品


SI 2670-M160
SI 2674-M120
SK 4438-M232
SI 2626-M149
SK 4275-M213
SD 155-M185
SI 2691-M168
SI 2695-M141
SI 2620-M145
SI 2681-M125

出土鉄製品

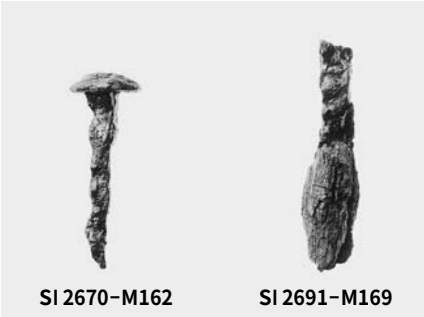
SI 2682-M163

SD 163-M186

SI 2691-M170

SI 2702-M127

SI 2599-M132


SI 2670-M162 SI 2691-M169

SI 2681-M126

SI 2678-M124

SK 4610-M234

SI 2665-M156

遺構外-M238

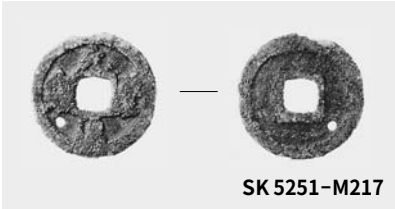
SI 2604-M143

SK 4175-M229

SK 4383-M230

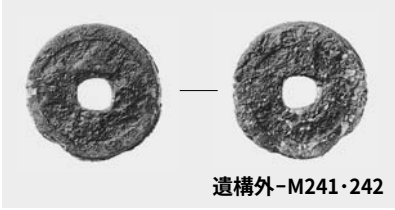
出土鉄製品・銅製品

SK 5381-M195


SK 5251-M217

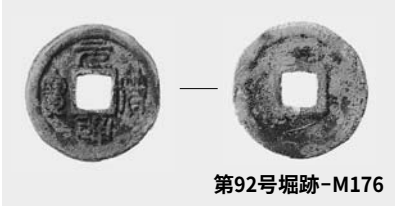
第93号堀跡-M179

SK 4654-M216

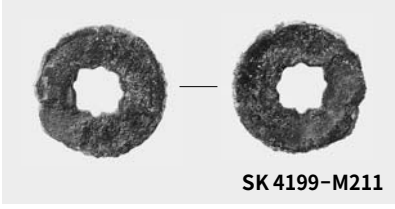

遺構外-M241・242

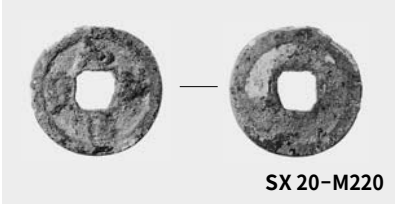
第93号堀跡-M180

SE 76-M188


第92号堀跡-M176

SK 5373-M219


SK 4199-M211


SX 20-M220

SK 5259-M202～204

SK 4520-M215

SK 4465-M233

SK 5259-M199

SK 5254-M197

SK 5254-M196

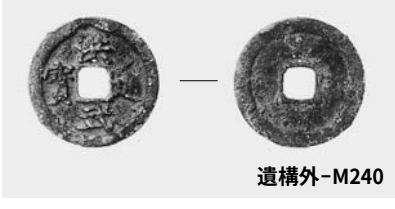
遺構外-M239

SK 5522-M236

SK 4463-M193

SK 4169-M206～210

SE 76-M189


遺構外-M240

SD 150-M182

出土銅製品

SD 176-1127

SD 176-DP136

SK 4269-DP138

SD 176-鉄滓

SD 176-鉄滓

SD 176-鉄滓

SD 176-鉄滓

SD 176-鉄滓

SD 176-鉄滓

SX 20-M224

SX 20-M222

SX 20-M223

SX 20-M227

SX 20-M225

SX 20-M228

出土土器・土製品・鉄滓

SD 176−鉄滓集合

SX 20−鉄滓集合

SI 2665−骨片

SD 152−貝殻

第79号方形竪穴遺構 N1〜3

第102号堀跡−N4

出土鉄滓・骨片・貝殻

茨城県教育財団文化財調査報告第280集

島名熊の山遺跡

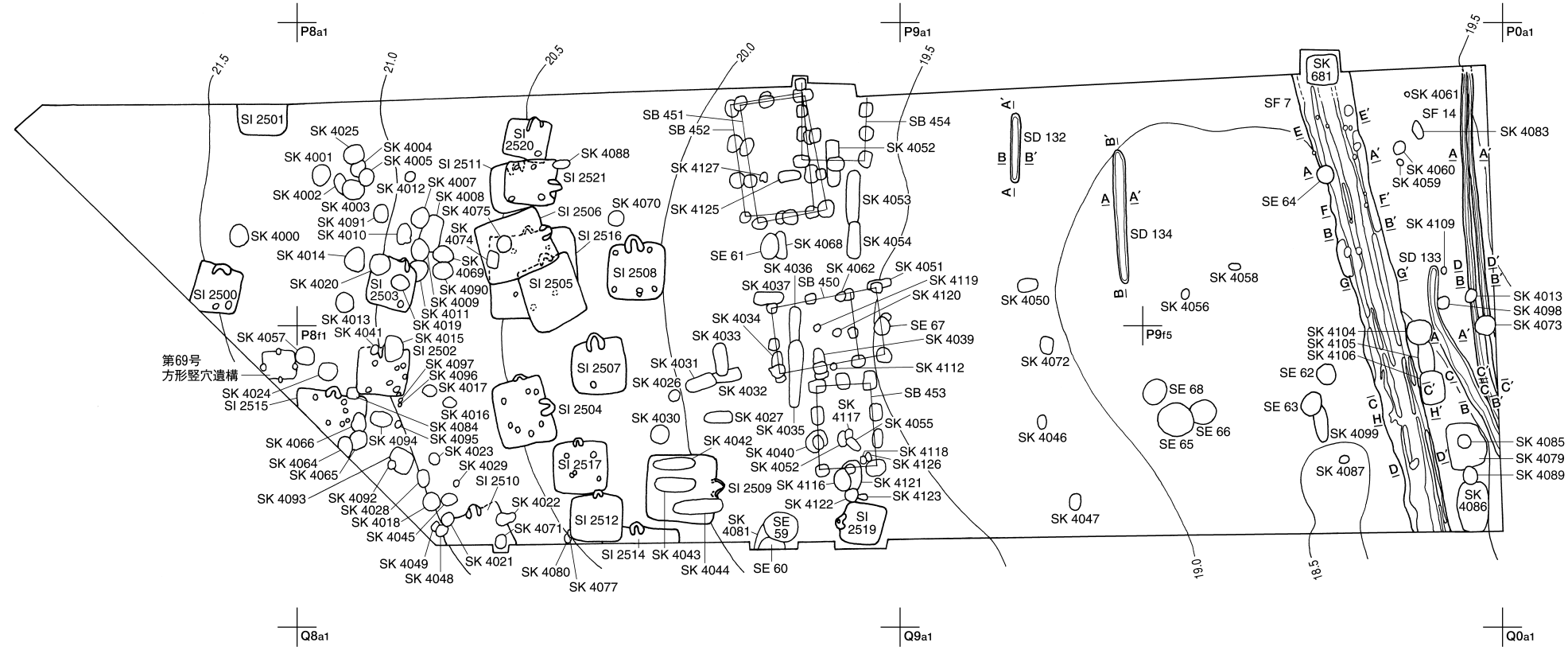
島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 XIII

第４分冊

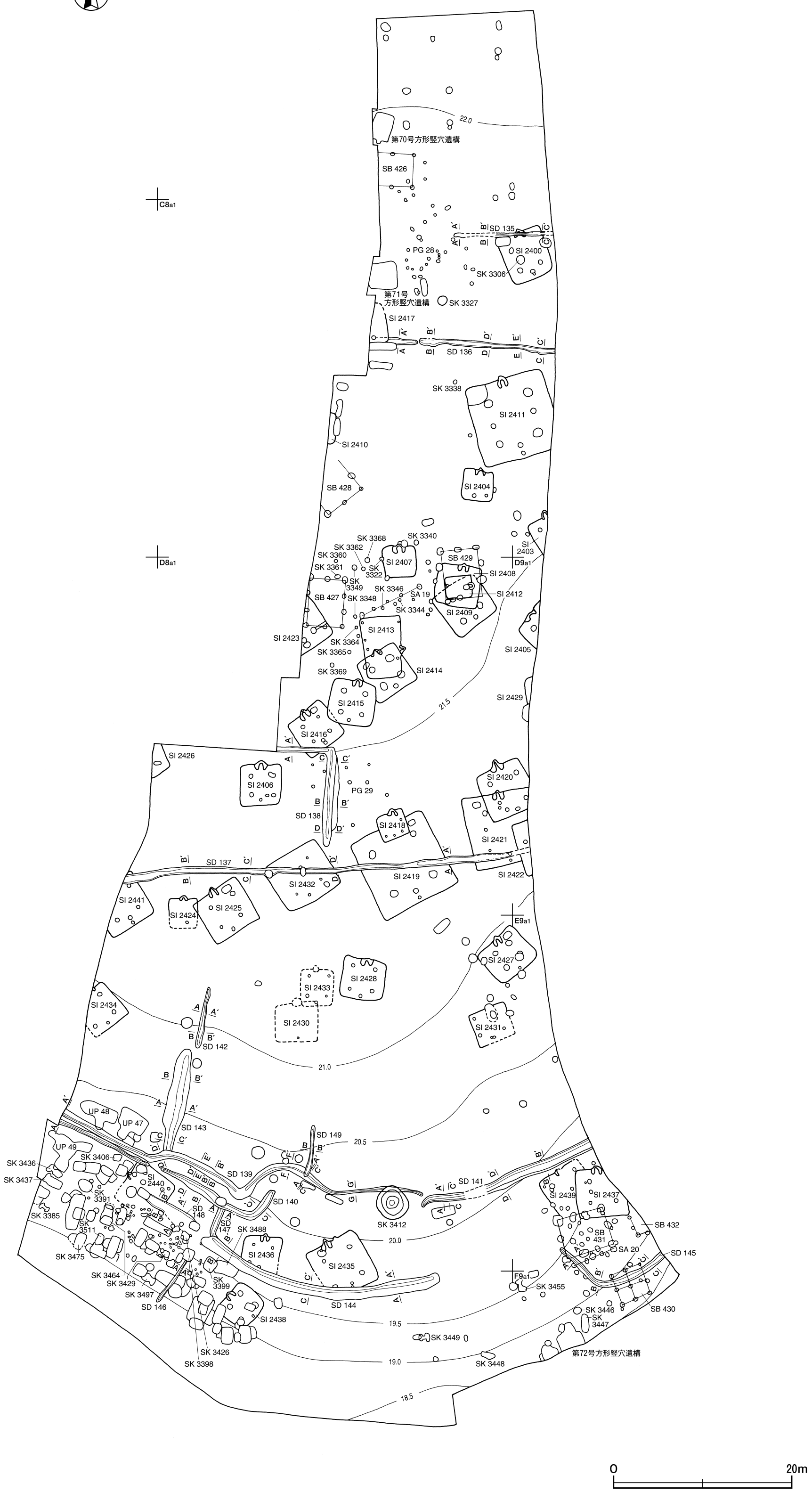
平成19(2007)年３月19日 印刷
平成19(2007)年３月23日 発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和１丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587

印刷　(有)川田プリント
〒310-0041　水戸市上水戸４丁目６－53
TEL　029－253－5551



付図１　島名熊の山遺跡９区遺構全体図　茨城県教育財団文化財調査報告第280集



付図 2　島名熊の山遺跡14区遺構全体図　茨城県教育財団文化財調査報告第280集

付図 3　島名熊の山遺跡16区遺構全体図　茨城県教育財団文化財調査報告第280集

付図４　島名熊の山遺跡遺構全体図　茨城県教育財団文化財調査報告第280集